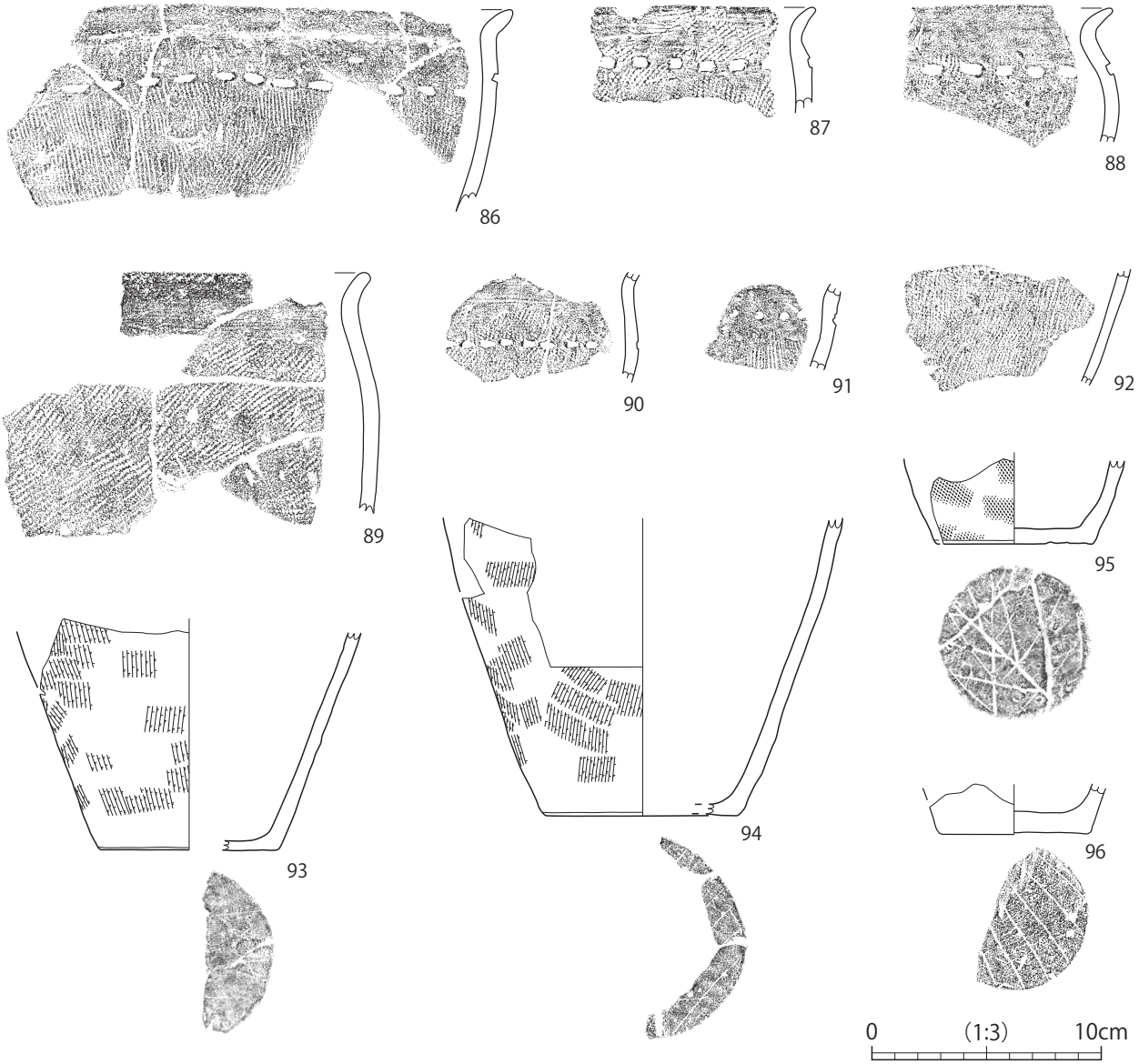
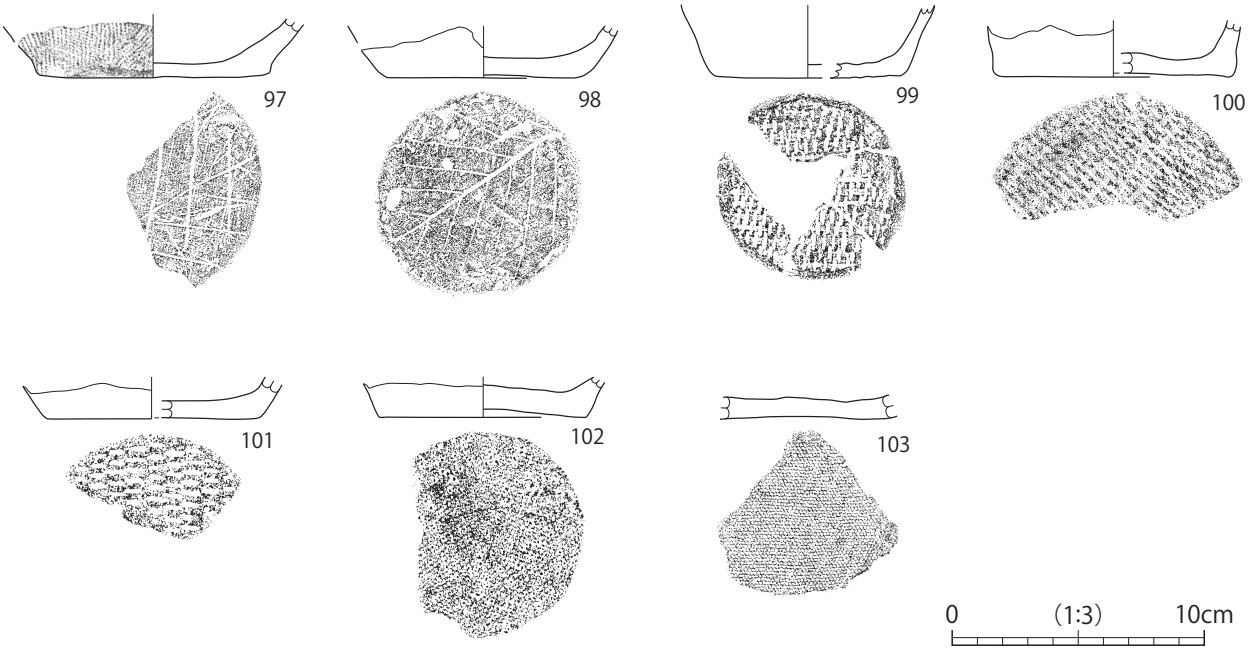


図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面調整（文様）	内面調整（文様）	備考	写真図版
86	B-060	11ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	弥生土器	甕	口縁～体上半	口縁：ヨコナデ　体上端：列点刺突（左→右） 体上半：植物茎回転文横位回転	ミガキ	口縁外面輪積痕	42
87	B-280	20ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vc層	弥生土器	甕	口縁～体上半	口縁：ヨコナデ→LR縄文斜位回転 体上端：列点刺突（左→右） 体上半：LR縄文横位回転	口縁～体上端：横位ミガキ 体上半：ナデ		42
88	B-169	15ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Va層	弥生土器	甕	口縁～体上半	口縁：ヨコナデ　体上端：列点刺突（左→右） 体上半：LR縄文横位回転	ミガキ	内面に輪積痕 内外面摩滅	42
89	B-015	19ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vc層	弥生土器	甕	口縁～体上半	口唇：LR縄文横位回転　口縁：ヨコナデ 体上半：LR縄文横位回転	横位ミガキ		42
90	B-269	4ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vc層	弥生土器	甕	口縁～体上半	口縁：ヨコナデ 体上端：列点刺突（右→左） 体上半：LR縄文横位回転	横位ミガキ		42
91	B-182	17ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	弥生土器	甕	体上端～体上半	体上端：列点刺突（円形刺突） 体上半：植物茎回転文横位回転	ナデ→ミガキ		42
92	B-170	15ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Va層	弥生土器	甕	体部	体部：附加条縄文（LR＋R）横位回転	ミガキ		42
93	B-034	8・9ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	弥生土器	甕	体下半～底部	体下半：植物茎回転文 底面：木葉痕	ミガキ	底径（7.8）㎝	43
94	B-081	3ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	弥生土器	甕	体下半～底部	体下半：植物茎回転文 底面：木葉痕	ミガキ	底径（8.4）㎝	43
95	B-331	29ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vc層	弥生土器	甕	体下端～底部	体下端：LR縄文横位回転 底面：木葉痕	ミガキ	底径6.8㎝ 木葉痕のズレ	43
96	B-202	8ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	弥生土器	甕	体下端～底部	体下端：ミガキ 底面：木葉痕	ナデ	底径6.4㎝	43

第 122 図　V層出土遺物（9）

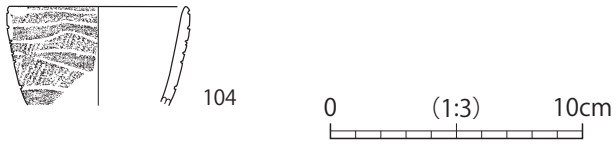


図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面調整（文様）	内面調整（文様）	備考	写真図版
97	B-196	7ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	弥生土器	甕	体下端～底部	体下端：LR縄文横位回転→ナデ 底面：木葉痕→沈線	ミガキ	底径(9.0)㎝ 外面炭化物付着 木葉痕のズレ	43
98	B-248	24ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	弥生土器	甕	体下端～底部	体下端：ナデ 底面：木葉痕	ミガキ	底径7.6㎝	43
99	B-063	12ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	弥生土器	甕	体下端～底部	体下端：ナデ 底面：網代痕	ミガキ	底部内面摩滅	43
100	B-206	9ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	弥生土器	甕	体下端～底部	体下端：ミガキ 底面：網代痕	ナデ	底径(9.2)㎝ 内面やや摩滅	43
101	B-174	23ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	弥生土器	甕	体下端～底部	体下端：ミガキ？ 底面：網代痕	不明	底径(8.4)㎝ 内外面摩滅	43
102	B-221	11ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	弥生土器	甕or壺	体下端～底部	体下端：ミガキ 底面：織布痕	不明	底径8.2㎝ 内外面摩滅	43
103	B-200	8ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	弥生土器	甕	底部	底面：織布痕	不明	内面摩滅	43

第 123 図　Ｖ層出土遺物（10）

小型土器（第 124 図）

小型土器（104）は鉢形の精製土器である。器形は、内湾気味に外傾するもので、平口縁である。装飾文様の施文部位は口縁部から体部上半にあり、横位直線文と連弧文の組み合わせが施文されている。文様内には附加条縄文（LR ＋ R）が充填されている。文様を構成する沈線には隙間がある。



図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面調整（文様）	内面調整（文様）	備考	写真図版
104	B-258	16ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	弥生土器	小型土器	口縁～体上半	口縁～体上半：沈線→附加条縄文(LR＋R)→沈線 →ミガキ(横位直線文＋連弧文)	ミガキ	口径(7.0)㎝	43

第 124 図　Ｖ層出土遺物（11）

b . 石器

基本層Ⅴ層から出土した石器のうち、石鏃 4 点、石錐 5 点、スクレイパー 8 点、石斧の製作破片 1 点、板状石器ほか 6 点、二次加工のある剥片 6 点、微細剥離痕のある剥片 9 点、石核 7 点、石庖丁 1 点、石斧 1 点、礫石器 28 点を掲載した。

1）打製石器

石鏃（第 126 図）

105 ～ 108 は有茎の石鏃で、2.9cm 以上の大型品と 2.5cm 前後の小型品がある。106・107 は完形品、105・108 は基部を欠損している。いずれも a・b 両面のほぼ全面に剥離調整が施されているが、105 の a・b 両面と 106 の b 面には素材剥片の剥離面がわずかに残っている。105 の断面形状は身部が五角形で、基部が菱形を呈し、106 ～ 108 の断面形状は身部、基部共に菱形を呈している。107 の基部にはアスファルトが付着している。石材は 105 が碧玉、106 ～ 108 が珪質頁岩である。

石錐（第 126 図）

109 ～ 113 は石錐で、109 ～ 111 は完形品、112 は欠損品、113 は未成品である。109 は a・b 両面のほぼ全面に剥離調整が施されているが、a 面に節理面がわずかに残っている。110 ～ 112 は縁辺部のみ剥離調整が施され、110・111 の a・b 両面には素材剥片の剥離面が大きく残っており、112 の a 面は縁辺部を除き自然面である。109・110 の先端は磨耗している。石材は 109 が珪質頁岩、110 が瑪瑙、111 が頁岩、112 が流紋岩、113 が碧玉である。

スクレイパー（第 126・127 図）

114 ～ 121 はスクレイパーである。114 は下端縁に刃部が形成され、左右両側縁に剥離調整が施されている。a 面には自然面が残っている。115 は a 面の下端縁に連続する急角度の剥離調整が施されている。a 面には自然面が残っている。116 は下端縁に連続する剥離調整が施され、微細剥離痕がある。117 は上端縁から左側縁及び、下端縁にかけて剥離調整が施されている。118 は a 面の下端縁に連続する急角度の剥離調整が施されている。119 は a・b 両面の周縁に剥離調整が施されている。120 は a・b 両面に二重パティナが認められ、a 面の右側縁に剥離調整が施されている。121 は a・b 両面の下端縁に鋸歯状の剥離調整が施されている。

石斧の製作剥片（第 127 図）

122 は a 面に複数方向からの剥片剥離作業が行われており、上面には敲打痕がある。磨製石斧の製作時に剥離された剥片と考えられる。石材は砂岩である。

板状石器ほか（第 128 ～ 131 図）

123 ～ 126 は板状石器である。123 は長さ 16.9cm、幅 19.5cm、厚さ 3.2cm の大型品である。刃部は直線的で、a・b 両面の刃部には光沢面がある。a 面には斜位の擦痕がある。上端部は a・b 両面とも剥離調整が施されている。124 は基本層Ⅳ層出土遺物との接合資料である。刃部は弧状を呈し、a･b 両面の刃部には剥離調整が施されている。a 面の上縁と b 面の左側縁上端部は剥離調整が施されている。a 面に自然面、b 面に節理面が残っている。125 は刃部がわずかに屈曲するもので、a･b 両面の刃部には光沢面がみられる。a 面の上縁は剥離調整が施されている。a･b 両面に被熱痕が認められる。a 面には自然面、b 面には節理面が残っている。126 は刃部が緩やかな弧状を呈し、

b 面の刃部には剥離調整が施されている。a 面の上縁と b 面の右側縁には剥離調整が施されている。a 面に被熱痕が認められ、a・b 両面に被熱による火ハネの痕跡がある。b 面には節理面が残っている。石材は 123 ～ 126 が板状節理を持つ安山岩である。127・128 は石材が異なるが板状石器と形態・大きさが共通しており、大型直縁刃石器に分類される（斎野 2002）。127 は大型礫を分割した剥片を用いており、裏面は自然面である。刃部は直線的である。a 面の上縁は剥離調整が施されている。128 は a 面の刃部に光沢面がみられ、a 面の上端から右側縁にかけてと左側縁、b 面の上端と右側縁に剥離調整が施されている。b 面には自然面が残っている。石庖丁未成品を転用して使用したものと考えられる。石材は 127 が安山岩、128 が黒雲母片岩である。

二次加工のある剥片（第 132 図）

129 は a 面の上縁から左側縁にかけてと、b 面の右側縁に剥離調整が施されている。130 は b 面の上縁と下端部に剥離調整が施されている。131 は a 面の左右両側縁に剥離調整が施されている。132 は b 面の下縁に剥離調整が施されている。133 は a・b 両面のほぼ全面に剥離調整が施される。断面形は上面が平坦な楔形を呈する。134 は a 面の上縁と右側縁と b 面の左側縁の一部に剥離調整が施されている。133 を除き、自然面が残っており、133 には節理面が残っている。石材は 129・133 が碧玉、130 ～ 132・134 が流紋岩である。

微細剥離痕のある剥片（第 132・133 図）

135 ～ 138 は一縁辺に微細剥離痕があり、139 ～ 143 は複数縁辺に微細剥離痕がある。142 の b 面には被熱による火ハネの痕跡がある。143 には二重パティナが認められる。石材は 135 ～ 141 が流紋岩、142 が鉄石英、143 が碧玉である。

石核（第 133 ～ 135 図）

144・145 は小型の石核である。石材は 144 が流紋岩、145 が珪化木である。146 は自然面の残存状況から拳大の原礫と考えられる。剥離面の状況から、少なくとも 4 回の打面転移が行われている。石材は流紋岩である。147 は分割された剥片を石核として剥片剥離作業が行われている。剥離面の状況から、少なくとも 3 回の打面転移が行われている。石材は流紋岩である。148 は小型の原礫である。a 面の剥片剥離作業を 1 回行っているが、石質のためか廃棄されたものと考えられる。149 は全面に二重パティナが認められる。3 回程度の打面転移が行われ、原礫の表皮を剥離した段階で、廃棄されたものと考えられる。石材は流紋岩である。150 は c 面の剥離面を打面として a 面で剥片剥離作業が行われている。石材は珪質頁岩である。

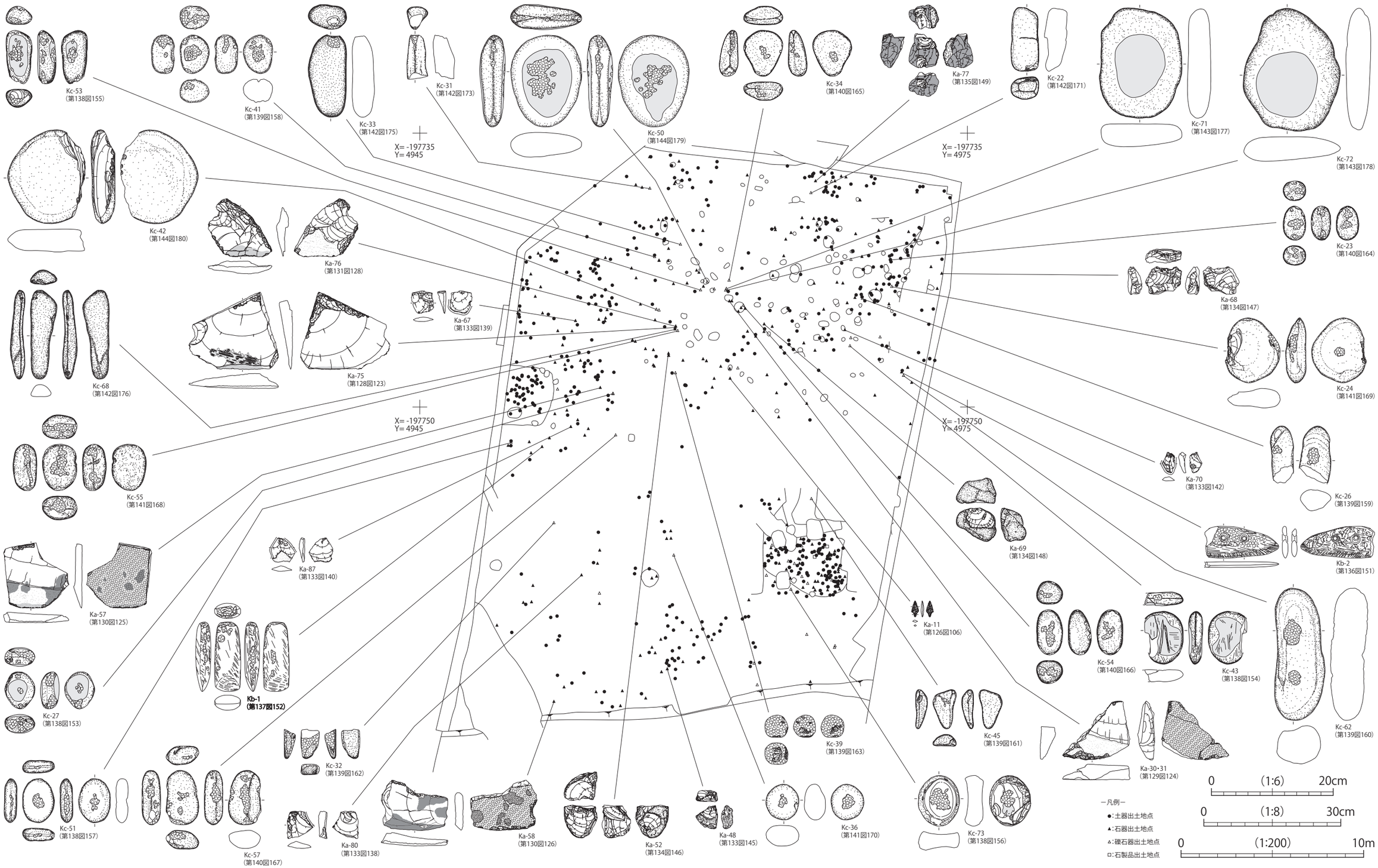
2）磨製石器

石庖丁（第 136 図）

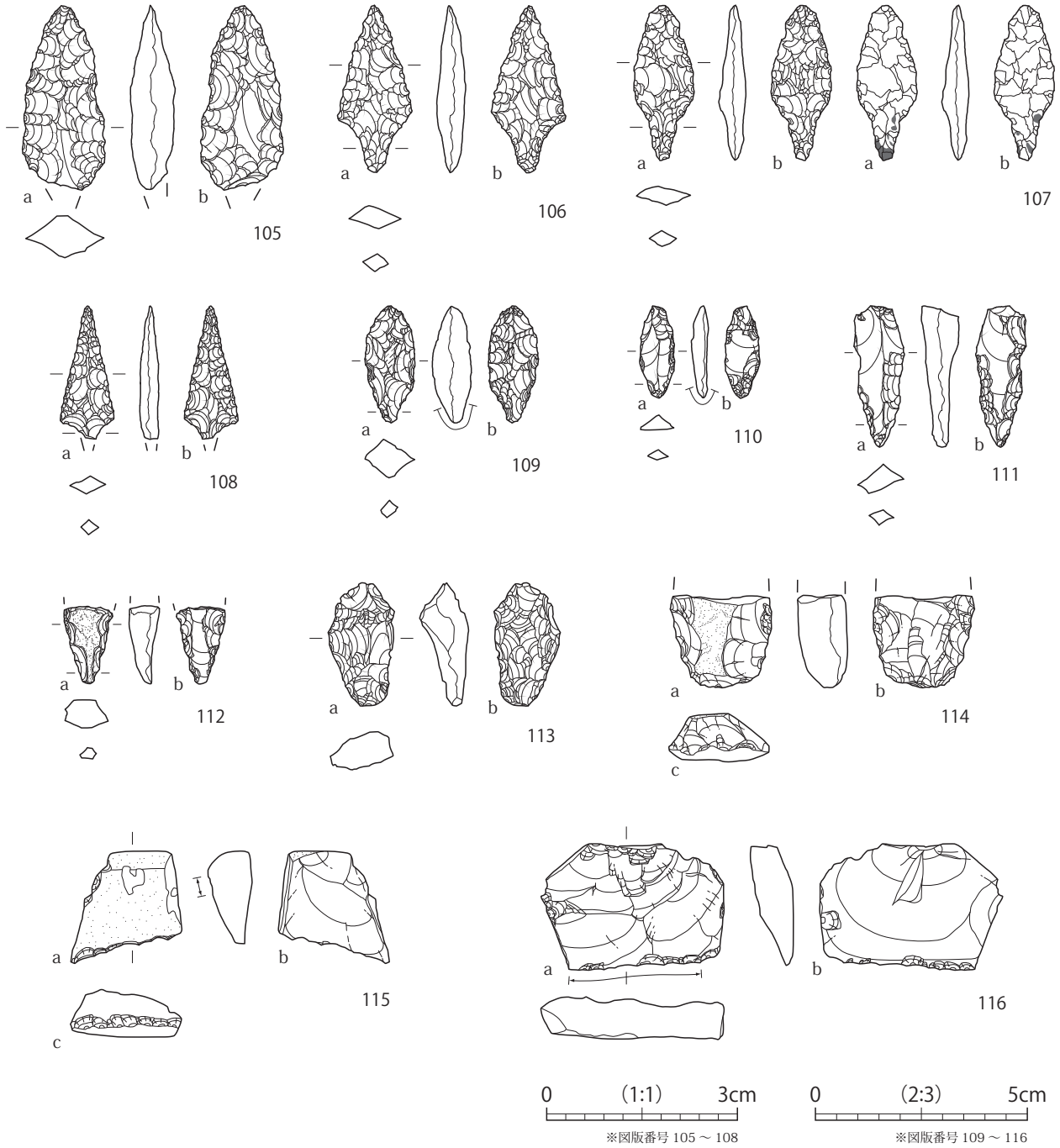
151 は石庖丁の欠損品である。整形時の剥離面や敲打痕が残っているが、刃部を中心に研磨されている。孔内径は 0.5cm で、孔の間隔は 3.3cm である。石材は硬砂岩である。

磨製石斧（第 137 図）

152 は扁平片刃石斧の完形品である。最大幅は基部の刃部よりにあり、断面形状は側面のある凸レンズ状である。刃部は弧状を呈する。基部には整形時の敲打痕が残っているが、ほぼ全面が研磨されている。石材は黒色片岩である。

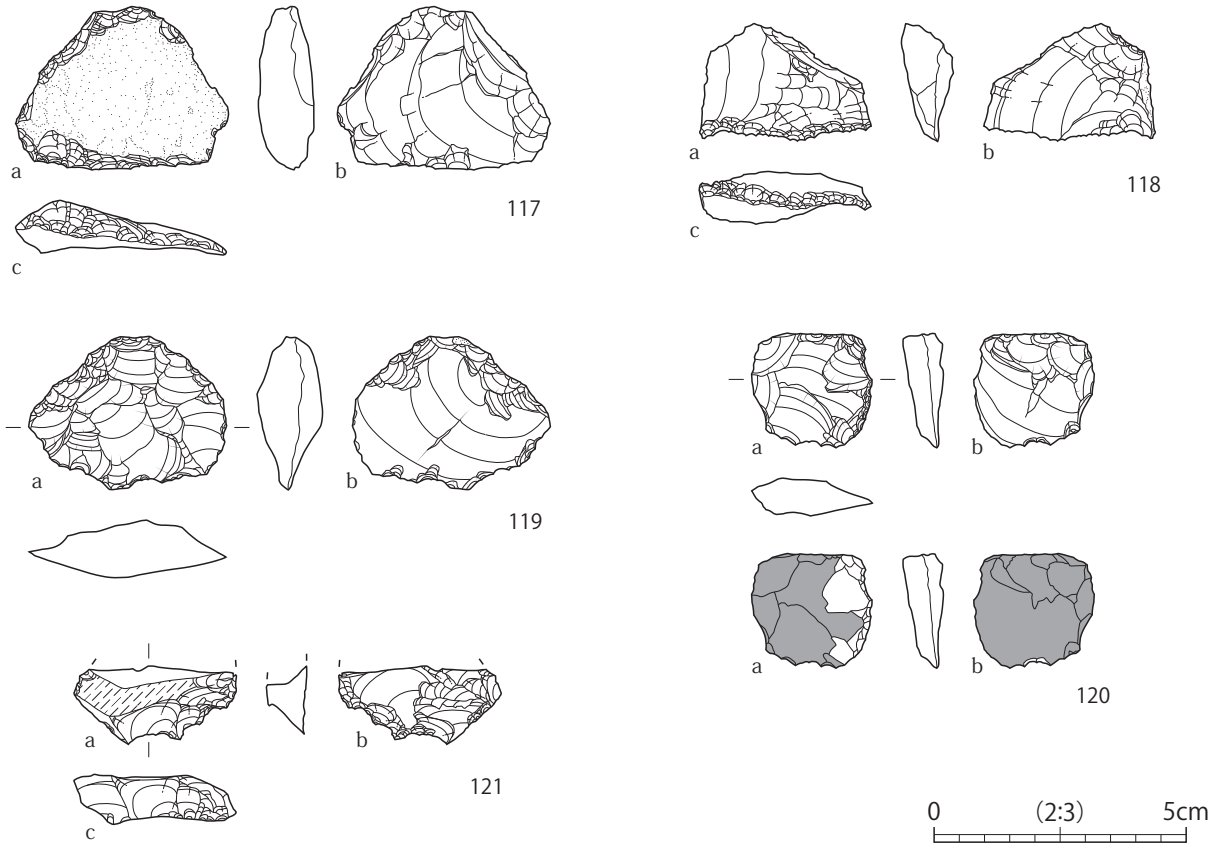


第 125 図　Ⅴ層石器出土状況図

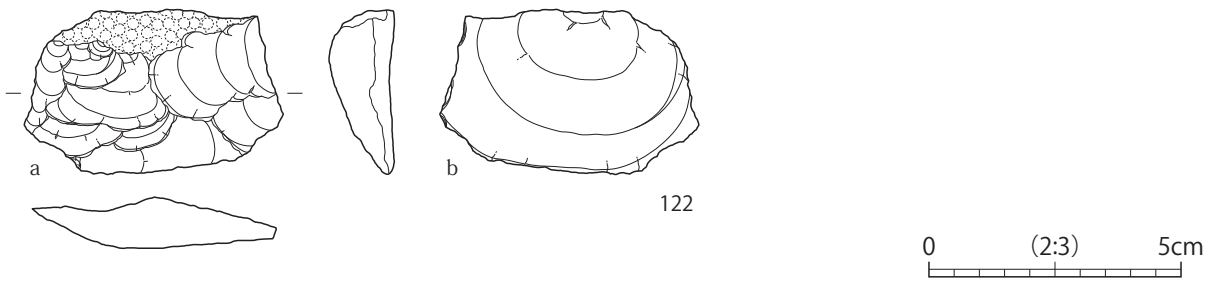


図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
105	Ka-008	20ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	石鏃	2.9	1.3	0.8	2.6	碧玉	有茎石鏃、基部欠損、先端角30°、厚幅比0.58	43
106	Ka-011	12ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	石鏃	2.6	1.2	0.4	0.9	珪質頁岩	有茎石鏃、完形品、先端角36°、厚幅比0.39	43
107	Ka-012	12ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	石鏃	2.5	0.9	0.5	0.6	珪質頁岩	有茎石鏃、完形品、先端角40°、厚幅比0.47、アスファルト付着	43
108	Ka-007	9ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Va層	打製石器	石鏃	2.1	0.9	0.3	0.4	珪質頁岩	有茎石鏃、基部欠損、先端角24°、厚幅比0.44	43
109	Ka-018	11ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vc層	打製石器	石錐	2.8	1.2	1.0	2.2	珪質頁岩	先端磨耗	43
110	Ka-020	21ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	石錐	2.2	0.8	0.4	0.6	瑪瑙	先端磨耗	43
111	Ka-017	8ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	石錐	3.3	1.2	0.9	2.2	頁岩		43
112	Ka-019	11ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	石錐	1.8	1.2	0.7	1.2	流紋岩	上部欠損	43
113	Ka-024	24ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	石錐未成品	2.9	1.6	1.1	4.0	碧玉		43
114	Ka-082	11ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vc層	打製石器	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	2.2	2.4	1.2	6.7	流紋岩	刃角78～84°、a面＋b面の複数縁辺に二次加工、a面自然面あり、上端欠損	43
115	Ka-038	11ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Va層	打製石器	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	2.6	2.6	1.2	3.8	凝灰岩	刃角72°、a面の複数縁辺に二次加工、a面自然面あり	43
116	Ka-051	21ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	3.0	4.3	1.0	12.0	珪化凝灰岩	刃角83°、a面＋b面の複数縁辺に二次加工、一縁辺に微細剥離痕	43

第 126 図　V層出土遺物（12）

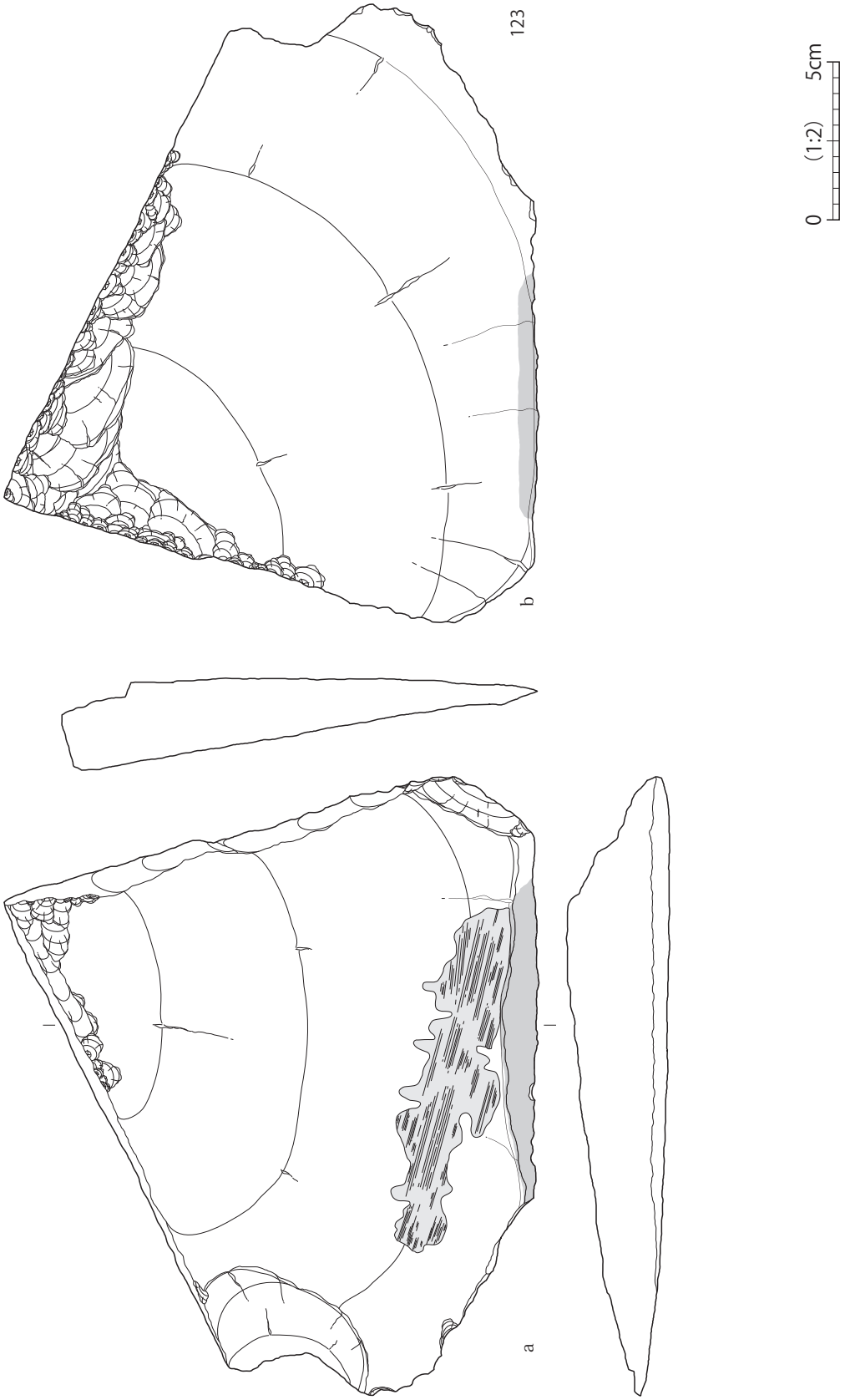


図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
117	Ka-081	12ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vc層	打製石器	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	3.2	4.2	1.1	13.2	流紋岩	刃角65～81°、a面＋b面の複数縁辺に二次加工、a面自然面あり	43
118	Ka-092	20ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	2.4	3.4	1.0	7.1	流紋岩	刃角72～81°、a面＋b面の複数縁辺に二次加工、b面自然面あり	43
119	Ka-025	20ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vc層	打製石器	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	3.0	4.0	1.3	11.3	流紋岩	刃角46°、a面＋b面の複数縁辺に二次加工、b面自然面あり	43
120	Ka-040	20ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Va層	打製石器	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	2.3	2.4	0.8	4.0	鉄石英	刃角79°、a面＋b面の複数縁辺に二次加工、ab両面二重パティナあり	43
121	Ka-073	23ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	3.2	1.5	0.9	4.0	碧玉	刃部角56～68°、a面＋b面の複数縁辺に二次加工、a面節理面あり	43



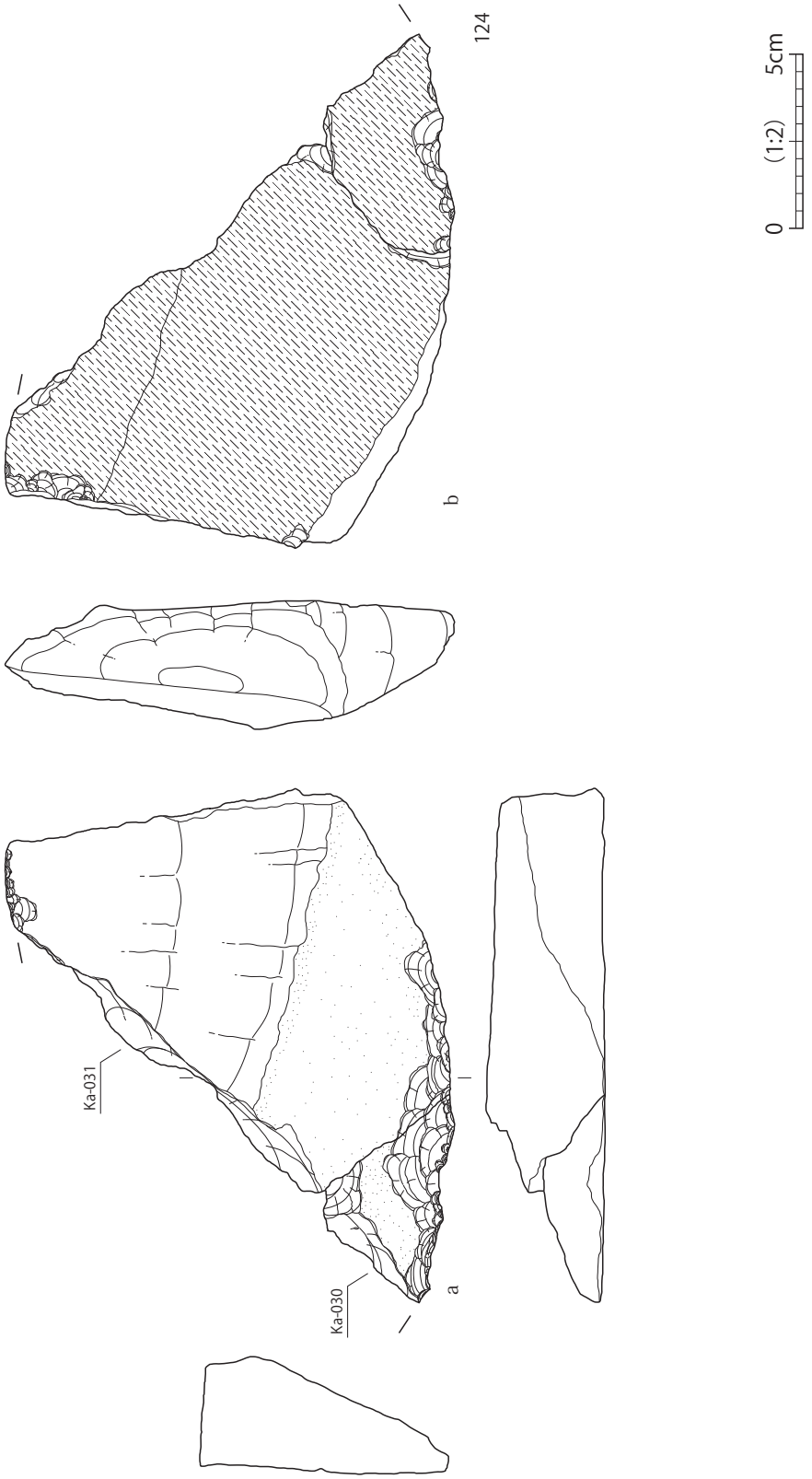
図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
122	Ka-086	15ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Va層	打製石器	石斧の製作片	3.5	5.1	1.1	18.9	砂岩	a面上面に敲打痕	43

第 127 図　V層出土遺物（13）



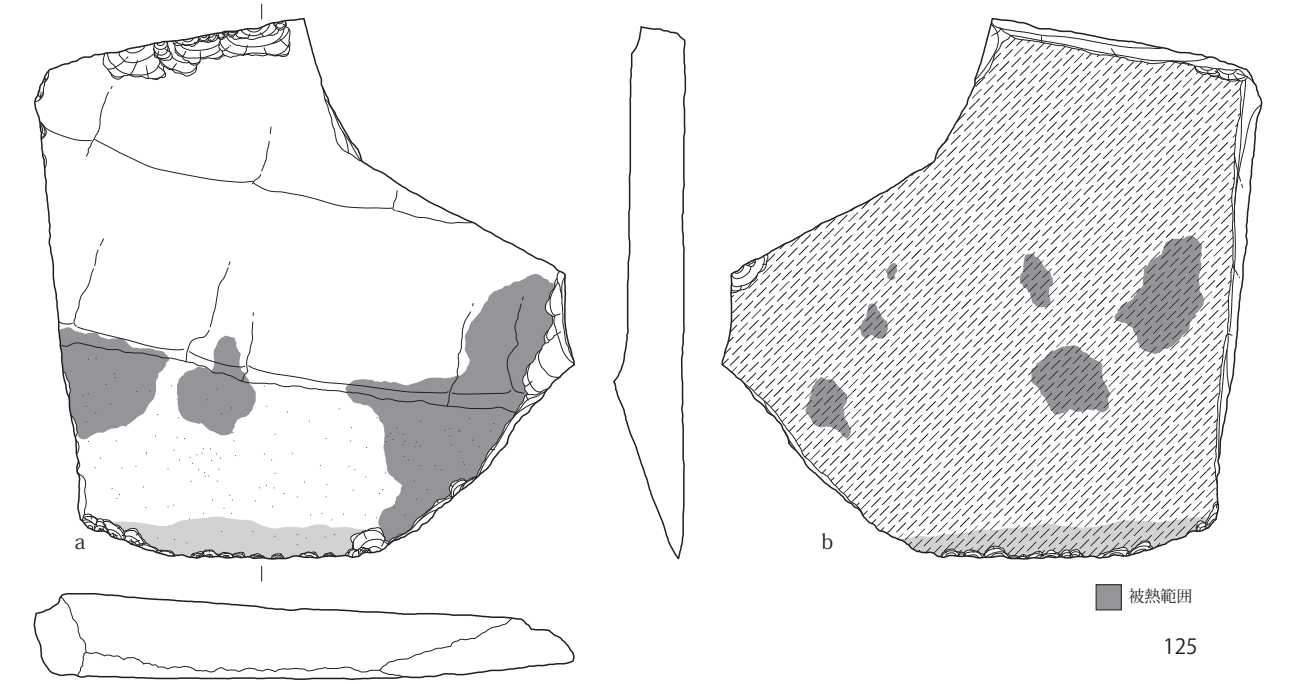
図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ				
123	Ka-075	11ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vc層	打製石器	板状石器	16.9	19.5	3.2	722.0	安山岩	刃部長11.6cm、、刃角44°、ab両面上端部剥離調整、ab両面刃部光沢あり、a面擦痕あり	44

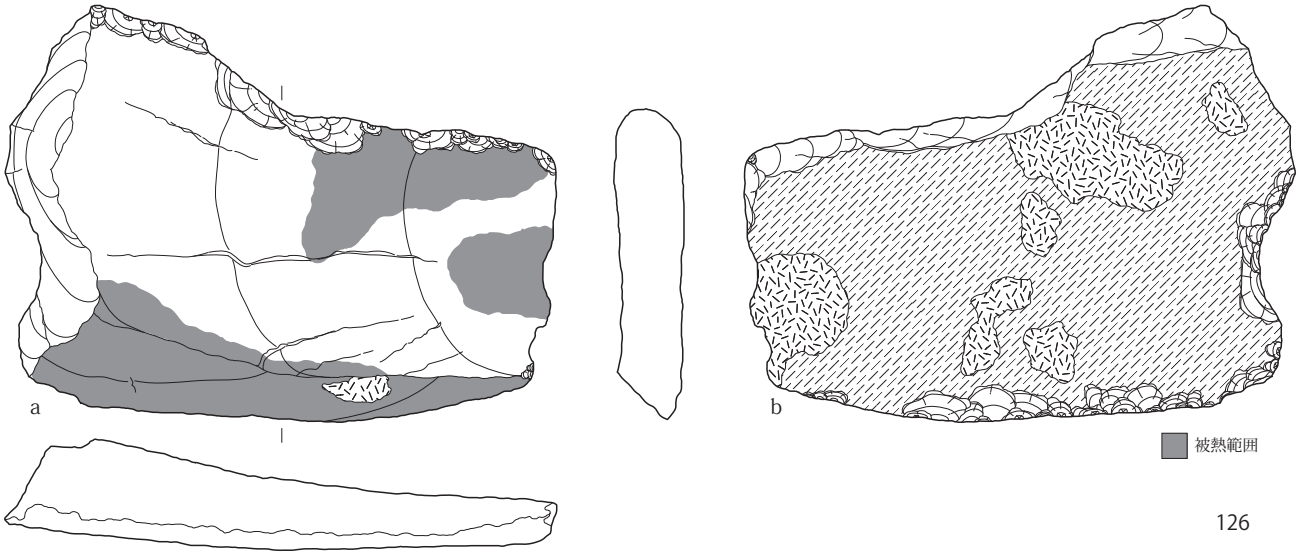
第128図　V層出土遺物（14）



図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ				
124	Ka-030	24ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Ⅳ層	打製石器	板状石器	12.2	15.0	3.3	523.0	安山岩	刃部長14.6cm、刃角38°、ab両面刃部調整、ab両面上端部剥離調整、a面自然面あり、b面節理面あり	44
	Ka-031	8ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器								

第 129 図　V 層出土遺物（15）

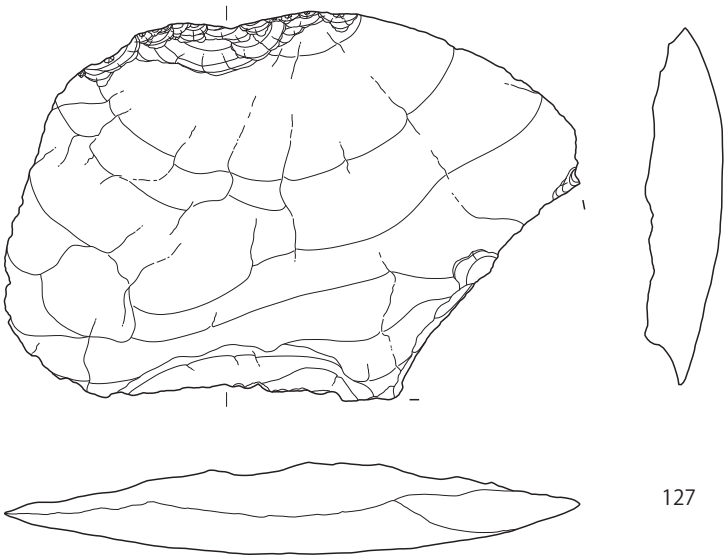




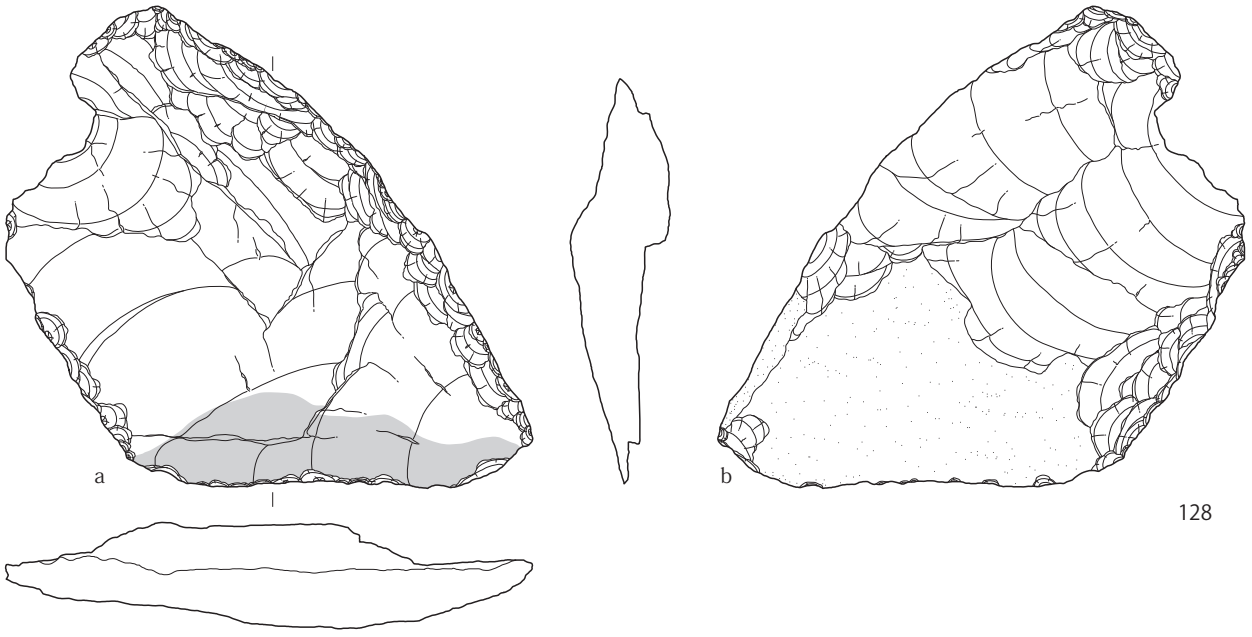
0 (1:2) 5cm

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ				
125	Ka-057	11ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	板状石器	14.3	14.3	2.2	471.0	安山岩	刃部長8.2cm、刃角32°、a面上縁剥離調整、ab両面刃部調整、ab両面被熱痕跡あり、ab両面刃部光沢あり、a面自然面あり、b面節理面あり	44
126	Ka-058	27ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	板状石器	11.0	14.6	2.9	429.0	安山岩	刃部長13.2cm、刃角54°、a面上縁剥離調整、b面刃部調整、a面被熱痕跡あり、b面火ハネあり、b面節理面あり	44

第 130 図　V層出土遺物（16）



127

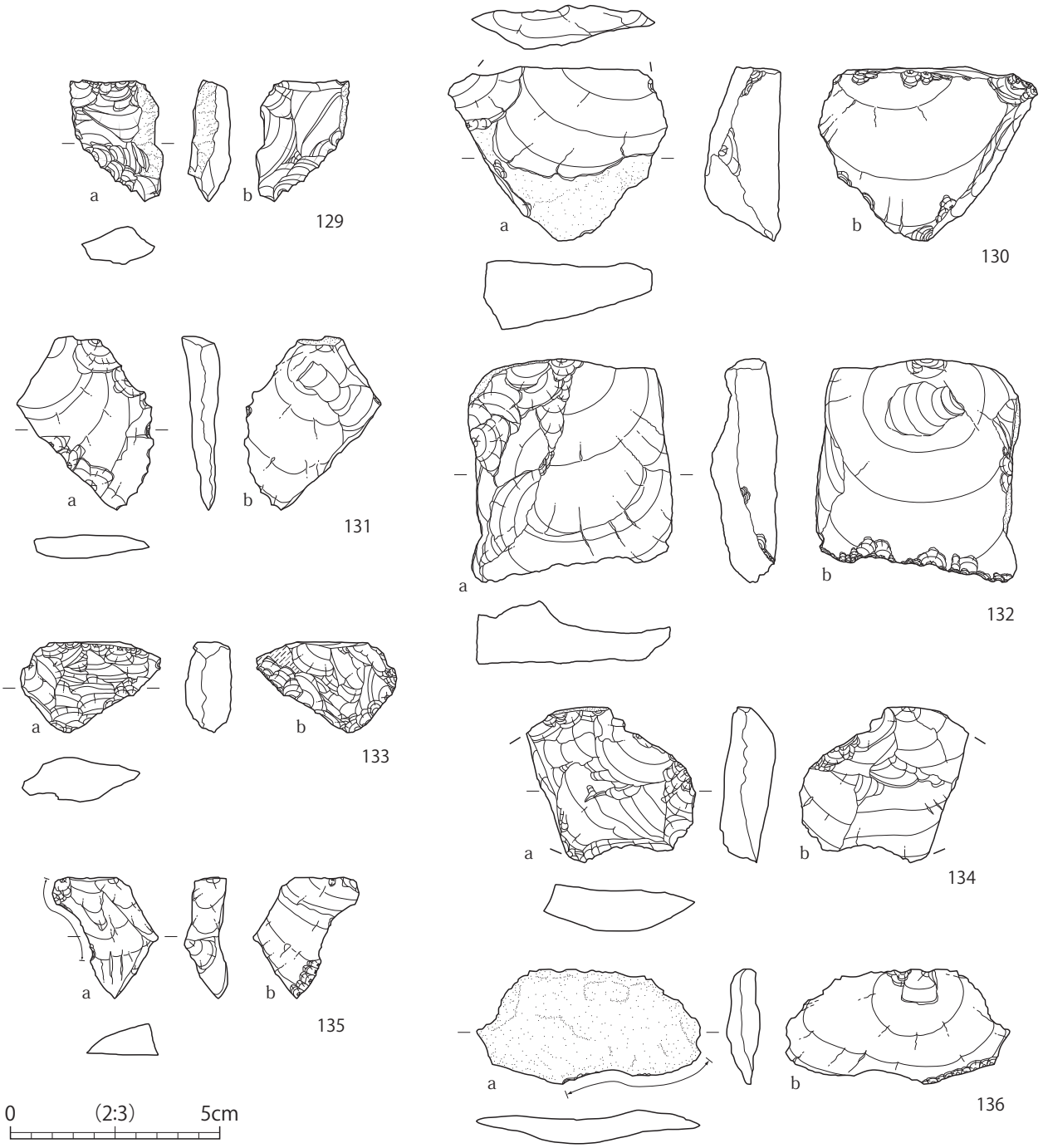


128

0 (1:2) 5cm

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ				
127	Ka-228	13ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	大型直縁刃石器	10.3	15.2	2.5	394	安山岩	刃部長7.8cm、刃角20°、上縁剥離調整	44
128	Ka-076	11ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vc層	打製石器	大型直縁刃石器	12.7	14.0	2.8	309.0	黒雲母片岩	石庖丁未成品の転用、刃部長10.2cm、刃角24°、a面刃部調整、a面上端から右側縁・左側縁剥離調整、b面上端・右側縁剥離調整、a面刃部光沢あり、b面自然面あり	45

第 131 図　V 層出土遺物（17）

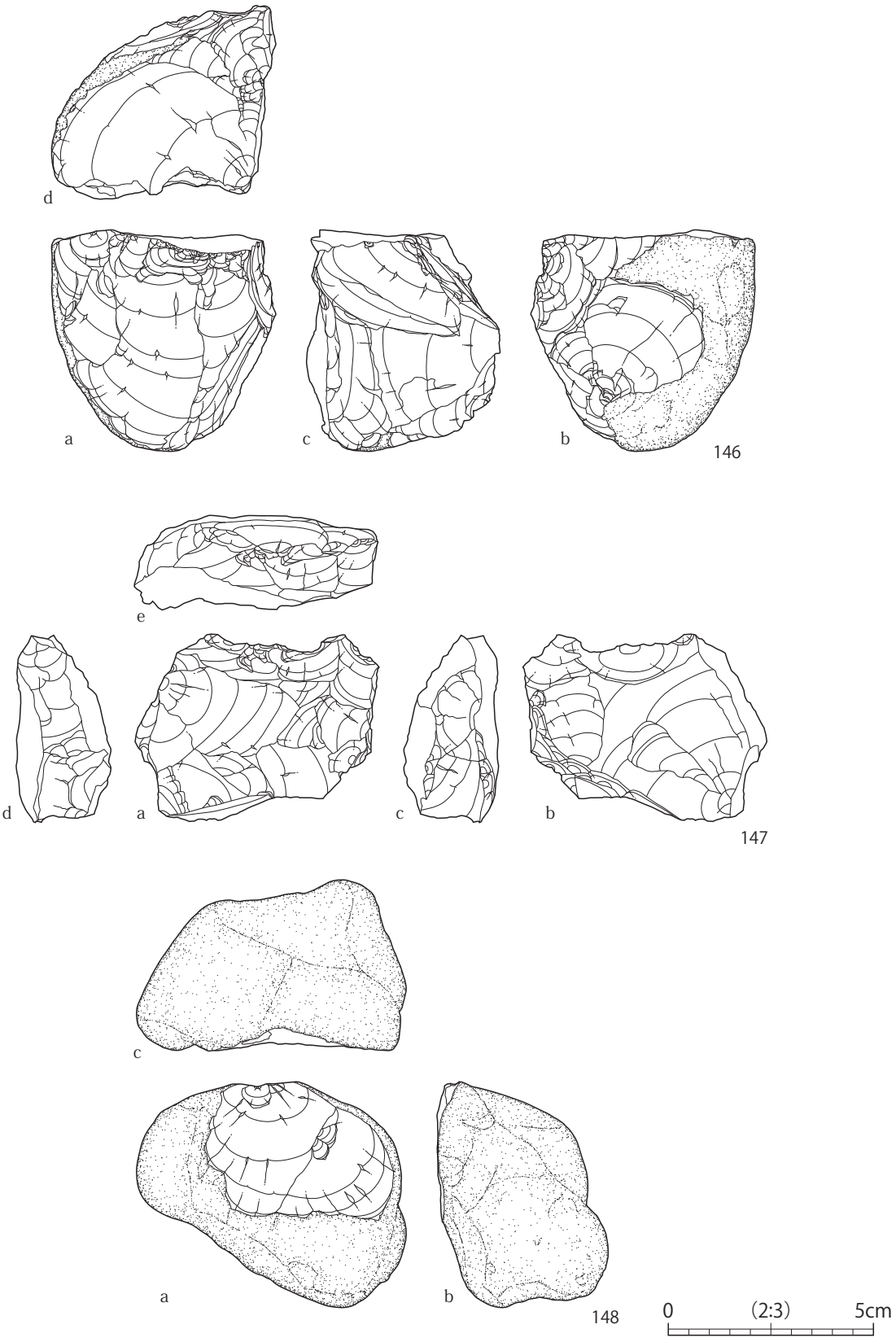


図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
129	Ka-039	22ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Va層	打製石器	二次加工のある剥片	2.9	2.2	1.0	5.7	碧玉	a面＋b面の複数縁辺に二次加工、自然面あり	45
130	Ka-071	24ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	二次加工のある剥片	4.2	5.3	1.8	33.5	流紋岩	b面の複数縁辺に二次加工、自然面あり	43
131	Ka-085	20ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Va層	打製石器	二次加工のある剥片	4.1	3.3	0.9	7.4	流紋岩	a面の複数縁辺に二次加工、自然面打面	45
132	Ka-091	22ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	二次加工のある剥片	5.3	4.9	1.6	36.5	流紋岩	b面の一縁辺に二次加工、自然面あり	45
133	Ka-072	24ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	二次加工のある剥片	2.2	3.4	1.1	7.1	碧玉	a面＋b面の複数縁辺に二次加工、節理面あり	45
134	Ka-037	24ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Va層	打製石器	二次加工のある剥片	3.7	4.0	1.3	16.2	流紋岩	a面＋b面の複数縁辺に二次加工、自然面打面	45
135	Ka-093	23ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vc層	打製石器	微細剥離痕のある剥片	2.9	2.5	1.0	4.0	流紋岩	一縁辺に微細剥離痕	45
136	Ka-062	20ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	微細剥離痕のある剥片	2.7	5.3	0.8	7.5	流紋岩	一縁辺に微細剥離痕、自然面打面	45

第 132 図　V層出土遺物（18）

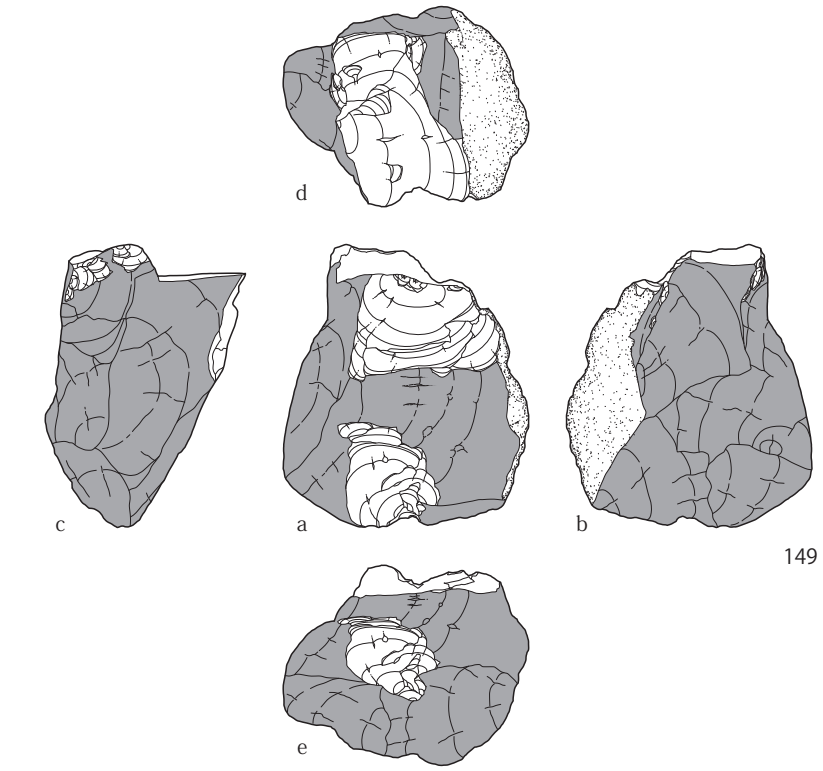
図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ				
137	Ka-041	12ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Va層	打製石器	微細剥離痕のある剥片	7.5	4.0	1.4	34.5	流紋岩	一縁辺に微細剥離痕、自然面あり	45
138	Ka-080	19ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vc層	打製石器	微細剥離痕のある剥片	4.3	4.2	1.5	21.1	流紋岩	一縁辺に微細剥離痕、下部欠損	45
139	Ka-067	11ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	微細剥離痕のある剥片	3.7	3.7	1.4	13.3	流紋岩	複数縁辺に微細剥離痕、自然面打面	45
140	Ka-087	15ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	微細剥離痕のある剥片	4.0	4.0	0.9	11.7	流紋岩	複数縁辺に微細剥離痕、自然面あり	45
141	Ka-061	19ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	微細剥離痕のある剥片	4.0	3.5	1.2	12.9	流紋岩	複数縁辺に微細剥離痕、自然面あり、節理面あり	45
142	Ka-070	12ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	微細剥離痕のある剥片	3.4	2.0	1.2	5.7	鉄石英	複数縁辺に微細剥離痕、b面火ハネあり	45
143	Ka-083	15ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vc層	打製石器	微細剥離痕のある剥片	1.6	1.5	0.5	1.0	碧玉	複数縁辺に微細剥離痕、二重パティナあり、自然面あり	45
144	Ka-047	8ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	石核	2.8	3.4	1.4	10.7	流紋岩	剥片素材、打面転移あり	46
145	Ka-048	23ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	石核	3.8	3.6	1.8	26.2	珪化木	礫素材、打面転移なし、自然面あり	46

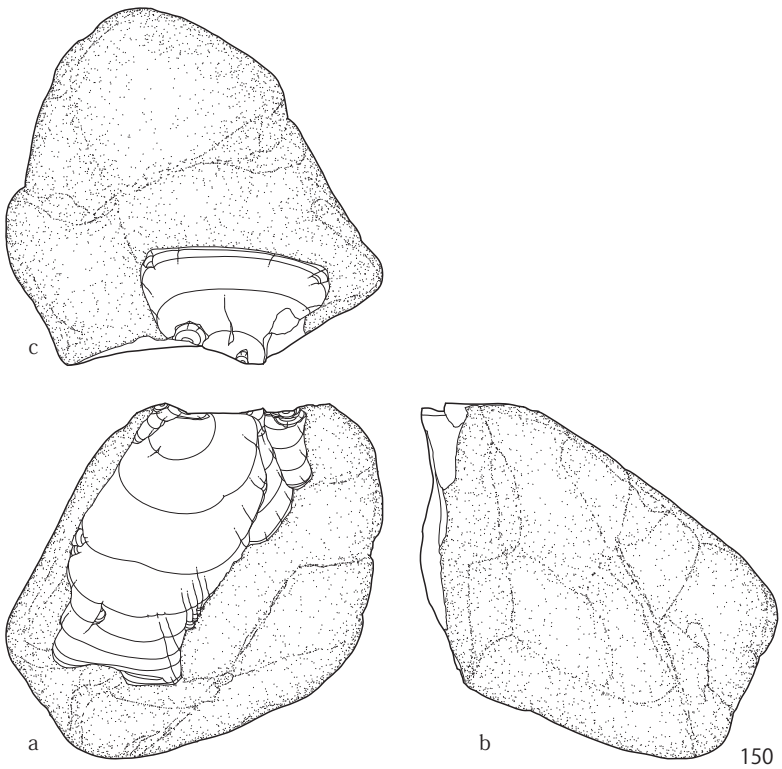
第 133 図　V 層出土遺物（19）



図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ				
146	Ka-052	11ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	石核	5.4	5.5	4.7	146.8	流紋岩	礫素材､打面転移あり､自然面あり	46
147	Ka-068	9ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	石核	4.5	6.0	2.3	62.1	流紋岩	剥片素材､打面転移あり	46
148	Ka-069	12ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	石核	5.5	6.6	4.6	146.1	流紋岩	礫素材､打面転移なし､自然面あり	46

第 134 図　V層出土遺物（20）

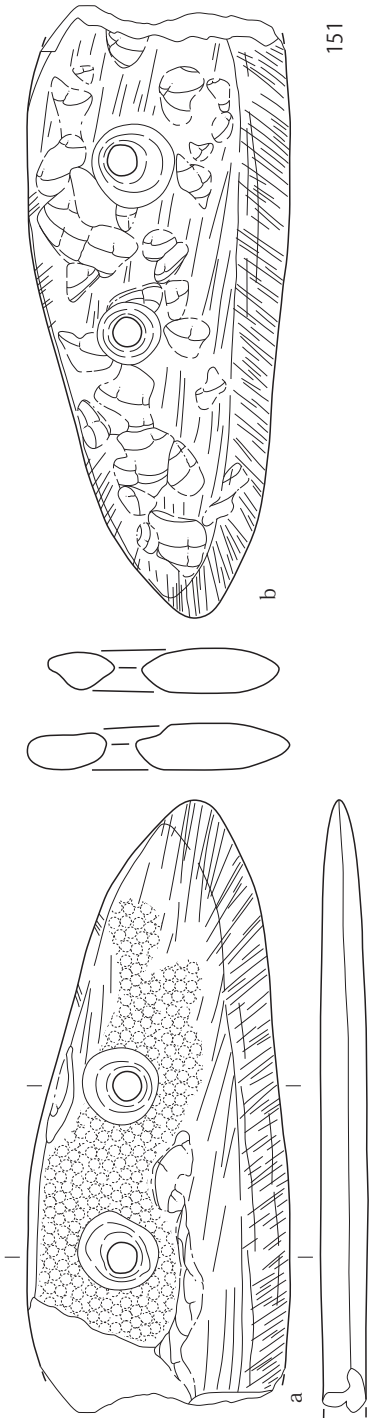




0 (2:3) 5cm

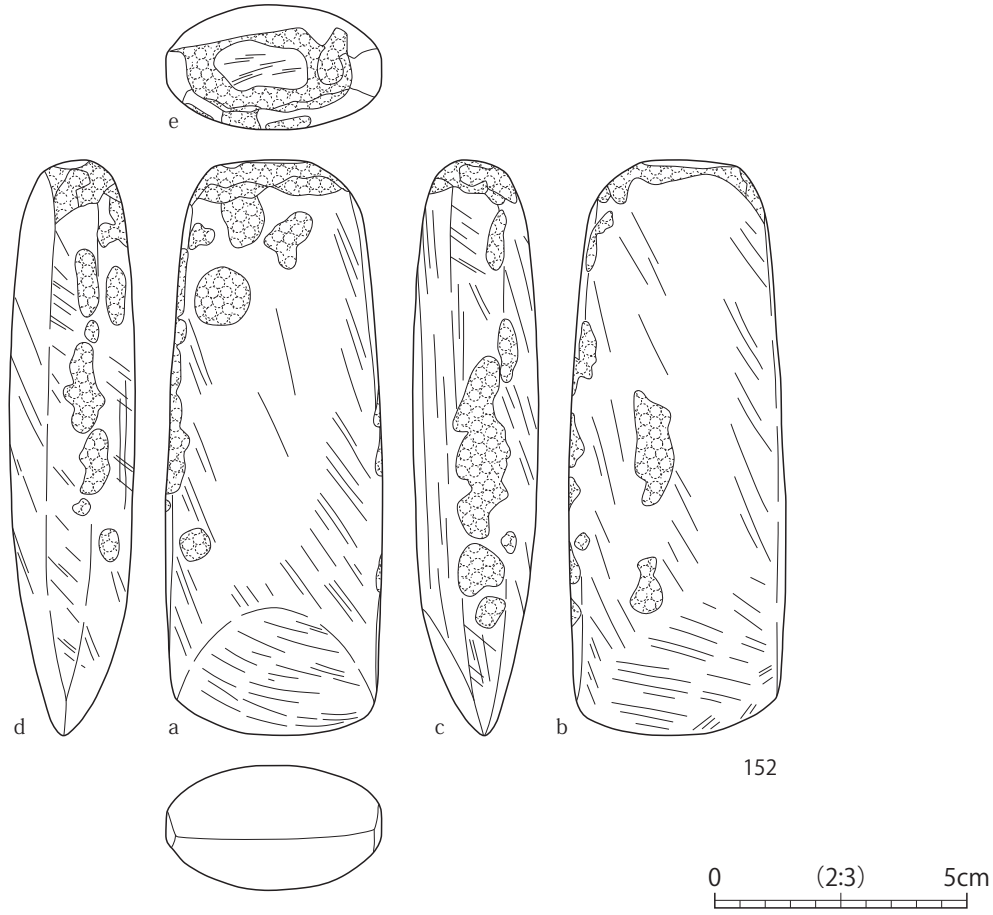
図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ				
149	Ka-077	4ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vc層	打製石器	石核	5.6	4.9	4.0	91.2	流紋岩	礫素材、打面転移あり、自然面あり、二重パティナあり	46
150	Ka-090	23ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	石核	7.1	7.4	7.1	360.0	珪質頁岩	礫素材、打面転移あり、自然面あり	46

第 135 図　V 層出土遺物（21）



図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真図版
						全長	幅	厚さ				
151	Kb-002	13ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	磨製石器	石庖丁	(12.2)	5.2	0.9	77.8	硬砂岩	欠損品、刃部角72～80°、孔内径0.5cm、孔外径1.3cm、孔間隔3.3cm	46

第 136 図　Ⅴ層出土遺物（22）



図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真図版
						全長	幅	厚さ				
152	Kb-001	15ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	磨製石器	扁平片刃石斧	11.4	4.3	2.4	218.2	黒色片岩	完形品、敲打後研磨、刃角69～78°	47

第 137 図　V層出土遺物（23）

3）礫石器

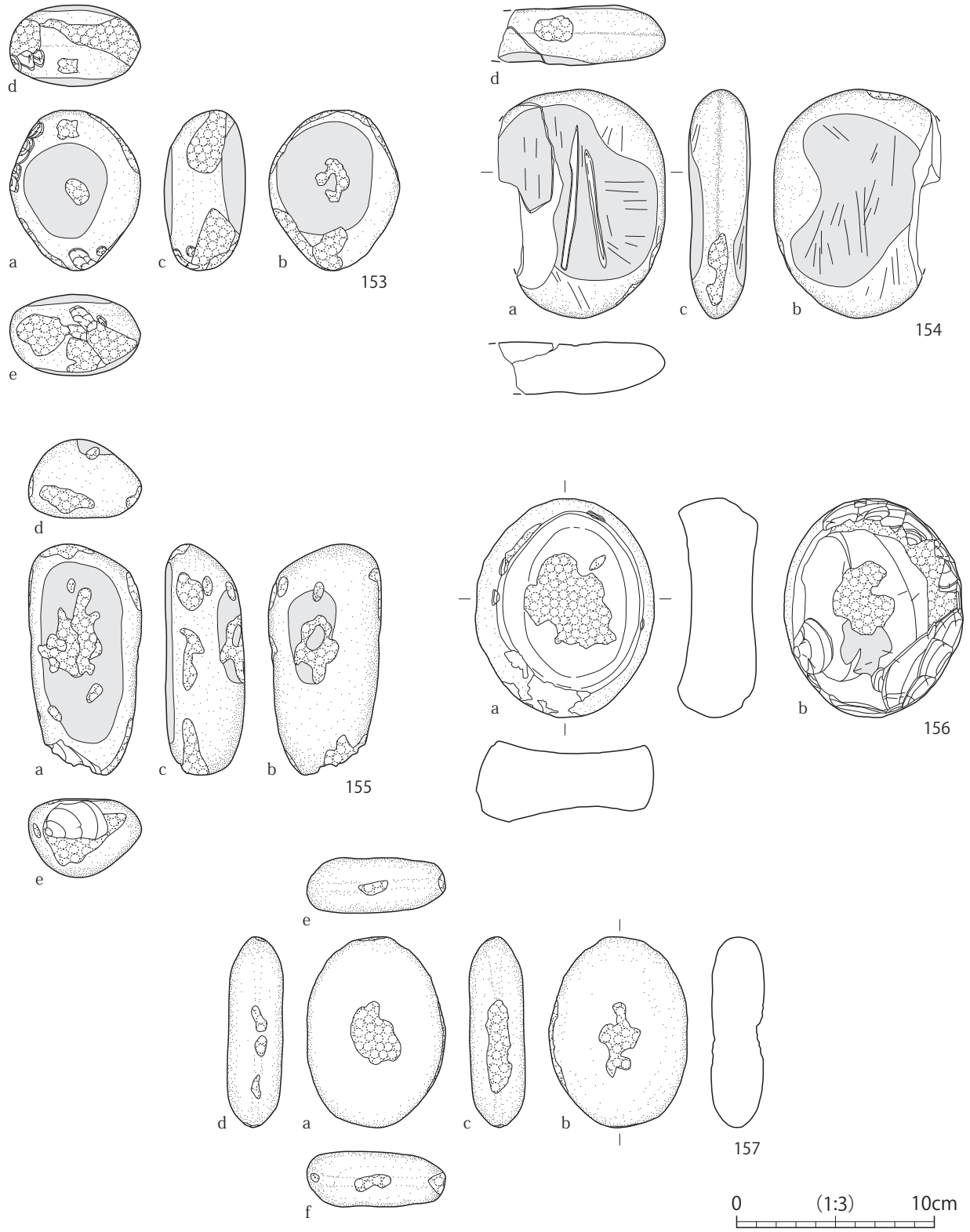
礫石器には、磨痕・凹痕・敲打痕などの使用痕跡が単独または複合して残されている。凹痕の中には痕跡がわずかで、敲打痕と区別が困難なものが含まれているが、凹面を形成しているものを凹痕、礫素材の形状を残しているものを敲打痕とした。礫石器の器種は、使用痕跡の組み合わせにより表記し、磨敲石、凹敲石、敲石、台石、礫器とした。

磨敲石（第 138 図）

153 ～ 156 は表裏面に磨痕、表裏面や側面に敲打痕がある。154 は表面の磨面に 2 条の溝状研磨痕がある。156 は円礫の両端を分割したものを素材としている。表裏面が大きく窪んで中央付近に敲打痕がある。裏面の上縁から右側縁にかけて、連続した剥離調整が施されており、石製品の未成品の可能性も考えられる。石材は 153・155 が安山岩、154・156 が凝灰岩である。

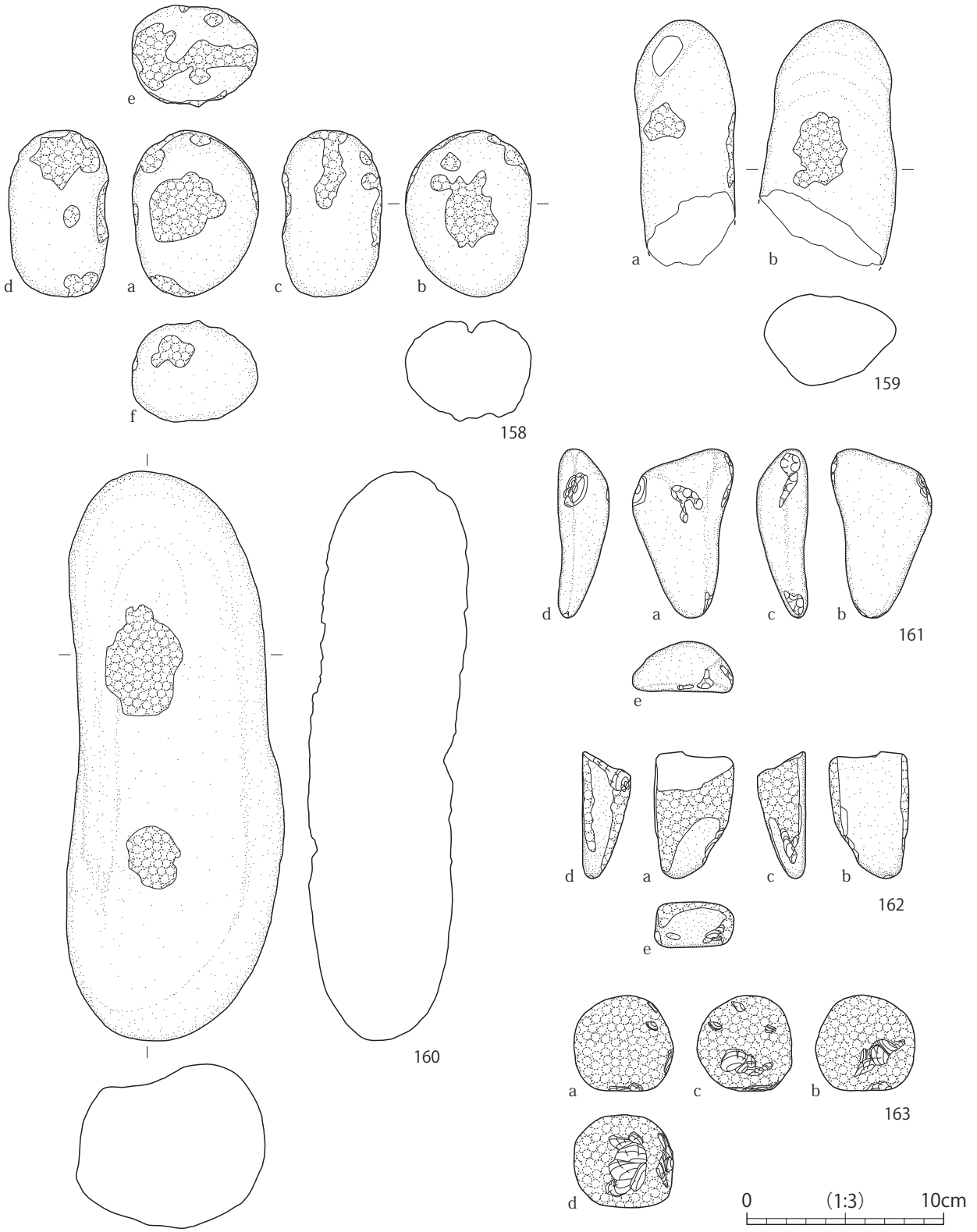
凹敲石（第 138・139 図）

157 は表裏面の中央にに浅い凹痕が残され、側面には敲打痕がある。158 は表裏面の中央部に深い凹痕が残され、側面には敲打痕がある。159 は表面に浅い凹痕が残り、側面に敲打痕がある。160 は棒状礫の平坦面に浅い凹痕と敲打痕がある。石材は 157・158 が石英斑岩、159・160 が凝灰岩である。



図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
153	Kc-027	11ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	礫石器	磨＋敲石	8.1	6.5	4.1	308.6	安山岩	完形品、楕円礫、磨二面(凸)、敲(平坦・側面11箇所)	47
154	Kc-043	12ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	礫石器	磨＋敲石	11.5	(8.4)	2.6	202.6	凝灰岩	欠損品、楕円礫、磨二面(平)、敲(側面2箇所)、溝状の研磨痕	47
155	Kc-053	8ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	礫石器	磨＋敲石	11.7	5.7	4.0	387.5	安山岩	完形品、楕円礫、磨二面(平)、敲(平坦・側面12箇所)	47
156	Kc-073	20ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vc層	礫石器	磨＋敲石	11.1	9.0	4.1	306.0	凝灰岩	完形品、分割礫、磨一面(平)、敲(平坦面3箇所)、縁辺剥離	47
157	Kc-051	15ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	礫石器	凹＋敲石	9.6	6.9	2.8	261.1	石英斑岩	完形品、楕円礫、凹二面(浅)、敲(側面6箇所)	47

第 138 図　Ⅴ層出土遺物（24）

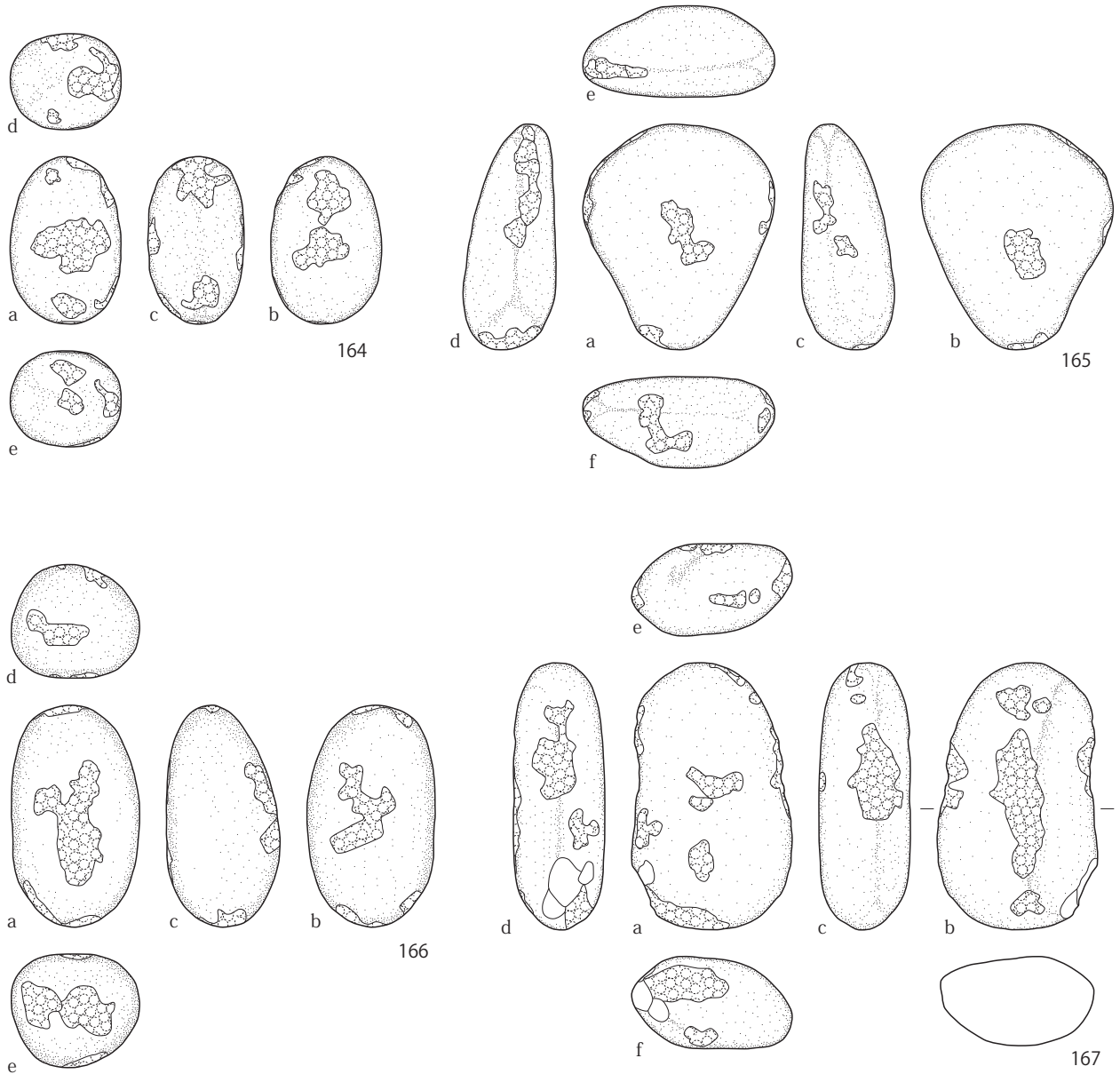


図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
158	Kc-041	7ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	礫石器	凹+敲石	8.4	6.5	4.9	354.2	石英斑岩	完形品、楕円礫、凹二面(深)、敲(平坦・側面5箇所)	47
159	Kc-026	8ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	礫石器	凹+敲石	(12.5)	6.9	5.1	282.9	凝灰岩	欠損品、棒状礫、凹一面(浅)、敲(側面1箇所)	47
160	Kc-062	13ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	礫石器	凹+敲石	28.9	11.0	9.0	2,000.0	凝灰岩	完形品、棒状礫、凹一面(浅)、敲(平坦面1箇所)	47
161	Kc-045	20ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	礫石器	敲石	8.6	4.9	2.6	118.8	砂岩	完形品、亜角礫、敲(平坦・側面5箇所)	47
162	Kc-032	19ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	礫石器	敲石	(6.4)	4.0	2.3	79.5	安山岩	欠損品、棒状礫、敲(平坦～側面2箇所)	47
163	Kc-039	11ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	礫石器	球状敲石	4.9	5.0	5.0	155.7	流紋岩	完形品、円礫、敲(全面)	47

第 139 図　V 層出土遺物（25）

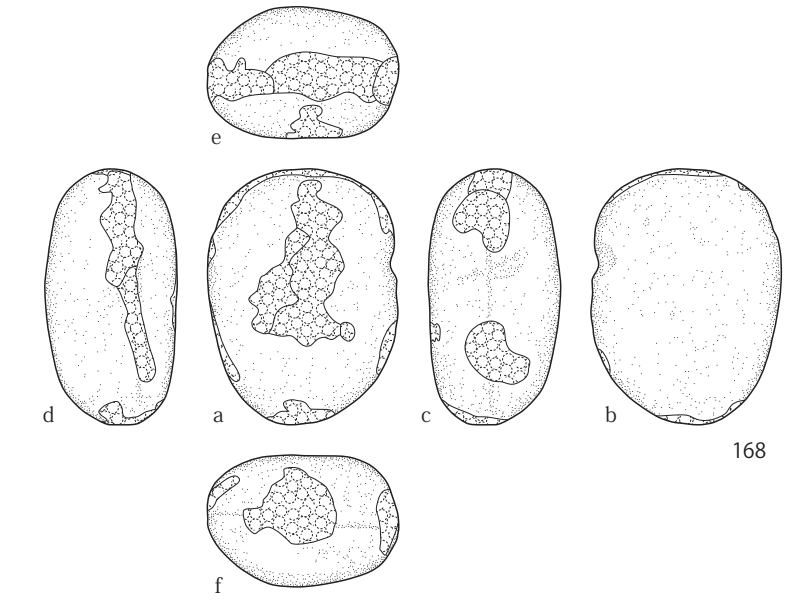
敲石（第 139 ～ 142 図）

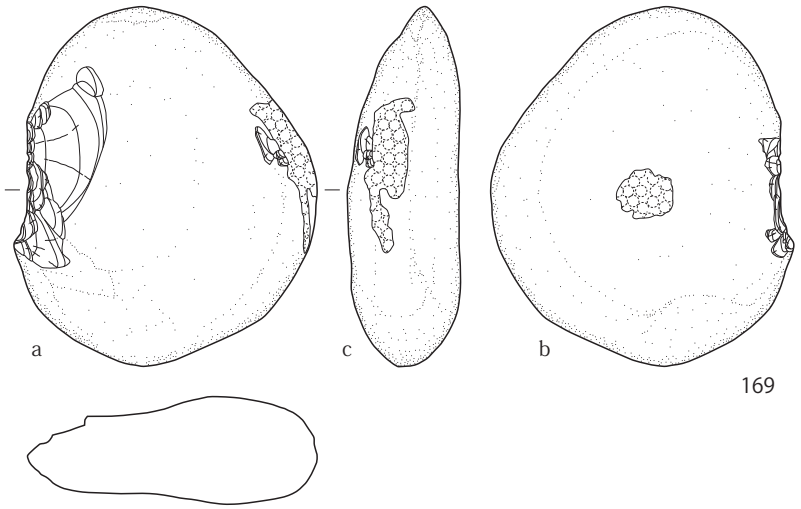
161 は三角形状の礫の端部と表面の中央部に敲打痕がある。162 は表面から右側縁にかけてと左側縁に敲打痕がある。163 は球状敲石で、ほぼ全面に敲打痕があり、一部に剥離がみられる。164 ～ 169 は表裏面と側面に敲打痕があり、169 は側縁に打撃による剥離がみられる。170 は表裏面の中央に敲打痕がある。171 ～ 176 は棒状の敲石で、礫の長軸端部などに敲打痕がある。使用時の衝撃により端部が剥離しているものがある。石材は 161・172・174・176 が砂岩、163 が流紋岩、162・164 ～ 166・168・170・171・173・175 が安山岩、167 がアプライト、169 が凝灰岩である。

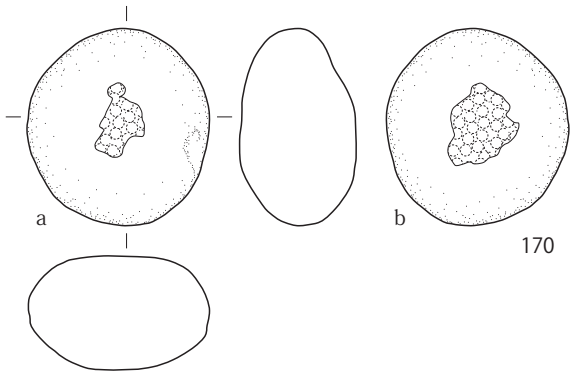


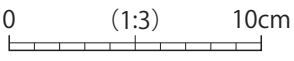
図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真図版
						全長	幅	厚さ				
164	Kc-023	9ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	礫石器	敲石	8.4	4.9	4.3	230.0	安山岩	完形品、楕円礫、敲（平坦・側面8箇所）	47
165	Kc-034	8ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	礫石器	敲石	10.1	8.5	3.1	350.0	安山岩	完形品、楕円礫、敲（平坦・側面9箇所）	47
166	Kc-054	8ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	礫石器	敲石	9.9	5.7	5.1	410.0	安山岩	完形品、楕円礫、敲（平坦・側面4箇所）	48
167	Kc-057	15ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	礫石器	敲石	11.9	7.2	4.1	507.1	アプライト	完形品、楕円礫、敲（平坦・側面13箇所）	48

第 140 図　Ｖ層出土遺物（26）



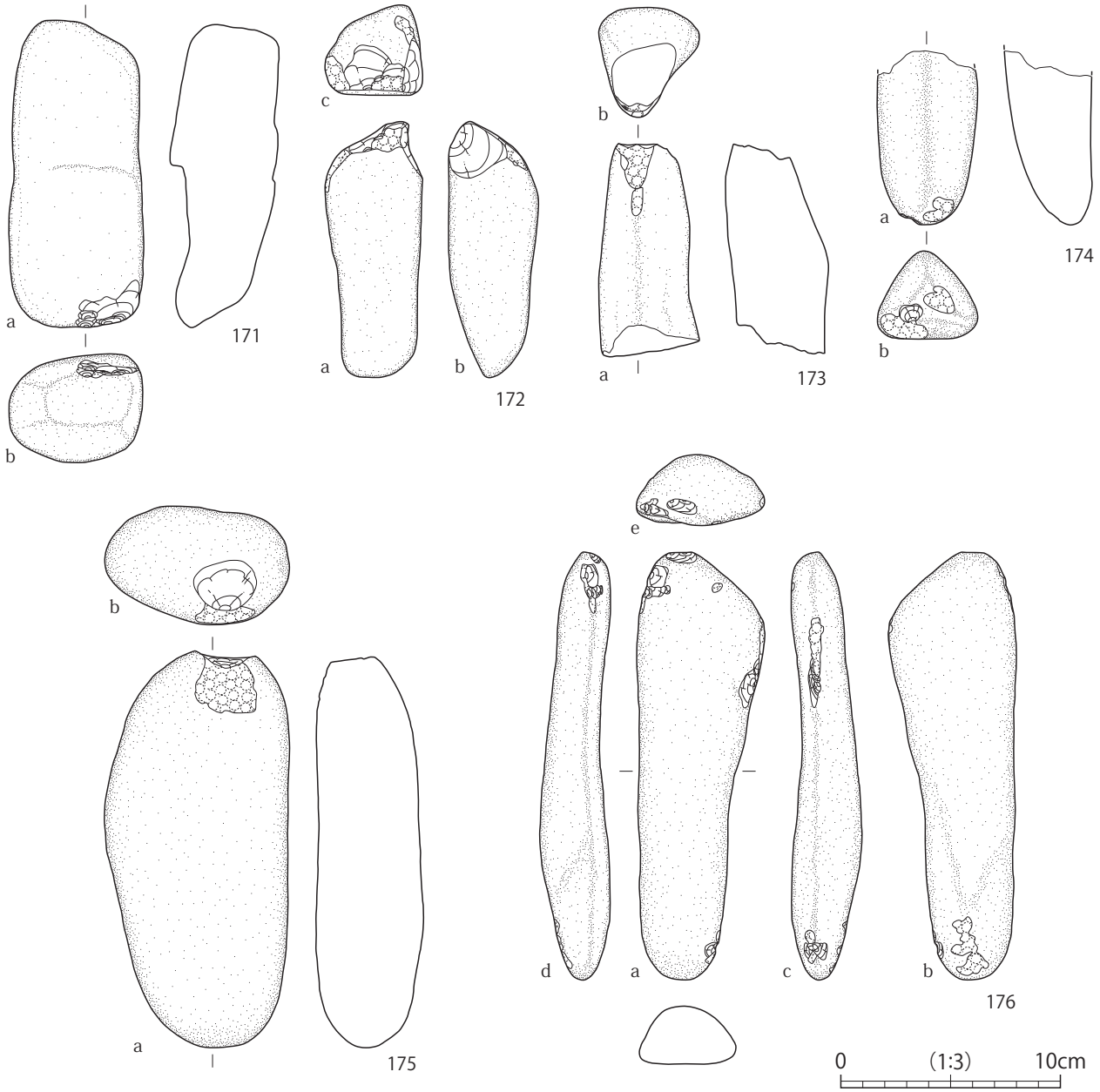






図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真図版
						全長	幅	厚さ				
168	Kc-055	11ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	礫石器	敲石	10.1	7.5	5.1	534.6	安山岩	完形品、楕円礫、敲(平坦・側面4箇所)	48
169	Kc-024	9ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	礫石器	敲石	14.3	12.0	4.5	632.4	凝灰岩	完形品、楕円礫、敲(平坦・側面2箇所)、側縁に打撃による剥離	48
170	Kc-036	19ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	礫石器	敲石	7.8	7.2	4.6	351.6	安山岩	完形品、円礫、敲(平坦面2箇所)	48

第 141 図　V 層出土遺物（27）



図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真図版
						全長	幅	厚さ				
171	Kc-022	4ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	礫石器	敲石	14.0	6.1	5.0	671.0	安山岩	完形品、棒状礫、敲(先端面1箇所)	
172	Kc-075	12ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vc層	礫石器	敲石	11.6	4.4	4.1	260.0	砂岩	完形品、棒状礫、敲(先端面3箇所)	48
173	Kc-031	3ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	礫石器	敲石	(8.7)	4.6	5.0	250.2	安山岩	欠損品、棒状礫、敲(側面2箇所)	48
174	Kc-074	11ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vc層	礫石器	敲石	(7.9)	4.6	4.0	183.8	砂岩	欠損品、棒状礫、敲(先端面2箇所)	48
175	Kc-033	7ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	礫石器	敲石	18.1	8.4	5.4	1,180.0	安山岩	完形品、棒状礫、敲(先端面1箇所)	48
176	Kc-068	11ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vc層	礫石器	敲石	19.5	5.8	3.3	425.6	砂岩	完形品、棒状礫、敲(平坦・側・先端面5箇所)	48

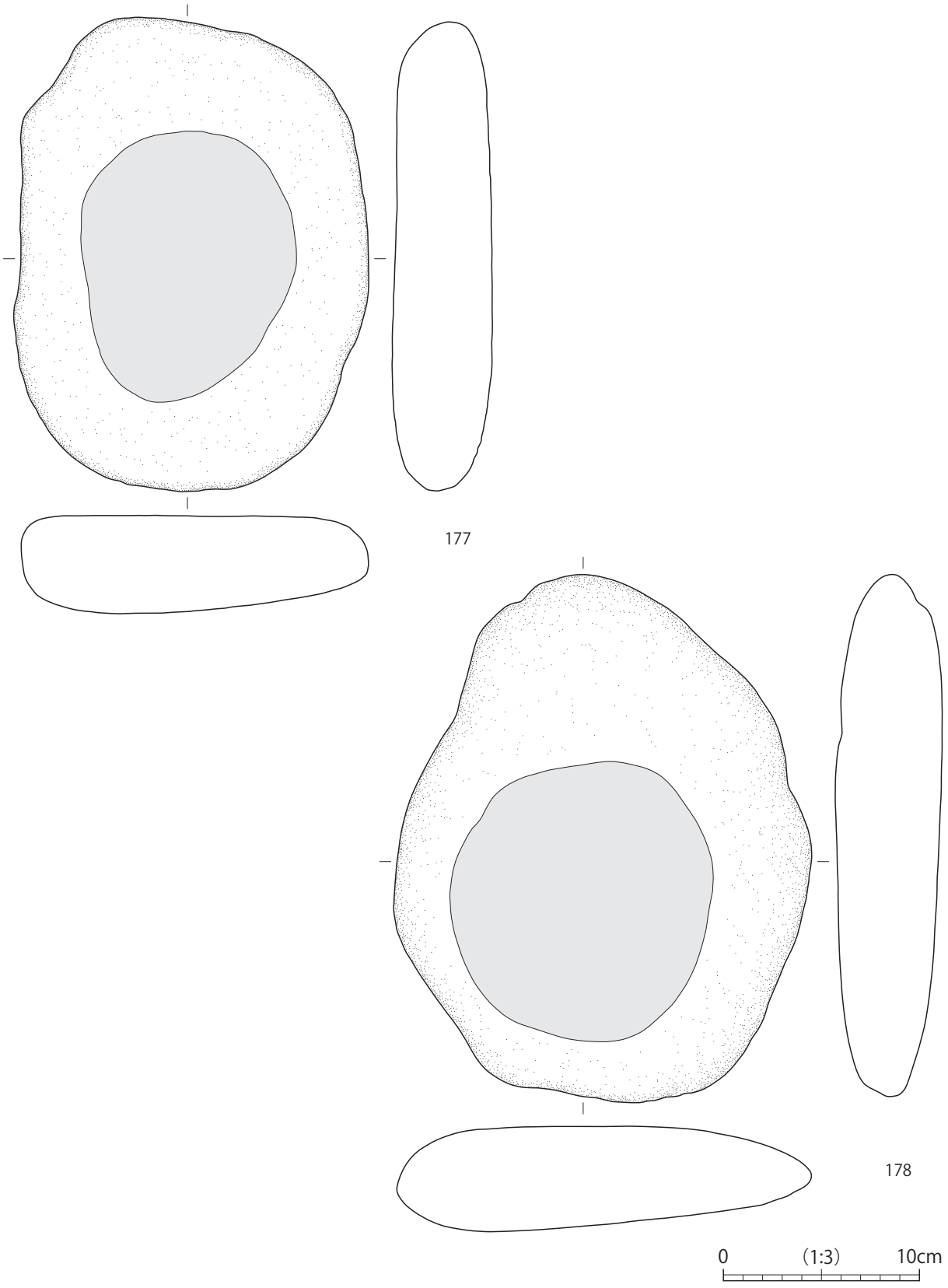
第 142 図　V層出土遺物（28）

台石（第 143・144 図）

177・178 は表面の平坦面に磨痕がある。179 は表裏両面に磨痕と敲打痕、側面に敲打痕がある。石材はいずれも安山岩である。

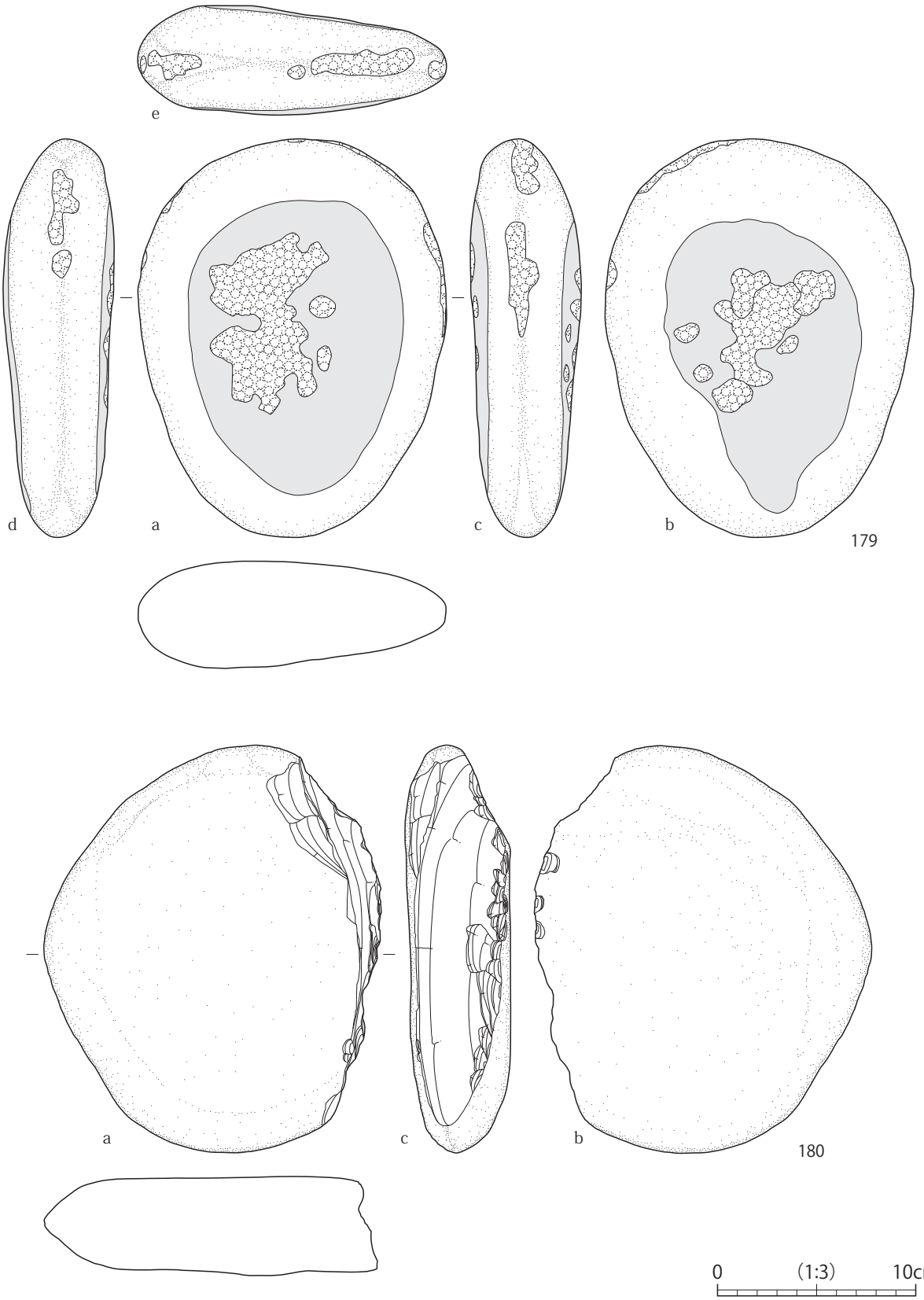
礫器（第 144 図）

180 は一側縁を弧状に大きく打ち欠き、その縁部を刃部としたものである。刃部には連続する剥離調整が施されている。石材は安山岩である。



図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真図版
						全長	幅	厚さ				
177	Kc-071	8ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vc層	礫石器	台石	24.2	18.0	5.0	3,720.0	安山岩	完形品、楕円礫、磨一面(平)	48
178	Kc-072	8ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vc層	礫石器	台石	26.9	21.3	5.5	4,485.0	安山岩	完形品、楕円礫、磨一面(平)	49

第 143 図　V 層出土遺物（29）



図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真図版
						全長	幅	厚さ				
179	Kc-050	8ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	礫石器	台石	20.1	15.5	5.5	2,260.0	安山岩	完形品、楕円礫、磨二面(凸)、敲(平坦・側面)11箇所	49
180	Kc-042	7ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	礫石器	礫器	20.5	17.0	5.2	2,690.0	安山岩	完形品、楕円礫、片刃	49

第 144 図　V層出土遺物（30）

(6) 接合資料（第 145 ～ 166 図）

基本層Ⅴ層（遺物包含層）と弥生時代の遺構堆積土、基本層Ⅳ層、古代の遺構堆積土、撹乱から出土した石器のうち、37 点の接合資料を掲載した。これらは、剥片剥離作業を示すものである。

第 145 図は接合資料の出土地点分布図である。これによると、遺物包含層内で接合したものには、東西で 13m ほど離れた場所から出土した剥片が接合したもの（接合資料 16）や、南北に 15m ほど離れた場所から出土した剥片が接合したもの（接合資料 32）など、10m 以上離れて接合関係がみられる資料がある。遺物包含層と弥生時代の遺構堆積土出土遺物との接合関係では、調査区北端の出土遺物と SX1 出土遺物が接合しているもの（接合資料 3・6・14）や調査区北半部中央の出土遺物と SK1 出土遺物が接合しているもの（接合資料 4）、調査区中央部の出土遺物と SK2 出土遺物が接合しているもの（接合資料 32）がある。以下、各接合資料について記載する。

接合資料 1（第 146 図）

二次加工のある剥片 2 点と剥片 1 点の接合資料である。いずれも遺物包含層からの出土である。石材は流紋岩である。自然面の残存状況から拳大の原礫と考えられる。剥離は、1（Ka-161）→ 2（Ka-160）→ 3（Ka-159）の順で剥離されている。1 は先行する剥離と同一方向から剥離されている。その後、90°の打面転移が行われ、2 が剥離され、さらに 2 の剥離面を打面として、1 と同一方向から 3 が剥離されている。2 と 3 はそれぞれ a 面と c 面に二次加工が施されている。

接合資料 2（第 147 図）

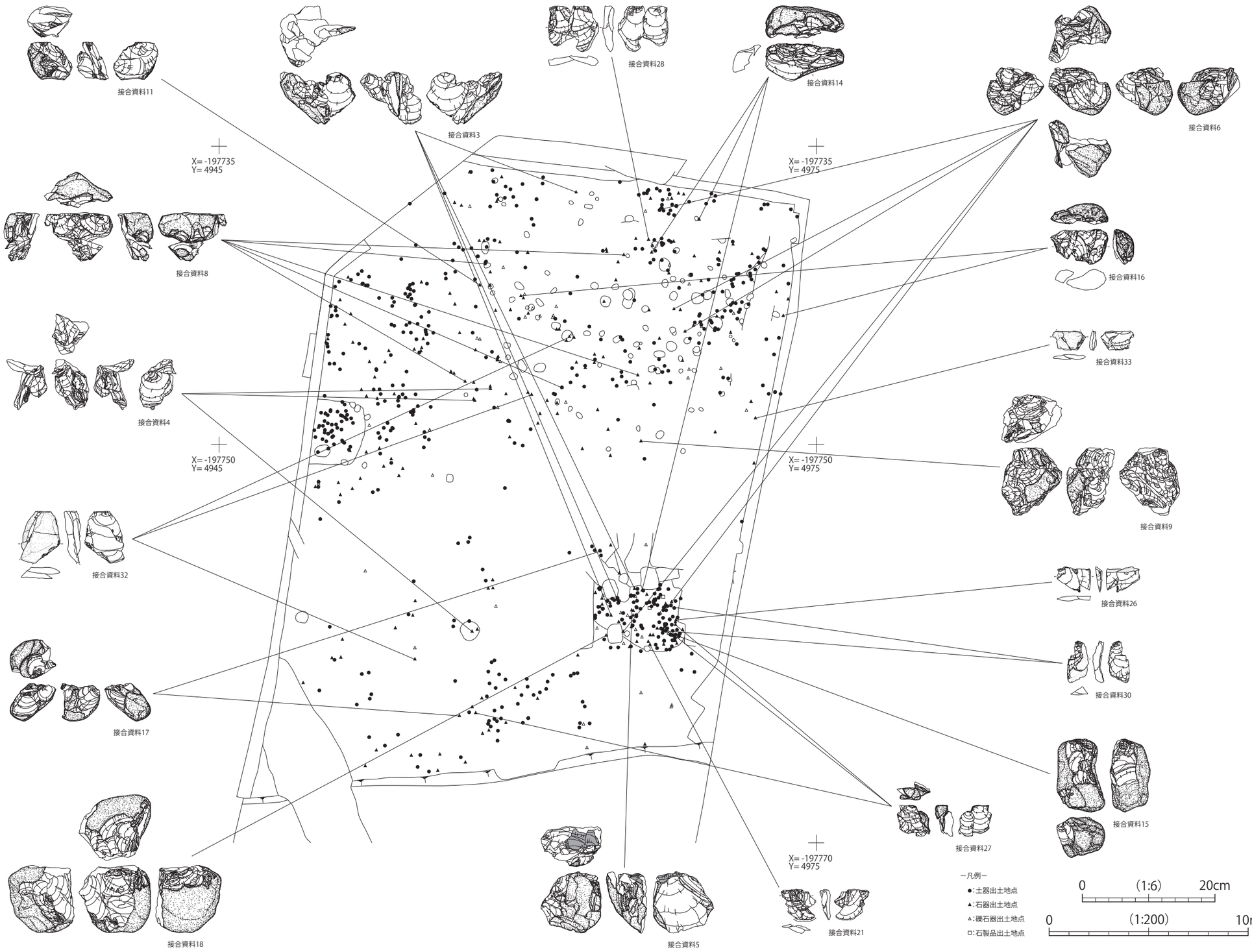
剥片 4 点の接合資料である。いずれも遺物包含層からの出土で、石材は流紋岩である。自然面の残存状況から、幅 7cm、厚さ 4cm 程度の小型の原礫と考えられる。剥離は、2（Ka-165）→ 3（Ka-164）→ 1（Ka-166・167）の順で、同一方向から連続的に剥離されている。1 は石核から剥離された際の同時割れにより、上半部と下半部に割れている。

接合資料 3（第 148 図）

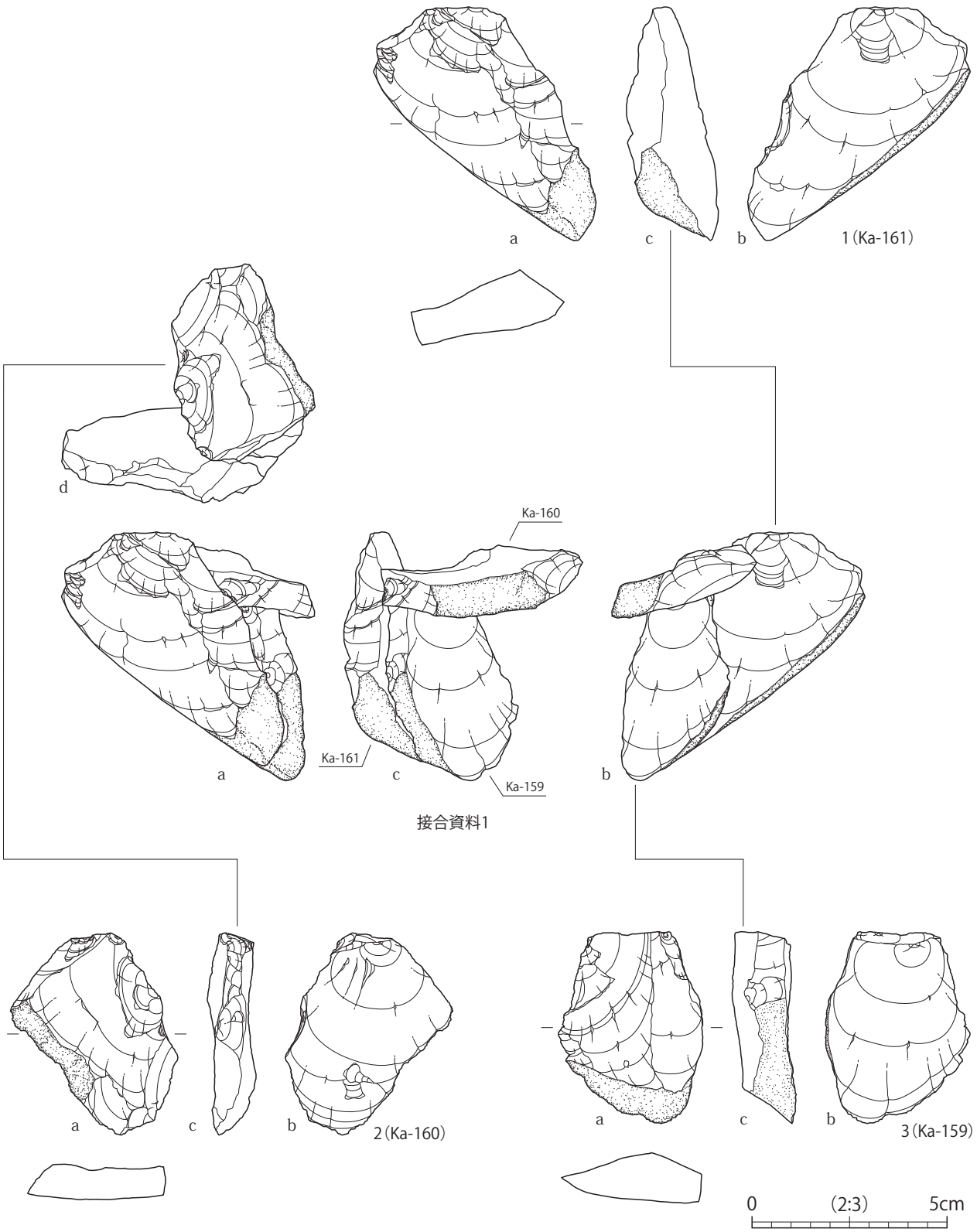
二次加工のある剥片 1 点と剥片 9 点の接合資料である。1（Ka-173）・4（Ka-172）・6（Ka-177）は遺物包含層、3（Ka-176）・5（Ka-174）・6（Ka-175）は SX1 堆積土、2（Ka-171）・7（Ka-168）・8（Ka-169）は古代の遺構堆積土からの出土で、遺物包含層から出土した 1（Ka-173）と SX1 堆積土から出土した 3（Ka-176）・5（Ka-174）・6（Ka-175）は 21m ほど離れて出土している。石材は流紋岩である。自然面の残存状況から長さ 10cm 以上、幅 8cm、厚さ 8cm 前後の原礫と考えられる。剥離は、1（Ka-173）→ 3（Ka-170・176）→ 6（Ka-175・177）→ 7（Ka-168）・4（Ka-172）→ 8（Ka-169）→ 5（Ka-174）→ 2（Ka-171）の順で剥離されている。1・3 は先行する剥離と同一方向から連続して剥離され、その後、90°の打面転移が行われている。さらに、打面転移後の剥離面を打面として、1 と同一方向から連続的に剥離されている。2 は a 面と b 面の一側縁に二次加工が施されている。3 と 6 はそれぞれ石核から剥離された際の同時割れにより、上半部と下半部に割れており、4・8 もそれぞれ同時割れの剥片である。

接合資料 4（第 149 図）

二次加工のある剥片 2 点と剥片 3 点の接合資料である。1 ～ 4（Ka-178 ～ 180・182）は遺物包含層、5（Ka-181）は SK1 堆積土からの出土である。遺物包含層から出土した 2（Ka-182）・4（Ka-180）と SK1 堆積土から出土した 5（Ka-181）は 12m ほど離れて出土している。石材は流紋岩である。剥離は、3（Ka-179）→ 2（Ka-182）

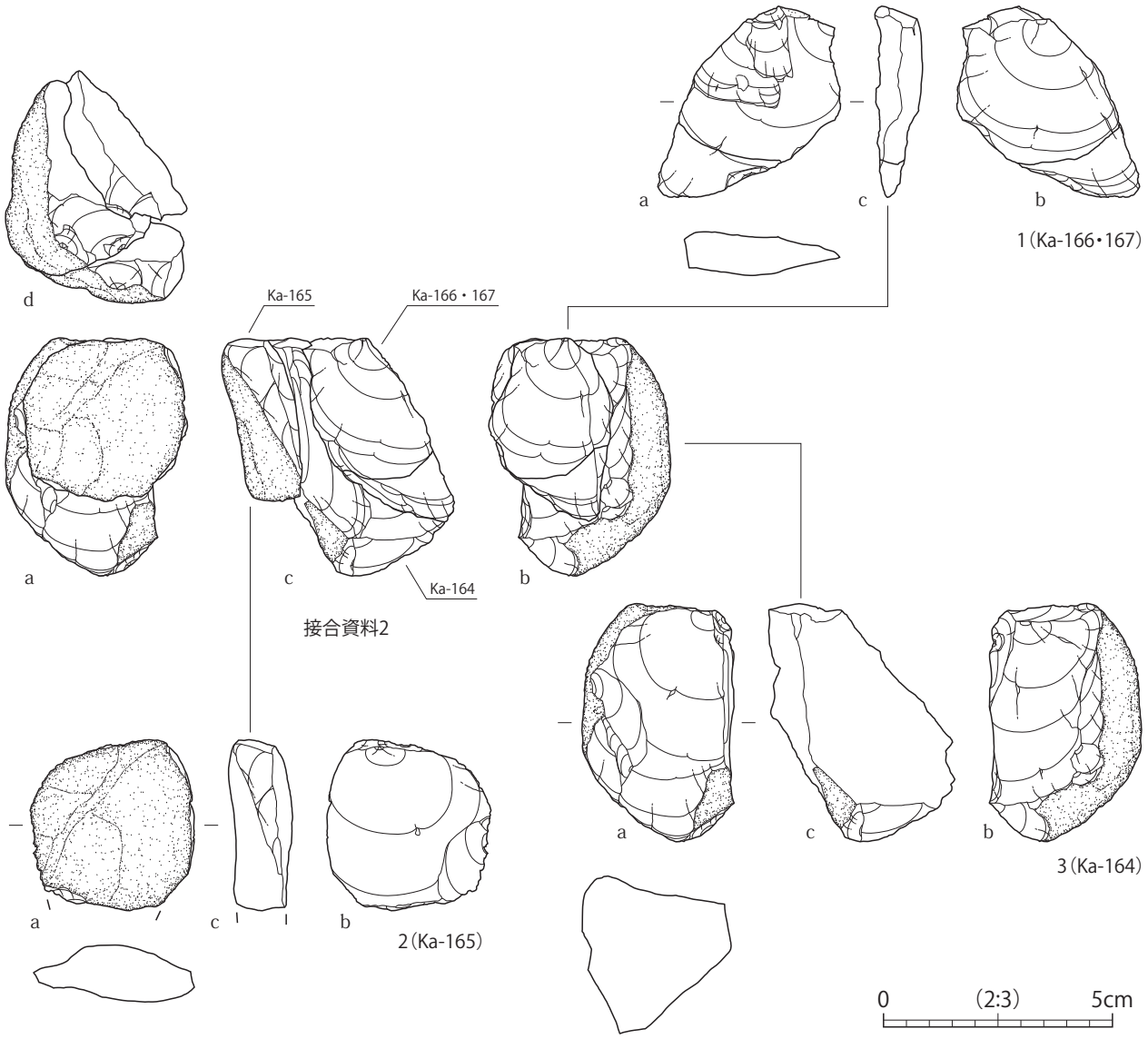


第 145 図　接合資料出土状況図



図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
1	Ka-161	24ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	剥片	6.0	5.7	2.4	45.5	流紋岩	接合資料1、自然面あり	50
2	Ka-160	24ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	二次加工のある剥片	5.1	4.3	1.2	19.9	流紋岩	接合資料1、自然面あり、a面＋c面に二次加工	50
3	Ka-159	16ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	二次加工のある剥片	4.9	3.7	1.6	26.5	流紋岩	接合資料1、自然面あり、a面＋c面に二次加工	50

第 146 図　接合資料（1）



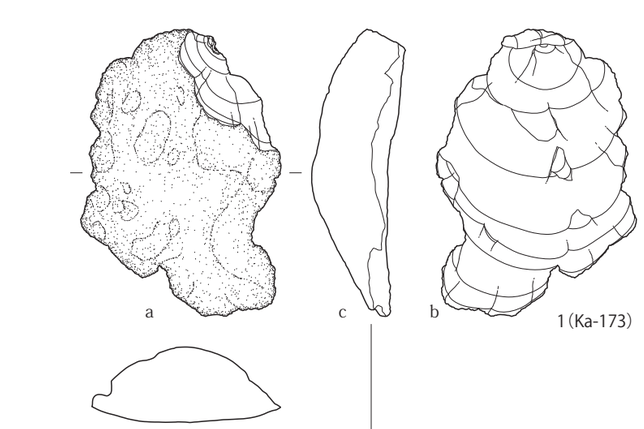
図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
1	Ka-166	12ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Ⅴc層	打製石器	剥片	4.2	3.9	1.1	13.2	流紋岩	接合資料2、同時割れ、法量はKa-166＋Ka-167	50
	Ka-167	20ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Ⅴc層	打製石器								
2	Ka-165	20ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Ⅴc層	打製石器	剥片	3.7	3.7	1.4	19.7	流紋岩	接合資料2、自然面あり	50
3	Ka-164	20ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Ⅴb層	打製石器	剥片	5.2	3.3	4.1	57	流紋岩	接合資料2、自然面あり	50

第 147 図　接合資料（2）

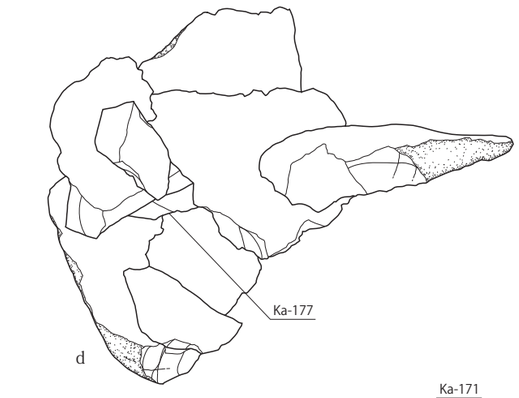
→ 1（Ka-178）→ 4（Ka-180）→ 5（Ka-181）の順で剥離されている。2 が剥離された後、90°の打面転移が行われ、1 が剥離されている。その後、1 の剥離面を打面として、4・5 が連続して剥離されている。2 と 4 は、それぞれ a 面にの一側縁に二次加工が施されている。3 は同時割れの剥片である。

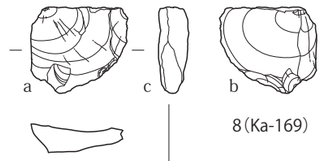
接合資料 5（第 150 図）

石核 1 点と二次加工のある剥片 1 点、剥片 1 点の接合資料である。1（Ka-184）は遺物包含層、2（Ka-185）は SX1 堆積土、3（Ka-183）は古代の遺構堆積土からの出土で、石材は流紋岩である。剥離は、3（Ka-183）→ 1（Ka-184）→ 2（Ka-185）の順で剥離されている。1・2 は同一方向から剥離されている。1 は a 面と b 面に二次加工が施されている。3 は石核で、二重パティナ及び二重パティナ状の自然面が残存しており、残核の再利用ないし分割礫状態の転礫を石核として利用した可能性が考えられる。少なくとも 2 回以上の打面転移がみられる。

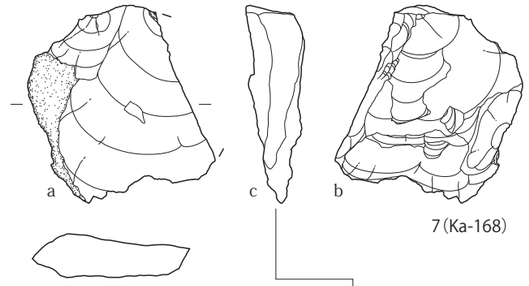


1（Ka-173）

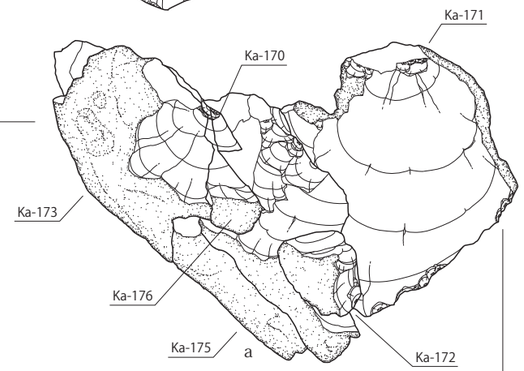




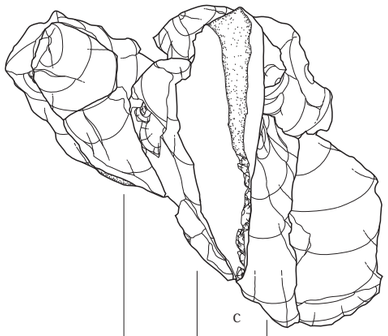
8（Ka-169）

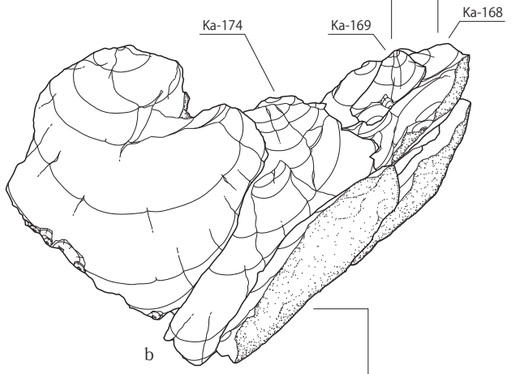


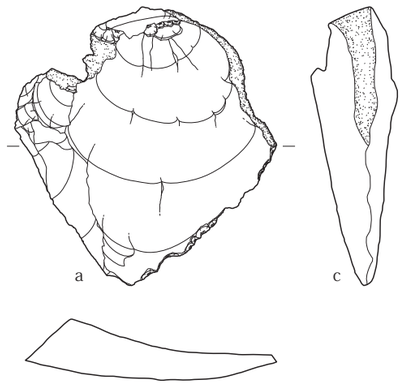
7（Ka-168）



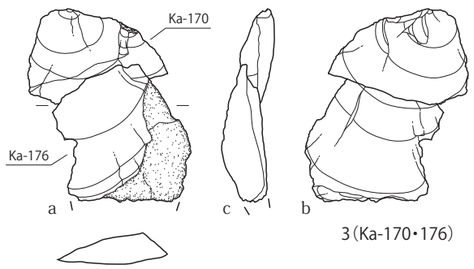
接合資料3



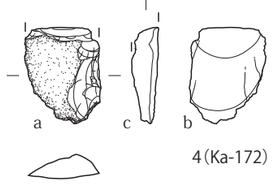




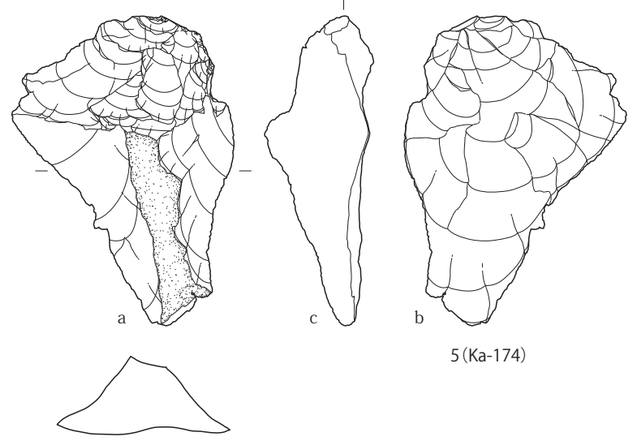
2（Ka-171）



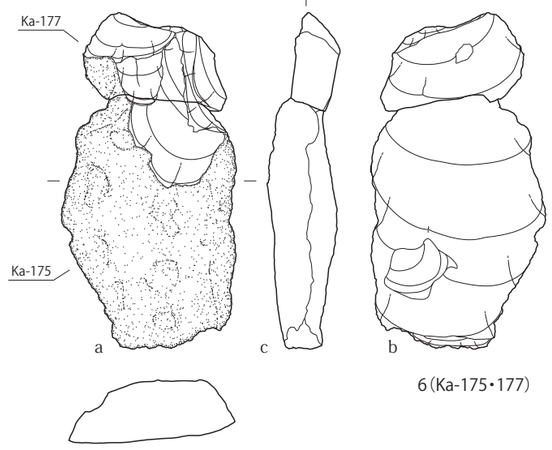
3（Ka-170・176）



4（Ka-172）



5（Ka-174）

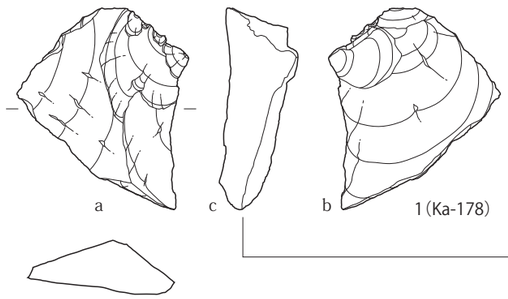


6（Ka-175・177）

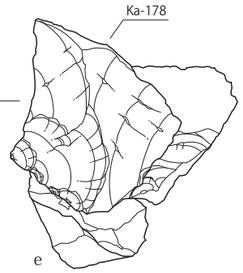
0 (2:3) 5cm

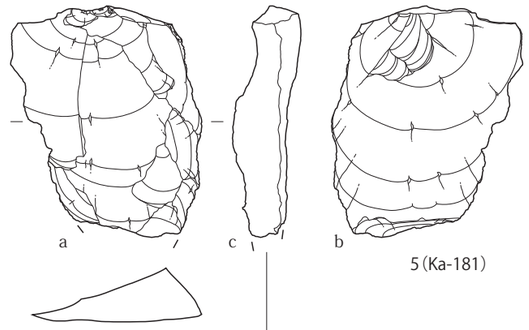
図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
1	Ka-173	4ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	剥片	7.0	4.9	2.3	54.4	流紋岩	接合資料3、自然面あり	51
2	Ka-171	SI293	掘り方	打製石器	二次加工のある剥片	6.0	5.8	2.2	54.8	流紋岩	接合資料3、a面＋b面に二次加工	51
3	Ka-170	攪乱	―	打製石器	剥片	4.7	4.0	1.3	12.7	流紋岩	接合資料3、同時割れ、法量はKa-170＋Ka-176	51
	Ka-176	SX1	堆積土	打製石器								
4	Ka-172	16ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Va層	打製石器	剥片	2.4	1.9	0.7	2.6	流紋岩	接合資料3、自然面あり	51
5	Ka-174	SX1	堆積土	打製石器	剥片	7.6	5.5	2.7	54.7	流紋岩	接合資料3、自然面あり	51
6	Ka-175	SX1	堆積土	打製石器	剥片	8.2	4.3	1.8	49.1	流紋岩	接合資料3、同時割れ、自然面あり 法量はKa-175＋Ka-177	51
	Ka-177	20ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器								
7	Ka-168	SI307P2	堆積土	打製石器	剥片	4.9	4.6	1.5	19.8	流紋岩	接合資料3、自然面あり	51
8	Ka-169	SB31P2	堆積土	打製石器	剥片	2.1	2.4	0.8	3.3	流紋岩	接合資料3	51

第 148 図　接合資料（3）

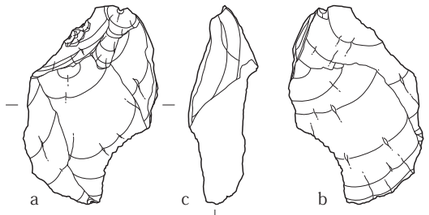


1（Ka-178）

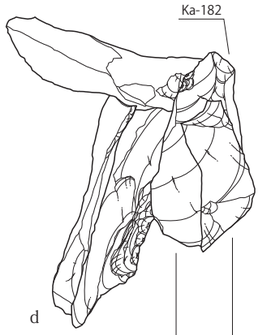


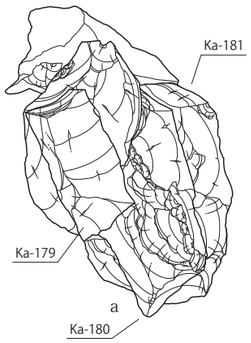


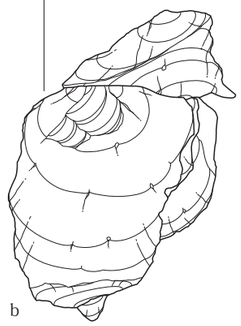
5（Ka-181）



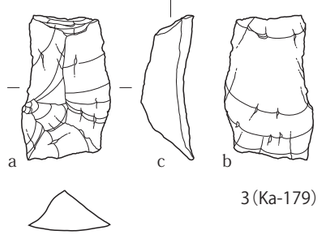
2（Ka-182）



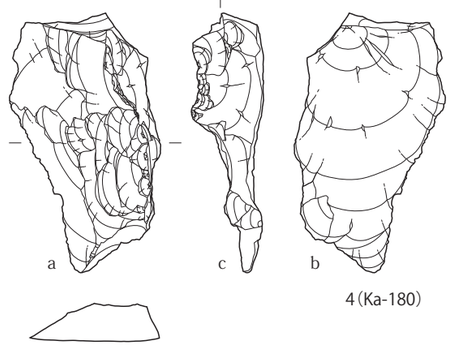




接合資料4



3（Ka-179）

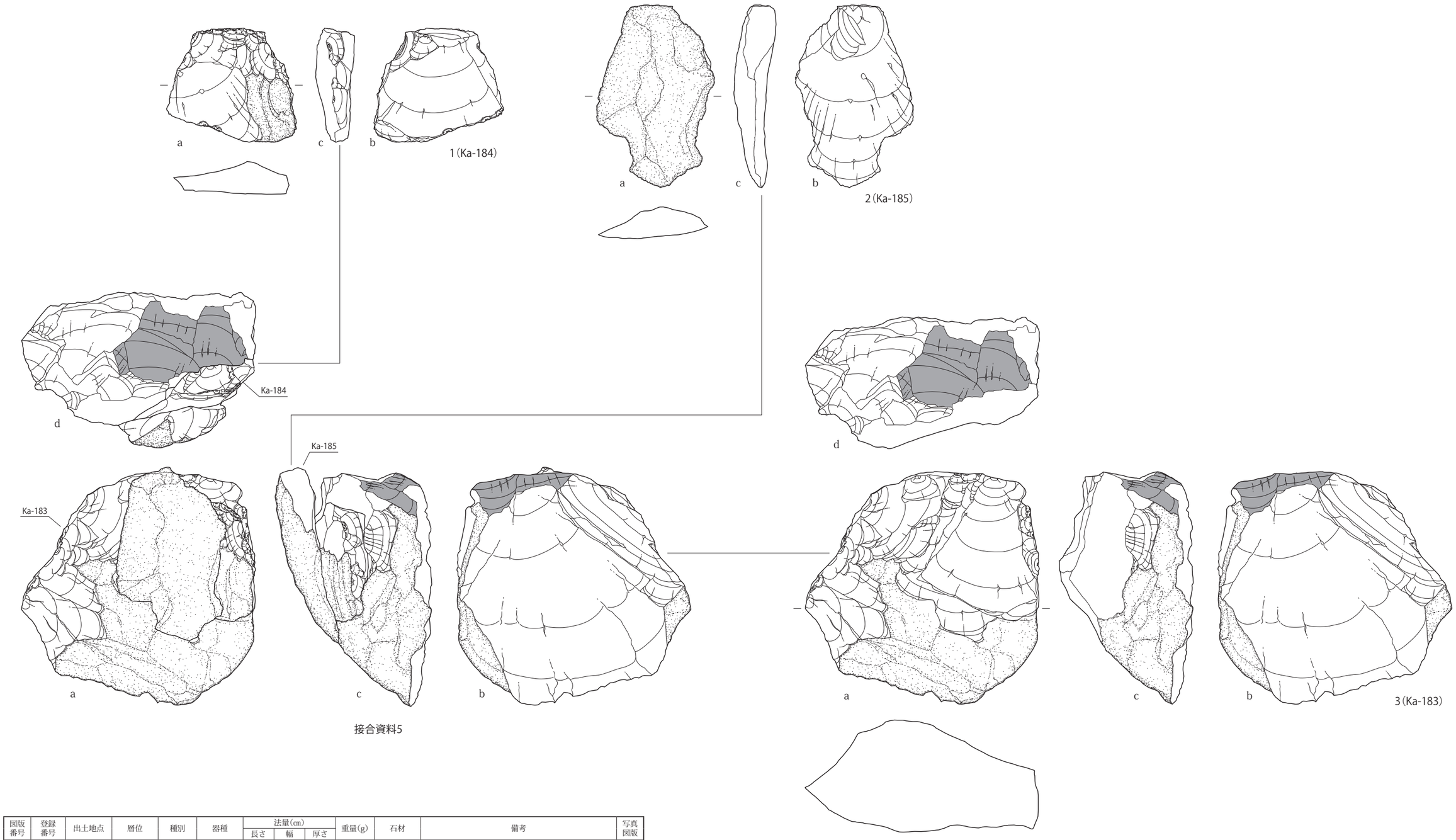


4（Ka-180）

0 （2:3） 5cm

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量（cm）			重量（g）	石材	備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ				
1	Ka-178	8ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Va層	打製石器	剥片	5.0	4.2	1.9	21.3	流紋岩	接合資料4	52
2	Ka-182	11ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vc層	打製石器	二次加工のある剥片	4.9	3.3	1.7	13.1	流紋岩	接合資料4、a面に二次加工	52
3	Ka-179	12ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	剥片	3.6	2.2	1.3	6.6	流紋岩	接合資料4	52
4	Ka-180	11ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	二次加工のある剥片	6.4	3.7	1.8	22.4	流紋岩	接合資料4、a面に二次加工	52
5	Ka-181	SK1	堆積土	打製石器	剥片	5.7	4.7	1.7	28.2	流紋岩	接合資料4	52

第 149 図　接合資料（4）



図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
1	Ka-184	3ｶﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	二次加工のある剥片	4.5	5.0	1.5	28.2	流紋岩	接合資料5、a面＋b面に二次加工、自然面あり	52・53
2	Ka-185	SX1	堆積土	打製石器	剥片	7.1	4.6	1.7	35.0	流紋岩	接合資料5、自然面あり	52・53
3	Ka-183	SB31P7	堆積土	打製石器	石核	9.1	9.1	5.1	378.8	流紋岩	接合資料5、b面＋c面＋d面に二重パティナ、打面転移あり、自然面あり	53

第 150 図　接合資料（5）

接合資料 6（第 151 図）

石核 1 点と微細剥離痕のある剥片 1 点、剥片 8 点の接合資料である。1（Ka-195）・3（Ka-189）・5（Ka-192）・6（Ka-191）・8（Ka-190）・10（Ka-193）は遺物包含層、2（Ka-194）・4（Ka-196）は SX1 堆積土、7（Ka-188）・9（Ka-187）は古代の遺構堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。自然面の残存状況から長さ 11cm、幅 8cm、厚さ 6cm 前後の原礫と考えられる。剥離は、4（Ka-196）→ 1（Ka-195）→ 3（Ka-189）→ 7（Ka-188）→ 10（Ka-193）→ 2（Ka-194）・6（Ka-191）の順で剥離されている。4・1・3 が同一方向から連続的に剥離された後、45°の打面転移が行われ、7 が剥離されている。その後、90°の打面転移を行い、10 を剥離し、さらに 90°の打面転移を行い、2･6 が剥離されている。また、10 を石核として、主要剥離面から 8･9 が剥離されている。1 は自然面を打面としている。4 は a 面の一側縁に微細剥離痕がみられる。5 は石核である。3・9 は同時割れの剥片である。6 は同時割れの剥片と考えられる。

接合資料 7（第 152 図）

石核 1 点と剥片 5 点の接合資料で、第 3 次調査区の接合資料 63（Ka-215・216）と接合した。接合状況のみ図化を行った。Ka-96 ～ 98 は古代の遺構堆積土、Ka-99 はⅣ層からの出土である。石材は流紋岩である。自然面の残存状況から長さ 12cm、幅 8cm、厚さ 6cm 前後の原礫と考えられる。剥離は、Ka-98 → Ka-99 →第 3 次調査区 Ka-215 →第 3 次調査区 Ka-216 → Ka-97 の順で剥離されている。少なくとも 2 回の打面転移が行われている。

接合資料 8（第 153 図）

石核 1 点と剥片 7 点の接合資料である。接合状況及び石核のみ図化を行った。いずれも遺物包含層からの出土で、最大で 10m ほど離れて出土している。石材は凝灰質頁岩で、接合資料 20 と同一母岩である。自然面の残存状況から拳大の原礫と考えられる。剥離は、Ka-157 → Ka-155 → Ka-151 → Ka-152 → Ka-153・Ka-154 → Ka-156 の順で剥離されている。Ka-157 ～ 152 は同一方向から連続的に剥離されている。その後、90°及び 120°の打面転移が行われ、Ka-153 と Ka-154・156 が剥離されている。Ka-151・152・155 ～ 157 は自然面を打面としている。

接合資料 9（第 154 図）

石核 1 点と剥片 4 点の接合資料で、第 3 次調査区の接合資料 95（Ka-305 ～ 307）と接合した。接合状況のみ図化を行った。Ka-94 は古代の遺構堆積土、Ka-95 は遺物包含層からの出土である。石材は流紋岩である。剥離は、第 3 次調査区 Ka-306 → Ka-94・95・第 3 次調査区 Ka-307 の順で剥離されている。第 3 次調査区 Ka-306 が剥離された後、打面転移が行われ、Ka-94・95・第 3 次調査区 Ka-307 が剥離されている。Ka-94・95・第 3 次調査区 Ka-307 は同時割れと考えられる。

接合資料 10（第 155 図）

石核 1 点と二次加工のある剥片 2 点、剥片 6 点の接合資料で、第 3 次調査区の接合資料 10（Ka-61 ～ 68）と接合した。接合状況のみ図化を行った。Ka-186 は古代の遺構堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。自然面の残存状況から長さ 10cm、幅 8cm、厚さ 6cm 前後の原礫と考えられる。剥離は、第 3 次調査区 Ka-64 → Ka-186･第 3 次調査区 Ka-62 →第 3 次調査区 Ka-613 →第 3 次調査区 Ka-67 →第 3 次調査区 Ka-68 →第 3 次調査区 Ka-66 の順で剥離されている。少なくとも 4 回の打面転移が行われている。Ka-186 と第 3 次調査区 Ka-62 は同時割れの剥片である。Ka-186、第 3 次調査区 Ka-61・64・67 は自然面を打面としている。

接合資料 11（第 155 図）

剥片 5 点の接合資料である。接合状況のみ図化を行った。Ka-211 ～ 214 は遺物包含層、Ka-215 は Pit80 からの出土である。石材は流紋岩で、自然面の残存状況から拳大の原礫と考えられる。剥離は、Ka-211 → Ka-212・213・215 → Ka214 の順で剥離されている。Ka-211 を剥離後、90°の打面転移を行い、Ka-212・213・215 が剥離されている。さらに 90°の打面転移を行い、Ka214 が剥離されている。Ka-212・213・215 は同時割れの剥片である。

接合資料 12（第 156 図）

石核 1 点と剥片 2 点の接合資料である。接合状況のみ図化を行った。Ka-106 は撹乱、Ka-107 はⅣ層、Ka-108 は古代の遺構堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。自然面の残存状況から拳大の原礫と考えられる。剥離は、Ka-106 → Ka-107 の順に剥離されている。同一方向から 106・107 を含む複数の剥片が剥離され、その後、90°の打面転移が行われ、剥片が剥離されている。b 面と c 面に節理面がみられる。

接合資料 13（第 156 図）

石核 1 点と剥片 4 点の接合資料である。接合状況のみ図化を行った。いずれも遺物包含層からの出土である。石材は流紋岩である。自然面の残存状況から拳大の原礫と考えられる。剥離は、Ka-197・198 → Ka-201 → Ka-199 の順で剥離されている。同一方向から Ka-197･198 と Ka-201 が連続して剥離された後、90°の打面転移が行われ、Ka-199 が剥離されている。Ka-197・198 は同時割れの剥片である。いずれも自然面を打面としている。

接合資料 14（第 157 図）

石核 1 点と剥片 3 点の接合資料である。接合状況のみ図化を行った。Ka-202 ～ 204 は遺物包含層、Ka-205 は SX1 堆積土からの出土である。遺物包含層から出土した Ka-204 と SK1 堆積土から出土した Ka-205 は 19m ほど離れて出土している。石材は凝灰質頁岩である。自然面の残存状況から長さ 12cm、幅 8cm、厚さ 4cm 前後の扁平な原礫と考えられる。剥離は、Ka-202・204 → Ka-205 の順で剥離されている。同一方向から Ka-202・204 が剥離された後、90°の打面転移が行われ、Ka-205 が剥離されている。

接合資料 15（第 157 図）

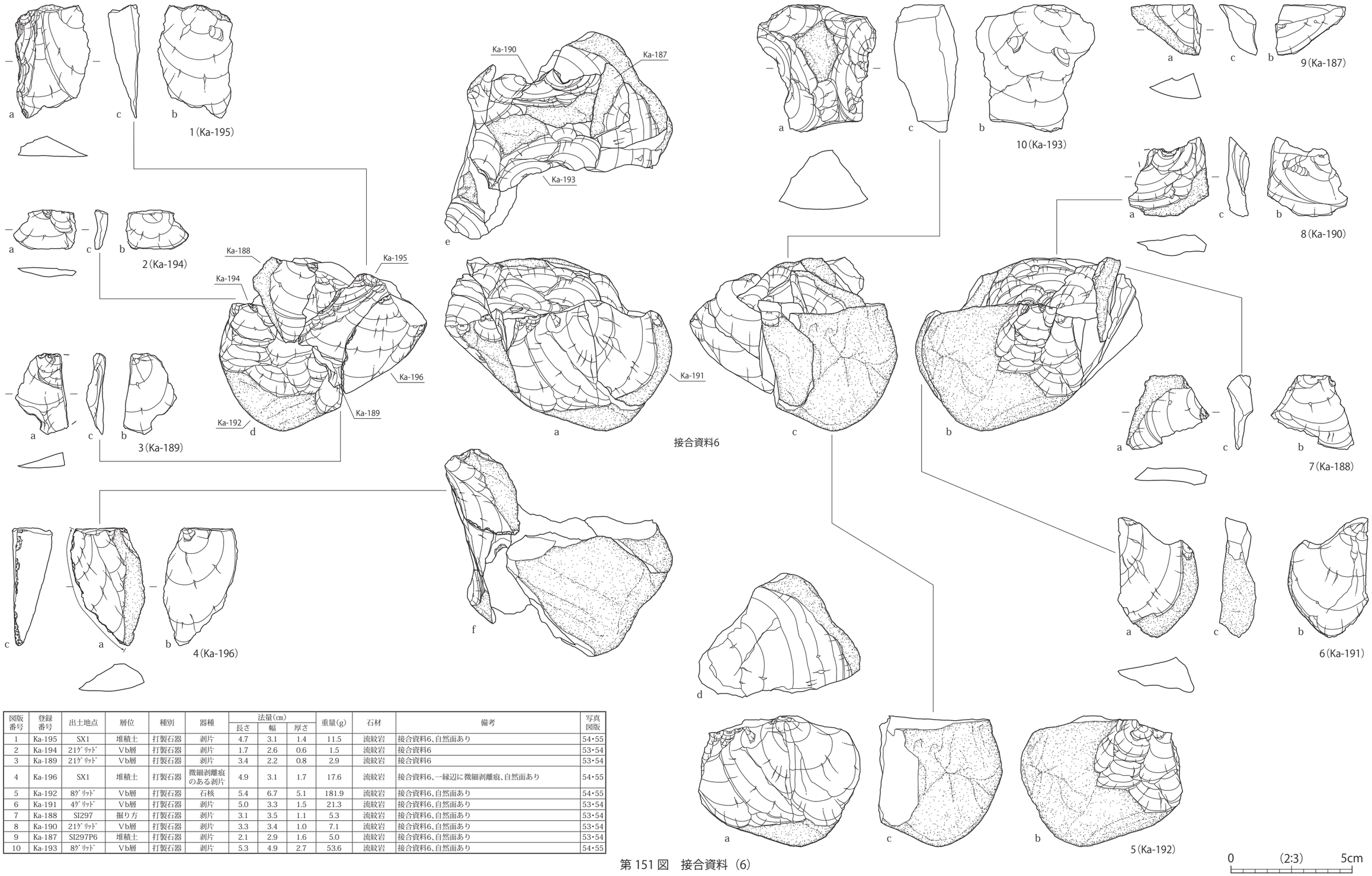
石核 1 点と剥片 1 点の接合資料である。接合状況のみ図化を行った。Ka-59 は遺物包含層、Ka-60 は SX1 堆積土からの出土である。石材は凝灰質頁岩である。長さ 11cm、幅 7cm、厚さ 6cm ほどの原礫である。Ka-60 は石核で、打面転移を行いながら、原礫の表皮を剥離した段階で、廃棄されたものと考えられる。

接合資料 16（第 158 図）

石核 1 点と剥片 1 点の接合資料である。接合状況のみ図化を行った。2 点とも遺物包含層からの出土で、13m ほど離れて出土している。石材は流紋岩である。自然面の残存状況から拳大の原礫と考えられる。

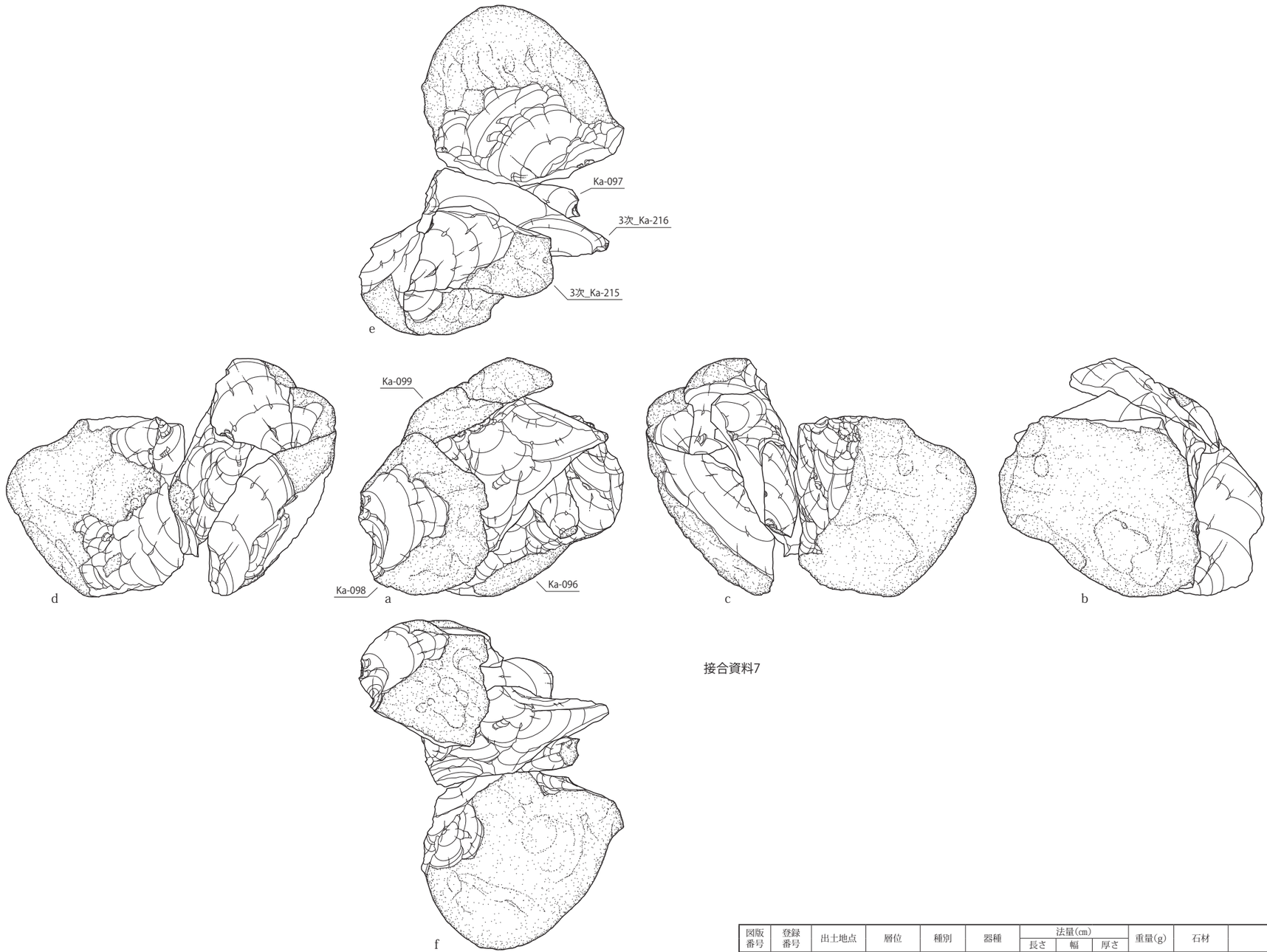
接合資料 17（第 158 図）

石核 1 点と剥片 2 点の接合資料である。接合状況のみ図化を行った。いずれも遺物包含層からの出土で、Ka-54 と Ka-55 は 10m ほど離れて出土している。石材は頁岩である。自然面の残存状況から幅 6cm、厚さ 4cm 前後の原礫と考えられる。剥離は Ka-54 → Ka-55 の順で剥離されている。Ka-54 が剥離された後、90°の打面転移が行われ、Ka-55 が剥離されている。



図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
1	Ka-195	SX1	堆積土	打製石器	剥片	4.7	3.1	1.4	11.5	流紋岩	接合資料6、自然面あり	54・55
2	Ka-194	21ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	剥片	1.7	2.6	0.6	1.5	流紋岩	接合資料6	53・54
3	Ka-189	21ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	剥片	3.4	2.2	0.8	2.9	流紋岩	接合資料6	53・54
4	Ka-196	SX1	堆積土	打製石器	微細剥離痕のある剥片	4.9	3.1	1.7	17.6	流紋岩	接合資料6、一縁辺に微細剥離痕、自然面あり	54・55
5	Ka-192	8ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	石核	5.4	6.7	5.1	181.9	流紋岩	接合資料6、自然面あり	54・55
6	Ka-191	4ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	剥片	5.0	3.3	1.5	21.3	流紋岩	接合資料6、自然面あり	53・54
7	Ka-188	SI297	掘り方	打製石器	剥片	3.1	3.5	1.1	5.3	流紋岩	接合資料6、自然面あり	53・54
8	Ka-190	21ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	剥片	3.3	3.4	1.0	7.1	流紋岩	接合資料6、自然面あり	53・54
9	Ka-187	SI297P6	堆積土	打製石器	剥片	2.1	2.9	1.6	5.0	流紋岩	接合資料6、自然面あり	53・54
10	Ka-193	8ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	剥片	5.3	4.9	2.7	53.6	流紋岩	接合資料6、自然面あり	54・55

第 151 図　接合資料（6）

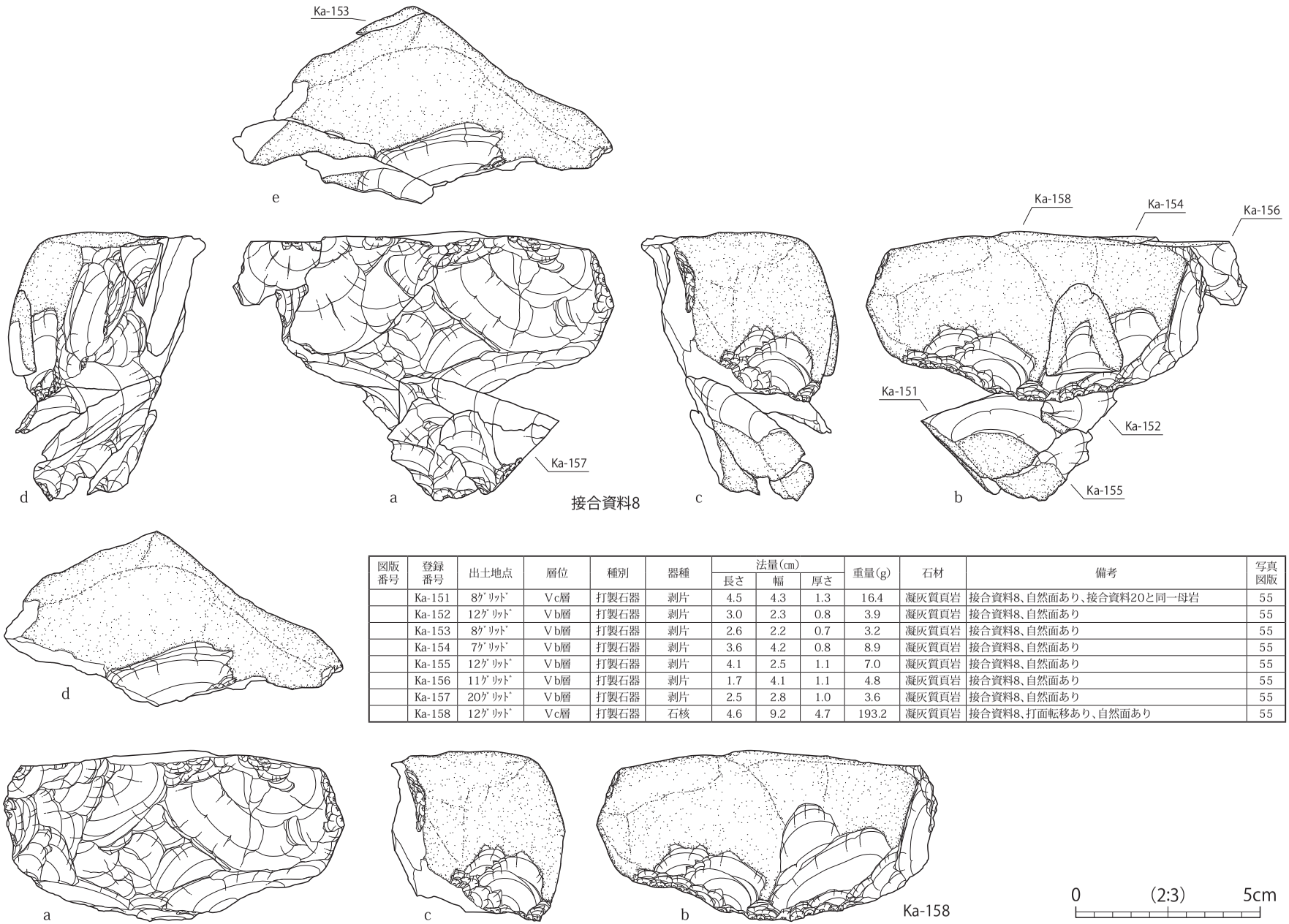


接合資料7

0 (2:3) 5cm

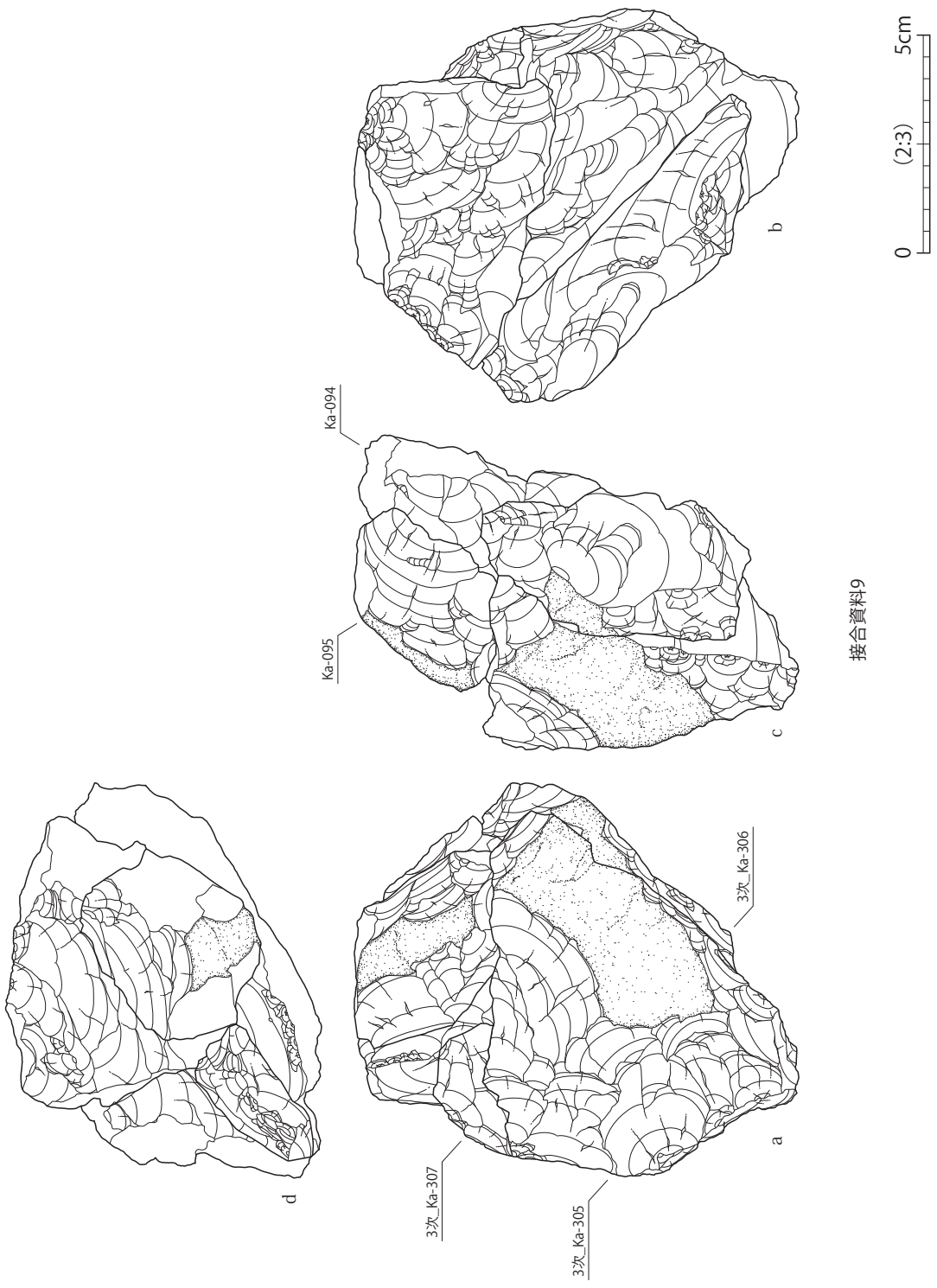
図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ				
	Ka-096	Pit68	堆積土	打製石器	石核	5.7	6.5	5.3	244.7	流紋岩	接合資料7、打面転移あり、自然面あり	55
	Ka-097	SI293A	掘り方	打製石器	剥片	3.3	1.2	0.5	4.3	流紋岩	接合資料7	55
	Ka-098	SD66	堆積土上層	打製石器	剥片	3.3	6.4	3.6	55.5	流紋岩	接合資料7、自然面あり	55
	Ka-099	21ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Ⅳ層	打製石器	剥片	1.6	3.5	1.2	9.1	流紋岩	接合資料7	55
	Ka-215・216	3次調査区の接合資料63(Ka-215・216)										55

第 152 図　接合資料（7）



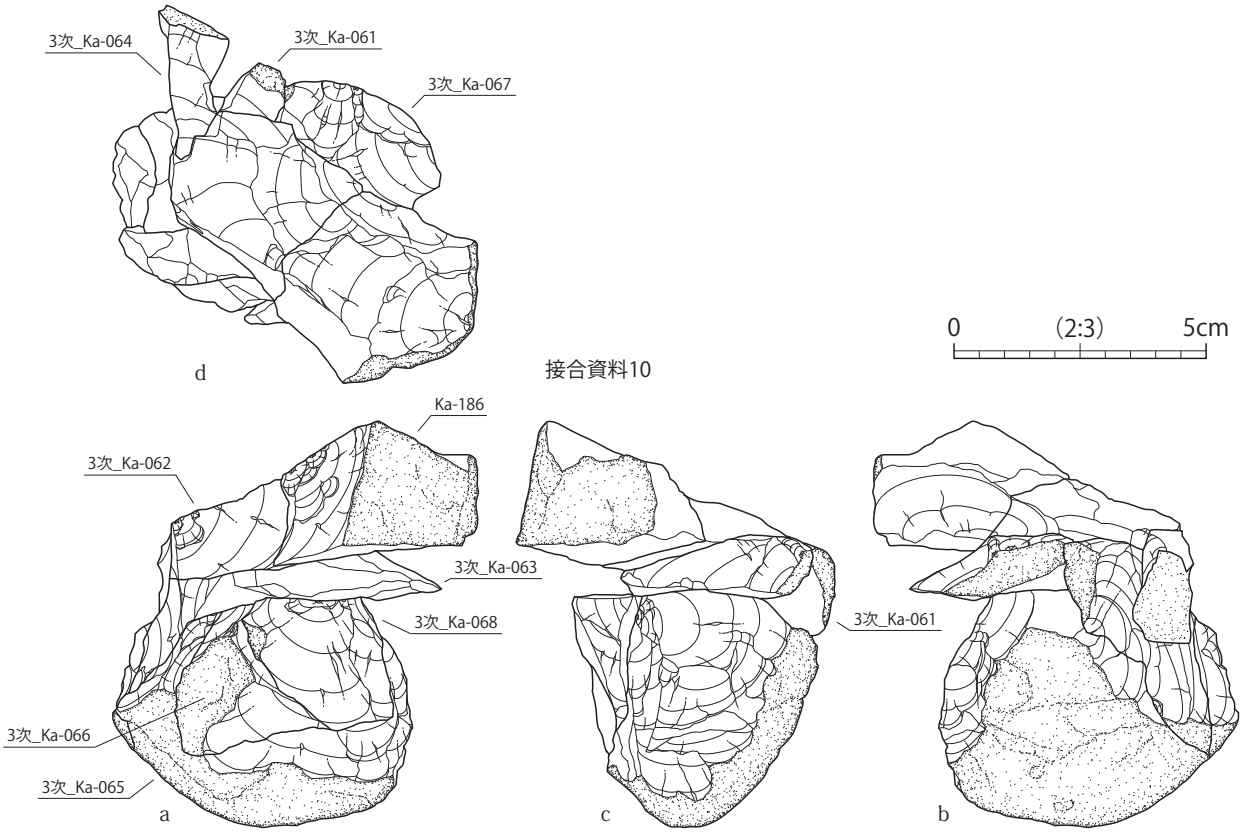
第153図　接合資料（8）

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
	Ka-151	8ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vc層	打製石器	剥片	4.5	4.3	1.3	16.4	凝灰質頁岩	接合資料8、自然面あり、接合資料20と同一母岩	55
	Ka-152	12ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	剥片	3.0	2.3	0.8	3.9	凝灰質頁岩	接合資料8、自然面あり	55
	Ka-153	8ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	剥片	2.6	2.2	0.7	3.2	凝灰質頁岩	接合資料8、自然面あり	55
	Ka-154	7ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	剥片	3.6	4.2	0.8	8.9	凝灰質頁岩	接合資料8、自然面あり	55
	Ka-155	12ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	剥片	4.1	2.5	1.1	7.0	凝灰質頁岩	接合資料8、自然面あり	55
	Ka-156	11ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	剥片	1.7	4.1	1.1	4.8	凝灰質頁岩	接合資料8、自然面あり	55
	Ka-157	20ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	剥片	2.5	2.8	1.0	3.6	凝灰質頁岩	接合資料8、自然面あり	55
	Ka-158	12ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vc層	打製石器	石核	4.6	9.2	4.7	193.2	凝灰質頁岩	接合資料8、打面転移あり、自然面あり	55

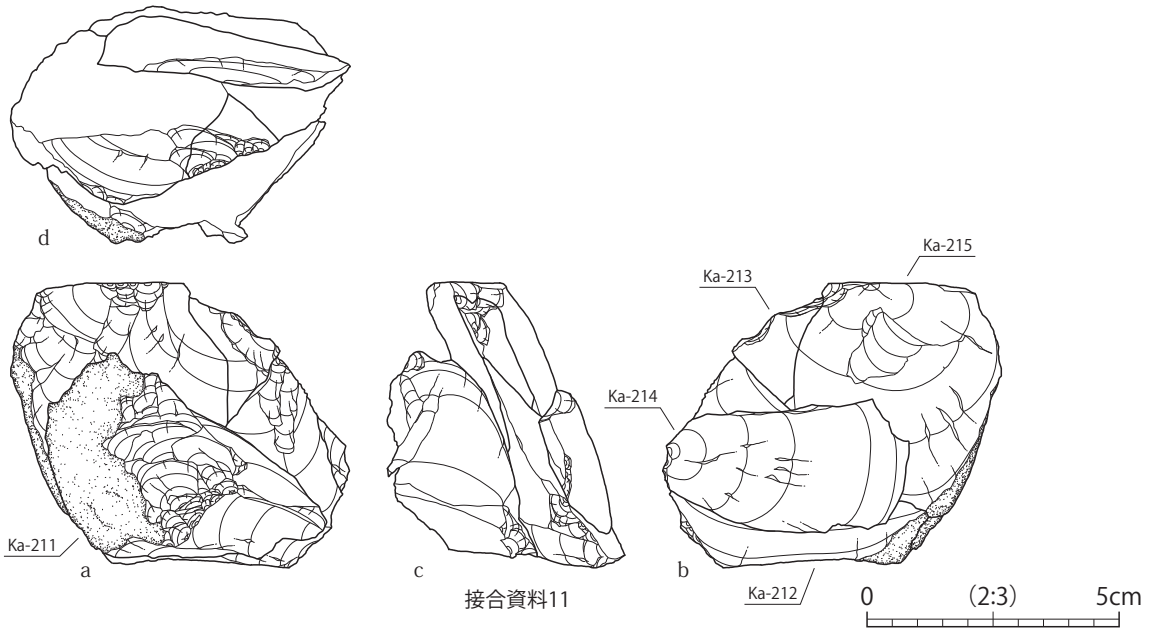


図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ				
	Ka-094	SI302	掘り方	打製石器	剥片	6.5	4.8	4.5	123.7	流紋岩	接合資料9	56
	Ka-095	12ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	剥片	4.3	4.5	1.8	40.7	流紋岩	接合資料9、自然面あり	56
	Ka-305～307	3次調査区の接合資料95(Ka-305～307)										56

第 154 図　接合資料（9）

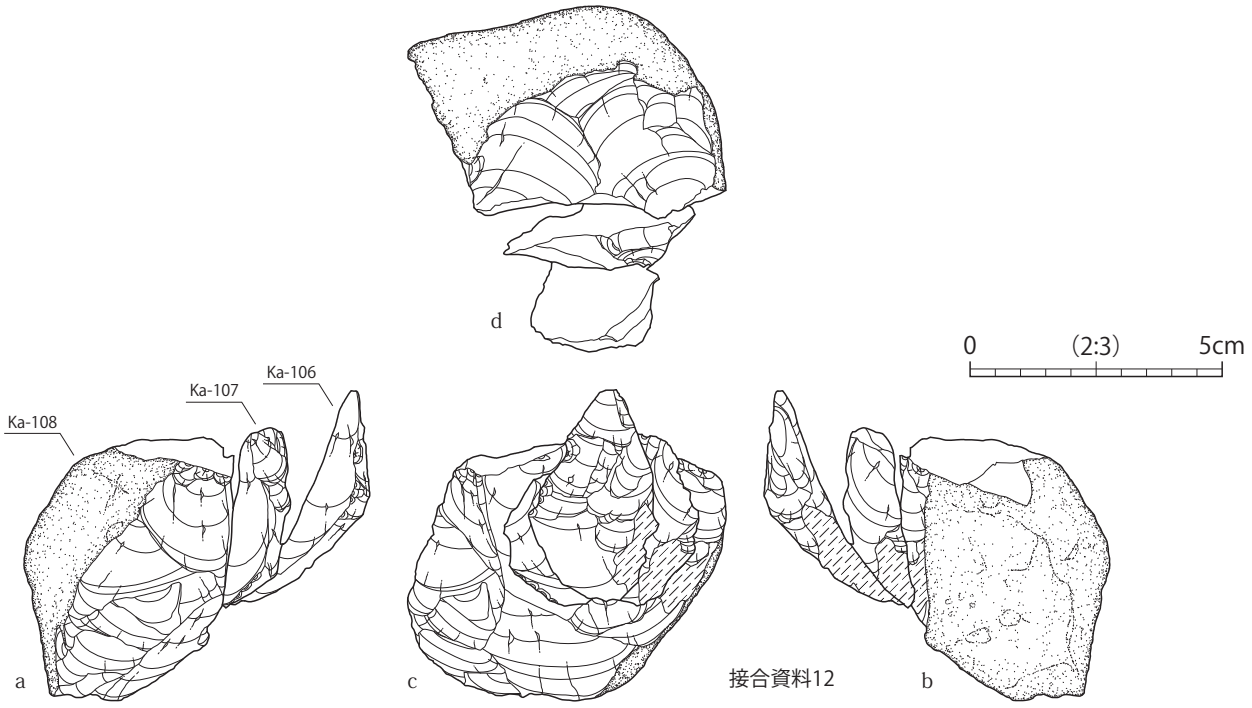


図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
	Ka-186	SI303	掘り方	打製石器	剥片	3.9	3.5	2.3	36.3	流紋岩	接合資料10、自然面あり	56
	Ka-61～68	3次調査区の接合資料10(Ka-61～68)										56

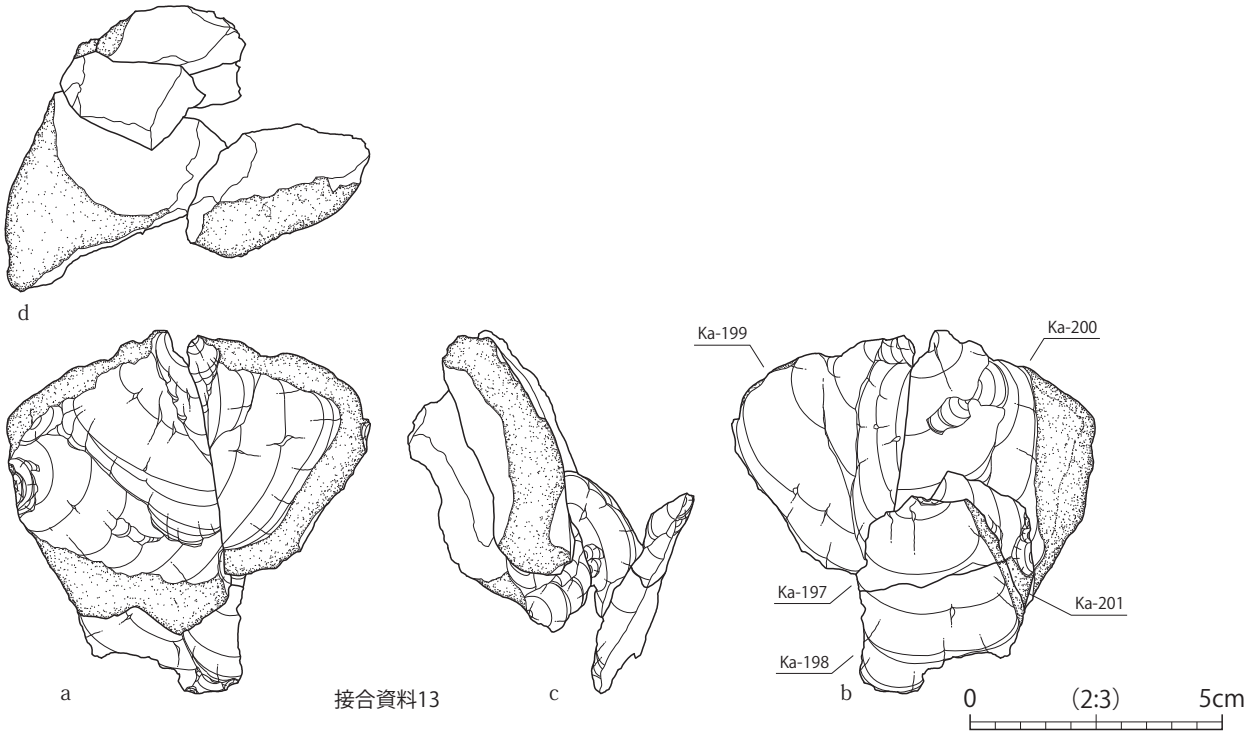


図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
	Ka-211	9ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Va層	打製石器	剥片	3.1	4.7	0.9	11.2	流紋岩	接合資料11	56
	Ka-214	8ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vc層	打製石器	剥片	7.2	6.0	2.2	73.1	流紋岩	接合資料11、自然面あり	56
	Ka-212	7ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	剥片	3.8	6.0	2.1	50	流紋岩	接合資料11、同時割れ、自然面あり、法量はKa-213＋Ka-215	56
	Ka-213	20ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器								56
	Ka-215	Pit80	堆積土	打製石器								56

第 155 図　接合資料（10）

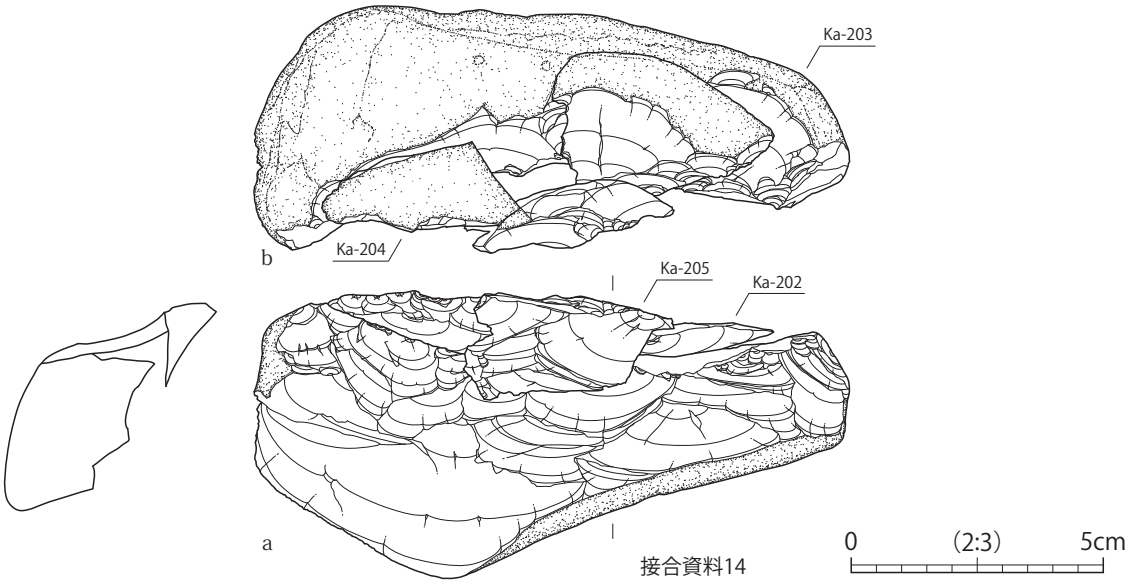


図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
	Ka-106	攪乱		打製石器	剥片	4.8	2.6	1.3	8.3	流紋岩	接合資料12、自然面あり	56
	Ka-107	24ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Ⅳ層	打製石器	剥片	4.3	4.0	1.4	13.4	流紋岩	接合資料12	56
	Ka-108	Pit235	堆積土	打製石器	石核	4.9	6.3	4.3	135.1	流紋岩	接合資料12、打面転移あり、自然面あり	56



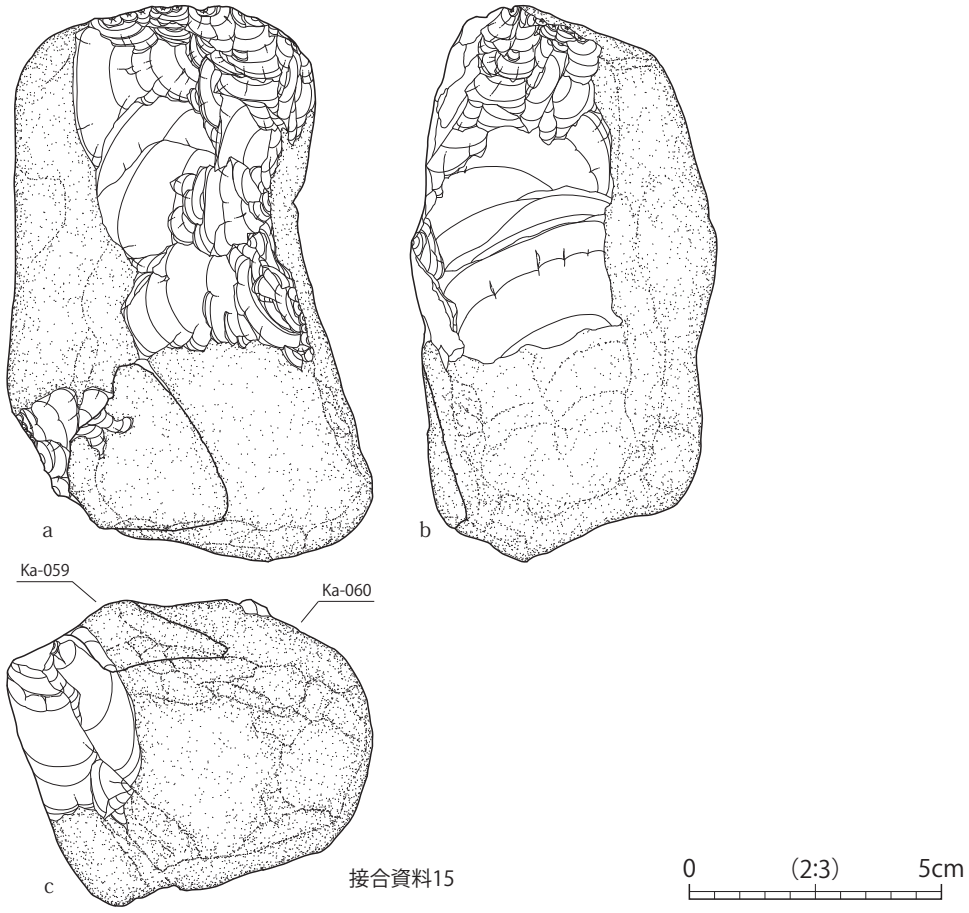
図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
	Ka-197	8ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	剥片	4.5	3.1	0.9	10.0	流紋岩	接合資料13、同時割れ、自然面あり、法量はKa-197＋Ka-198	57
	Ka-198	15ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器								57
	Ka-199	8ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vc層	打製石器	剥片	5.0	4.3	1.1	23.6	流紋岩	接合資料13、自然面あり	57
	Ka-200	4ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vc層	打製石器	石核	5.8	4.5	3.2	70.4	流紋岩	接合資料13、打面転移あり、自然面あり	57
	Ka-201	12ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vc層	打製石器	剥片	3.0	2.6	1.5	8.5	流紋岩	接合資料13、自然面あり	57

第 156 図　接合資料（11）



接合資料14

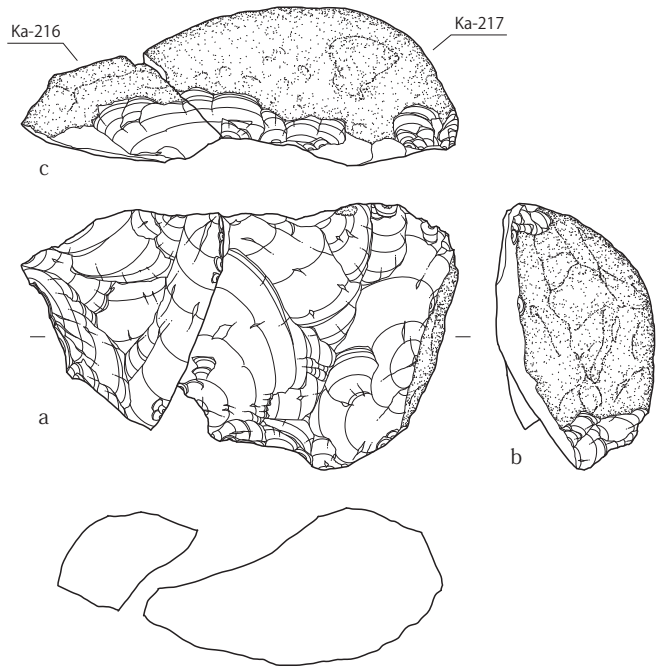
図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ				
	Ka-202	24ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	剥片	2.9	4.5	0.7	6.1	凝灰質頁岩	接合資料14、自然面あり	57
	Ka-203	8ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	石核	5.7	11.8	3.3	220.8	凝灰質頁岩	接合資料14、打面転移あり、自然面あり	57
	Ka-204	4ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vc層	打製石器	剥片	2.1	3.3	0.6	4.3	凝灰質頁岩	接合資料14、自然面あり	57
	Ka-205	SX1	堆積土	打製石器	剥片	1.4	3.9	1.0	5.8	凝灰質頁岩	接合資料14	57



接合資料15

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ				
	Ka-059	20ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Va層	打製石器	剥片	2.8	3.2	0.9	8.0	凝灰質頁岩	接合資料15、自然面あり	57
	Ka-060	SX1	堆積土	打製石器	石核	11.0	7.3	6.2	568.7	凝灰質頁岩	接合資料15、打面転移あり、自然面あり	57

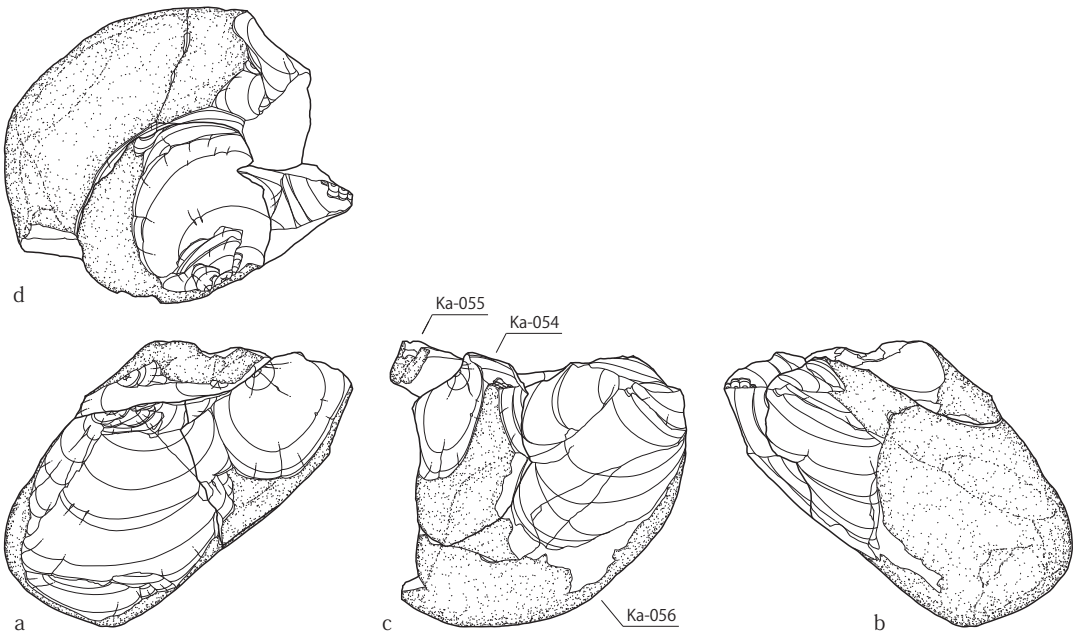
第 157 図　接合資料（12）



接合資料16

0 (2:3) 5cm

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
	Ka-216	8ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	剥片	4.4	3.0	2.6	25.2	流紋岩	接合資料16、自然面あり	58
	Ka-217	9ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vc層	打製石器	石核	5.3	6.1	3.2	92.7	流紋岩	接合資料16、打面転移あり、自然面あり	58



接合資料17

0 (2:3) 5cm

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
	Ka-054	23ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	剥片	3.7	4.0	1.0	8.8	頁岩	接合資料17、自然面打面、自然面あり	58
	Ka-055	20ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	剥片	2.8	3.8	1.8	15.0	頁岩	接合資料17、自然面あり	58
	Ka-056	15ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	石核	6.8	5.0	3.9	130.0	頁岩	接合資料17、打面転移あり、自然面あり	58

第 158 図　接合資料（13）

接合資料 18（第 159 図）

石核 1 点と剥片 1 点の接合資料である。接合状況のみ図化を行った。2 点とも遺物包含層からの出土で、石材は流紋岩である。一辺が 10cm ほどの原礫である。Ka-227 は石核で、少なくとも 4 回の打面転移が行われている。

接合資料 19（第 160 図）

剥片 3 点の接合資料である。接合状況のみ図化を行った。いずれも遺物包含層からの出土である。石材は流紋岩である。剥離は、同一方向から Ka-221・222 → Ka-223 の順で、連続して剥離されている。Ka-221 と 222 は同時割れの剥片である。

接合資料 20（第 160 図）

剥片 4 点の接合資料である。接合状況のみ図化を行った。いずれも遺物包含層からの出土である。石材は凝灰質頁岩で、接合資料 8 と同一母岩である。剥離は、Ka-100 → Ka-101・102 → Ka-103 の順で剥離されている。同一方向から Ka-100 と Ka-101・102 が剥離された後、90°の打面転移が行われ、Ka-103 が剥離されている。Ka-101 と 102 は同時割れの剥片である。いずれも自然面を打面としている。

接合資料 21（第 160 図）

微細剥離痕のある剥片 1 点と剥片 2 点の接合資料である。接合状況のみ図化を行った。Ka-142 は古代の遺構堆積土、Ka-143 は遺物包含層、Ka-144 は SX1 堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。剥離は、同一方向から Ka-142・143 → Ka-144 の順で剥離されている。Ka-144 は a 面の下縁に微細剥離痕がみられ、自然面を打面としている。

接合資料 22（第 161 図）

二次加工のある剥片 1 点と剥片 2 点の接合資料である。接合状況のみ図化を行った。Ka-218･220 は遺物包含層、Ka-219 は古代の遺構堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。自然面の残存状況から小型の原礫と考えられる。剥離は、Ka-218 → Ka219 → Ka-220 の順で剥離されている。Ka-218・220 は自然面を打面としている。

接合資料 23（第 161 図）

剥片 2 点の接合資料である。接合状況のみ図化を行った。2 点とも遺物包含層からの出土である。石材は流紋岩である。剥離は、Ka-149 → Ka-150 の順で剥離されている。

接合資料 24（第 161 図）

剥片 3 点の接合資料である。接合状況のみ図化を行った。Ka-112 は古代の遺構堆積土、Ka-113 は遺物包含層、Ka-114 はⅣ層からの出土である。石材は流紋岩である。剥離は、同一方向から Ka-112 → Ka-113 → Ka-114 の順で、連続して剥離されている。

接合資料 25（第 162 図）

剥片 2 点の接合資料である。接合状況のみ図化を行った。Ka-115 は古代の遺構堆積土、Ka-116 は遺物包含層からの出土である。石材は流紋岩である。剥離は、Ka-115 が剥離された後、90°の打面転移が行われ、Ka-116 が剥離されている。

接合資料 26（第 162 図）

二次加工のある剥片 1 点と剥片 1 点の接合資料である。接合状況のみ図化を行った。Ka-43 は SX1 堆積土、Ka-44 は遺物包含層からの出土である。石材は凝灰質頁岩である。剥離は、同一方向から Ka-43 → Ka-44 の順で、連続して剥離されている。いずれも自然面を打面としている。

接合資料 27（第 162 図）

剥片 3 点の接合資料である。接合状況のみ図化を行った。Ka-206・207 は SX1 堆積土、Ka-208 遺物包含層からの出土である。SX1 堆積土から出土した Ka-207 と遺物包含層から出土した Ka-208 は 11m ほど離れて出土している。石材は流紋岩である。剥離は、同一方向から Ka-206 → Ka-207 → Ka-208 の順で、連続的に剥離されている。いずれも自然面を打面としている。

接合資料 28（第 163 図）

剥片 2 点の接合資料である。接合状況のみ図化を行った。2 点とも遺物包含層からの出土である。石材は流紋岩である。剥離は、同一方向から Ka-147 → Ka-148 の順で剥離されている。

接合資料 29（第 163 図）

二次加工のある剥片 1 点と剥片 1 点の接合資料である。接合状況のみ図化を行った。2 点とも遺物包含層からの出土である。石材は流紋岩である。剥離は、Ka-117 → Ka-118 の順で剥離されている。Ka-118 は b 面に二次加工が施されている。

接合資料 30（第 163 図）

剥片 2 点の接合資料である。接合状況のみ図化を行った。2 点とも遺物包含層からの出土である。石材は流紋岩である。Ka-63 と 64 は同時割れの剥片である。

接合資料 31（第 164 図）

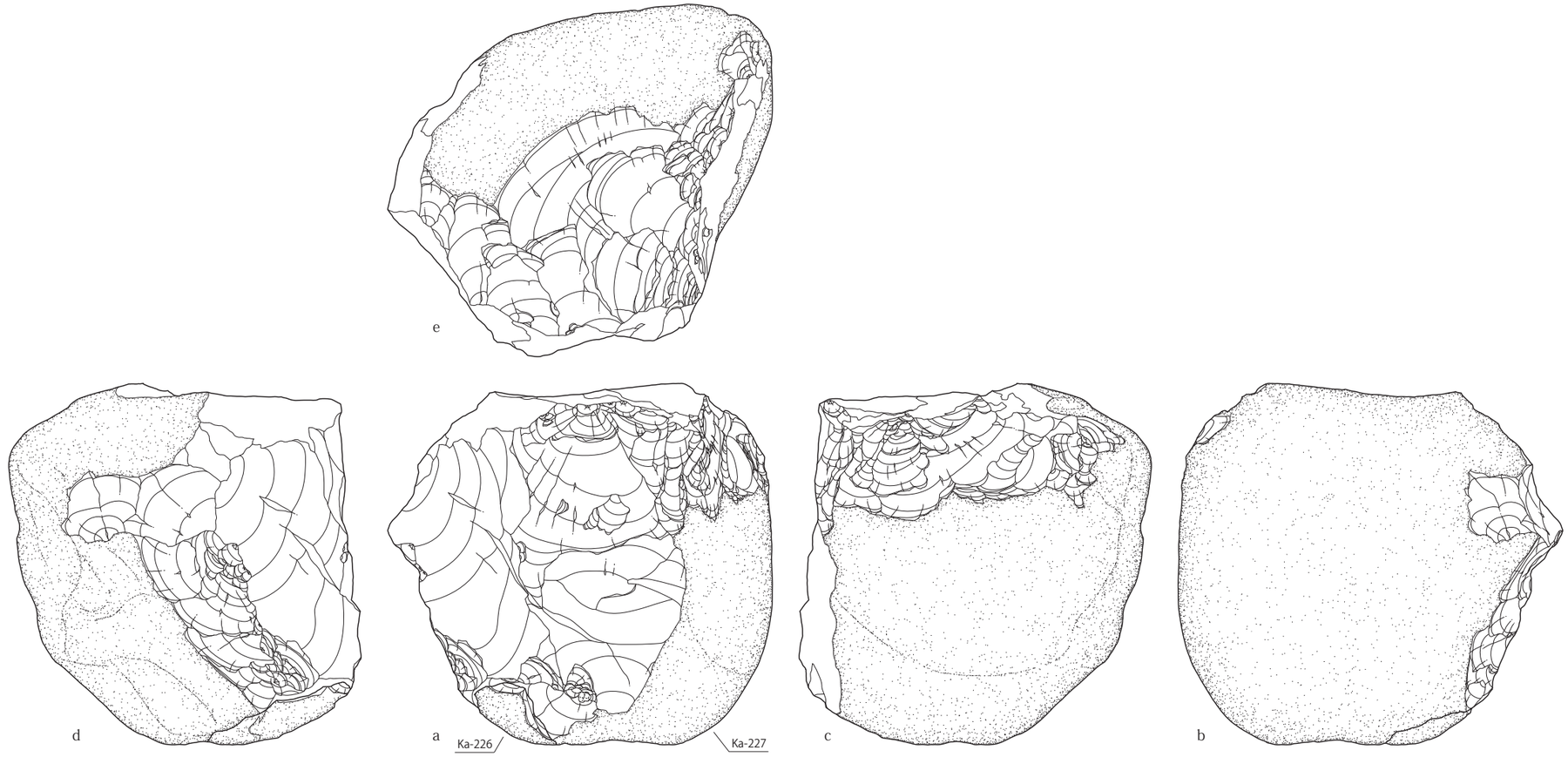
微細剥離痕のある剥片 1 点と剥片 1 点の接合資料である。接合状況のみ図化を行った。Ka-78 は遺物包含層、Ka-79 は古代の遺構堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。剥離は、同一方向から Ka-78 → Ka-79 の順で、連続して剥離されている。Ka-79 は a 面の左側縁に微細剥離痕がみられる。いずれも自然面を打面としている。

接合資料 32（第 164 図）

二次加工のある剥片 2 点と剥片 2 点の接合資料である。接合状況のみ図化を行った。Ka-134 はⅣ層、Ka-135・136 は遺物包含層、Ka-137 は SK2 堆積土からの出土である。遺物包含層から出土した Ka-136 と SK2 堆積土から出土した Ka-137 は 18m ほど離れて出土している。石材は頁岩である。剥離は、同一方向から Ka-134・135 → Ka-136・137 の順で、連続的に剥離されている。Ka-134・135 は側縁に二次加工が施されている。Ka-134 と 135、Ka-136 と 137 は、それぞれ同時割れの剥片である。

接合資料 33（第 164 図）

剥片 2 点の接合資料である。接合状況のみ図化を行った。2 点とも SX1 堆積土出土である。石材は流紋岩である。剥離は、同一方向から Ka-145 → Ka-146 の順で、連続して剥離されている。

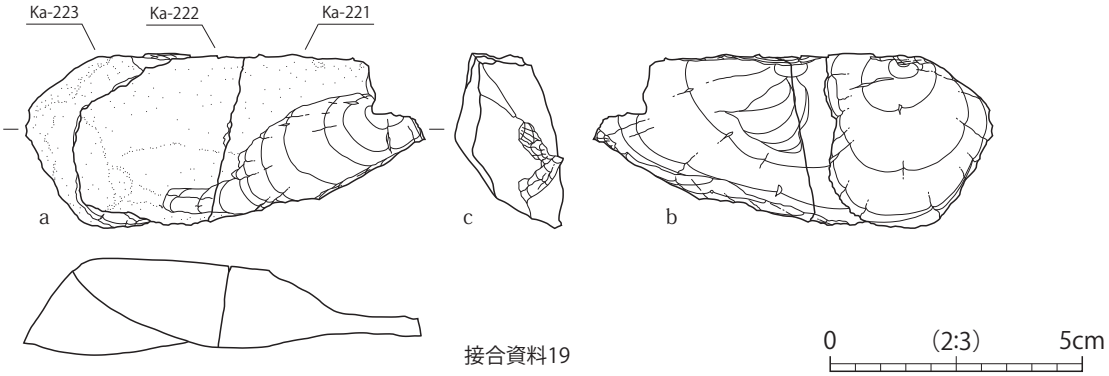


接合資料18

0 (2:3) 5cm

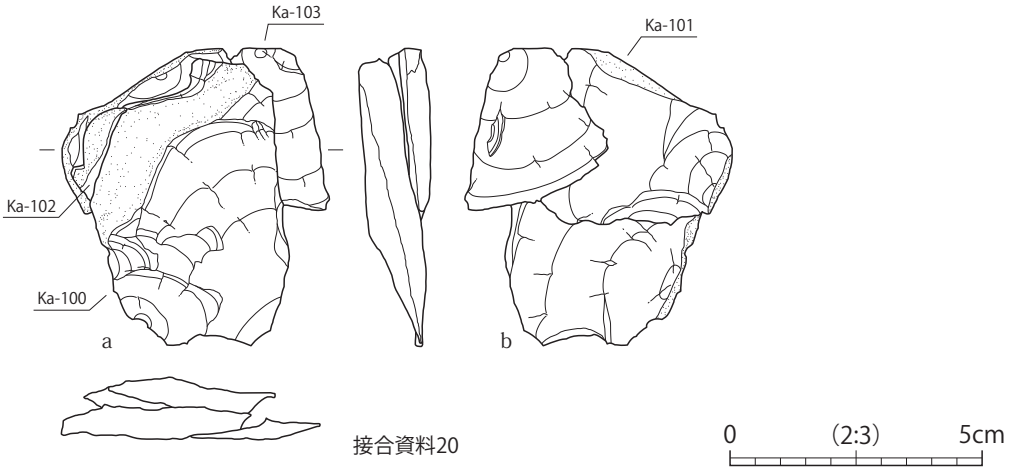
図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ				
	Ka-226	15ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	剥片	3.6	2.1	0.7	4.1	流紋岩	接合資料18	58
	Ka-227	20ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vc層	打製石器	石核	10.1	10.8	9.8	1180.0	流紋岩	接合資料18、打面転移あり、自然面あり	58

第 159 図　接合資料（14）



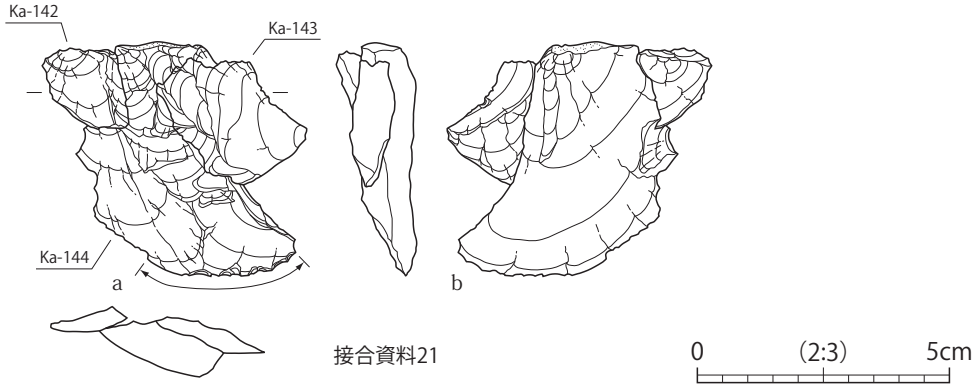
接合資料19

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
	Ka-221	20ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Va層	打製石器	剥片	3.2	6.9	2	30.5	流紋岩	接合資料19、同時割れ、自然面あり、法量はKa-221＋Ka-223	59
	Ka-222	23ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器								59
	Ka-223	20ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vc層	打製石器	剥片	3.4	3.5	1.3	15.8	流紋岩	接合資料19、自然面あり	59



接合資料20

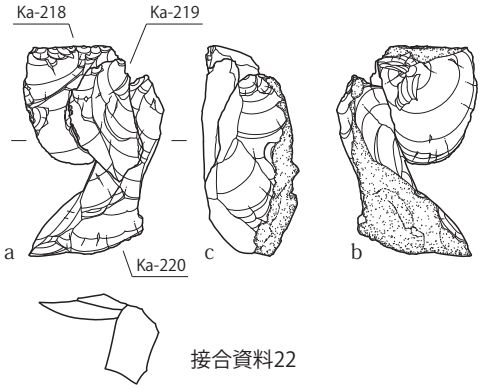
図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
	Ka-100	20ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vc層	打製石器	剥片	5.2	5.1	0.6	18.3	凝灰質頁岩	接合資料20、自然面打面、自然面あり。接合資料8と同一母岩	59
	Ka-101	11ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Va層	打製石器	剥片	3.5	3.9	1.1	12.1	凝灰質頁岩	接合資料20、同時割れ、自然面打面、自然面あり、法量はKa-101＋Ka-102	59
	Ka-102	20ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	剥片							59
	Ka-103	9ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Va層	打製石器	剥片	3.2	2.8	0.4	3.3	凝灰質頁岩	接合資料20、自然面打面、、自然面あり	59



接合資料21

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
	Ka-142	SI293	堆積土	打製石器	剥片	1.6	1.8	0.5	1.5	流紋岩	接合資料21	59
	Ka-143	20ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Va層	打製石器	剥片	2.2	2.3	0.9	2.6	流紋岩	接合資料21、打面欠損	59
	Ka-144	SX1	堆積土	打製石器	微細剥離痕のある剥片	4.6	4.4	1.3	14.9	流紋岩	接合資料21、自然面打面、下縁に微細剥離痕、自然面あり	59

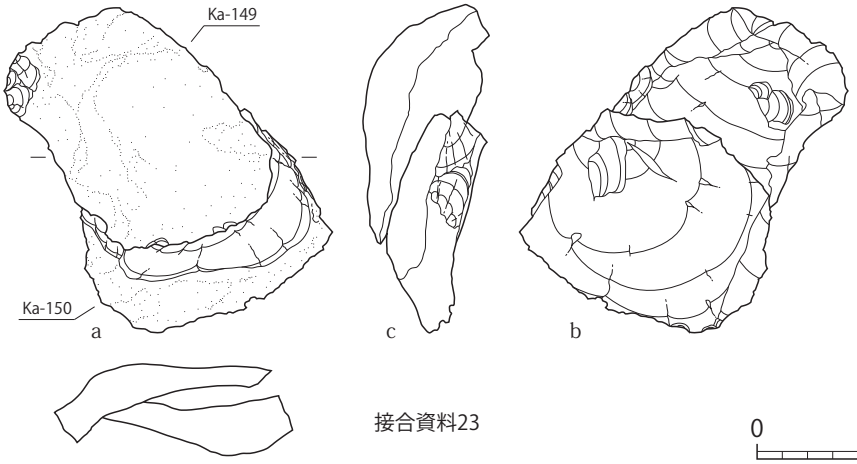
第 160 図　接合資料（15）



接合資料22

0 (2:3) 5cm

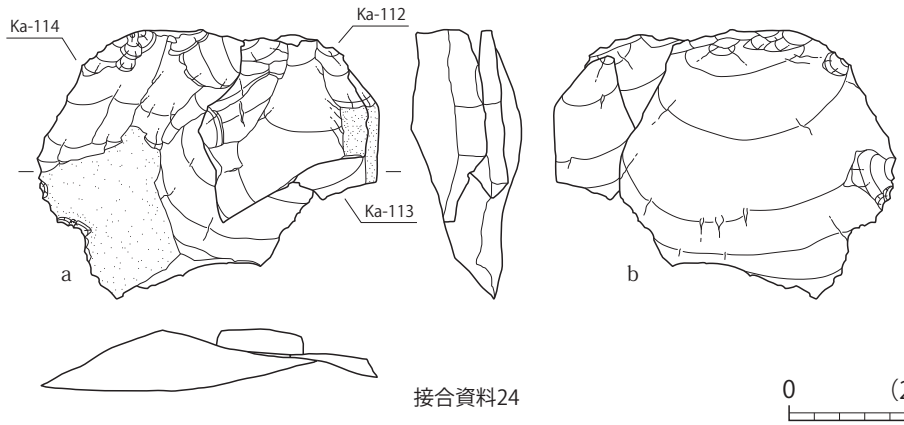
図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
	Ka-218	27ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	二次加工のある剥片	2.3	2.1	1.0	3.1	流紋岩	接合資料22、自然面打面、a面に二次加工、自然面あり	59
	Ka-219	SD257	堆積土	打製石器	剥片	2.3	1.5	0.4	1.1	流紋岩	接合資料22	59
	Ka-220	19ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vc層	打製石器	剥片	3.6	2.6	1.8	8.5	流紋岩	接合資料22、自然面打面、自然面あり	59



接合資料23

0 (2:3) 5cm

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
	Ka-149	24ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	剥片	3.8	5.6	2.5	24.6	流紋岩	接合資料23、自然面あり	59
	Ka-150	24ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	剥片	4.5	5.0	2.0	29.2	流紋岩	接合資料23、自然面あり	59

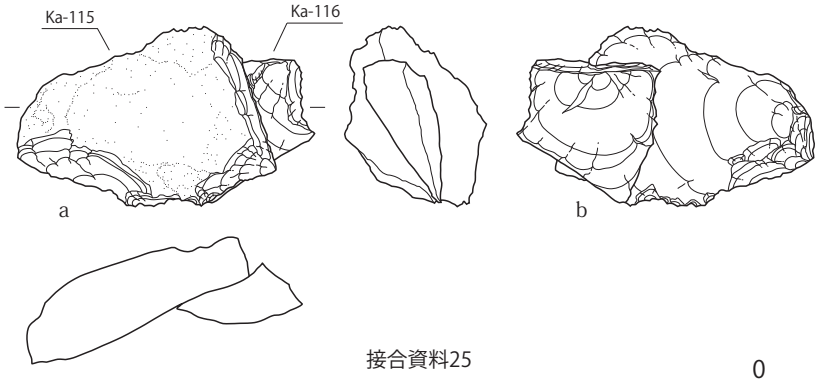


接合資料24

0 (2:3) 5cm

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
	Ka-112	SI308	掘り方	打製石器	剥片	3.7	3.4	0.6	10.4	流紋岩	接合資料24、自然面あり	59
	Ka-113	4ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Va層	打製石器	剥片	3.1	2.1	0.4	2.3	流紋岩	接合資料24、自然面あり	59
	Ka-114	18ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Ⅳ層	打製石器	剥片	5.3	5.5	1.2	44.6	流紋岩	接合資料24、自然面あり	59

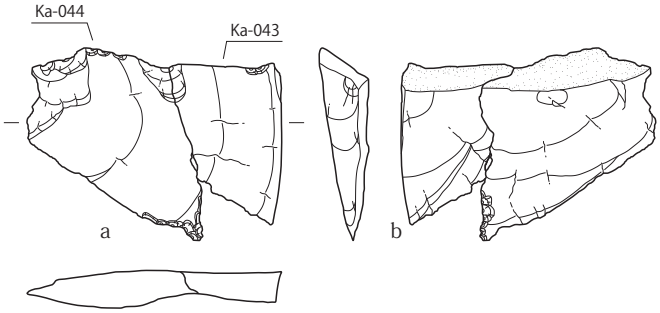
第 161 図　接合資料（16）



接合資料25

0 (2:3) 5cm

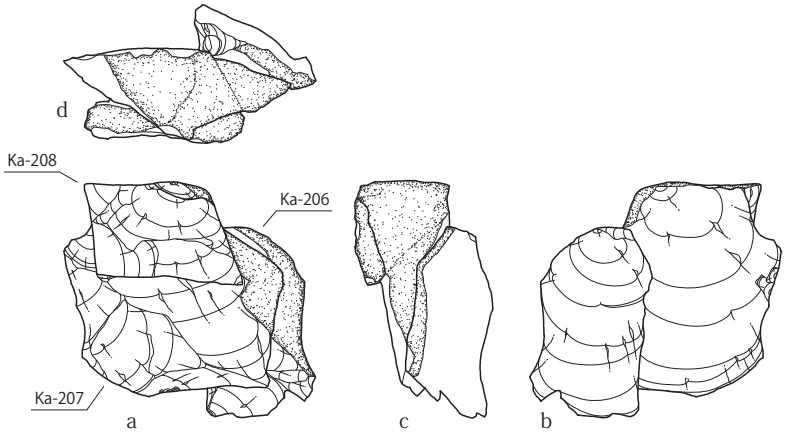
図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
	Ka-115	Pit178	堆積土	打製石器	剥片	5.4	3.5	1.9	29.9	流紋岩	接合資料25、自然面あり	59
	Ka-116	17ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Ⅳ層	打製石器	剥片	2.8	2.8	1.6	6.3	流紋岩	接合資料25	59



接合資料26

0 (2:3) 5cm

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
	Ka-043	SX1	堆積土	打製石器	剥片	3.2	2.2	0.6	4.6	凝灰質頁岩	接合資料26、自然面打面、自然面あり	59
	Ka-044	20ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	二次加工のある剥片	3.8	3.5	1.0	9.5	凝灰質頁岩	接合資料26、自然面打面、a面+b面の下端部に二次加工、自然面あり	59

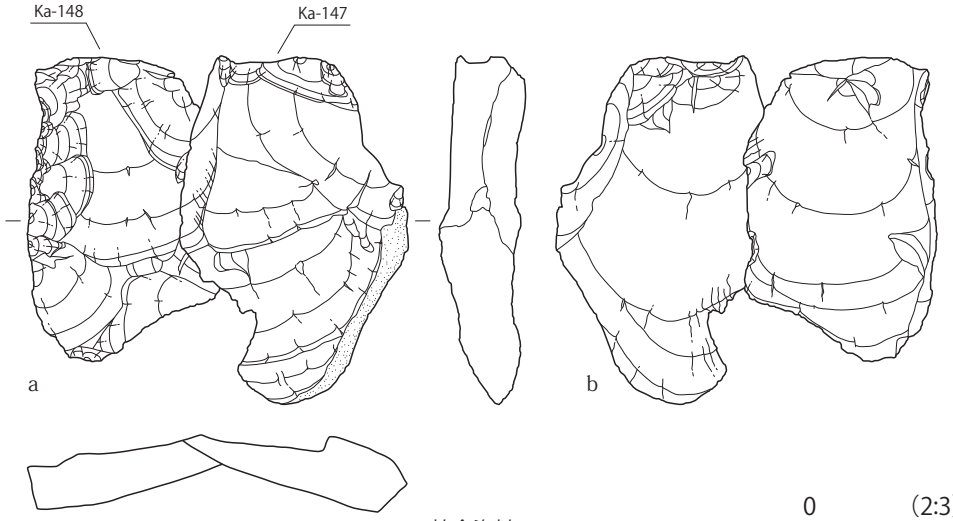


接合資料27

0 (2:3) 5cm

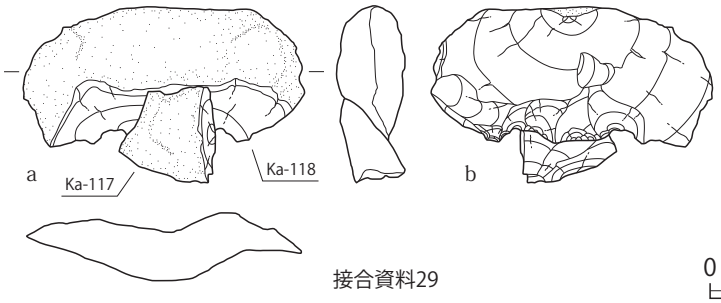
図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
	Ka-206	SX1	堆積土	打製石器	剥片	2.1	3.1	0.8	4.0	流紋岩	接合資料27、自然面打面、自然面あり	59
	Ka-207	SX1	堆積土	打製石器	剥片	4.2	4.5	1.7	24.8	流紋岩	接合資料27、自然面打面、自然面あり	59
	Ka-208	23ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	剥片	3.8	2.7	1.2	9.5	流紋岩	接合資料27、自然面あり	59

第 162 図　接合資料（17）



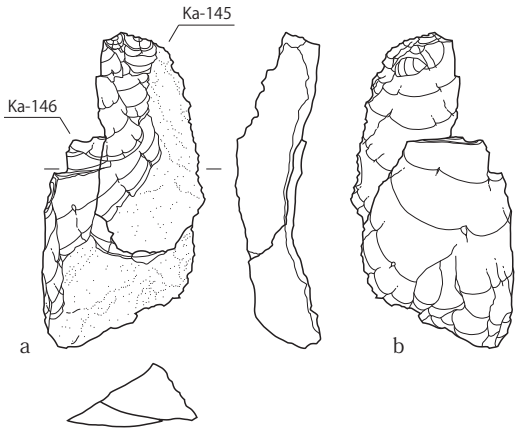
接合資料28

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
	Ka-147	16ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	剥片	6.9	4.5	1.6	29.7	流紋岩	接合資料28、自然面あり	60
	Ka-148	4ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	剥片	6.0	3.9	1.4	26.7	流紋岩	接合資料28、自然面あり	60



接合資料29

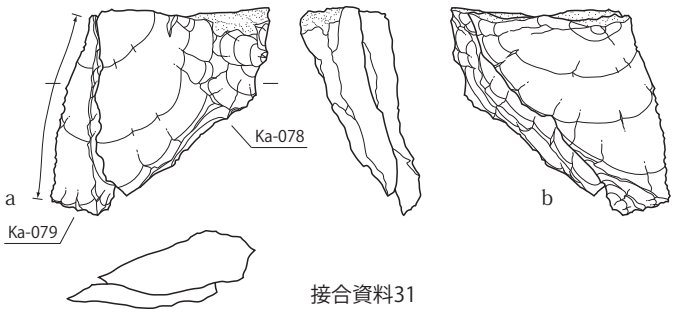
図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
	Ka-117	20ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	剥片	2.0	1.9	1.0	4.0	流紋岩	接合資料29	60
	Ka-118	13ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Va層	打製石器	二次加工のある剥片	2.7	5.6	1.0	18.0	流紋岩	接合資料29、自然面打面、b面下縁に二次加工、自然面あり	60



接合資料30

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
	Ka-145	SX1	堆積土	打製石器	剥片	4.4	2.2	1.7	8.4	流紋岩	接合資料30、自然面あり	59
	Ka-146	SX1	堆積土	打製石器	剥片	4.2	3.1	1.5	11.0	流紋岩	接合資料30、自然面あり	59

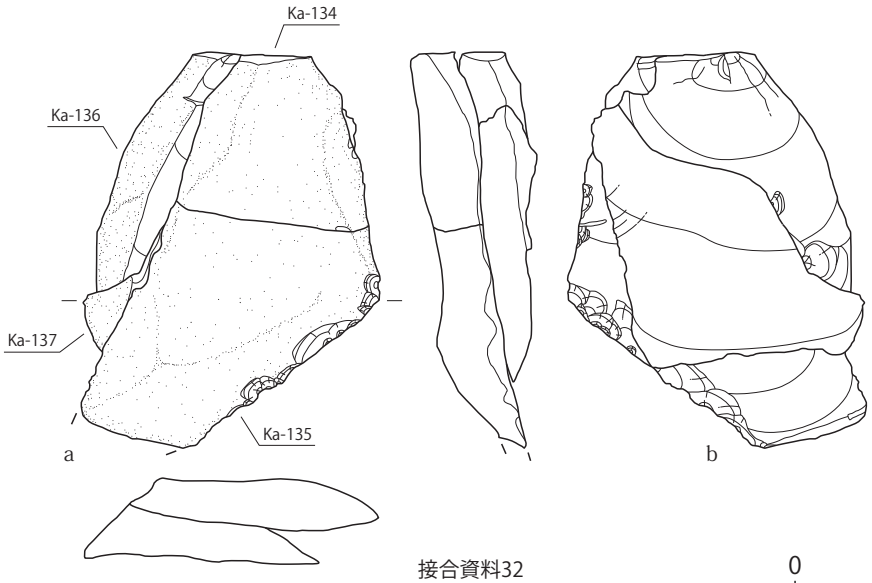
第 163 図　接合資料（18）



接合資料31

0 (2:3) 5cm

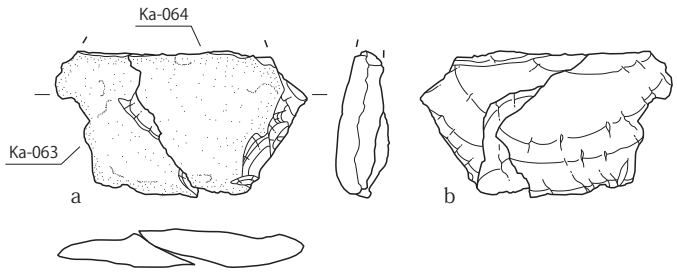
図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
	Ka-078	19ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vc層	打製石器	剥片	3.7	3.5	2.0	16.1	流紋岩	接合資料31、自然面打面、自然面あり	60
	Ka-079	Pit94	堆積土	打製石器	微細剥離痕のある剥片	4.0	4.0	1.2	5.7	流紋岩	接合資料31、自然面打面、一縁辺に微細剥離痕、自然面あり	60



接合資料32

0 (2:3) 5cm

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
	Ka-134	21ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Ⅳ層	打製石器	二次加工のある剥片	7.8	5.0	1.1	47.7	頁岩	接合資料32、同時割れ、a面+b面に二次加工、自然面あり、法量はKa-134＋Ka-135	60
	Ka-135	23ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	二次加工のある剥片							60
	Ka-136	12ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	剥片	6.2	4.6	1.0	43.0	頁岩	接合資料32、同時割れ、自然面あり、法量はKa-136＋Ka-137	60
	Ka-137	SK2	堆積土	打製石器	剥片							60



接合資料33

0 (2:3) 5cm

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
	Ka-063	16ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	剥片	2.9	5.0	1.0	12.8	流紋岩	接合資料33、同時割れ、自然面あり、法量はKa-063＋Ka-064	60
	Ka-064	13ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器								60

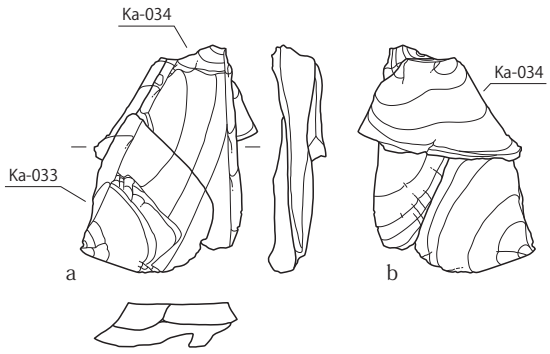
第 164 図　接合資料（19）

接合資料 34（第 165 図）

剥片 3 点の接合資料である。接合状況のみ図化を行った。Ka-33・34 は遺物包含層、Ka-35 はⅣ層からの出土である。石材は珪質頁岩である。剥離は、Ka-35 が剥離された後、180°の打面転移が行われ、Ka-34 → 35 の順で、連続して剥離されている。

接合資料 35（第 165 図）

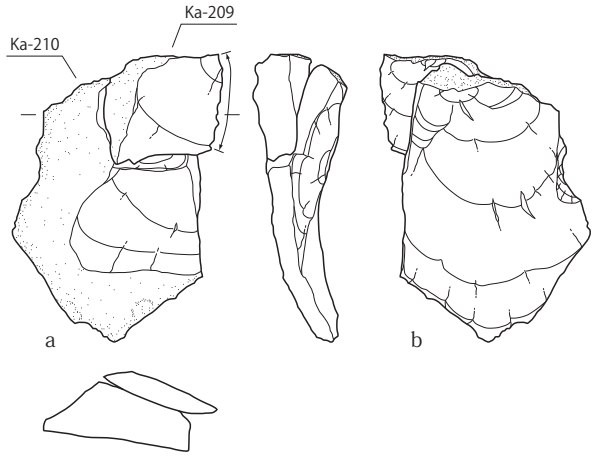
微細剥離痕のある剥片 1 点と剥片 1 点の接合資料である。接合状況のみ図化を行った。2 点とも遺物包含層からの出土である。石材は流紋岩である。剥離は、同一方向から Ka-209 → Ka-210 の順で、連続的に剥離されている。Ka-209 は a 面の右側縁に微細剥離痕がみられる。いずれも自然面を打面としている。



接合資料34

0 (2:3) 5cm

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
	Ka-033	19ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Va層	打製石器	剥片	3.2	2.2	0.6	5.3	珪質頁岩	接合資料34	60
	Ka-034	22ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Va層	打製石器	剥片	4.0	1.9	0.4	4.4	珪質頁岩	接合資料34	60
	Ka-035	21ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Ⅳ層	打製石器	剥片	2.0	3.3	0.5	2.9	珪質頁岩	接合資料34	60



接合資料35

0 (2:3) 5cm

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
	Ka-209	11ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器	微細剥離痕のある剥片	2.0	2.3	0.5	4.0	流紋岩	接合資料35、自然面打面、一縁辺に微細剥離痕、自然面あり	60
	Ka-210	12ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vc層	打製石器	剥片	5.5	3.7	1.1	22.6	流紋岩	接合資料35、自然面打面、自然面あり	60

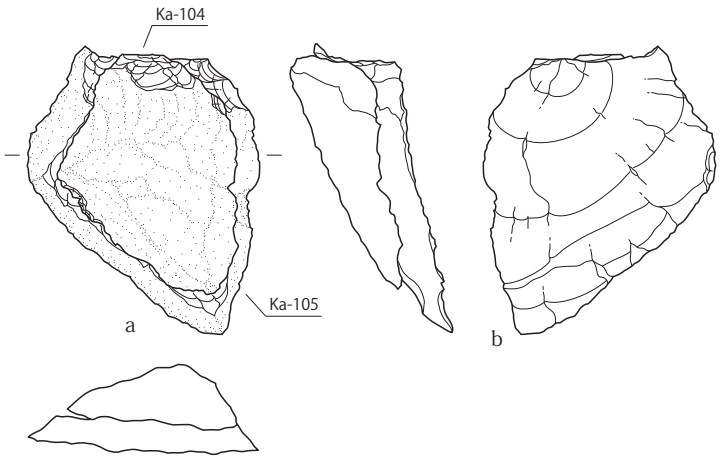
第 165 図　接合資料（20）

接合資料 36（第 166 図）

剥片２点の接合資料である。接合状況のみ図化を行った。Ka-104 はⅣ層、Ka-105 は遺物包含層からの出土である。石材は流紋岩である。剥離は、同一方向から Ka-104 → Ka-105 の順で、連続して剥離されている。

接合資料 37（第 166 図）

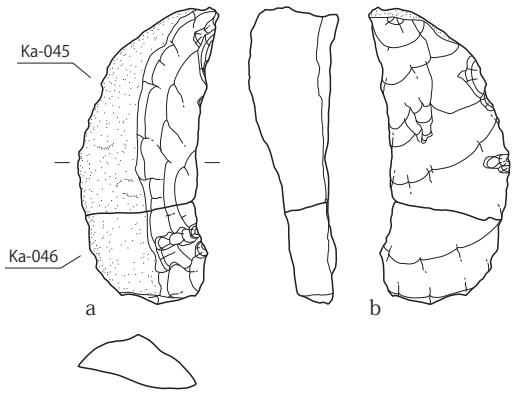
二次加工のある剥片 2 点の接合資料である。接合状況のみ図化を行った。Ka-45 はⅣ層、Ka-46 は遺物包含層からの出土である。石材は流紋岩である。同時割れの剥片で、一側縁に二次加工が施されている。



接合資料36

0 (2:3) 5cm

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
	Ka-104	7ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Ⅳ層	打製石器	剥片	4.7	3.6	2.2	18.4	流紋岩	接合資料36	60
	Ka-105	15ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Va層	打製石器	剥片	5.7	4.6	2.8	24.9	流紋岩	接合資料36	60



接合資料37

0 (2:3) 5cm

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
	Ka-045	13ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Ⅳ層	打製石器	二次加工のある剥片	5.9	2.6	1.7	18.7	流紋岩	接合資料37、同時割れ、自然面打面、a面＋b面の一縁辺に二次加工、法量はKa-045＋Ka-046	60
	Ka-046	8ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Vb層	打製石器								60

第 166 図　接合資料（21）

(7) その他の出土遺物（第 167 ～ 178 図）

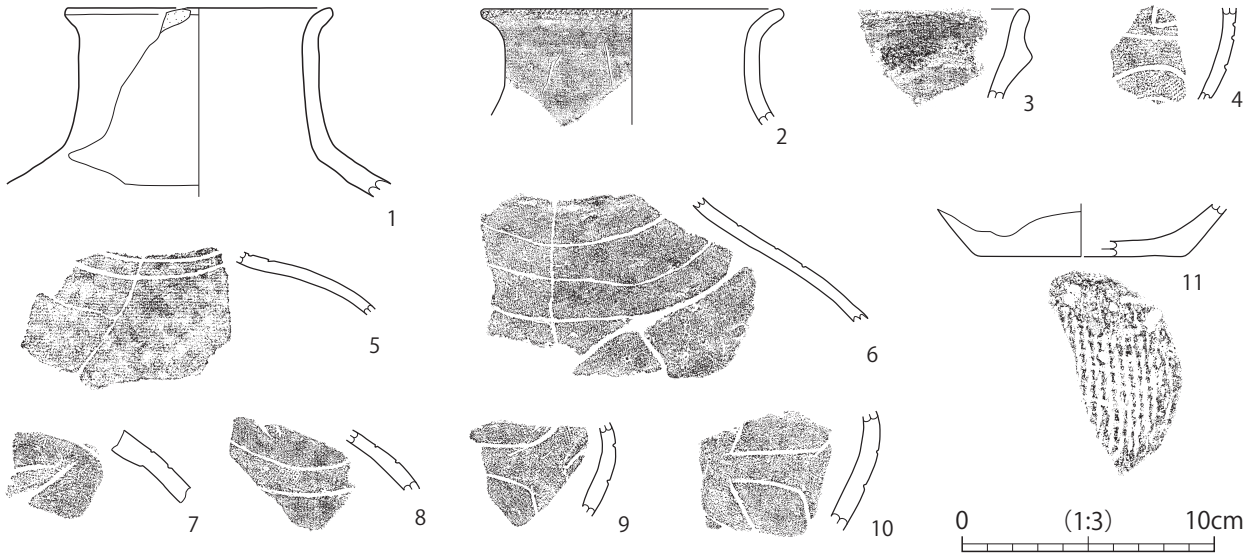
弥生時代に帰属すると考えられる遺物は基本層Ⅴ層から出土した遺物のほか、基本層Ⅳ層や古代の遺構堆積土などからも出土している。本項では、これらの遺物について記載する。

a . 弥生土器

器種は、壺 11 点、鉢 8 点、蓋 8 点、深鉢 3 点、甕 13 点、小型土器 2 点を掲載した。いずれも弥生時代中期中葉の桝形囲式に比定される。以下、器種毎に概要を記載する。

壺（第 167 図）

壺はすべて破片資料である。器形は、頸部が内傾気味に直立し、口縁部が短く外反するもの（1・2）と頸部から口縁部にかけて外傾し、頸部上端に隆帯が横位に貼り付けられるもの（3）がある。体部上半は肩が張るもの（5）と肩がなだらかなもの（6 ～ 8）がある。体部上半の装飾文様には、横位直線文と錨形文があり、錨形文の文様内には地文が充填されている。横位直線文が施されるもののうち、沈線施文後、沈線間の内外をミガキ調整しているもの（6）は、本調査区で出土した他の弥生土器とは様相が異なり、より新しい時期の円田式土器に近い特徴を持つと考えられる。

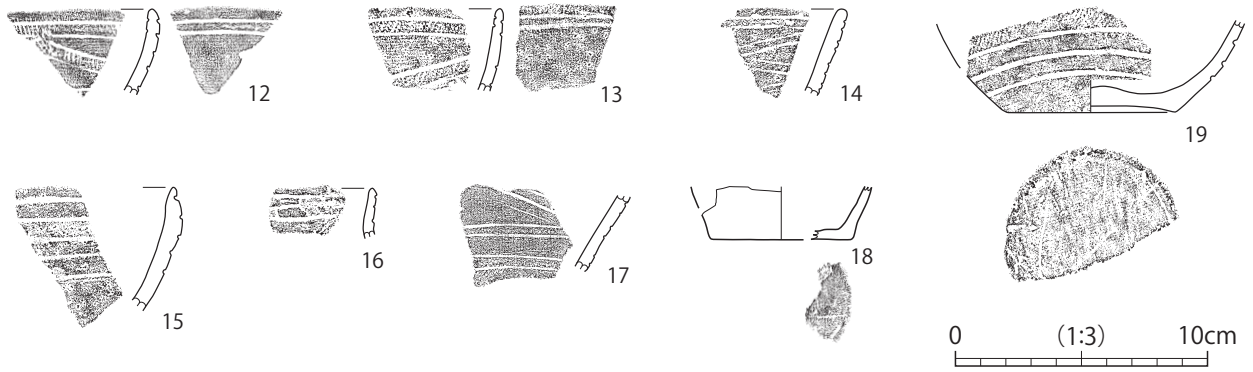


図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面調整（文様）	内面調整（文様）	備考	写真図版
1	B-002	13ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Ⅳ層	弥生土器	壺	口縁～体上半	口縁～体上半：横位ミガキ 体上半：ミガキ	ナデ	口径（10.6）cm	61
2	B-153	13ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Ⅳ層	弥生土器	壺	口縁～頸部	口唇：LR縄文横位回転？ 口縁～頸部：ミガキ	ミガキ	口径（11.6）cm 口唇やや摩滅	61
3	B-145	31ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Ⅲ層	弥生土器	壺	口縁～頸部	口縁～頸部：横位隆帯貼付→ミガキ	ナデ		61
4	B-156	19ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Ⅳ層	弥生土器	壺	体部	体部：沈線→LR縄文→沈線→ミガキ（錨形文？）	ミガキ	外面地文部及び沈線内に赤彩痕跡	61
5	B-297	SB31P9	堆積土	弥生土器	壺	体上端	体上端：沈線→ミガキ（横位直線文）	ミガキ	内面に輪積痕	61
6	B-125	SI297	堆積土	弥生土器	壺	体上半	体上半：沈線→ミガキ（横位直線文）	ナデ？	内面やや摩滅	61
7	B-293	SI308	掘り方	弥生土器	壺	体部	体部：沈線→LR縄文（0段多条）→沈線→ミガキ（錨形文）	ナデ	B-338・339・340と同一個体、内外面摩滅	61
8	B-340	SI308	掘り方	弥生土器	壺	体部	体部：沈線→LR縄文（0段多条）→沈線→ミガキ（錨形文）	ナデ	B-293・338・339と同一個体、内外面摩滅	61
9	B-338	SI308	掘り方	弥生土器	壺	体部	体部：沈線→LR縄文（0段多条）→沈線→ミガキ（錨形文？）	ナデ	B-293・339・340と同一個体、内外面摩滅	61
10	B-339	カクラン		弥生土器	壺	体部	体部：沈線→LR縄文（0段多条）→沈線→ミガキ（錨形文）	ナデ	B-293・338・340と同一個体、内外面摩滅	61
11	B-155	19ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Ⅳ層	弥生土器	壺	底部	底面：網代痕	不明	底径（7.8）cm	61

第 167 図　その他の出土遺物（1）

鉢（第 168 図）

鉢はすべて破片資料である。器形は、体部から口縁部にかけて強く内湾するもの（12・15）と内湾気味に外傾するもの（13）、直線的に外傾するもの（14）などがある。装飾文様の施文部位は、口縁部から体部上半にかけてあるもの（12 ～ 17）と体部下半にあるもの（19）がある。装飾文様は、横位直線文と山形文の組み合わせが施文され、口縁部内面に横位直線文が施されるもの（12・13）もある。文様内は磨消縄文のもの（17）と地文が充填されているもの（12・13・19）、無文のもの（14 ～ 16）がある。底面には、織布痕（19）がみられる。



図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面調整（文様）	内面調整（文様）	備考	写真図版
12	B-307	SD66	堆積土下層	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口縁～体上半：植物茎回転文→沈線→ミガキ（横位直線文＋連弧文）	口縁：沈線（横位直線文）口縁～体上半：ミガキ		61
13	B-154	19ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Ⅳ層	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口縁～体上半：沈線→LR縄文→沈線（横位直線文＋連続山形文？）	口縁：沈線（横位直線文）	内外面やや摩滅	61
14	B-289	SI299	掘り方	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口縁～体上半：沈線（横位直線文＋連続山形文）	不明	外面籾痕内外面摩滅	61
15	B-294	SI308	掘り方	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口縁～体上半：ナデ→沈線（横位直線文）	ミガキ？	内外面摩滅	61
16	B-147	10ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Ⅲ層	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口縁：ナデ→沈線→ミガキ（横位直線文）	横位ミガキ	口縁部突起	61
17	B-150	7ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Ⅳ層	弥生土器	鉢	体部	体部：LR縄文→沈線→ミガキ（横位直線文＋連続山形文？・磨消縄文）	ミガキ		61
18	B-004	12ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Ⅳ層	弥生土器	鉢	体下端～底部	体下端：ミガキ底面：木葉痕	ナデ	内外面赤彩	61
19	B-148	7ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Ⅳ層	弥生土器	鉢	体下半～底部	体下半：沈線→LR縄文→沈線→ナデ（横位直線文）底面：木葉痕→ミガキ	ヘラナデ→ミガキ	底径6.6cm	61

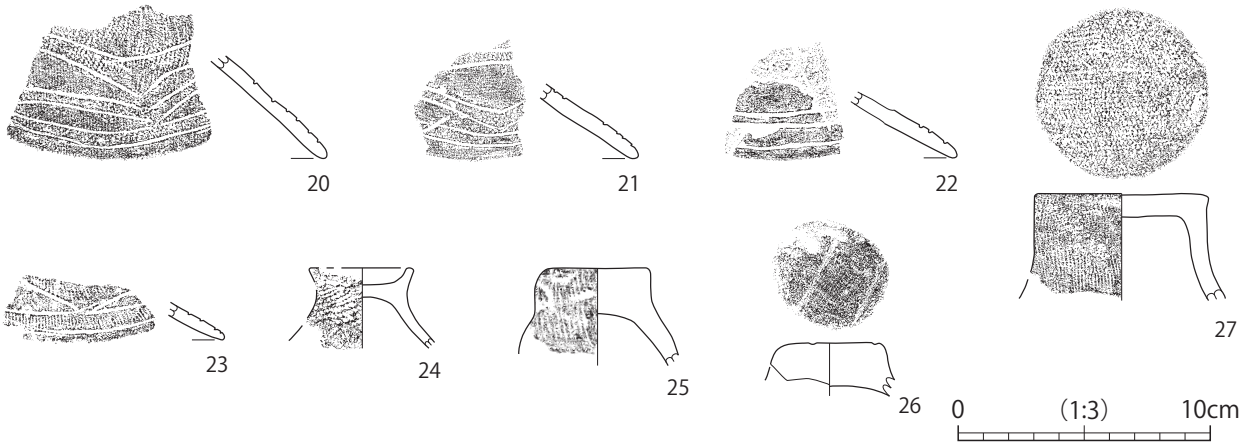
第 168 図　その他の出土遺物（2）

蓋（第 169 図）

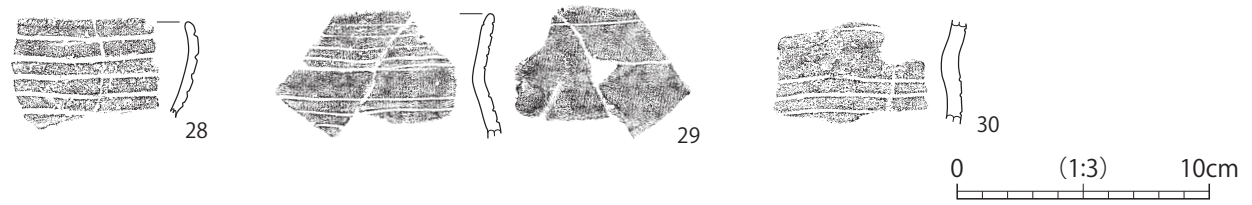
蓋はすべて破片資料であるが、天井部径が 6cm 以上の大型品（27）と 4cm 前後の小型品（24 ～ 26）がある。器形は、体部から口縁部にかけて直線的に開くもので、天井部につまみ部が付くもの（24）と付かないもの（25 ～ 27）がある。つまみ部が付かないもの（25）には天井部の器厚が厚く、基本層Ⅴ層から出土した蓋と様相が異なるものがある。装飾文様の施文部位は、口縁部から体部下半にある。装飾文様は、横位直線文と連弧文もしくは山形文の組み合わせが施文される。文様内は磨消縄文のもの（20）と地文が充填されているもの（21・23）、無文のもの（22）がある。文様の規格性が崩れ、粗雑な文様のもの（20）がみられる。

深鉢（第 169 図）

深鉢はすべて破片資料である。器形は、口縁部と体部の境が括れるもので、口縁部が内湾するもの（28）と直線的に外傾するもの（29）がある。装飾文様の施文部位は、口縁部と体部上半にあり、いずれも数条の横位直線文が施されている。口縁部内面に横位直線文が施されるもの（29）もある。文様内や括れ部分がミガキ調整のみで無文となる。文様を構成する沈線には、幅 1mm 以下の細い沈線のもの（29）がある。



図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面調整（文様）	内面調整（文様）	備考	写真図版
20	B-284	SI291	掘り方	弥生土器	蓋	体部～口縁	体部～口縁:LR縄文横位回転→沈線→ミガキ（横位直線文＋連弧文・磨消縄文）	口縁:横位ミガキ 体部:縦位ミガキ		61
21	B-316	SD247	堆積土下層	弥生土器	蓋	体下半～口縁	体下半:沈線→LR縄文横位回転→沈線→ミガキ 口縁:ヨコナデ→沈線（横位直線文＋連続山形文）	口縁:横位ミガキ 体部:縦位ミガキ		61
22	B-302	SD66	堆積土下層	弥生土器	蓋	体下半～口縁	体下半:ナデ→沈線 口縁:ヨコナデ→沈線（横位直線文）	ミガキ	体下半内外面剥離	61
23	B-298	Pit94	堆積土	弥生土器	蓋	体下半～口縁	体下半～口縁:沈線→植物茎横位回転→沈線→ミガキ（横位直線文＋連続山形文）	口縁:横位ミガキ 体下半:縦位ミガキ	内面に輪積痕	61
24	B-157	24ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Ⅳ層	弥生土器	蓋	つまみ～体上端	天井:ナデ つまみ～体上端:LR縄文横位回転	ミガキ	つまみ部径4.0㎝	61
25	B-290	SI302	堆積土	弥生土器	蓋	天井～体上端	天井:ナデ 体上端:植物茎回転文横位回転	ナデ→ミガキ	天井部径3.8㎝	61
26	B-286	SI296	堆積土	弥生土器	蓋	天井～体上端	天井:木葉痕→ミガキ 体部上端:ミガキ	ナデ→ミガキ	天井部径3.8㎝	61
27	B-295	SI308	カマド	弥生土器	蓋	天井～体上半	天井:織布痕 体上半:植物茎回転文横位回転	ミガキ	天井径6.6㎝	61

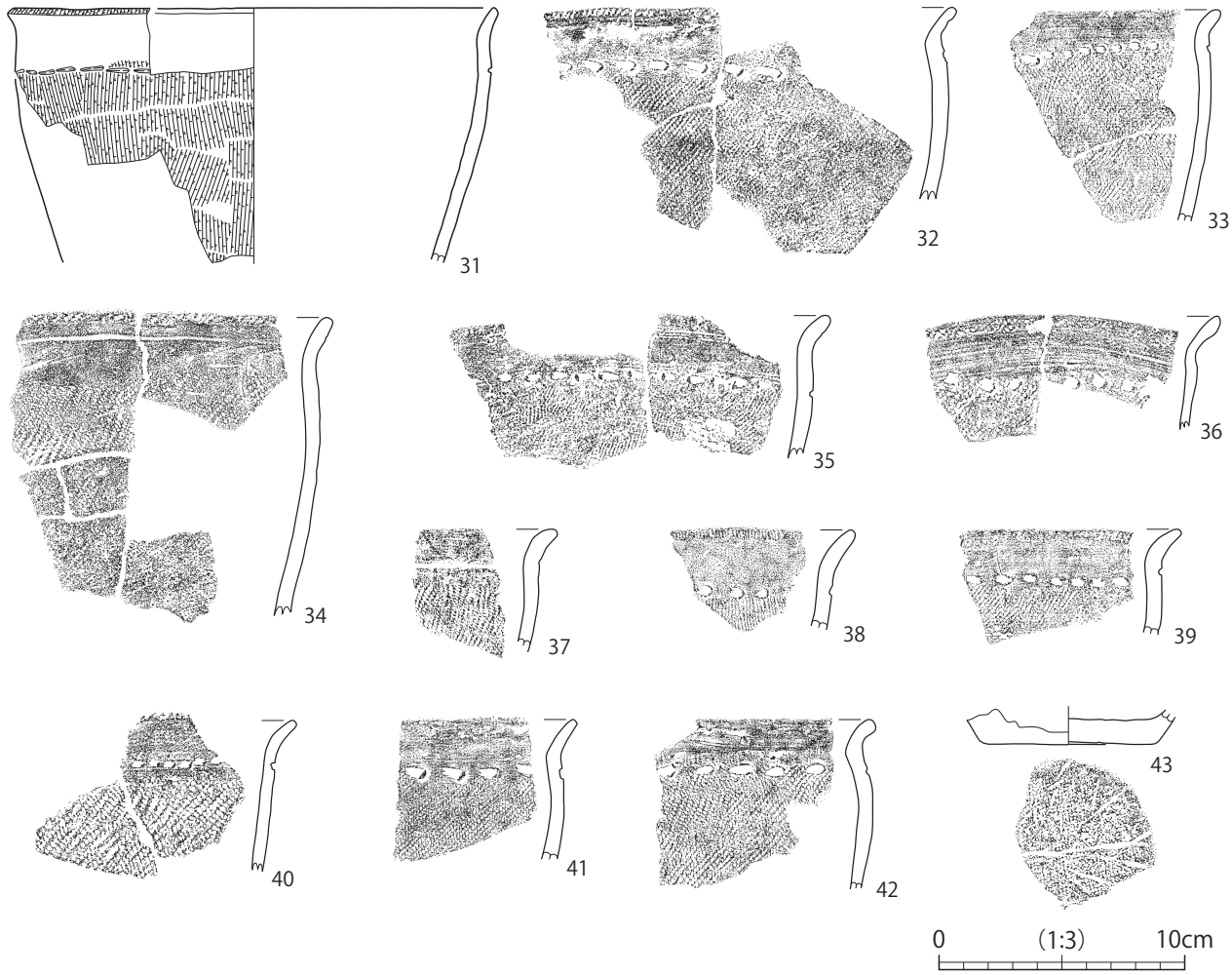


図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面調整（文様）	内面調整（文様）	備考	写真図版
28	B-129	SI307	掘り方	弥生土器	深鉢	口縁～体上半	口唇:植物茎横位回転 口縁～体上半:沈線（横位直線文）	口縁:ヨコナデ→ミガキ 体上半:ミガキ		61
29	B-285	SI291	掘り方	弥生土器	深鉢	口縁～体上半	口縁～体上半:沈線→ミガキ（横位直線文）	口縁:沈線（横位直線文） 口縁～体上半:横位ミガキ	内面沈線内に赤彩痕跡 口縁外面摩滅	61
30	B-288	SI299	堆積土	弥生土器	深鉢	体上半	体上半:沈線→ミガキ（横位直線文）	横位ミガキ	外面摩滅	61

第 169 図　その他の出土遺物（3）

甕（第 170 図）

甕は、全体の器形を復元できる個体はない。器形は、口縁部に最大径を持つもの（31 ～ 41）と口縁部と体部上半に最大径を持つもの（40）がある。口縁部と体部の境が括れる形態が大部分である。口縁部は平口縁で短く外反または外傾し、括れは鈍角に屈曲するもの、緩やかに屈曲するものなど多様な形態が認められる。口縁部には明瞭なヨコナデが施され、口唇部と体部には地文が施されている。地文には縄文と植物茎回転文があり、縄文原体には単節（LR）と直前段３条（LR）がある。このほか、原体末端部の折り返しの痕跡が残されているもの（34）がある。体部上端には列点刺突文が施されるものと沈線が施されるもの（34・37）、短沈線のもの（31）がある。列点刺突文の施文方向には左右の別があり、刺突のほか押し引き状のものがある。刺突の施文工具は棒状工具が多用されるが、短沈線はヘラ状工具により施文されている。底面には織布痕が残された後に、木葉痕が付いたもの（43）がみられる。

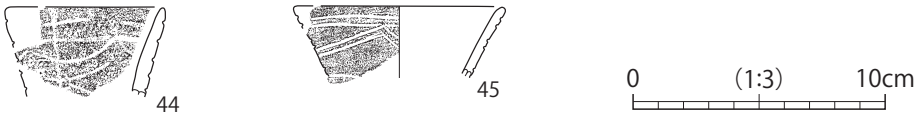


図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面調整（文様）	内面調整（文様）	備考	写真図版
31	B-144	22ｸﾞﾘｯﾄﾞ	表土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口唇:植物茎回転文横位回転　口縁:ヨコナデ 体上端:短沈線(左→右) 体上半:植物茎回転文横位回転	口縁:ヨコナデ→ミガキ 体上半:ナデ	口径(20.0)㎝	61
32	B-135	SD66	堆積土下層	弥生土器	甕	口縁～体上半	口唇:LR縄文横位回転　口縁:ヨコナデ 体上端:列点刺突(左→右) 体上半:LR縄文横位回転	不明	内外面摩滅	61
33	B-313	SD247	堆積土下層	弥生土器	甕	口縁～体上半	口縁:ヨコナデ　体上端:列点刺突(左→右) 体上半:LR縄文横位回転	口縁:ヨコナデ 体上半:ミガキ		61
34	B-128	SI302	掘り方	弥生土器	甕	口縁～体部	口唇:LR縄文横位回転 口縁:ヨコナデ→沈線(横位直線文) 体部:LR縄文(末端折り返し)横位回転	不明		61
35	B-126	SI299	掘り方	弥生土器	甕	口縁～体上半	口唇:植物茎回転文横位回転　口縁:ヨコナデ 体上端:列点刺突(右→左) 体上半:植物茎回転文横位回転	横位ミガキ		61
36	B-123	SI291	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口唇:LR縄文横位回転　口縁:ヨコナデ 体上端:列点刺突(左→右) 体上半:LR縄文横位回転	ミガキ？	内面摩滅	61
37	B-320	SK280	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口縁:ヨコナデ　体上端:沈線(横位直線文) 体上半:LR縄文横位回転	横位ミガキ		62
38	B-315	SD247	堆積土下層	弥生土器	甕	口縁～体上半	口唇:植物茎回転文横位回転　口縁:ヨコナデ 体上端:列点刺突(左→右) 体上半:植物茎回転文横位回転	ミガキ？	内面摩滅	62
39	B-304	SD66	堆積土下層	弥生土器	甕	口縁～体上半	口唇:LR縄文横位回転　口縁:ヨコナデ 体上端:列点刺突(左→右) 体上半:LR縄文横位回転	ミガキ	内外面やや摩滅	62
40	B-137	SD249	堆積土下層	弥生土器	甕	口縁～体上半	口唇:LR縄文　口縁;ヨコナデ 体上端:列点刺突(左→右) 体上半:LR縄文横位回転	ミガキ	内面やや摩滅	62
41	B-306	SD66	底面直上	弥生土器	甕	口縁～体上半	口縁:ヨコナデ　体上端:列点刺突(左→右) 体上半:LR縄文横位回転	口縁:横位ミガキ 体部:縦位ミガキ		62
42	B-146	40ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Ⅲ層	弥生土器	甕	口縁～体上半	口縁:ヨコナデ　体上端:列点刺突(左→右) 体上半:LR縄文(直前段3条)横位回転	横位ミガキ		62
43	B-309	SD66	堆積土下層	弥生土器	甕	体下端～底部	体下端:ナデ 底面:織布痕→木葉痕	不明	底径(8.0)㎝ 内面摩滅	62

第 170 図　その他の出土遺物（4）

小型土器（第 171 図）

小型土器（44・45）は鉢形の精製土器である。器形は、外反気味に外傾するもの（44）と直線的に大きく開くもの（45）で、平口縁である。装飾文様は、横位直線文と連弧文もしくは山形文の組み合わせが施文されている。文様内には単節の LR 縄文が充填されているもの（44）と無文のもの（45）がある。



図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面調整（文様）	内面調整（文様）	備考	写真図版
44	B-287	SI299	床面直上	弥生土器	小型土器	口縁～体上半	口縁～体上半：沈線・LR縄文横位回転（横位直線文＋連弧文）	ミガキ？	口径(6.2)cm 内外面摩滅	62
45	B-303	SD66	堆積土下層	弥生土器	小型土器	口縁～体上半	口縁～体上半：LR縄文？→沈線→ミガキ（横位直線文＋連弧文）	ミガキ？	口径(8.2)cm 内面やや摩滅	62

第 171 図　その他の出土遺物（5）

b . 石器

石鏃 8 点、石匙 1 点、石錐 2 点、スクレイパー 3 点、二次加工のある剥片 4 点、微細剥離痕のある剥片 5 点、石核 5 点、礫石器 2 点を掲載した。

1）打製石器

石鏃（第 172 図）

46 はアメリカ式石鏃である。器形は左右非対象で、抉り部分の整形時に欠損したためと考えられる。47 ～ 53 は有茎の石鏃で、2.7cm 以上の大型品と 2.0cm 前後の小型品がある。47・50・52 は完形品、48・49 は先端部を欠損、51・53 は基部を欠損している。49 は a・b 両面の全面に剥離調整が施されているが、そのほかは素材剥片の剥離面をわずかに残しており、52 の a 面には自然面がある。47・52・53 の断面形状は身部が五角形で、基部が菱形を呈し、48 ～ 51 の断面形状は身部、基部共に菱形を呈している。石材は 46・52・55 が流紋岩、47 ～ 49 が珪質頁岩、50・51 が玉髄、53 が瑪瑙である。

石匙（第 172 図）

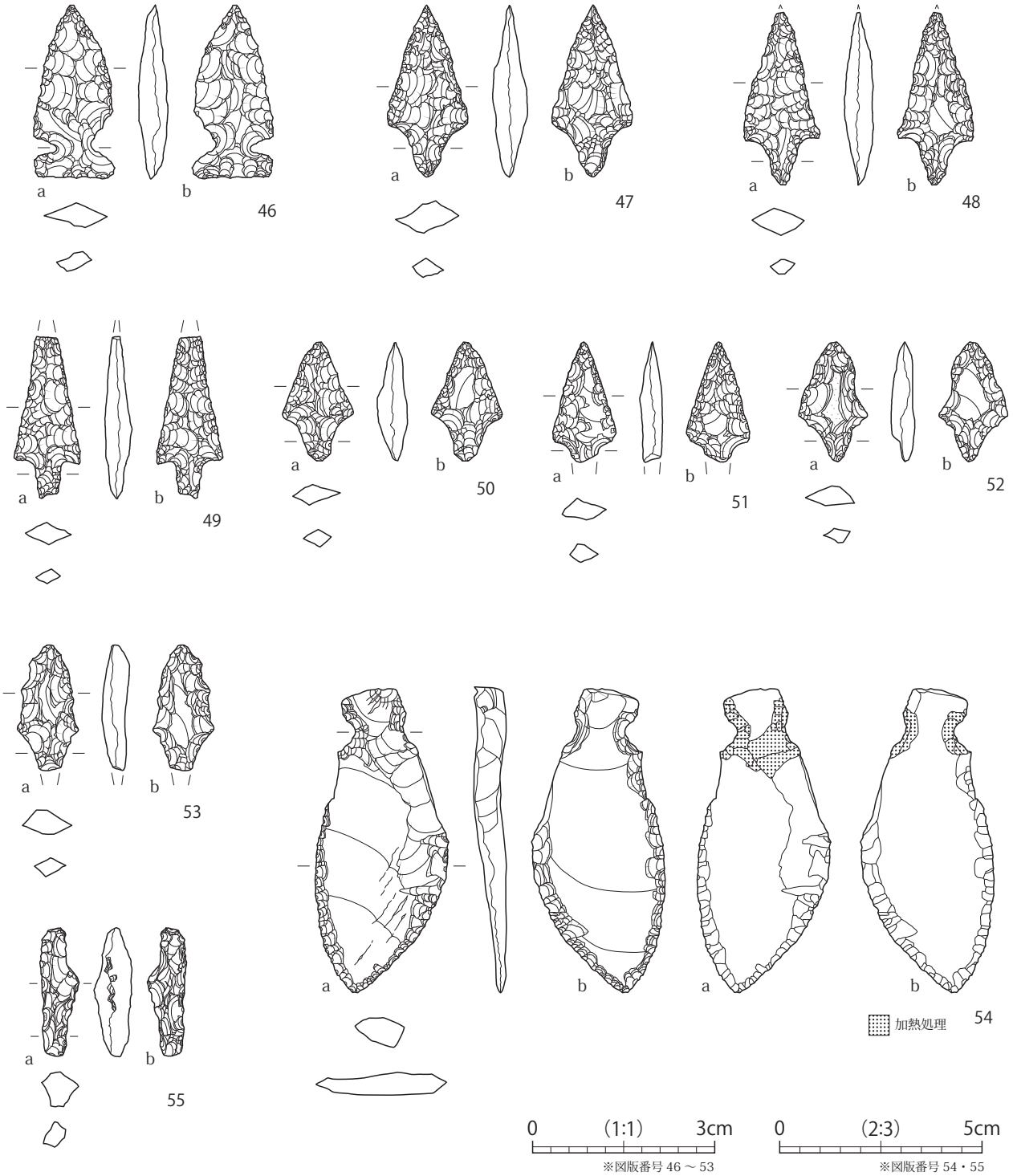
54 は左右両側縁に表裏両方向からの調整剥離が施されている。抉り部分には光沢がみられ、加熱処理を施しているものと考えられる。石材は碧玉である。

石錐（第 172・173 図）

55 は完形品、56 は未成品と考えられる。55 は棒状の器形を呈し、a・b 両面に丁寧な剥離調整が施されている。56 は a 面の右側縁に連続した剥離調整と b 面の下端部に剥離調整が施されている。石材は 55 が流紋岩、56 が珪質頁岩である。

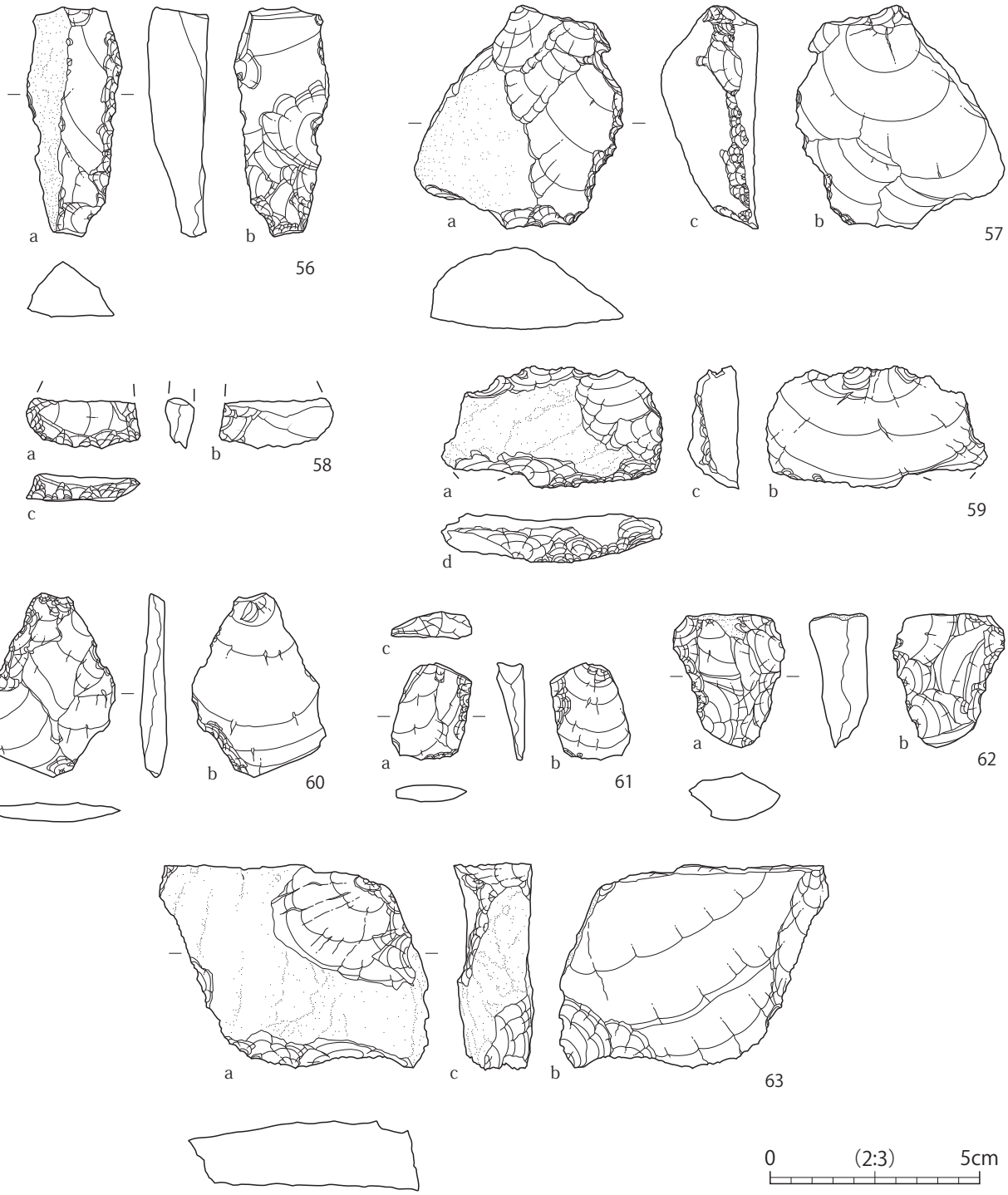
スクレイパー（第 173 図）

57 は a 面の右側縁、58 は a 面の下縁と左右両側縁、59 は a 面の下縁に剥離調整が施されている。57・59 には自然面が残っている。石材は 57・59 が流紋岩、58 が珪質頁岩である。



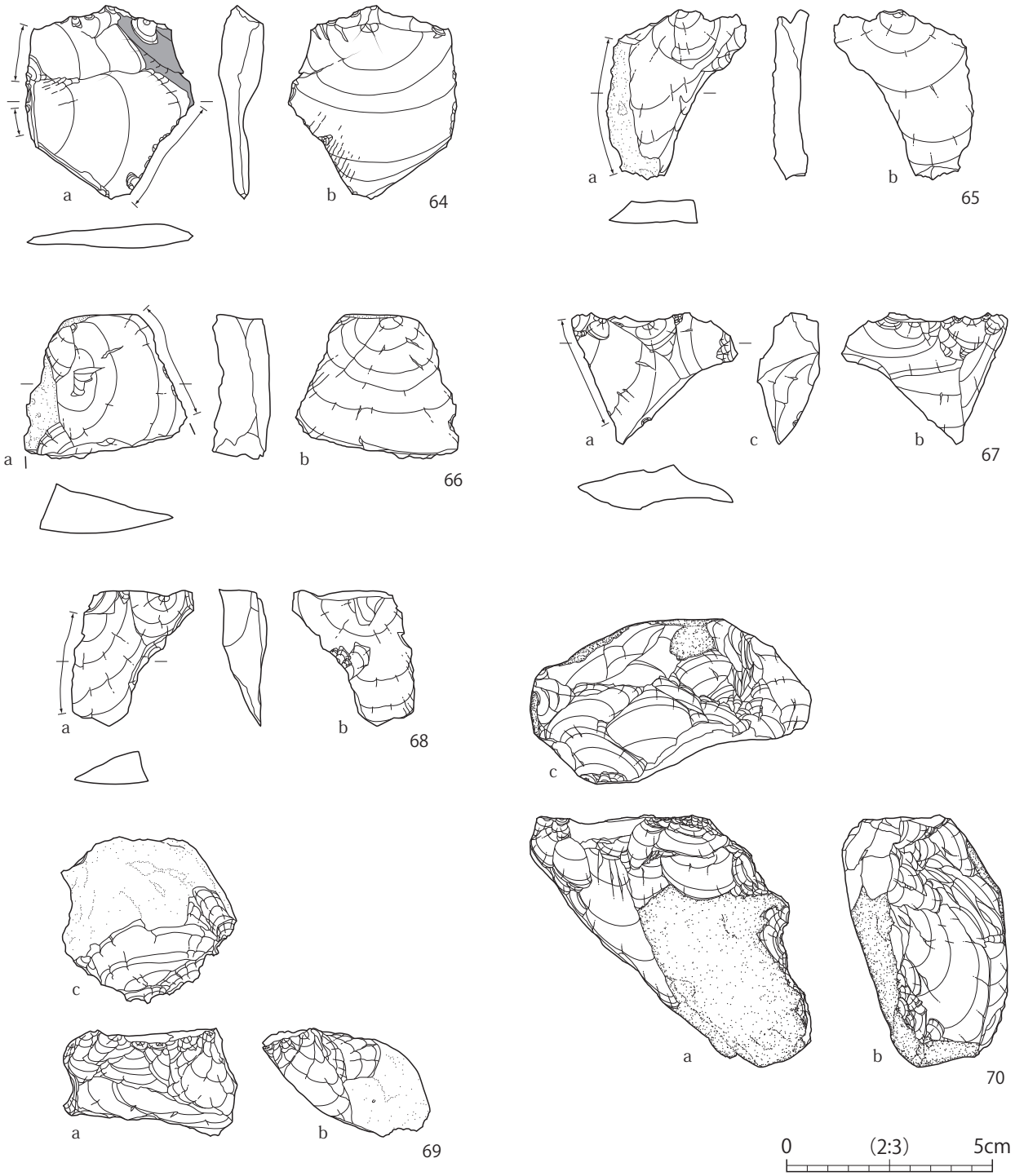
図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
46	Ka-013	SD66	堆積土上層	打製石器	石鏃	2.9	1.3	0.5	1.4	流紋岩	アメリカ式石鏃、完形品、先端角35°、厚幅比0.37	62
47	Ka-014	SD66	床面直上	打製石器	石鏃	2.8	1.4	0.6	1.3	珪質頁岩	有茎石鏃、完形品、先端角40°、厚幅比0.47	62
48	Ka-005	20ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Ⅳ層	打製石器	石鏃	2.9	1.3	0.5	1.1	珪質頁岩	有茎石鏃、完形品、先端角35°、厚幅比0.4	62
49	Ka-006	17ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Ⅳ層	打製石器	石鏃	2.7	1.1	0.5	0.8	珪質頁岩	有茎石鏃、両端欠損、先端角21°、厚幅比0.48	62
50	Ka-001	SI292	掘り方	打製石器	石鏃	2.0	1.2	0.5	0.8	玉髄	有茎石鏃、完形品、先端角50°、厚幅比0.5	62
51	Ka-002	SI301	堆積土	打製石器	石鏃	2.0	1.1	0.4	0.6	玉髄	有茎石鏃、基部欠損、先端角37°、厚幅比0.4	62
52	Ka-003	SI303	掘り方	打製石器	石鏃	2.0	1.2	0.4	0.7	流紋岩	有茎石鏃、完形品、先端角48°、厚幅比0.36	62
53	Ka-004	SD66	堆積土中層	打製石器	石鏃	2.1	1.0	0.5	0.9	瑪瑙	有茎石鏃、基部欠損、先端角35°、厚幅比0.5	62
54	Ka-015	SD65	堆積土下層	打製石器	石匙	7.6	3.3	0.9	16.0	碧玉	左右両側縁に二次加工、抉り部分加熱処理後剥離調整	62
55	Ka-016	SI304	掘り方	打製石器	石錐	3.2	1.0	0.9	2.1	流紋岩	先端磨耗	62

第 172 図　その他の出土遺物（6）



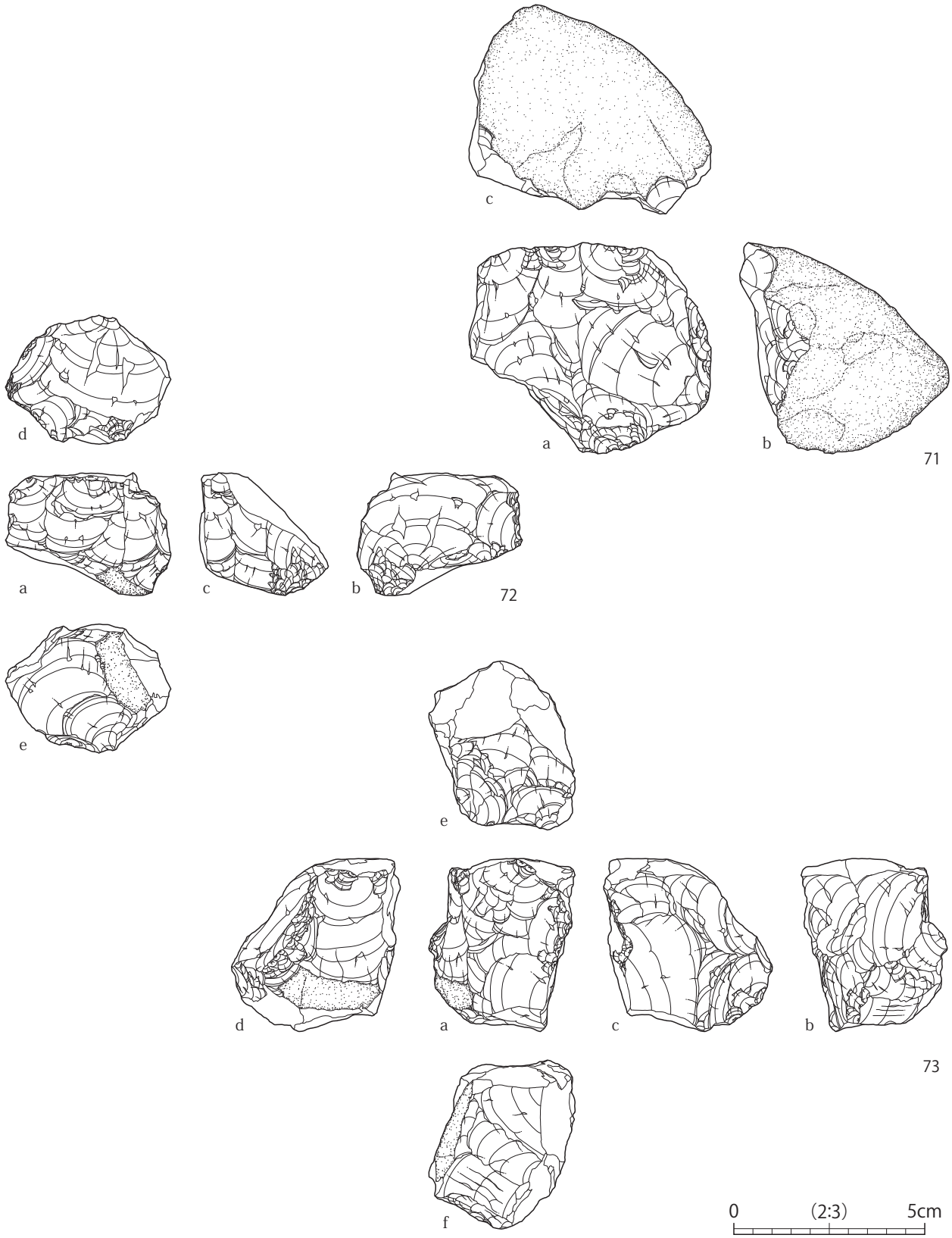
図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
56	Ka-026	攪乱		打製石器	石錐未成品	5.5	2.3	1.5	16.4	珪質頁岩	a面＋b面の複数縁辺に二次加工、a面自然面あり	62
57	Ka-127	SI302	掘り方	打製石器	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	5.3	5.0	1.3	51.7	流紋岩	刃角79°、a面の一縁辺に二次加工、a面自然面あり	62
58	Ka-021	SI301	堆積土	打製石器	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	1.2	2.7	0.7	2.1	珪質頁岩	刃角83°、a面の複数縁辺に二次加工、上端欠損	62
59	Ka-125	SI304	堆積土下層	打製石器	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	2.9	5.3	1.3	16.4	流紋岩	刃角80°、a面の一縁辺に二次加工、a面自然面あり	62
60	Ka-029	18ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Ⅳ層	打製石器	二次加工のある剥片	4.4	3.1	0.7	6.8	流紋岩	a面＋b面の複数縁辺に二次加工	62
61	Ka-027	4ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Ⅲ層	打製石器	二次加工のある剥片	2.3	2.0	0.7	2.3	流紋岩	a面＋b面の複数縁辺に二次加工	63
62	Ka-023	17ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Ⅳ層	打製石器	二次加工のある剥片	3.2	2.6	1.4	9.3	頁岩	a面＋b面の複数縁辺に二次加工、a面自然面あり	63
63	Ka-121	SD65	堆積土下層	打製石器	二次加工のある剥片	4.9	6.4	1.8	73.3	流紋岩	a面＋b面の複数縁辺に二次加工、a面自然面あり	63

第 173 図　その他の出土遺物（7）



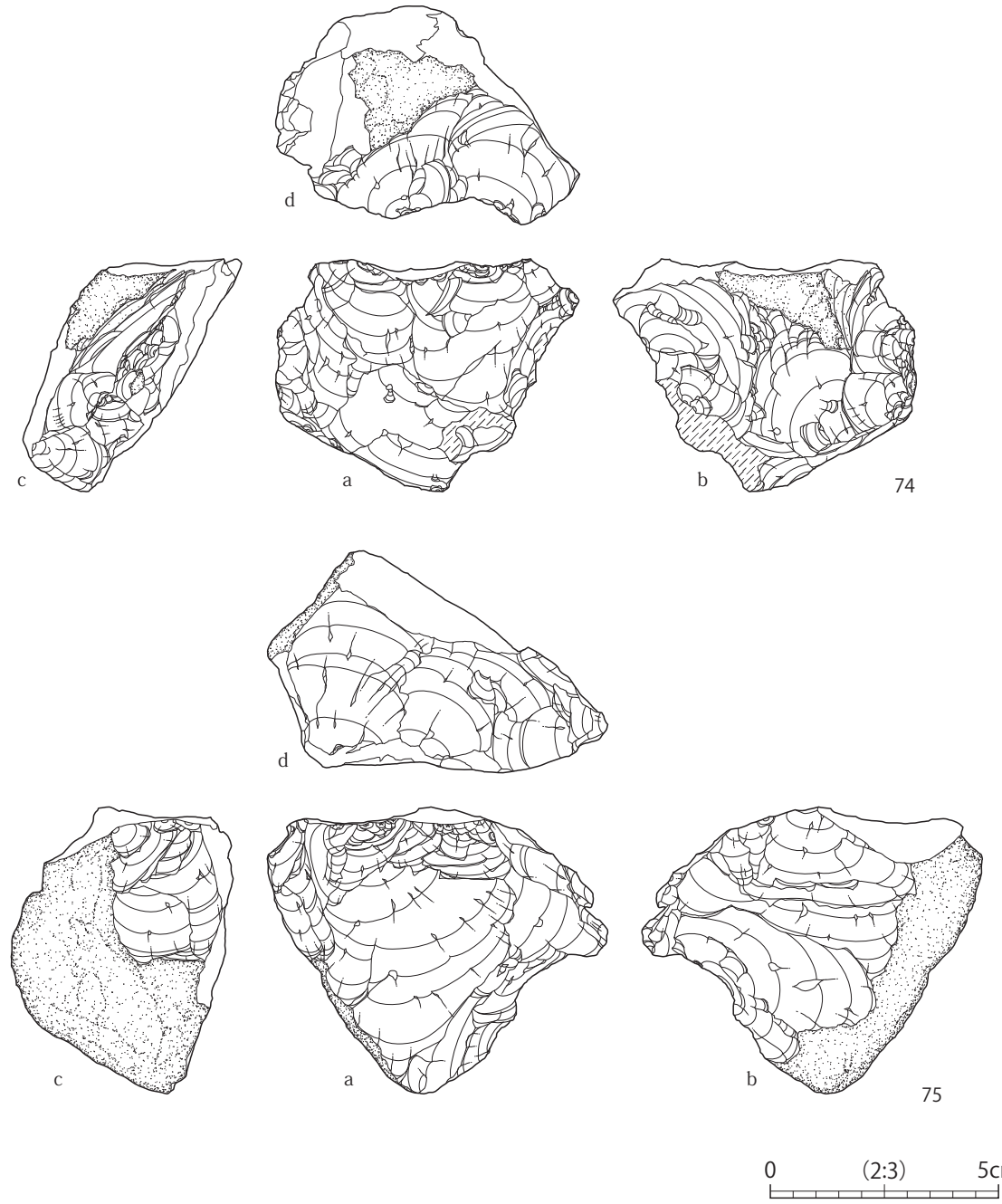
図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ				
64	Ka-028	21ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Ⅳ層	打製石器	微細剥離痕のある剥片	4.7	4.1	1.1	15.6	珪質頁岩	複数縁辺に微細剥離痕、a面二重パティナあり	63
65	Ka-123	SK273	堆積土	打製石器	微細剥離痕のある剥片	4.0	3.4	0.8	7.5	流紋岩	一縁辺に微細剥離痕、a面自然面あり	63
66	Ka-124	SI303	掘り方	打製石器	微細剥離痕のある剥片	4.5	4.0	1.4	15.9	流紋岩	一縁辺に微細剥離痕、a面自然面あり、下部欠損	63
67	Ka-126	SD65	堆積土下層	打製石器	微細剥離痕のある剥片	3.2	4.0	1.5	11.9	流紋岩	一縁辺に微細剥離痕	63
68	Ka-133	SI306P3	堆積土	打製石器	微細剥離痕のある剥片	3.3	2.9	1.2	6.2	流紋岩	一縁辺に微細剥離痕	63
69	Ka-131	SD66	堆積土中層	打製石器	石核	2.6	4.2	4.0	34.6	流紋岩	礫素材、打面転移なし、自然面あり	63
70	Ka-089	SD66	堆積土上層	打製石器	石核	6.1	6.9	4.1	129.2	流紋岩	礫素材、打面転移あり、自然面あり	63

第 174 図　その他の出土遺物（8）



図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ				
71	Ka-120	SD66	堆積土中層	打製石器	石核	5.5	6.3	5.5	148.7	流紋岩	礫素材、打面転移なし、自然面あり	64
72	Ka-132	SD65	堆積土下層	打製石器	石核	3.2	4.3	3.3	35.8	流紋岩	礫素材、打面転移あり、自然面あり	63
73	Ka-128	SD66	堆積土中層	打製石器	石核	4.5	3.3	4.4	73.0	流紋岩	礫素材、打面転移あり、自然面あり	64

第 175 図　その他の出土遺物（9）



図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ				
74	Ka-129	SD66	堆積土上層	打製石器	石核	5.1	6.2	6.7	95.6	流紋岩	礫素材、打面転移あり、自然面あり	64
75	Ka-130	SD66	堆積土下層	打製石器	石核	6.3	7.5	7.5	170.3	流紋岩	礫素材、打面転移あり、自然面あり	65

第 176 図　その他の出土遺物（10）

二次加工のある剥片（第 173 図）

いずれも複数縁辺に二次加工が施されており、62 は定形石器の未成品の可能性も考えられる。石材は 60・61・63 が流紋岩、62 が頁岩である。

微細剥離痕のある剥片（第 174 図）

64 は複数縁辺に微細剥離痕があり、a 面には二重パティナが認められる。65 ～ 68 は一縁辺に微細剥離痕がある。石材は 64 が珪質頁岩、65 ～ 68 が流紋岩である。

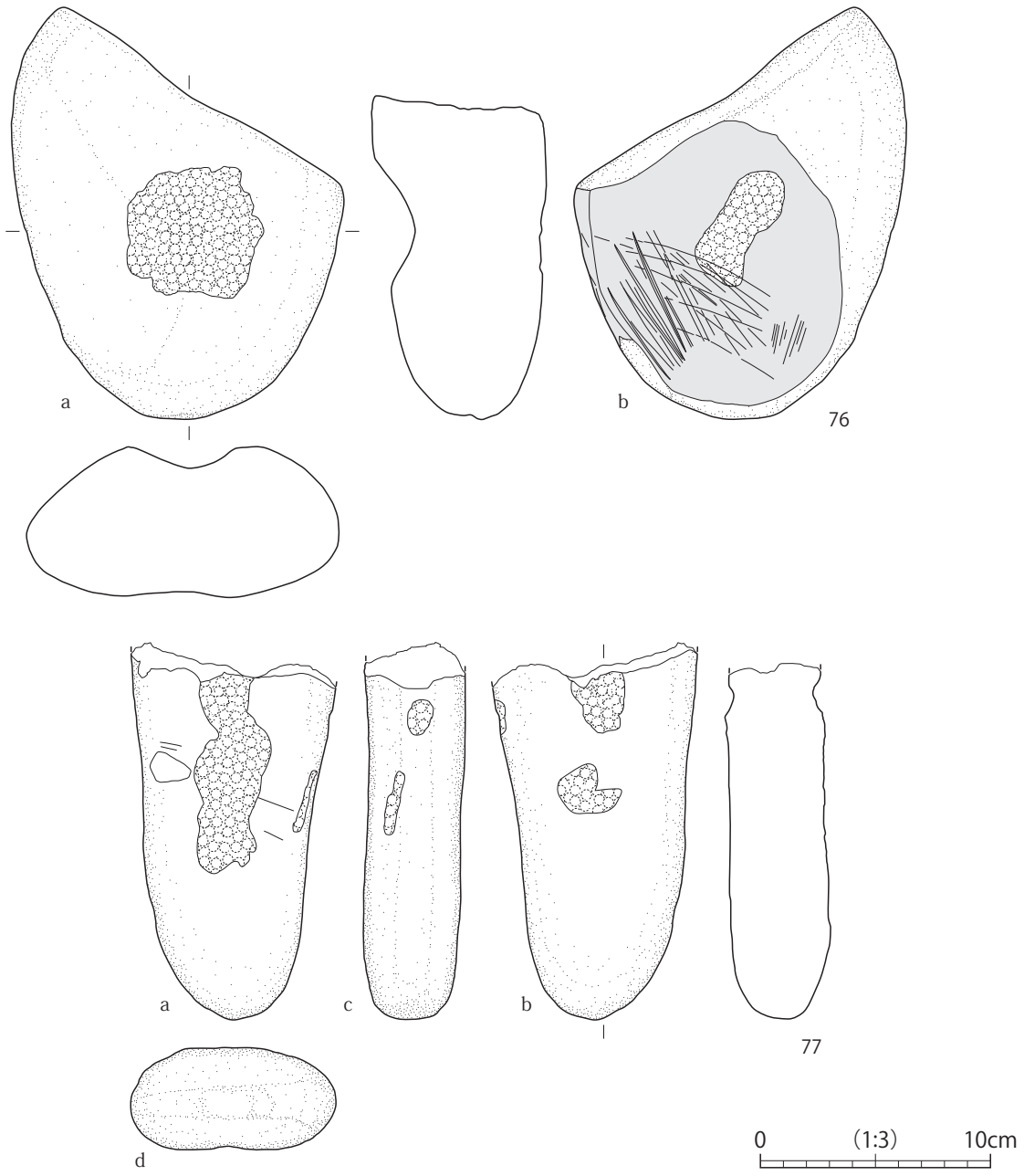
石核（第 174 ～ 176 図）

いずれも自然面が残っており、74 には節理面がある。石材はすべて流紋岩である。

2）礫石器

礫石器（第 177 図）

76 は表面に深い凹痕、裏面に擦痕と敲打痕がある。石材は流紋岩である。77 は表裏両面に深い凹痕と敲打痕が認められ。上部は欠損している。石材は凝灰岩である。



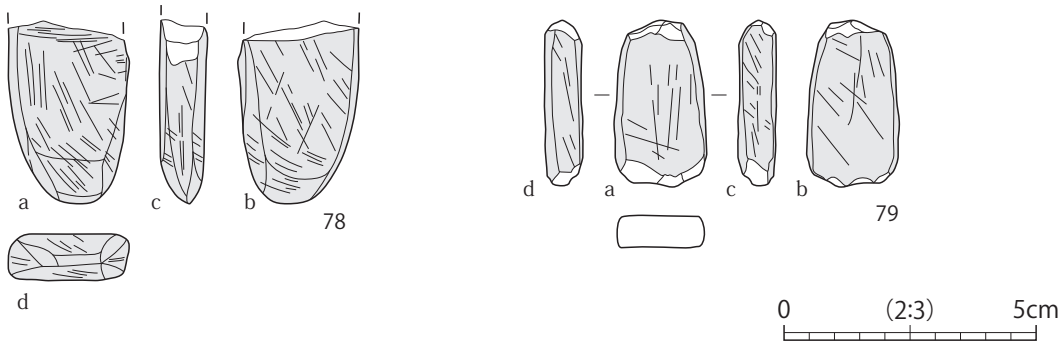
図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真図版
						全長	幅	厚さ				
76	Kc-018	SD66	堆積土中層	礫石器	磨＋凹＋敲石	17.9	14.5	7.6	1,240.0	流紋岩	完形品、亜角礫、磨一面(凸)、凹一面(深)、敲(平坦面1箇所)	65
77	Kc-019	SD66	堆積土中層	礫石器	凹＋敲石	(16.4)	9.0	4.3	502.8	凝灰岩	欠損品、棒状礫、凹二面(深)、敲(平坦・側面4箇所)	65

第 177 図　その他の出土遺物（11）

c．石製品

石製品（第 178 図）

78 は上部を欠損している。研磨により表裏面と側面を平坦に仕上げられているが、比較的明瞭な擦痕がある。平面形状は下端部がやや直線的な楕円形で、断面形状は長方形を呈し、下端が刃先状に薄くなる。石材は細粒凝灰岩である。79 は研磨により表裏面と側面を平坦に仕上げられているが、比較的明瞭な擦痕がある。平面形状は台形状で、断面形状は長方形を呈する。石材は細粒凝灰岩である。



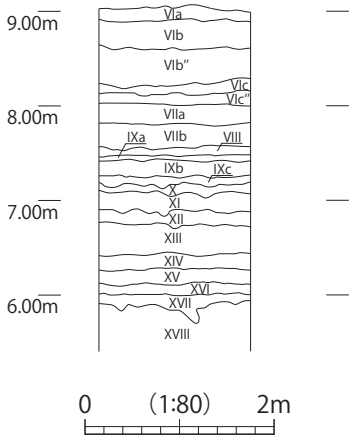
図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
78	Kd-008	20ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Ⅳ層	石製品	不明	(3.6)	2.4	1.8	6.3	細粒凝灰岩	欠損品、全面研磨	65
79	Kd-003	12ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Ⅳ層	石製品	不明	3.3	1.7	0.6	4.1	細粒凝灰岩	完形品、全面研磨	65

第 178 図　その他の出土遺物（12）

第 5 節　下層調査（第 179・180 図）

本調査区に隣接する第 3 次調査区で、縄文時代後期後半～後葉の縄文土器や礫石器が出土しており、本調査区においても遺物包含層の存在が想定された。このため、弥生時代の遺構検出面（基本層Ⅵ層上面）の調査終了後に、縄文時代の遺物包含層（基本層Ⅸ層）を対象とし調査を実施した。南北 27m ×東西 13m の調査区を設定し、上層から層位毎に掘り込みを行った。その結果、標高 7.35 ～ 7.06m の基本層Ⅸ層から遺物が出土した。その後、標高 5.75m 前後のⅩⅧ層まで掘り込みを行ったが、遺物は出土しなかった。

なお、基本層Ⅸ層は第 3 次調査区の基本層Ⅸ層に対応するものと考えられ、第 3 次調査では大洞 A' 式に比定される土器が出土している。

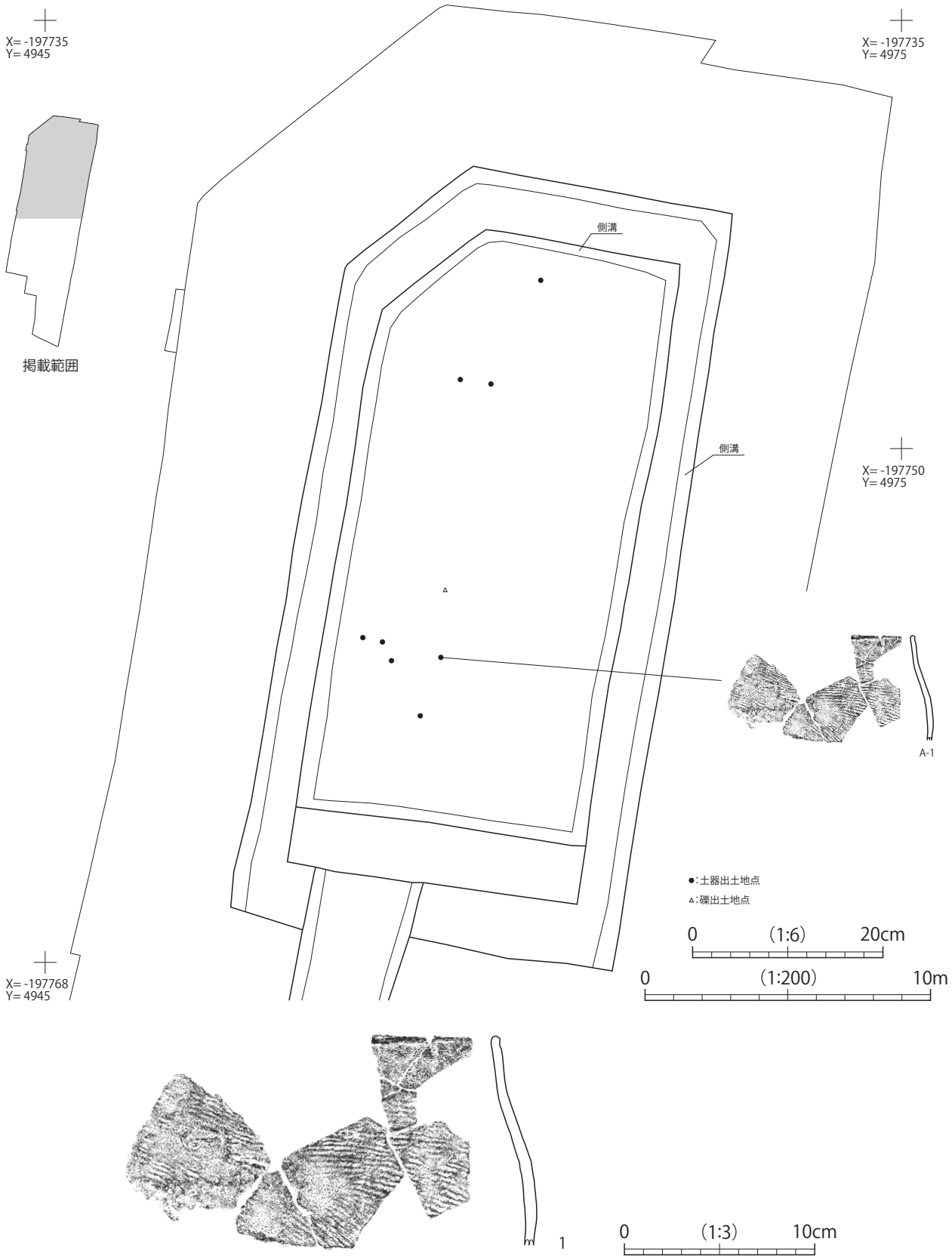


第 179 図　下層調査基本層序

(1) Ⅸ層出土遺物（第 180 図）

基本層Ⅸ層から縄文土器 8 点と礫 1 点が出土した。出土した縄文土器は、いずれも破片資料で全体に摩滅が認められた。このうち、図化可能な縄文土器 1 点を掲載した。

1 は体部が緩やかに内湾し、口縁部が内傾気味に直立する器形を呈する。口縁部は無文で、体部には無節 L 縄文が斜位回転施文されている。内面はナデ調整後、粗雑なミガキ調整が施されている。このような特徴は、西台畑遺跡第 3 次調査のⅡ区拡張区Ⅹ層から出土した A-006（仙台市文化財調査報告書第 388 集）に類似しており、縄文時代晩期後半に帰属するものと考えられる。



図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面調整（文様）	内面調整（文様）	備考	写真図版
1	A-001	19ｸﾞﾘｯﾄﾞ	Ⅸ層	縄文土器	深鉢	口縁～体上半	口縁：ミガキ？ 体上半：L縄文（無節）斜位回転	ナデ→ミガキ（粗）		65

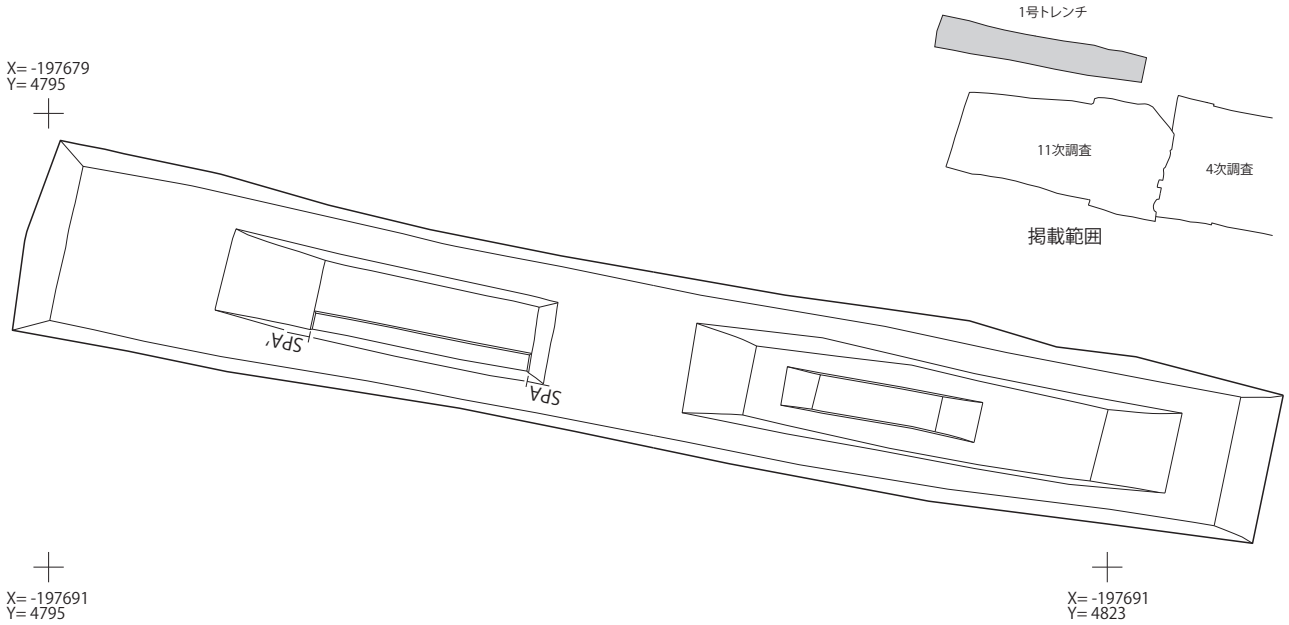
第 180 図　下層調査区・Ⅸ層出土遺物

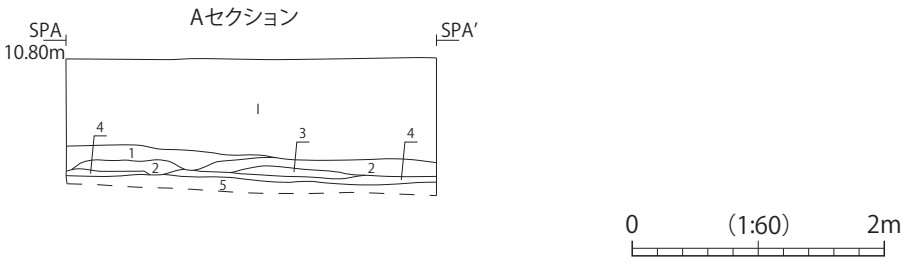
第 5 章　第 11 次調査

第 1 節　トレンチ調査（第 181 図）

第 11 次調査は、環状線道路を調査対象としており、調査に先立ち迂回道路が建設されることになった。このことから、迂回道路部分の遺構・遺物の有無を確認するため、30m × 5m の 1 号トレンチを設定し調査を行った。

調査の結果、遺物はわずかに出土したものの、現地表面から約 160cm の深さまで削平を受けており、遺構は確認することができなかった。また、Ⅱ層以下は全体的にグライ化し、小礫や帯状に緑灰色シルトないし灰色粘土を含むことから、河川跡の堆積土と考えられる。このことから、1 号トレンチ付近では長町駅東遺跡の古代遺構検出面である黄褐色シルト層は残存していないものと判断された。





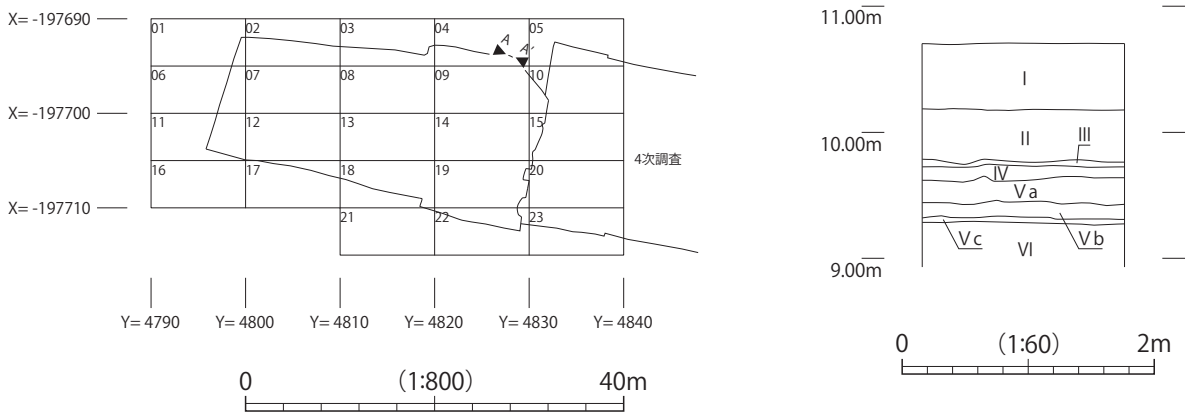
層位	土色	土質	備考	
I	2.5Y6/8 明黄褐色		旧国鉄の貨物ヤードに関する近・現代の盛土。	
1	5GY5/1 オリーブ灰色	細砂	黒褐色粘土ブロック（10～20㎜程度）少量、炭化物微量含む。全体的にグライ化している。	河川跡堆積土
2	5GY6/1 オリーブ灰色	細砂	小礫微量含む。全体的にグライ化している。	河川跡堆積土
3	5Y4/1 灰色	粘土質シルト	緑灰色シルトを帯状に含む。小礫微量含む。全体的にグライ化している。	河川跡堆積土
4	5GY6/1 オリーブ灰色	砂質シルト	黒褐色粘土ブロック（10～20㎜程度）微量含む。全体的にグライ化している。	河川跡堆積土
5	7.5GY6/1 緑灰色	シルト	灰色粘土を帯状に含む。全体的にグライ化している。	河川跡堆積土

第 181 図　1 号トレンチ平・断面図

第 2 節　基本層序（第 182 図）

長町駅東遺跡は旧国鉄貨物ヤード跡地内に所在し、旧国鉄による大規模な削平及び盛土・整地が行われていたことが確認されている。本調査区においても全域で盛土・整地層が認められ、調査区の中央から西側にかけては、現地表面から約 140cm の深さまで削平を受けている。このため調査区東端部を除き、古代の遺構検出面は残存していない。基本層序の観察は、古代の遺構面が残存していた調査区東端の北壁で行った。

Ⅰ層：近・現代の堆積層で、層厚は 50 ～ 140cm である。国鉄時代の整地・盛土層である。
Ⅱ層：灰黄褐色シルト層で、層厚は 39 ～ 43cm である。古代末～中･近世と考えられ、全体的にグライ化している。
Ⅲ層：黒褐色シルト層で、層厚は 3 ～ 6cm である。
Ⅳ層：にぶい黄褐色砂質シルト層で、灰白色シルトブロックを含む。層厚は 8 ～ 13cm である。長町駅東遺跡における古代の遺構検出面である。
Ⅴ層：にぶい黄褐色シルト層で、色調及び混入物の状況により、3 層に細分される。層厚は 30cm 前後である。
Ⅵ層：灰黄褐色細砂で、灰白色粘土ブロックを含む。



層位	土色	土質	備考	
Ⅰ	2.5Y6/8 明黄褐色		旧国鉄の貨物ヤードに関する近･現代の盛土。	
Ⅱ	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	黒褐色土ブロック･マンガン粒含む。全体的にグライ化している。	
Ⅲ	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色(10YR5/6)砂質シルトブロック(5～10㎜程度)多量含む。	
Ⅳ	10YR5/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	浅黄褐色(2.5Y7/3)シルトブロック(10㎜程度)微量含む。	古代遺構検出面
Va	10YR6/3 にぶい黄橙色	シルト	浅黄褐色(2.5Y7/3)シルトを帯状に含む。	
Vb	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	浅黄褐色(2.5Y7/3)シルトブロック(10㎜程度)少量含む。	
Vc	10YR6/3 にぶい黄橙色	シルト	浅黄褐色(2.5Y7/3)シルトを帯状に含む。	
Ⅵ	10YR4/2 灰黄褐色	細砂	浅黄褐色(2.5Y7/3)シルトブロック(20㎜程度)多量含む。	

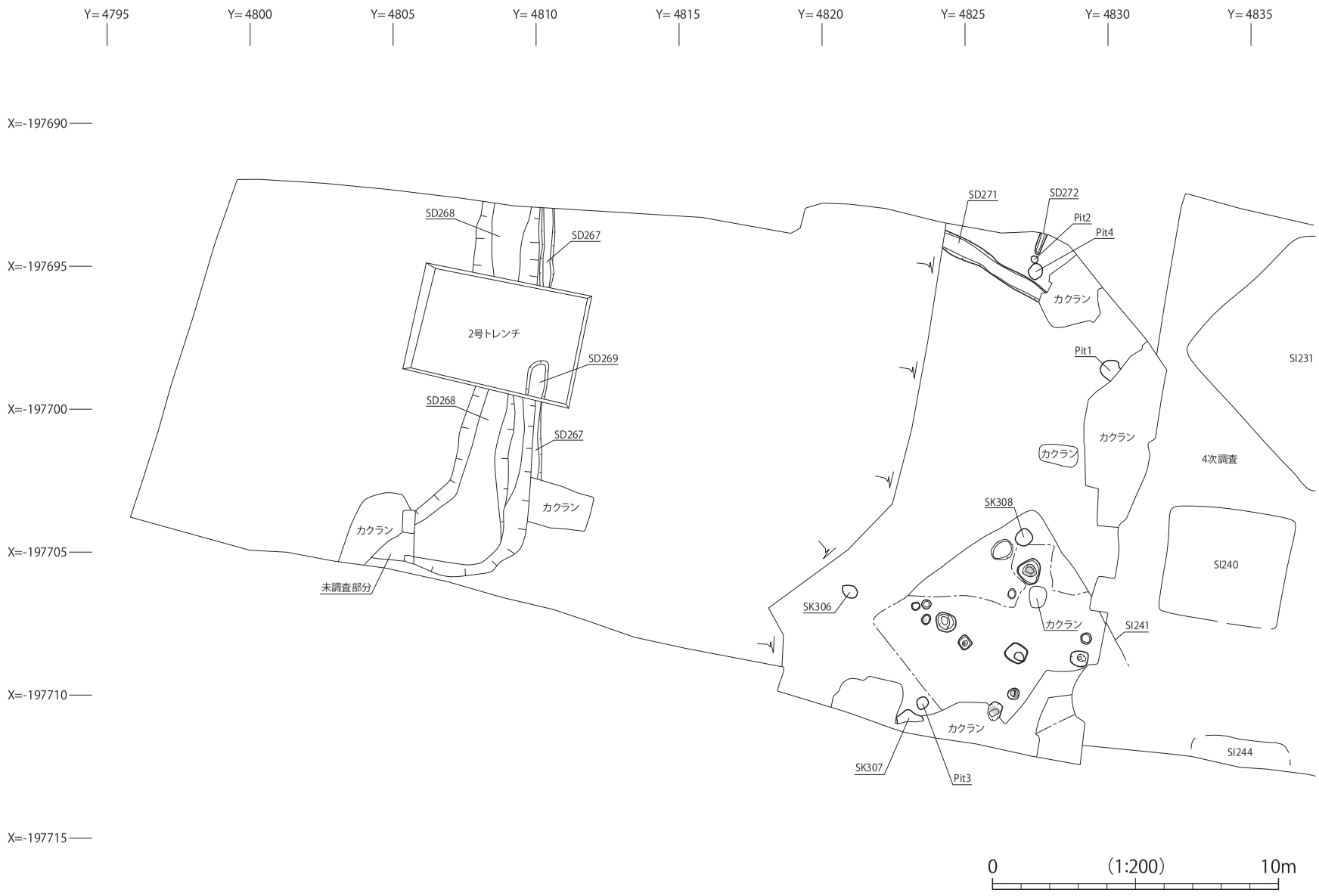
第 182 図　グリッド配置図・基本層序

第 3 節　検出された遺構と遺物（第 183 ～ 191 図）

遺構検出面である基本層Ⅳ層は、削平や撹乱の影響を受けており、調査区東端部のみで確認された。検出された遺構は削平により残存状況が悪く、出土遺物も少ないため、帰属時期を明確にすることができなかった。また、撹乱を受けている調査区中央から西側にかけての状況を確認するために、2 号トレンチを設定し調査を行った。調査の結果、河川跡の堆積土が確認され、堆積土上面と堆積土中から溝跡が検出した。

検出された遺構は、竪穴住居跡 1 軒、土坑 3 基、溝跡 3 条、ピット 4 基である。出土遺物は、土師器・須恵器を主体にコンテナで 4 箱程度が出土している。

以下、竪穴住居跡、土坑、溝跡、ピットの順で記載する。


Y=4795
Y=4800
Y=4805
Y=4810
Y=4815
Y=4820
Y=4825
Y=4830
Y=4835
X=-197690
X=-197695
X=-197700
X=-197705
X=-197710
X=-197715
SD268
SD267
2号トレンチ
SD269
SD268
SD267
カクラン
カクラン
未調査部分
SD271
SD272
Pit2
Pit4
カクラン
Pit1
SI231
カクラン
カクラン
4次調査
SK308
SI240
SK306
カクラン
SI241
カクラン
SI244
SK307
Pit3
0
(1:200)
10m

第183図 遺構配置図

（1）竪穴住居跡（第 184 ～ 186 図）

SI309 竪穴住居跡（第 184 ～ 186 図）

【位置・確認】 調査区東端の 14・19・22 グリッドに位置する。削平を受けているため残存状況が悪く、床面の一部と掘り方を検出した。第 4 次調査区で検出した SI241 と同一の竪穴住居跡と考えられる。

【重複】 SK308 と重複し、これより古い。

【規模・形態】 検出した規模は、長軸 684cm、短軸 668cm を測る。平面形状は方形を呈する。

【方向】 南東壁を基準として N － 38° － W である。

【堆積土】 11 層に分層した。1 ～ 7 層は灰黄褐色ないしにぶい黄褐色シルトを主体とする住居堆積土で、8 ～ 11 層は掘り方埋土である。

【壁面】 残存していない。

【床面】 残存部分では、概ね平坦である。

【柱穴】 床面及び掘り方埋土中から 12 基(P1 ～ 12)検出した。P1 ～ 4 は規模や位置関係から主柱穴と考えられる。規模は長軸 61 ～ 82cm、深さ 69 ～ 77cm を測る。P1 で径 45cm の柱痕跡、P4 で径 17cm の底面変色範囲を確認した。このほか、P10・11 で径 13 ～ 20cm の柱痕跡を確認した。

【周溝】 同一の竪穴住居跡と考えられる SI241（第 4 次調査）では壁面直下で、幅 25cm、深さ 10cm 前後の周溝が検出されている。

【カマド】 検出されなかった。

【掘り方】 底面には起伏がみられ、竪穴中央付近には土坑状の落ち込みが認められる。

【その他の施設】 掘り方埋土中から土坑（P13）を検出した。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸 80cm、短軸 68cm、深さ 26cm を測る。堆積土は 3 層に分層した。削平を受けているため掘り方埋土中で確認を行ったが、本来は床面施設と考えられる。規模や位置関係から貯蔵穴の可能性がある。

【出土遺物】 床面施設及び堆積土、掘り方から土師器・須恵器・鉄製品・石製品が出土している。土師器坏 2 点、鉢 1 点、甕 2 点、ミニチュア土器 1 点、鉄鏃 1 点、砥石 1 点、石製模造品 1 点をを掲載した（第 186 図）。

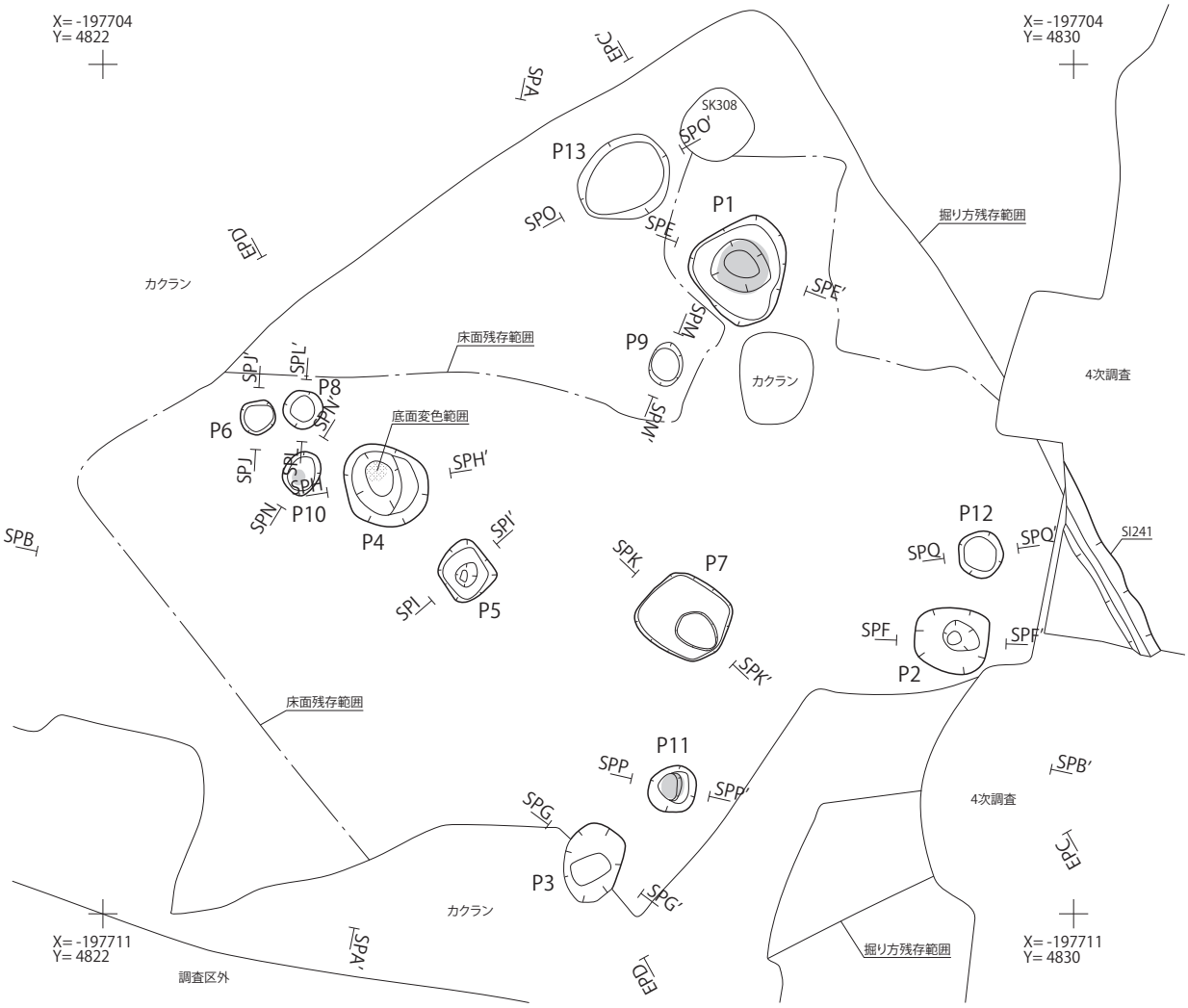
1 ～ 3・5・6 は住居堆積土、4・8 は掘り方、7・9 は P1 堆積土からの出土である。

1 はロクロ使用の土師器坏である。内湾気味に外傾する器形を呈し、体部下半の器厚がやや薄い。調整は、外面がロクロナデ、内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。2 は土師器坏で、口縁部と体部の境に稜線を持ち、口縁部が短く直立する。全体的に摩滅しており、調整は不明である。3 は土師器鉢である。口縁部と体部の境に稜線を持ち、口縁部が短く直立する。調整は、外面が口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ、内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。4･5 は土師器甕である。4 は口縁部と胴部の境に明瞭な段を持ち、口縁部は直線的に外傾する。調整は、外面が口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ・ヘラケズリ、内面は、口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデである。5 は胴部に最大径を持つと考えられ、粘土紐接合面には刻目が施されている。調整は、外面が胴部ハケメ後ナデ、胴部下端ヘラケズリ、内面はヘラナデである。底面には木葉痕がみられる。6 は鉢形のミニチュア土器で、体部下端に粘土塊が付着している。調整は、内外面ともにナデが施されている。

7 は無頸の長三角形鏃で、径約 3mm の貫通穴を持つ。

8 は砥石で、上端の欠損部以外には擦痕が認められる。正面と底面には刃縁の研磨によるものと考えられる断面「V」字状の溝状痕が数条認められる。石材は凝灰岩である。9 は鏡形の石製模造品で、円孔が 2 個認められる。両面とも研磨されているが、研磨以前の剥離面が残る。石材は緑色片岩である。

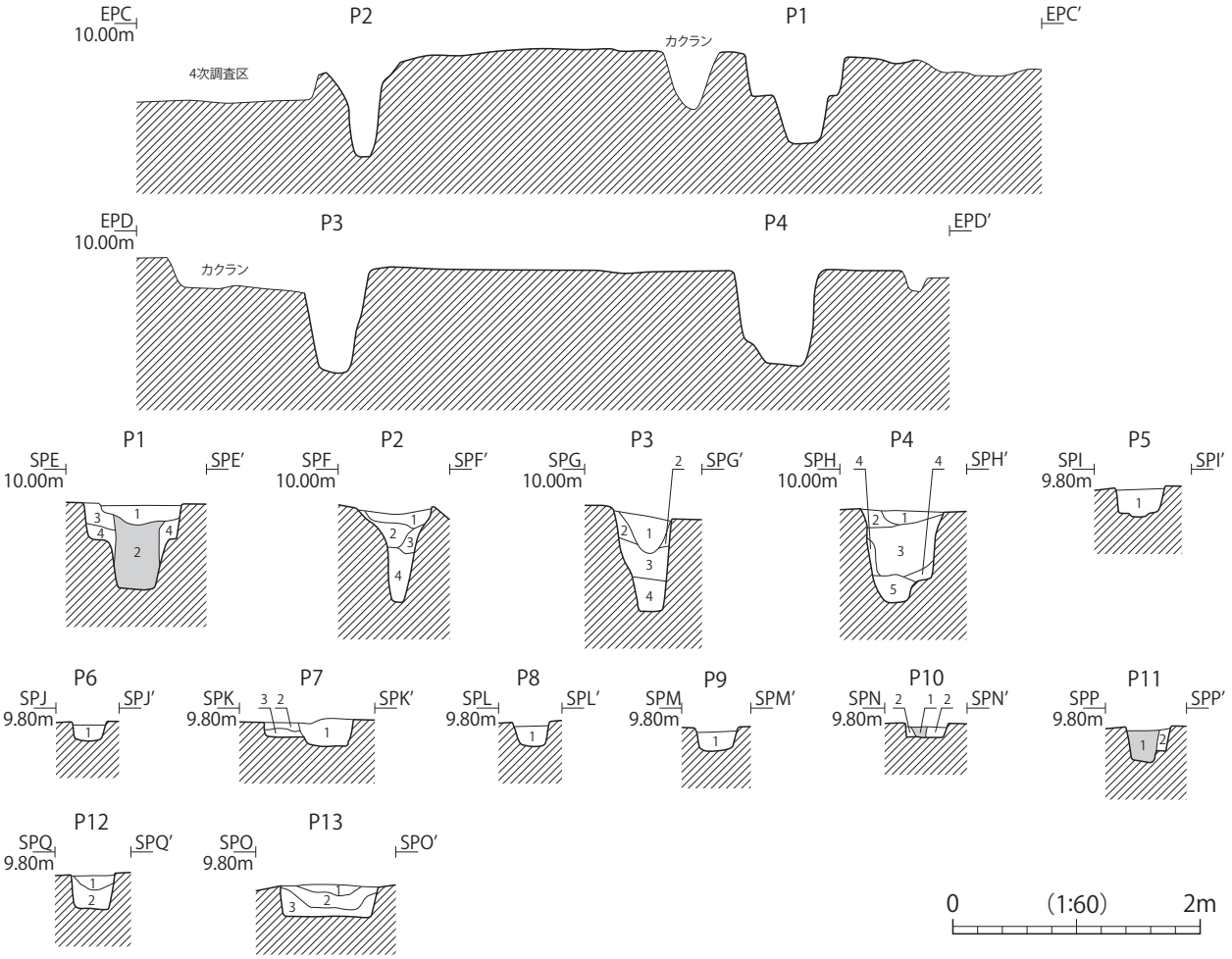
【時期】 時期を決定できる遺物や遺構との重複関係がなく、時期は不明である。



SI309 堆積土註記表

部位	層位	土色	土性	備考
住居堆積土	1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	Ⅳ層土ブロック(10～20㎜程度)多量、焼土粒微量含む。
	2	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	Ⅳ層土ブロック(10～20㎜程度)少量、炭化物微量含む。
	3	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	Ⅳ層土ブロック(10㎜程度)多量、灰白色粘土粒少量含む。
	4	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	灰白色粘土粒多量、炭化物・焼土粒微量含む。
	5	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	Ⅳ層土ブロック(5～20㎜程度)多量、炭化物・焼土粒微量含む。
	6	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	炭化物・焼土粒少量、灰白色粘土粒微量含む。
	7	10YR6/3 にぶい黄橙色	粘土質シルト	浅黄橙色粘土ブロック(5～10㎜程度)多量、炭化物少量含む。
掘り方	8	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	黒褐色粘土ブロック(5～10㎜程度)微量含む。
	9	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	Ⅳ層土ブロック(10～20㎜程度)多量、灰白色粘土ブロック(5～10㎜程度)少量含む。
	10	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	Ⅳ層土ブロック(10～20㎜程度)多量、灰白色粘土ブロック(5～10㎜程度)少量、炭化物微量含む。
	11	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	灰白色粘土ブロック(20㎜程度)少量含む。

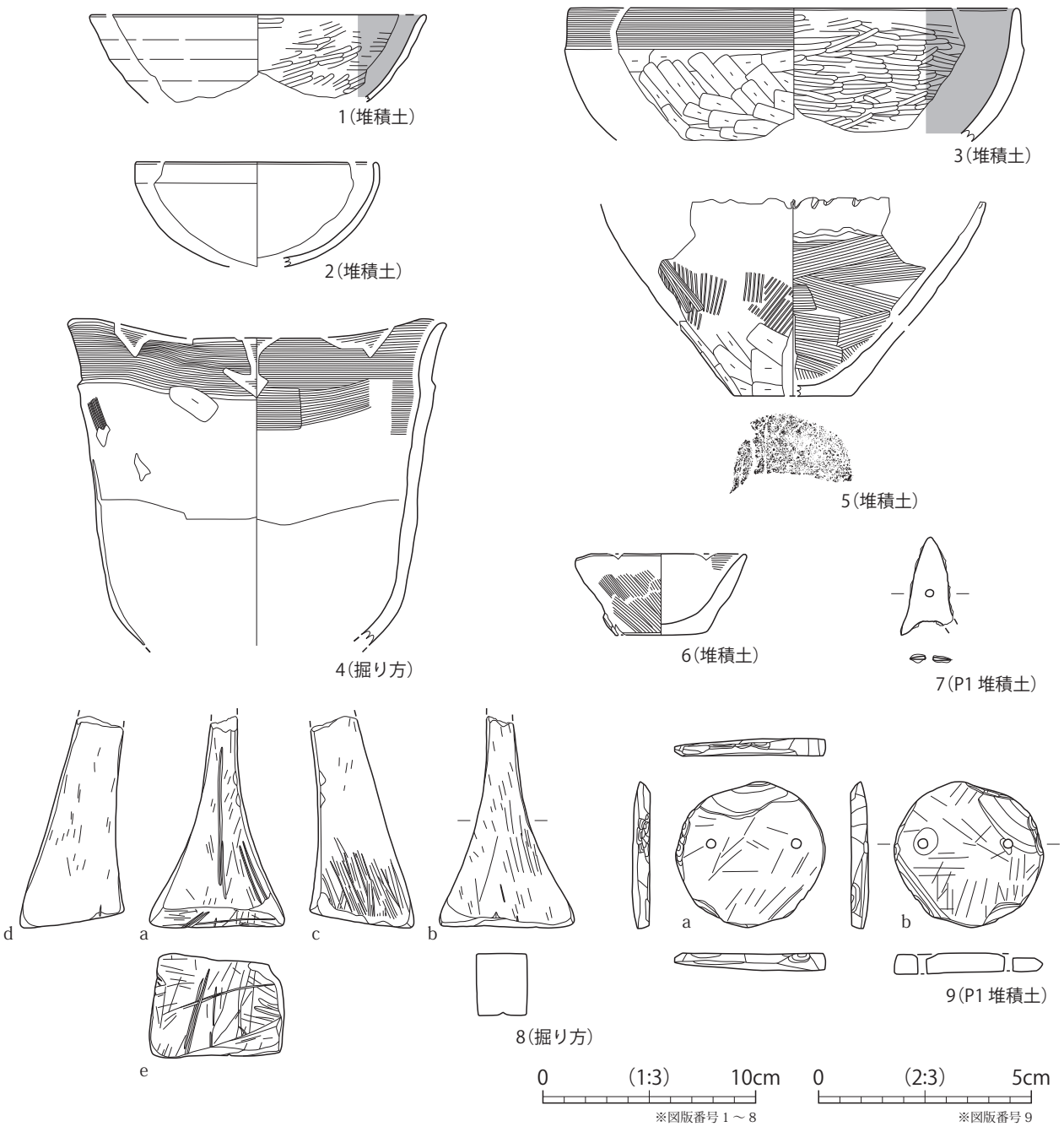
第 184 図　SI309 竪穴住居跡（1）



SI309 施設観察表

遺構名	平面形	規模(cm) 長軸×短軸	規模(cm) 深さ	層位	土色	土性	備考
P1	楕円形	82×81	69	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	Ⅳ層土ブロック(10～20㎜程度)多量、炭化物・焼土粒微量含む。
				2	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	灰白色粘土ブロック(5～10㎜程度)多量、炭化物微量含む。※柱痕跡
				3	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	Ⅳ層土ブロック(10㎜程度)少量含む。
				4	10YR4/4 褐色	砂質シルト	灰白色粘土ブロック(10～20㎜程度)少量含む。
P2	楕円形	61×54	77	1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	Ⅳ層土ブロック(10～20㎜程度)少量、炭化物を微量含む。
				2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	Ⅳ層土ブロック(10㎜程度)多量、炭化物・焼土粒を微量含む。
				3	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	黒褐色土ブロック(10㎜程度)微量含む。
				4	10YR6/3 にぶい黄橙色	シルト	黒褐色土ブロック(10～20㎜程度)・炭化物を微量含む。
P3	楕円形	67×(54)	77	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	Ⅳ層土ブロック(5～10㎜程度)少量、黒褐色粘土ブロック(5㎜程度)微量含む。
				2	10YR5/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	Ⅳ層土ブロック(10～30㎜程度)多量含む。
				3	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	Ⅳ層土ブロック(10～50㎜程度)多量、黒褐色粘土ブロック(10㎜程度)少量含む。
				4	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	Ⅳ層土ブロック(10㎜程度)を少量含む。
P4	楕円形	76×68	75	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	炭化物を少量、Ⅳ層土ブロック(10～20㎜程度)微量含む。
				2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	Ⅳ層土ブロック(10～20㎜程度)多量、炭化物微量含む。
				3	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	黒褐色シルトブロック(5～10㎜程度)少量、灰白色粘土ブロック(10㎜程度)微量含む。
				4	10YR6/3 にぶい黄橙色	シルト	黒褐色シルトブロック(5～10㎜程度)微量含む。
				5	10YR5/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	黒褐色シルトブロック・灰白色粘土ブロック(5～10㎜程度)少量含む。
P5	方形	45×42	25	1	10YR4/4 褐色	シルト	Ⅳ層土ブロック(5㎜程度)中量、炭化物を微量含む。
P6	円形	31×29	15	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	Ⅳ層土ブロック(5～10㎜程度)多量含む。
P7	隅丸長方形	73×65	23	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	Ⅳ層土ブロック(10～20㎜程度)多量、炭化物少量含む。
				2	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	Ⅳ層土ブロック(5～10㎜程度)少量、炭化物・灰白色粘土ブロック(5㎜程度)微量含む。
				3	10YR6/4 にぶい黄橙色	シルト	Ⅳ層土ブロック(5～10㎜程度)・黒褐色粘土ブロック(10～20㎜程度)少量含む。
P8	円形	33×32	20	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	Ⅳ層土ブロック(5～10㎜程度)中量、焼土粒微量含む。
P9	楕円形	(37)×(28)	(19)	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	Ⅳ層土粒中量含む。
P10	楕円形	36×29	11	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	Ⅳ層土ブロック(10㎜程度)・灰白色粘土ブロック(5～10㎜程度)少量含む。※柱痕跡
				2	10YR6/4 にぶい黄橙色	シルト	Ⅳ層土ブロック(10～30㎜程度)多量含む。
P11	円形	42×39	28	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	Ⅳ層土ブロック(20㎜程度)多量、黒褐色粘土ブロック(10㎜程度)少量含む。※柱痕跡
				2	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	Ⅳ層土ブロック(5～10㎜程度)少量、灰白色粘土ブロック(10㎜程度)・焼土粒微量含む。
P12	円形	39×39	28	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	Ⅳ層土ブロック(5～10㎜程度)多量、炭化物・焼土粒微量含む。
				2	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	Ⅳ層土ブロック(5～10㎜程度)・炭化物・焼土粒少量含む。
P13	楕円形	80×68	26	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	Ⅳ層土ブロック(5～20㎜程度)少量、炭化物微量含む。
				2	2.5Y5/1 黄灰色	粘土質シルト	浅黄橙色粘土ブロック(10～30㎜程度)多量、炭化物・焼土粒微量含む。
				3	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	Ⅳ層土ブロック(10～20㎜程度)・黒褐色シルトブロック(5～10㎜程度)少量含む。

第 185 図　SI309 竪穴住居跡（2）



図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			外面調整	内面調整	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	D-001	SI309	堆積土	土師器	坏	(15.6)	-	(3.1)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	内面黒色処理	4
2	C-017	SI309	堆積土	土師器	坏	(11.2)	-	(4.9)	摩滅	摩滅		4
3	C-008	SI309	堆積土	土師器	鉢	(20.8)	-	(6.2)	口縁:ﾖｺﾅﾃﾞ 体部:ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	内面黒色処理	4
4	C-002	SI309	掘り方	土師器	甕	(17.8)	-	(15.3)	口縁:ﾖｺﾅﾃﾞ 胴部:ﾊｹﾒ･ﾍﾗｹｽﾞﾘ	口縁:ﾖｺﾅﾃﾞ 胴部:ﾍﾗﾅﾃﾞ		4
5	C-003	SI309	堆積土	土師器	甕	(18.0)	(5.4)	(9.2)	胴部:ﾊｹﾒ→ﾅﾃﾞ 胴下端:ﾍﾗｹｽﾞﾘ	胴部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	接合面刻目 底面木葉痕	4
6	C-012	SI309	堆積土	土師器	ﾐﾆﾁｭｱ	7.8	4.3	3.8	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	粘土塊付着	4

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	備考	写真図版
						全長	幅	厚さ			
7	N-001	SI309-P1	堆積土	金属製品	鉄鏃	4.6	(2.4)	1.4	4.3	無頸、円孔	4

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真図版
						全長	幅	厚さ				
8	Kd-002	SI309	掘り方	石製品	砥石	10.0	6.3	4.9	237.3	凝灰岩	欠損品、面取り、柱状	4
9	Kd-001	SI309-P1	堆積土	石製品	模造品	3.5	3.5	0.4	7.6	緑色片岩	鏡形石製模造品、円孔2個、孔径2㎜	4

第 186 図　SI309 竪穴住居跡出土遺物

（2）土坑（第 187 図）

SK306（第 187 図）

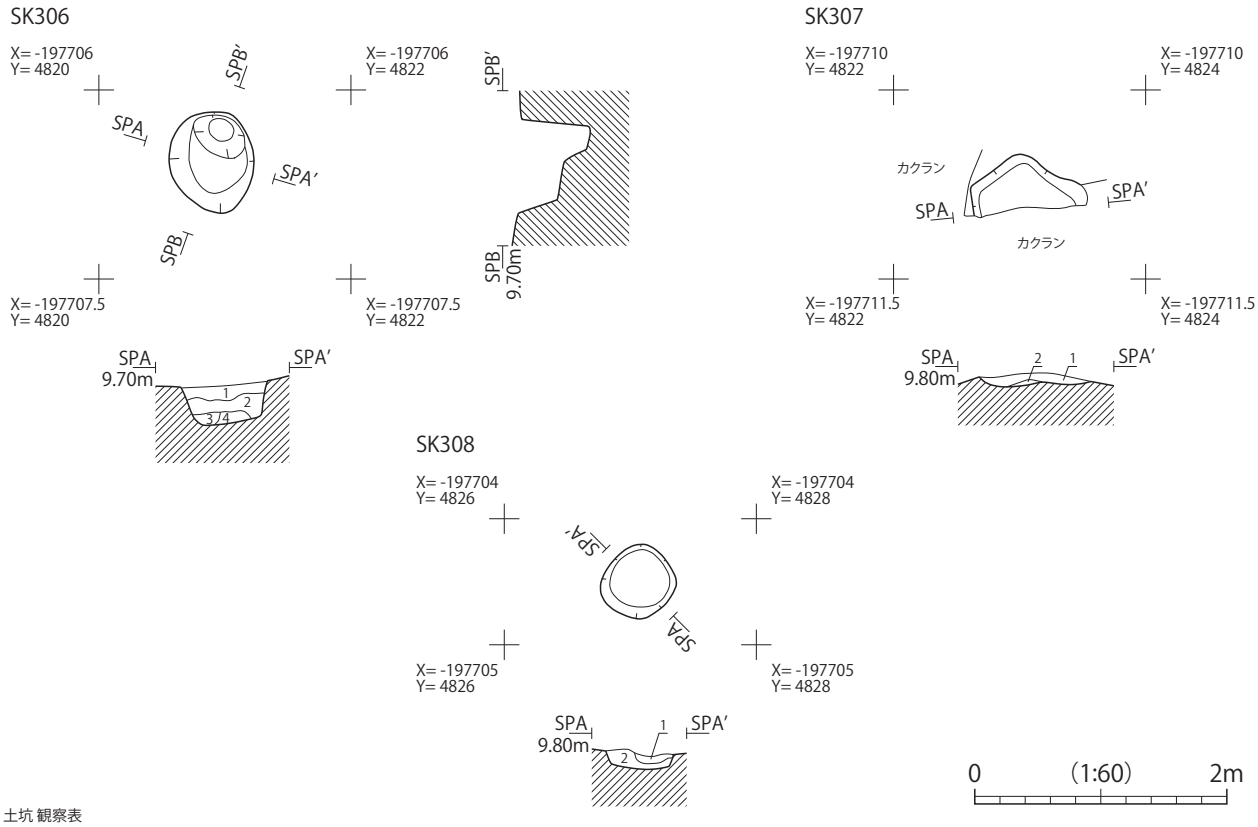
調査区東側の 19 グリッドに位置する。他遺構との重複はない。規模は長軸 82cm、短軸 68cm、深さ 55cm を測る。平面形状は楕円形を呈する。底面北側にはピット状の落ち込みが認められ、柱穴の可能性が考えられる。堆積土は 4 層に分層した。にぶい黄褐色シルトないし灰黄褐色粘土質シルトを主体とする。遺物は出土していない。

SK307（第 187 図）

調査区東側の 22 グリッドに位置する。南側は撹乱により失われている。他遺構との重複はない。規模は長軸 89cm、深さ 10cm を測る。平面形状は不整形を呈すると推察される。堆積土は 2 層に分層した。遺物は出土していない。

SK308（第 187 図）

調査区東側の 14 グリッドに位置する。SI309 より新しい。規模は長軸 59cm、短軸 55cm、深さ 16cm を測る。平面形状は円形を呈する。堆積土は 2 層に分層した。にぶい黄褐色ないし灰黄褐色シルトを主体とする。遺物は出土していない。



土坑 観察表

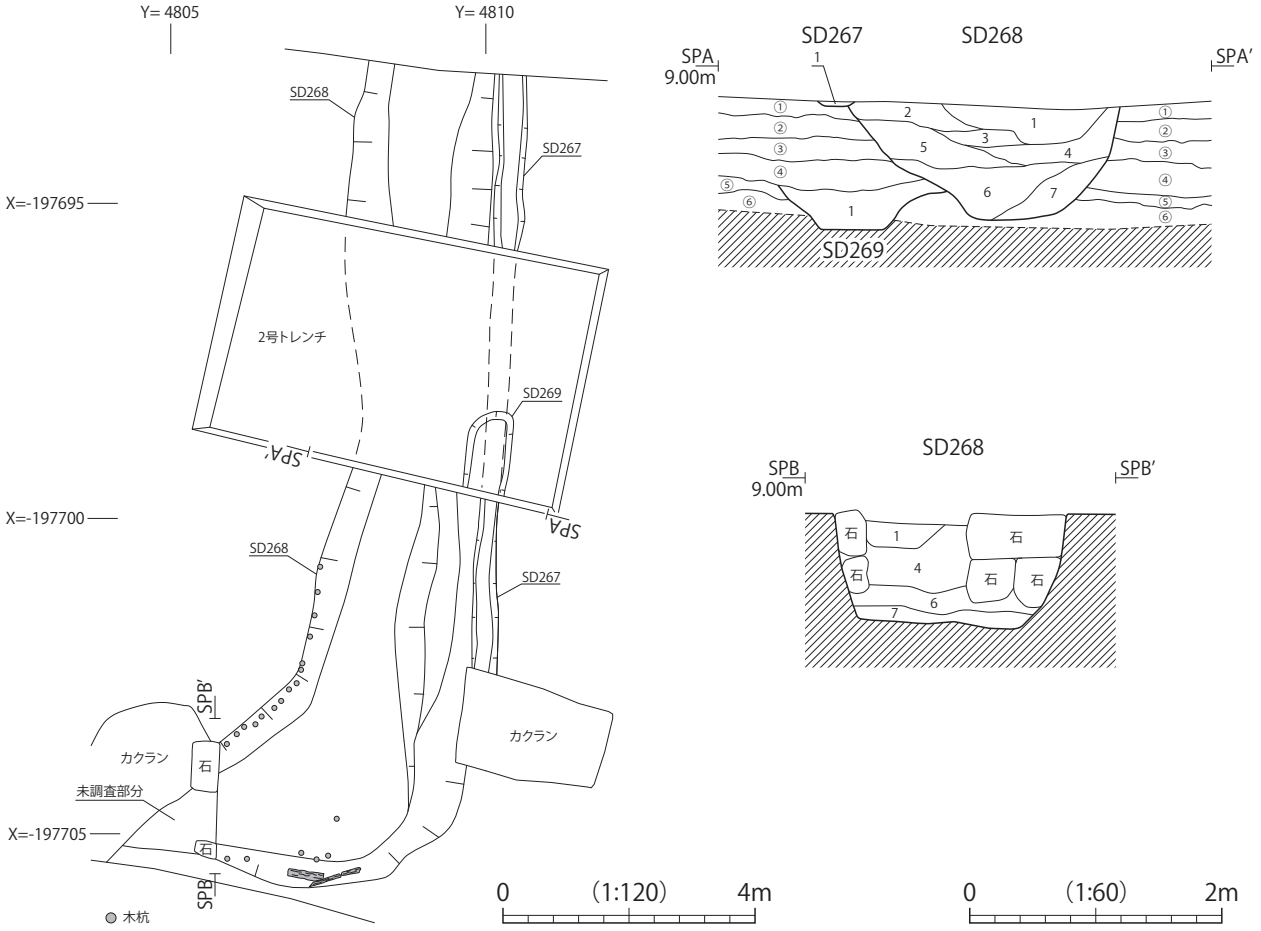
遺構名	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	平面形	規模(cm) 長軸×短軸	規模(cm) 深さ	層位	土色	土性	備考	重複
SK306	19	楕円形	82×68	55	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	Ⅳ層土ブロック(10～20㎜程度)多量含む。	
					2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	Ⅳ層土ブロック(10㎜程度)・灰白色粘土粒含む。	
					3	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	Ⅳ層土ブロック(10～20㎜程度)多量含む。	
					4	10YR6/4 にぶい黄橙色	砂質シルト	黒褐色粘土ブロック(5～10㎜程度)少量含む。	
SK307	22	不整形	89×(45)	10	1	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	Ⅳ層土ブロック(5～10㎜程度)少量含む。	撹乱に切られる。
					2	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	焼土粒・灰白色シルトブロック(10㎜程度)微量含む。	
SK308	14	円形	59×55	16	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	Ⅳ層土ブロック(10㎜程度)多量含む。	SI309より新しい。
					2	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	Ⅳ層土ブロック(10㎜程度)・焼土粒少量含む。	

第 187 図　土坑

(3) 溝跡（第 188 ～ 190 図）

SD267（第 188 図）

調査区西側の 3・8・12・13 グリッドに位置する。河川跡上面で検出した。SD268 より新しい。規模は、検出長 9.46m、幅 46cm、深さ 7cm を測る。方向は N － 3° － E で、SD268 と並走して南北方向に延びる。堆積土はオリーブ灰色粘土質シルトの単層で、木片を含む。断面形状は皿状を呈する。出土遺物がないため明確な時期は不明だが、SD268 より新しいことから 19 世紀後葉以降と考えられる。



溝跡 観察表（1）

遺構名	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	方向	規模(cm) 長さ×幅	規模(cm) 深さ	層位	土色	土性	備考	重複
SD267	3･8･12･13	N-3°-E	946×46	7	1	5GY5/1 オリーブ灰色	粘土質シルト	砂粒少量、木片微量含む。	SD268より新しい。
SD268	2･3･7･12	N-6°-E～N-85°-W	1350×346	96	1	10G6/1 緑灰色	細砂	褐灰色シルトブロック（5㎜程度）・木片・炭化物・煉瓦少量含む。	SD267より古く、SD269より新しい。
					2	10Y5/1 灰色	シルト	砂粒多量、拳大の礫・木片・炭化物少量含む。	
					3	7.5GY6/1 緑灰色	砂質シルト	褐灰色シルトブロック（10㎜程度）少量、木片微量含む。	
					4	5GY5/1 緑灰色	粘土質シルト	褐灰色シルトブロック（10㎜程度）・拳大の礫少量、木片微量含む。	
					5	5GY5/1 緑灰色	粘土質シルト	砂粒多量、拳大の礫・木片微量含む。	
					6	5GY5/1 オリーブ灰色	粘土質シルト	砂粒少量、木片微量含む。	
					7	10YR6/1 褐灰色	シルト	褐灰色シルトブロック（10～30㎜程度）多量、木片微量含む。	
SD269	7･8	N-9°-E	130×72	28	1	5G6/1 緑灰色	粘土質シルト	砂粒・木片・酸化鉄微量含む。	SD268より古い。

第 188 図　SD267 ～ 269 溝跡

SD268（第 188・189 図）

調査区西側の 2・3・7・12 グリッドに位置する。河川跡上面で検出した。SD267 より古い。第 12 次調査では本溝跡の北側延長部が検出され、4 時期の変遷が確認されている。本溝跡は第 12 次調査の SD268A に対応するものと考えられ、19 世紀後葉から 20 世紀前葉にかけての溝跡と考えられる。規模は、検出長 13.5m、幅 346cm、深さ 96cm を測る。方向は N － 6°－ E ～ N － 85°－ W で、SD267 と並走して南北方向に延び、調査区南端で西側に屈曲する。南半部では木杭が並んで検出され、西端部では大型の礫が組まれた状態で出土している。これらは壁面を補強するために設置したものと考えられる。堆積土は 7 層に分層した。緑灰色ないしオリーブ灰色粘土質シルトを主体とし、礫や木片を含む。断面形状は箱状ないし逆台形状を呈する。堆積土中から軟質陶器・金属製品・古銭などが出土している（第 189 図）。

SD269（第 188 図）

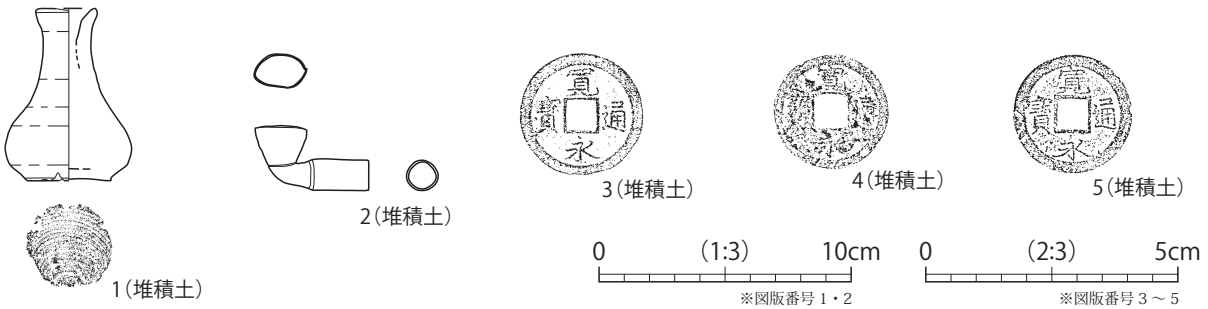
調査区西側の 7・8 グリッドに位置する。河川跡の堆積土中で検出した。SD268 より古い。規模は、検出長 1.3m、幅 72cm、深さ 28cm を測る。方向は N － 9°－ E である。堆積土は緑灰色粘土質シルトの単層である。断面形状は逆台形を呈する。遺物は出土していない。

SD271（第 190 図）

調査区東側の 4・9 グリッドに位置する。基本層Ⅳ層上面で検出した。東西両端は撹乱により失われている。規模は、検出長 3.9m、幅 71cm、深さ 20cm を測る。方向は N － 59°－ W である。堆積土はにぶい黄褐色粘土質シルトを主体とする。断面形状は箱形を呈する。堆積土中から土師器が出土したが、図化できる遺物はなかった。

SD272（第 190 図）

調査区東側の 4 グリッドに位置する。基本層Ⅳ層上面で検出した。北側は調査区外へ延びる。規模は、検出長 0.75m、幅 26cm、深さ 10cm を測る。方向は N － 20°－ E である。堆積土は灰黄褐色ないしにぶい黄褐色シルトである。断面形状は「V」字状を呈する。遺物は出土していない。

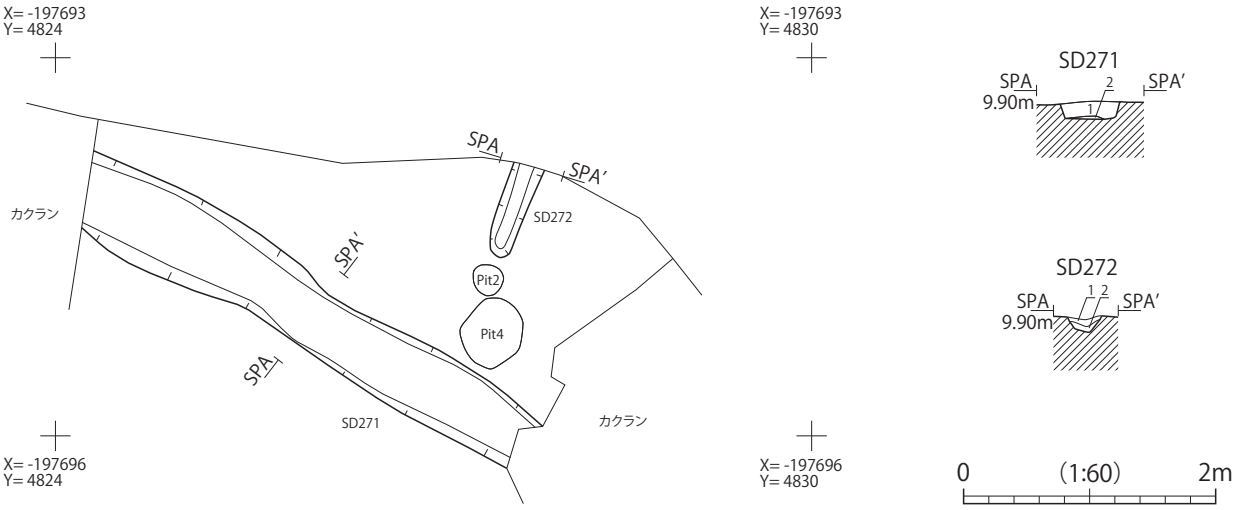


図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	外面調整	内面調整	備考	写真図版
1	I-001	SD268	堆積土	陶器	花瓶	2.4	3.4	6.8	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底部静止糸切り	4

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 口径	長さ	厚さ	重量(g)	備考	写真図版
2	N-002	SD268	堆積土	金属製品	キセル	1.2	4.5	0.8	10.0	雁首	4

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm・g) 外径	厚さ	重さ	銭名	背	備考	写真図版
3	N-003	SD268	堆積土	金属製品	銭貨	2.4	0.15	3.0	寛永通宝	－		4
4	N-004	SD268	堆積土	金属製品	銭貨	2.3	0.12	2.0	寛永通宝	－		4
5	N-005	SD268	堆積土	金属製品	銭貨	2.3	0.12	2.8	寛永通宝	－		4

第 189 図　SD268 溝跡出土遺物



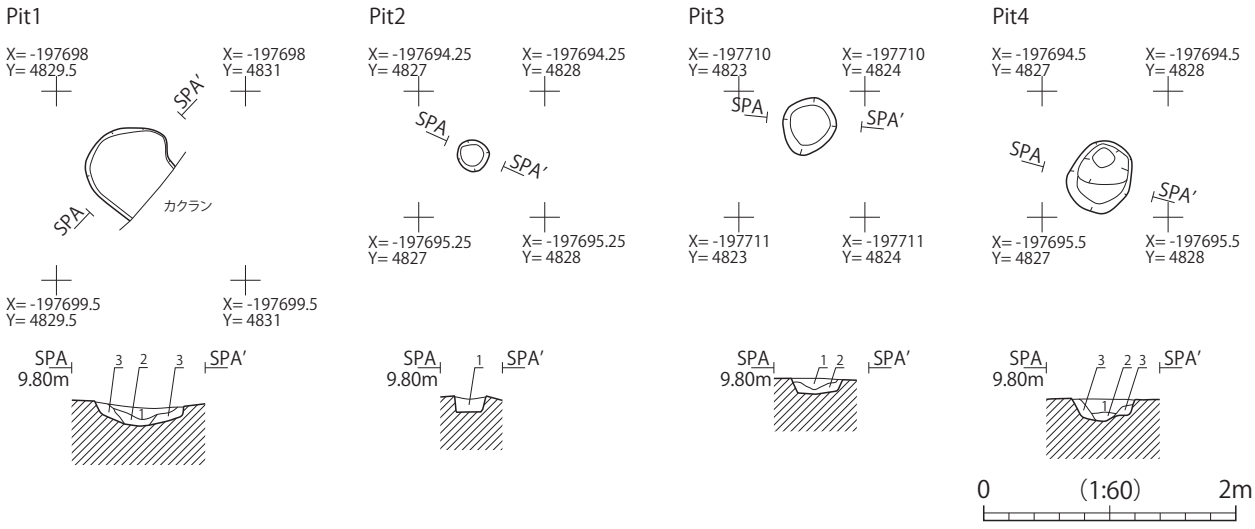
溝跡 観察表（2）

遺構名	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	方向	規模(cm)		層位	土色	土性	備考	重複
			長さ×幅	深さ					
SD271	4・9	N-59°-W	390×71	20	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	Ⅳ層土ブロック（10～20㎜程度）少量含む。	
					2	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	Ⅳ層土ブロック（10～20㎜程度）多量含む。	
SD272	4	N-20°-E	75×26	10	1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	Ⅳ層土ブロック（10～20㎜程度）少量含む。	
					2	10YR6/3 にぶい黄橙色	シルト	Ⅳ層土ブロック（10～30㎜程度）多量含む。	

第 190 図　SD271・272 溝跡

(4) ピット（第 191 図）

調査区東側の基本層Ⅳ層上面で 4 基のピットを検出した。ピットの分布状況には規則性が認められず、柱痕跡などが検出されていないことから、遺構の性格は不明である。詳細は観察表を参照していただきたい。



ピット 観察表

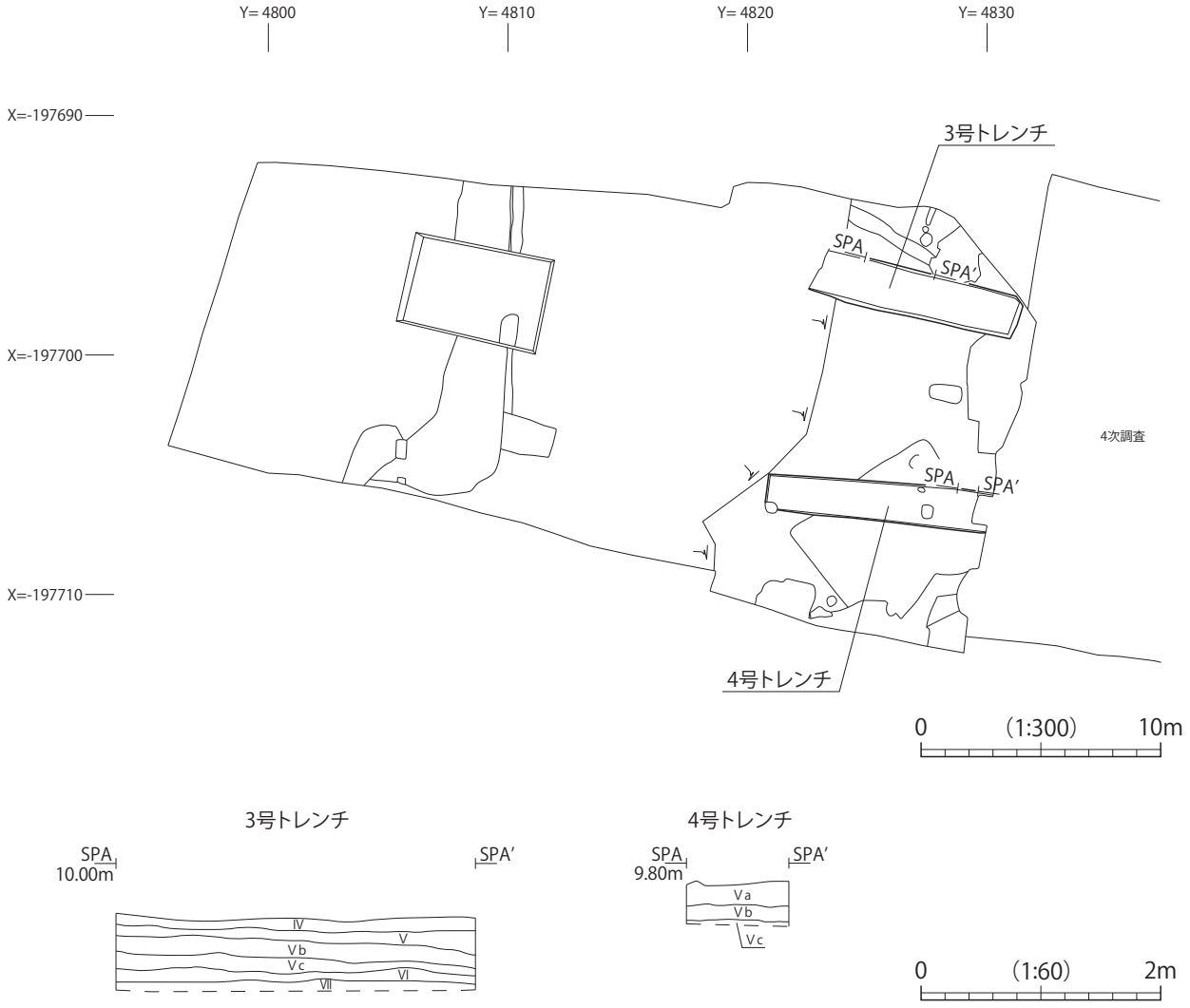
遺構名	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	平面形	規模(cm)		層位	土色	土性	備考	重複
			長軸×短軸	深さ					
Pit1	9・10	楕円形	71×(62)	18	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	Ⅳ層土ブロック（10～20㎜程度）少量含む。	
					2	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	炭化物少量含む。	
					3	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	Ⅳ層土ブロック（5～20㎜程度）多量含む。	
Pit2	4	円形	27×26	13	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	Ⅳ層土ブロック（10～20㎜程度）多量含む。	
Pit3	22	楕円形	48×42	13	1	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	灰色粘土ブロック（5㎜程度）少量、焼土ブロック（10㎜程度）微量含む。	
					2	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	Ⅳ層土ブロック（10～20㎜程度）少量含む。	
Pit4	4・9	楕円形	58×48	18	1	2.5Y5/2 暗灰黄色	粘土質シルト	Ⅳ層土ブロック（5～10㎜程度）・炭化物（10～30㎜程度）少量含む。	
					2	2.5Y5/3 黄褐色	粘土質シルト	Ⅳ層土粒少量、炭化物を微量含む。	
					3	2.5Y6/3 にぶい黄色	シルト	Ⅳ層土粒少量含む。	

第 191 図　ピット

(5) 下層調査（第 192 図）

本調査区の南側に隣接する第 4 次調査区で弥生時代の遺構が検出されていることから、古代遺構検出面（基本層Ⅳ層上面）の調査終了後に、弥生時代の遺物包含層及び遺構の有無を確認するため 8m × 2m のトレンチを 2 ヶ所設定し調査を実施した。

3 号トレンチはⅦ層まで、4 号トレンチはＶｃ層まで掘り込みを行ったが、遺構・遺物は確認できなかった。



層位	土色	土質	備考	
Ⅳ	10YR5/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	浅黄褐色(2.5Y7/3)シルトブロック(10㎜程度)微量含む。	古代遺構検出面
Va	10YR6/3 にぶい黄橙色	シルト	浅黄褐色(2.5Y7/3)シルトを帯状に含む。	
Vb	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	浅黄褐色(2.5Y7/3)シルトブロック(10㎜程度)少量含む。	
Vc	10YR6/3 にぶい黄橙色	シルト	浅黄褐色(2.5Y7/3)シルトを帯状に含む。	
Ⅵ	10YR4/2 灰黄褐色	細砂	浅黄褐色(2.5Y7/3)シルトブロック(20㎜程度)多量含む。	
Ⅶ	10YR6/2 灰黄褐色	砂質シルト	浅黄褐色(2.5Y7/3)シルトブロック(20㎜程度)多量含む。	

第 192 図　3・4 号トレンチ平・断面図

第 6 章　鉄道関連遺物

第 1 節　長町操車場跡地について

長町駅は、明治 29 年（1896）に日本鉄道株式会社の東京～青森間鉄道（現東北本線）の一駅として開業した。開業当時の列車は 1 日に上下各 4 本であったが、同年 12 月の時刻表改正に伴い 1 日に上下各 5 本となった。

大正 3 年（1914）に第一次世界大戦が勃発すると、国内経済は空前の好景気を迎え、鉄道の貨物輸送トン数は、大正 4 年（1915）から大正 6 年（1917）にかけて 50％増加した。仙台駅構内においても、大正 8 年（1919）の時刻表改正後は東北本線及び常磐線の貨車が急増し、その操車能力は限界に達していた。同年 5 月に仙台鉄道管理局が創設されると、長町操車場の建設が具体化することとなった。大正 11 年（1922）に長町駅操車場建設工事が始まり、同時に駅舎も改築された。3 年後の大正 14 年（1925）6 月 11 日に長町操車場は完成し、34 万 6500㎡と東北で最大規模の操車場となった。翌年 3 月には旧仙台機関区から分離独立し、長町機関区が誕生した。

昭和 19 年には構内の大規模な拡張工事が行われ、構内にある沼の埋め立てなどが行われた。遺跡各所で確認された盛土・整地層は、この時の工事によるものと考えられる。

昭和 59 年（1984）に操車場が機能を停止すると、跡地は「あすと長町」の名称で再開発事業地となった。長町駅東遺跡の発掘調査もこの再開発に伴うもので、第 2・3 次調査の際に以下で紹介する汽車土瓶をはじめとした鉄道関連資料が出土した。

長町駅関連年表

明治20	12月	上野－塩竈駅間開通	日本鉄道株式会社、仙台駅開業
明治27	8～11月	長町に臨時停車場（軍用駅）建設・廃止	日清戦争に伴う軍事物資運搬のため（政府要請）
明治29	2月	長町駅開業	明治24～25年頃地元による長町駅設置運動
明治39	11月	日本鉄道株式会社の国有化	
明治42	10月	東北本線の名称が用いられる	
大正8	5月	仙台鉄道管理局創設	長町操車場建設の具体化
大正11	5月	長町操車場工事着工、駅舎改築工事着工	
大正12	12月	駅舎完成	
大正13	10月	下り仕訳線・中継貨物線完成 第一次構内拡張工事着工・上り仕訳線の拡張工事着工	
大正14	6月	上り仕訳線完成	東北最大規模の操車場となる
大正15	3月	長町機関区誕生	旧仙台機関区より分離独立
昭和19	3月	第二次構内拡張工事着工	駅構内の沼埋め立て（岩切－品井沼駅間のトンネル工事で排出された土砂を利用）

第 2 節　汽車土瓶

長町駅東遺跡から出土した汽車土瓶は、泥漿鋳込みで製作された汽車土瓶 26 点、ガラス製汽車土瓶 1 点、湯呑 51 点、ガラス製湯呑 6 点がある。汽車土瓶はいずれも茶瓶型を呈し、横断面形が八角形の角型茶瓶と円形の丸型茶瓶がある。前者は金属製の把手を取り付ける耳と筒状の注ぎ口を持ち、製造窯は愛知県の瀬戸焼と福島県の会津本郷焼がある。後者は粘土紐による把手が付き、片口の注ぎ口を持つもので、製造窯は愛知県の瀬戸焼と考えられる。ここでは、図化した汽車土瓶 12 点、湯呑 10 点を掲載し特徴を記載する。その他については、観察表を参照していただきたい。

(1) 瀬戸焼の汽車土瓶（第 193・194 図）

1 ～ 6 は瀬戸焼の角型茶瓶である。1 は瀬戸古藤製である。体部の縦断面形が方形を呈する。頸部が長く、注ぎ口が上方に延びる。注ぎ口は曲線的な作りで括れを持つ。外面上端から下部まで釉薬がかかり、色調は灰白色である。2 はセト古藤製である。体部の縦断面形が台形を呈する。頸部が長く、注ぎ口が上方に延びる。他の汽車土瓶に比べ器壁が厚く、重量感のある作りである。外面上端から下端まで釉薬がかかり、色調は薄緑色である。3 は古藤製である。体部の縦断面形が長方形を呈する。やや大振りな注ぎ口が斜め上方に延びる。外面上端から下部まで釉薬がかかり、色調は灰白色である。4 ～ 6 は尾張瀬戸古藤製である。体部の縦断面形が方形を呈する。注ぎ口が斜め上方に延び、頸部の長さに違いがみられる。外面上端から下端まで釉薬がかかり、色調は 4・5 が褐灰白色、6 が茶色である。これら瀬戸焼の汽車土瓶は、注ぎ口の形態と頸部の長さに違いがみられるが、いずれも注ぎ口と口縁部がほぼ同じ高さになる。

上記の汽車土瓶側面には、文字や文様が描かれている。詳細は以下の通りである。

正面：「お茶」と「鉄道局指定」の陰刻
　　：「お茶」の陽刻
　　：「お茶」とレールマークの陽刻、「鉄道局指定」の陰刻
裏面　製造元　：「瀬戸 古藤製」・「セト 古藤」・「古藤製」・「尾張瀬戸 古藤製」
　　販売価格：「金五銭」
　　注意書き：「あきびんは腰かけの下にお置き下さい」の陰刻
　　「空びんは腰かけの下にお置き下さい」の陰刻
　　「空壜空折箱などを窓の外へ投げすてる事は危険ですから
　　こしかけの下にお置き下さるか又はお持ちかへり下さい」の陰刻
　　その他　：「意匠登録済」の陰刻

11 は丸型茶瓶である。体部中央がやや窪み、上端に隆帯が周る。粘土紐による把手が付き、片口の注ぎ口を持つ。外面上端から下端まで光沢が強い釉薬がかかり、色調は浅黄色である。正面に陽刻された「御茶」の「茶」の字部分には、焼成時に貼り付いた粘土を剥がした痕跡がみられる。裏面には「□山商店製」が陽刻されている。瀬戸焼村山商店製の汽車土瓶に形態などが類似していることから、□は「村」と推定される。

上記の汽車土瓶側面には、文字や文様が描かれている。詳細は以下の通りである。

正面：「御茶」
裏面　製造元　：「□山商店製」
　　販売価格：「金五銭」
　　注意書き：「御注意　空瓶は腰掛の下へ御置き下さい」

(2) 会津本郷焼の汽車土瓶（第 194 図）

7 ～ 10 は会津本郷焼の角型茶瓶である。7 は会津㋒造製である。体部の縦断面形が長方形を呈する。側面は方形基調の区画が施されている。外面上端から下端まで釉薬がかかり、色調は茶色である。8 はあいづ耕山製である。体部の縦断面形が長方形を呈する。他の汽車土瓶と異なり、口頸部は内湾する。外面上端から下端まで釉薬がかかり、色調は薄茶色である。側面には、駅名の「岩沼駅」と販売業者名の「蓬田屋」の筆書きがみられる。9 はあいづ㋒造製である。体部の縦断面形が長方形を呈する。他の汽車土瓶と異なり、口頸部は内傾し、底部に厚みを持つ。外面上端から下端まで釉薬がかかり、色調は茶褐色である。10 は製造元が明記されていない。体部の縦断面形が

長方形を呈する。体部上端と下端の頂部が装飾的に面取りされている。そのほか、側面には注ぎ口を先頭とした汽車が全周にわたって陽刻されている。外面上端から下端まで釉薬がかかり、色調は茶色である。これら会津本郷焼の汽車土瓶は、いずれも注ぎ口が口縁部より低く、体部と頸部の境付近に位置する。

上記の汽車土瓶側面には、文字や文様が描かれている。詳細は以下の通りである。

正面：「お茶」の陽刻と方形基調の区画
　　：「お茶」とレールマークの陽刻、「鉄道局指定」の陰刻
　　：「お茶」とレールマークの陽刻
　　：「お茶」と汽車文様の陽刻
裏面　製造元　：「会津㋕造」・「あいづ耕山」・「あいづ㋕造」
　　販売価格：「金五銭」

(3) ガラス製汽車土瓶（第 194 図）

12 は体部全体に細かい凹凸が施され、上端には幅 5mm の沈線が周る。正面に桜の花びら、裏面に「丁卯商會製」と桜の花びら、底面に「3」が陽刻されている。底部から体部下半にかけては成型時の皺がみられるほか、口縁部には歪みがある。ガラスの質は均質ではなく、気泡が入り込んでいる。色調は明緑灰色である。

(4) 汽車土瓶の湯呑（第 194・195 図）

13・14 はガラス製汽車土瓶に伴う湯呑と推定される。口縁部に螺旋状の筋がみられることから、回転させて封をする蓋としても使用されたものと推定される。13 は正面に桜の花びらが陽刻され、14 は陽刻による縦位の線が全周する。ガラスの質は均質ではなく、気泡が入り込んでいる。色調は明緑灰色である。

15 ～ 17 は瀬戸焼の汽車土瓶に伴うと推定される湯呑である。口縁部が真直ぐ立ち上がるものである。15・16 は内面から外面下部まで、黄褐色の釉薬がかかる。17 は内面から外面下端まで、薄緑色の釉薬がかかり、口縁部では緑色を呈する。

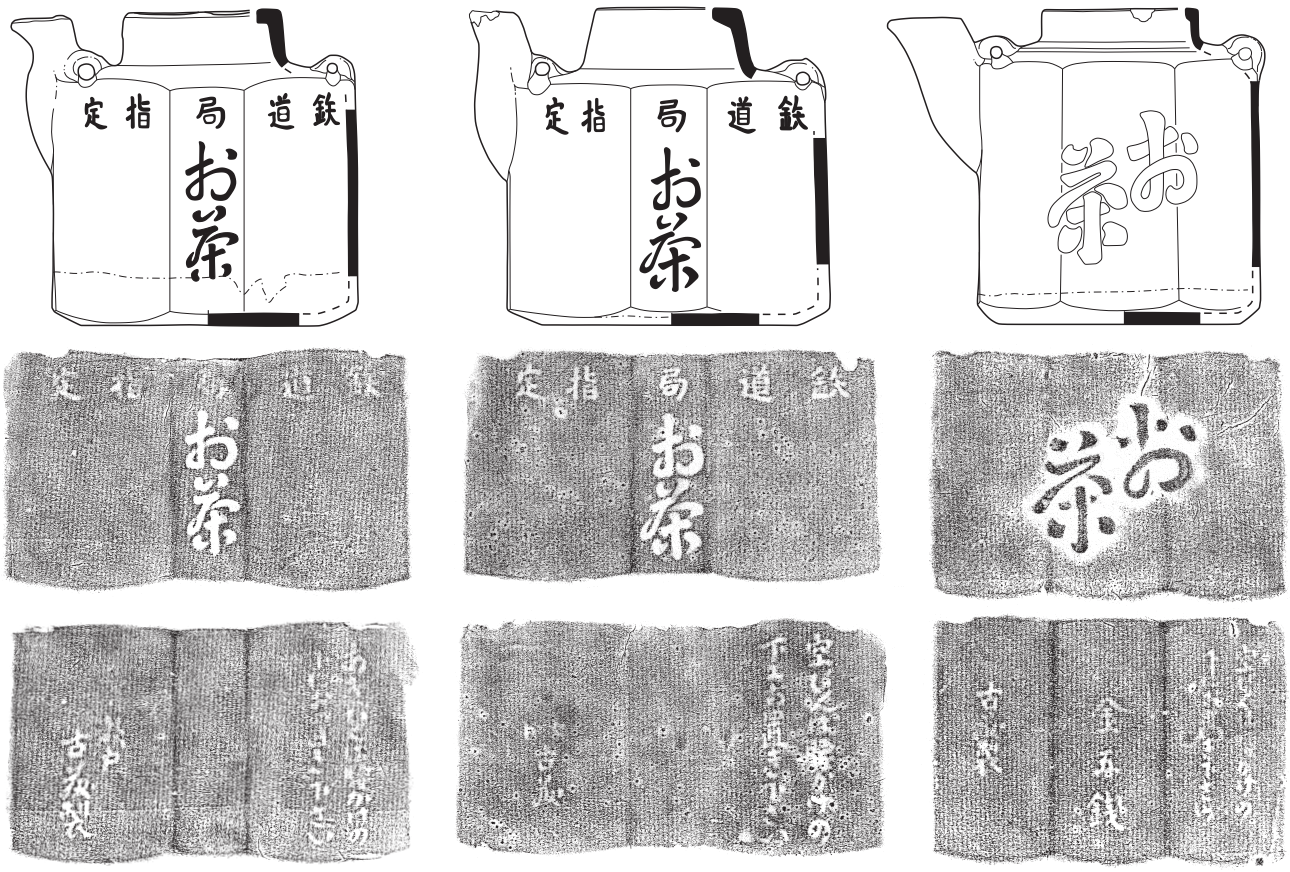
18・19 は会津本郷焼の汽車土瓶に伴うと推定される湯呑である。口縁部が真直ぐ立ち上がるものである。18 は内面から外面下部まで、黄褐色の釉薬がかかる。19 は内外面で釉薬が使い分けされており、内面から口縁端部にかけて灰白色の釉薬、外面上端から下端までは茶色の釉薬がかかる。

20 ～ 22 は製造窯が不明の湯呑である。20 は内面から外面下部まで、黄褐色の釉薬がかかる。21 は内面から外面下部まで、にぶい黄褐色の釉薬がかかる。22 は体部上端で強く屈曲し、口縁部が外側に開くものである。組み合わさる汽車土瓶は不明である。内面から口縁部外面まで、にぶい黄褐色の釉薬がかかる。

(5) まとめ

長町駅東遺跡から出土した汽車土瓶は、すべて泥漿鋳込みで製作されたもので、製造窯には瀬戸焼と会津本郷焼がある。時期を検討できる資料としては、「金五銭」と記載された汽車土瓶とガラス製汽車土瓶がある。汽車土瓶の販売価格が五銭であった時期は、昭和 5 年（1930）～昭和 18 年（1943）とされている。一方、ガラス製汽車土瓶の販売期間は、大正 11 年（1922）～昭和 4 年（1929）とされている。本遺跡出土のガラス製汽車土瓶には、「丁卯商会」の陽刻があり、昭和 2 年の干支が「丁卯（ひのとう）」であることから、これに由来するものと思われる。また、会津本郷焼は、昭和の初め頃から汽車土瓶の生産が始まり、太平洋戦争の終戦前後まで生産されていたとされている。

以上のことから、本遺跡出土の汽車土瓶は、盛土・整地層から出土しているため時間的な纏まりはないが、概ね昭和初期に限定されるものと考えられる。

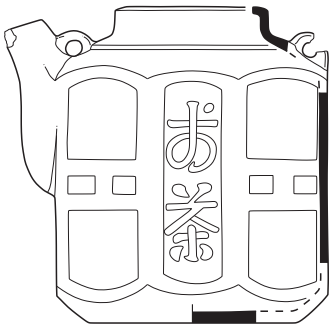


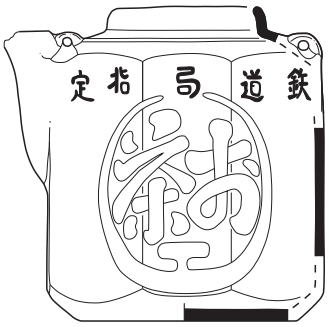
1（X-007）　2（X-010）　3（X-006）

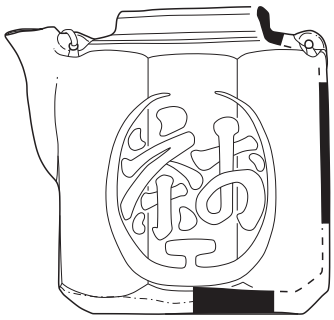
4（X-003）　5（X-002）　6（X-008）

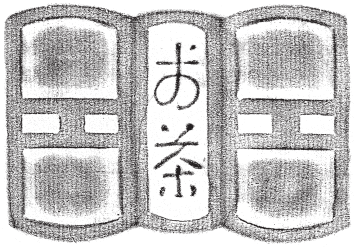
第 193 図　汽車土瓶（1）

0　（1:2）　5cm

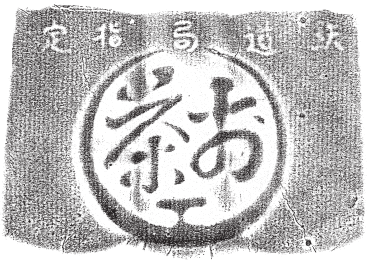




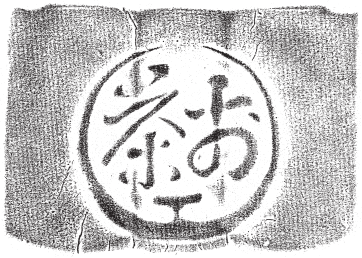




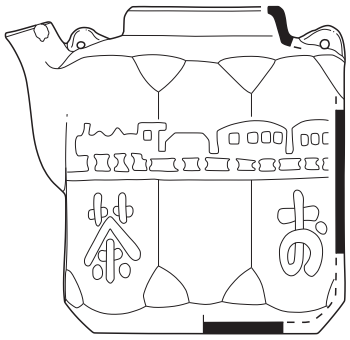
7(X-019)

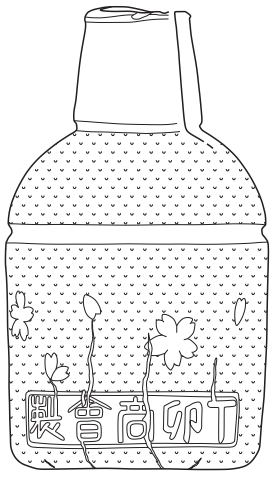


8(X-024)

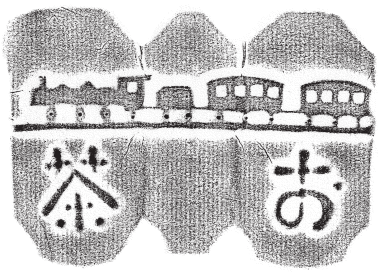


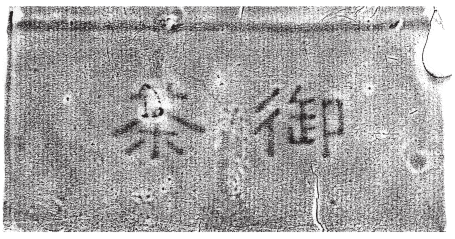
9(X-022)

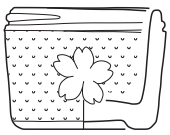




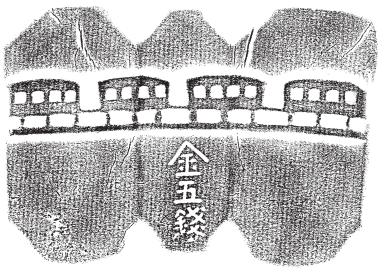
12(X-027)



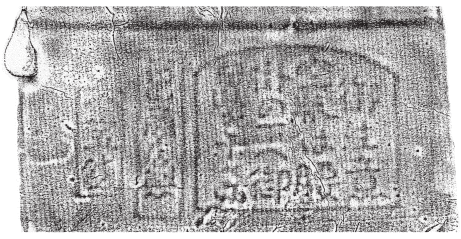




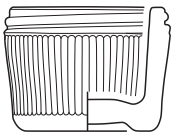
13(X-079)



10(X-023)



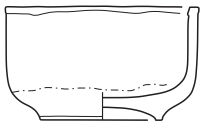
11(X-026)



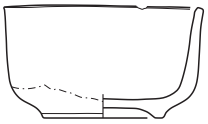
14(X-084)

0 (1:2) 5cm

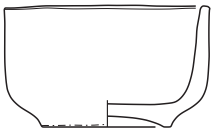
第 194 図　汽車土瓶（2）



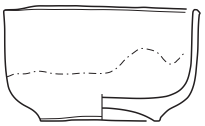
15（X-030）



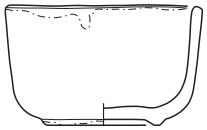
16（X-037）



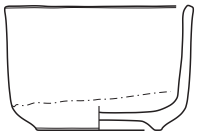
17（X-054）



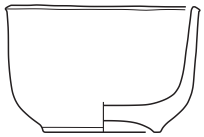
18（X-055）



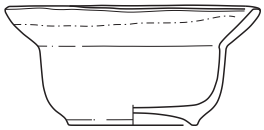
19（X-060）



20（X-075）



21（X-077）



22（X-078）

0　（1:2）　5cm

第 195 図　汽車土瓶湯呑

長町駅東遺跡出土汽車土瓶観察表

図版番号 登録番号	調査次数	分類	形態	器高 (cm)	底径 (cm)	口縁部(cm)			容量cc	色調	文字情報等		備考
						頸部高	外径	内径					
1 (X-007)	2次調査	瀬戸焼	角型	8.2	6.5	1.3	4.1	3.0	250 (233)	灰白色	正面	上→鉄道局指定　(陰刻)	完形
												中央→お茶　(陰刻)	
											裏面	右→あきびんは腰かけの下にお置き下さい(陰刻)	
												左→瀬戸　古藤製　(陰刻)	
2 (X-010)	3次調査	瀬戸焼	角型	8.4	6.6	1.7	3.8	2.5	274 (254)	薄緑色	正面	上→鉄道局指定　(陰刻)	完形
												中央→お茶(陰刻)	
											裏面	右→空びんは腰かけの下にお置き下さい(陰刻)	
												左→セト　古藤　(陰刻)	
3 (X-006)	3次調査	瀬戸焼	角型	8.3	6.2	0.8	4.2	3.4	270 (259)	灰白色	正面	中央→お茶　(陽刻)	完形
											裏面	右→あきびんは腰かけの下にお置き下さい(陰刻)	
												中央→金五銭　(陰刻)	
												左→古藤製(陰刻)	
4 (X-003)	3次調査	瀬戸焼	角型	8.3	6.4	1.0	4.1	3.2	276 (259)	褐灰白色	正面	上→鉄道局指定　(陰刻)	注ぎ口一部破損
												中央→お茶(鉄道レールマーク)(陽刻)	
											裏面	右→あきびんは腰かけの下にお置き下さい(陰刻)	
												中央→意匠登録済　(陰刻)	
												左→尾張瀬戸　古藤製　金五銭　(陰刻)	
5 (X-002)	3次調査	瀬戸焼	角型	8.0	6.2	0.6	4.2	3.4	259 (252)	褐灰白色	正面	上→鉄道局指定　(陰刻)	耳一部破損
												中央→お茶(鉄道レールマーク)(陽刻)	
											裏面	右→空壜空折箱などを窓の外へ投げすてる事は危険ですからこしかけの下にお置き下さるか又はお持ちかへり下さい(陰刻)	
												中央→意匠登録済　(陰刻)	
												左→尾張瀬戸　古藤製　金五銭　(陰刻)	
6 (X-008)	不明	瀬戸焼	角型	8.0	6.5	0.6	4.0	3.0	232 (223)	茶色	正面	上→鉄道局指定　(陰刻)	完形
												中央→お茶(鉄道レールマーク)(陽刻)	
											裏面	右→空壜空折箱などを窓の外へ投げすてる事は危険ですからこしかけの下にお置き下さるか又はお持ちかへり下さい(陰刻)	
												中央→意匠登録済　(陰刻)	
												左→尾張瀬戸　古藤製　(陰刻)	
7 (X-019)	3次調査	会津本郷焼	角型	8.4	5.6	0.7	4.2	3.2	236 (224)	茶色	正面	中央→お茶(陽刻)	耳一部破損
											裏面	中央→金五銭　(陰刻)	
												左→会津　㋣造(陰刻)	
8 (X-024)	3次調査	会津本郷焼	角型	8.3	6.0	0.7	4.2	3.5	237 (229)	薄茶色	正面	上→鉄道局指定　(陰刻)	注ぎ口一部破損
												中央→お茶(鉄道レールマーク)(陽刻)	
											裏面	右→岩沼駅　蓬田屋　(筆書き)	
												中央→金五銭　(陰刻)	
												左→あいづ　耕山　(陰刻)	
9 (X-022)	3次調査	会津本郷焼	角型	8.1	5.8	0.7	4.0	3.4	230 (218)	茶褐色	正面	中央→お茶(鉄道レールマーク)　(陽刻)	完形
											裏面	中央→金五銭　(陰刻)	
												左→あいづ　㋣造(陰刻)	
10 (X-023)	3次調査	会津本郷焼？	角型	8.5	6.1	0.9	4.1	3.3	270 (262)	茶色	正面	中央→お茶　(陽刻)・汽車模様(陽刻)	完形
											裏面	中央→金五銭　(陰刻)・汽車模様(陽刻)	
11 (X-026)	3次調査	瀬戸焼？	丸型	9.5	7.0	1.3	3.2	2.6	229 (221)	浅黄色	正面	御茶　(陽刻)　肩部に隆帯巡る	注ぎ口有り 把手破損 完形
											裏面	右→御注意　空瓶は腰掛の下へ御置き下さい(陽刻)	
												中央→□山商店製　(陽刻)	
												左→金五銭　(陽刻)	
12 (X-027)	2次調査	—	丸型	12.2	6.5	3	2.8	1.8	241 (228)	明緑灰色	正面	桜の花びら　(陽刻)　肩部に5㎜幅の沈線巡る	ガラス製品 口縁部変形 丁卯(昭和2年)
											裏面	製會商卯丁	
												桜の花びら　(陽刻)	
											底面	「3」(陽刻)	

※容量については土瓶上部まで水を入れて計量しているが、(　　)の数字については　土瓶の肩部までの計量である。

長町駅東遺跡出土汽車土瓶湯呑観察表

図版番号 登録番号	調査次数	分類	形態	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	容量 (cc)	色調	備考
13 (X-079)	2次調査	—	真直ぐ立ち上がる	3.2	4.0	3.9	20.0	明緑灰色	ガラス製湯呑　桜の花びら
14 (X-084)	2次調査	—	真直ぐ立ち上がる	3.2	4.2	3.9	25.0	明緑灰色	ガラス製湯呑　縦の刻有り
15 (X-030)	2次調査	瀬戸焼	真直ぐ立ち上がる	3.0	5.2	3.3	36.0	にぶい黄褐色	
16 (X-037)	2次調査	瀬戸焼	真直ぐ立ち上がる	3.0	5.2	3.3	36.0	褐灰色	
17 (X-054)	3次調査	瀬戸焼	真直ぐ立ち上がる	3.2	5.4	3.4	41.0	薄緑色	
18 (X-055)	2次調査	会津本郷焼	真直ぐ立ち上がる	3.0	5.0	3.3	35.0	茶色	
19 (X-060)	2次調査	会津本郷焼	真直ぐ立ち上がる	3.1	5.2	3.3	38.0	内:灰白色 外:茶色	
20 (X-075)	2次調査	不明	真直ぐ立ち上がる	3.3	5.1	3.3	41.0	黄褐色	
21 (X-077)	3次調査	不明	真直ぐ立ち上がる	3.3	5.0	3.2	28.0	にぶい黄褐色	
22 (X-078)	3次調査	不明	外に開く	3.1	6.6	3.3	49.0	内:にぶい黄色 外:灰白色	

長町駅東遺跡出土汽車土瓶（非掲載）観察表

登録番号	調査次数	分類	形態		器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	容量 (cc)	色調		備考		
X-001	3次調査	瀬戸焼	角型	7.8	6.3	0.7	4.2	3.1	239 (229)	灰白色	正面	上→鉄道局指定(陰刻)	注ぎ口一部破損
												中央→お茶(鉄道レールマーク)(陽刻)	
											裏面	右→空壜空折箱などを窓の外へ投げすてる事は危険ですからこしかけの下にお置き下さるか又はお持ちかへり下さい(陰刻)	
												中央→意匠登録済　(陰刻)	
												左→尾張瀬戸　古藤製　金五銭　(陰刻)	
X-004	3次調査	瀬戸焼	角型	8.4	6.6	0.9	4.2	3.3	273 (260)	灰白色	正面	上→鉄道局指定　(陰刻)	完形
												中央→お茶(鉄道レールマーク)(陽刻)	
											裏面	右→あきびんは腰かけの下にお置き下さい(陰刻)	
												中央→意匠登録済　(陰刻)	
												左→尾張瀬戸　古藤製　金五銭　(陰刻)	
X-005	3次調査	瀬戸焼	角型	8.2	6.6	0.9	4.1	3.3	270 (257)	灰白色	正面	上→鉄道局指定　(陰刻)	完形
												中央→お茶(鉄道レールマーク)(陽刻)	
											裏面	右→あきびんは腰かけの下にお置き下さい(陰刻)	
												中央→意匠登録済　(陰刻)	
												左→尾張瀬戸　古藤製　金五銭　(陰刻)	
X-009	2次調査	瀬戸焼	角型	—	—	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	文字有り．破片の為全文は判読不能？ □□を窓□□事は危険で□□かけの下にお置き □□はお持ちかへり□□　意匠など(陰刻)	胸部破片 X-008の文章と同じ？
X-011	2次調査	瀬戸焼	角型	8.4	6.8	1.7	3.8	2.6	280 (251)	薄緑色	正面	上→鉄道局指定　(陰刻)	注ぎ口一部破損
												中央→お茶(陰刻)	
											裏面	右→空びんは腰かけの下にお置き下さい(陰刻)	
												左→セト　古藤　(陰刻)	
X-012	3次調査	瀬戸焼	角型	8.5	6.4	1.6	3.8	2.6	281 (260)	薄緑色	正面	上→鉄道局指定　(陰刻)	完形
												中央→お茶(陰刻)	
											裏面	右→空びんは腰かけの下にお置き下さい(陰刻)	
												左→セト　古藤　(陰刻)	
X-013	3次調査	会津本郷焼	角型	8.5	5.9	0.7	4.4	3.6	265 (251)	薄茶色	正面	中央→お茶　(陽刻)	完形
											裏面	中央→金五銭　(陰刻)	
												左→会津　㋣造(陰刻)	
X-014	2次調査	会津本郷焼	角型	8.3	5.6	0.6	4.1	3.6	248 (235)	薄茶色	正面	中央→お茶(陽刻)	注ぎ口・耳一部破損
											裏面	中央→金五銭　(陰刻)	
												左→会津　㋣造(陰刻)	
X-015	3次調査	会津本郷焼	角型	8.8	5.9	0.7	4.2	3.5	274 (257)	薄茶色	正面	中央→お茶(陽刻)	完形
											裏面	中央→金五銭　(陰刻)	
												左→会津　㋣造(陰刻)	
X-016	3次調査	会津本郷焼	角型	8.8	5.9	0.8	4.3	3.4	272 (258)	薄茶色	正面	中央→お茶(陽刻)	完形
											裏面	中央→金五銭　(陰刻)	
												左→会津　㋣造(陰刻)	
X-017	3次調査	会津本郷焼	角型	8.7	5.8	0.8	4.5	3.7	265 (253)	薄茶色	正面	中央→お茶(陽刻)	完形
											裏面	中央→金五銭　(陰刻)	
												左→会津　㋣造(陰刻)	
X-018	3次調査	会津本郷焼	角型	8.5	6.1	0.7	4.2	3.5	257 (246)	薄茶色	正面	中央→お茶(陽刻)	耳一部破損
											裏面	中央→金五銭　(陰刻)	
												左→会津　㋣造(陰刻)	
X-020	3次調査	会津本郷焼	角型	8.3	5.8	0.7	4.1	3.2	240 (229)	茶色	正面	中央→お茶(陽刻)	完形
											裏面	中央→金五銭　(陰刻)	
												左→会津　㋣造(陰刻)	
X-021	2次調査	会津本郷焼	角型	—	—	—	—	—	—	薄茶色		胸部破片	
X-025	3次調査	会津本郷焼	角型	8.2	6.0	0.6	4.2	3.5	254 (229)	薄茶色	正面	上→鉄道局指定　(陰刻)	完形
												中央→お茶(鉄道レールマーク)(陽刻)	
											裏面	中央→金五銭　(陰刻)	
												左→あいづ　耕山　(陰刻)	

長町駅東遺跡出土汽車土瓶湯呑（非掲載）観察表

登録番号	調査次数	分類	形態	器高（cm）	口径（cm）	底径（cm）	容量（cc）	色調	備考
X-028	2次調査	瀬戸焼	真直ぐ立ち上がる	2.9	5.0	3.2	36.0	褐灰色	
X-029	2次調査	瀬戸焼	真直ぐ立ち上がる	2.9	5.2	3.3	36.0	灰褐色	
X-031	2次調査	瀬戸焼	真直ぐ立ち上がる	3.0	5.2	3.3	36.0	にぶい黄褐色	
X-032	2次調査	瀬戸焼	真直ぐ立ち上がる	3.0	5.2	3.3	36.0	灰褐色	
X-033	2次調査	瀬戸焼	真直ぐ立ち上がる	3.0	5.2	3.3	36.0	褐灰色	
X-034	2次調査	瀬戸焼	真直ぐ立ち上がる	3.1	5.2	3.3	36.0	にぶい黄褐色	
X-035	2次調査	瀬戸焼	真直ぐ立ち上がる	3.0	5.2	3.3	36.0	にぶい黄褐色	
X-036	2次調査	瀬戸焼	真直ぐ立ち上がる	3.0	5.1	3.3	36.0	にぶい黄褐色	
X-038	2次調査	瀬戸焼	真直ぐ立ち上がる	3.0	5.2	3.3	36.0	褐灰色	
X-039	3次調査	瀬戸焼	真直ぐ立ち上がる	3.0	5.2	3.3	36.0	にぶい黄橙色	
X-040	3次調査	瀬戸焼	真直ぐ立ち上がる	3.0	5.0	3.3	36.0	にぶい黄橙色	
X-041	3次調査	瀬戸焼	真直ぐ立ち上がる	3.0	5.1	3.3	36.0	にぶい黄橙色	
X-042	3次調査	瀬戸焼	真直ぐ立ち上がる	3.0	5.1	3.3	35.0	にぶい黄橙色	
X-043	3次調査	瀬戸焼	真直ぐ立ち上がる	3.0	5.1	3.3	38.0	にぶい黄橙色	
X-044	2次調査	瀬戸焼	真直ぐ立ち上がる	3.3	5.4	3.5	42.0	薄緑色	
X-045	2次調査	瀬戸焼	真直ぐ立ち上がる	2.8	5.2	3.2	34.0	薄緑色	
X-046	3次調査	瀬戸焼	真直ぐ立ち上がる	3.2	5.5	3.5	42.0	薄緑色	
X-047	3次調査	瀬戸焼	真直ぐ立ち上がる	3.3	5.5	3.5	43.0	薄緑色	
X-048	3次調査	瀬戸焼	真直ぐ立ち上がる	3.1	5.4	3.4	42.0	薄緑色	
X-049	3次調査	瀬戸焼	真直ぐ立ち上がる	3.2	5.5	3.4	41.0	薄緑色	
X-050	3次調査	瀬戸焼	真直ぐ立ち上がる	3.0	5.2	3.4	41.0	薄緑色	
X-051	3次調査	瀬戸焼	真直ぐ立ち上がる	3.1	5.2	3.3	41.0	薄緑色	
X-052	3次調査	瀬戸焼	真直ぐ立ち上がる	3.2	5.3	3.3	41.0	薄緑色	
X-053	3次調査	瀬戸焼	真直ぐ立ち上がる	3.2	5.3	3.4	42.0	薄緑色	
X-056	2次調査	会津本郷焼	真直ぐ立ち上がる	3.0	5.2	3.3	34.0	茶色	
X-057	3次調査	会津本郷焼	真直ぐ立ち上がる	3.0	5.2	3.2	35.0	にぶい茶褐色	
X-058	3次調査	会津本郷焼	真直ぐ立ち上がる	3.0	5.1	3.2	35.0	にぶい茶褐色	
X-059	3次調査	会津本郷焼	真直ぐ立ち上がる	3.0	5.1	3.2	38.0	浅黄橙色	
X-061	2次調査	会津本郷焼	真直ぐ立ち上がる	3.4	5.7	3.3	42.0	内:灰白色 外:茶色	
X-062	3次調査	会津本郷焼	真直ぐ立ち上がる	3.2	5.3	3.0	41.0	内:灰黄色 外:茶褐色	
X-063	3次調査	会津本郷焼	真直ぐ立ち上がる	3.3	5.5	3.2	48.0	内:灰黄色 外:茶色	
X-064	3次調査	会津本郷焼	真直ぐ立ち上がる	3.3	5.2	3.1	43.0	内:灰白色 外:茶色	
X-065	3次調査	会津本郷焼	真直ぐ立ち上がる	3.1	5.1	3.1	38.0	内:灰白色 外:茶色	
X-066	3次調査	会津本郷焼	真直ぐ立ち上がる	3.1	5.2	3.2	36.0	内:灰白色 外:薄茶色	
X-067	3次調査	会津本郷焼	真直ぐ立ち上がる	3.2	5.2	3.2	40.0	内:灰白色 外:薄茶色	
X-068	3次調査	会津本郷焼	真直ぐ立ち上がる	3.1	5.2	3.2	38.0	内:灰白色 外:薄茶色	
X-069	3次調査	会津本郷焼	真直ぐ立ち上がる	3.1	5.3	3.2	38.0	内:灰白色 外:茶褐色	
X-070	3次調査	会津本郷焼	真直ぐ立ち上がる	3.1	5.2	3.1	40.0	内:灰白色 外:茶色	
X-071	3次調査	会津本郷焼	真直ぐ立ち上がる	3.3	5.3	3.1	42.0	内:灰白色 外:茶褐色	
X-072	3次調査	会津本郷焼	真直ぐ立ち上がる	3.2	5.0	3.1	39.0	内:灰白色 外:茶色	
X-073	不明	会津本郷焼	真直ぐ立ち上がる	3.2	5.4	3.2	43.0	内:灰白色 外:薄茶色	

長町駅東遺跡出土汽車土瓶湯呑（非掲載）観察表

登録番号	調査次数	分類	形態	器高（cm）	口径（cm）	底径（cm）	容量（cc）	色調	備考
X-074	2次調査	会津本郷焼	真直ぐ立ち上がる	3.5	5.5	3.5	50.0	内：灰白色 外：茶色	
X-076	3次調査	不明	真直ぐ立ち上がる	3.2	4.9	3.1	36.0	薄茶色	
X-080	2次調査	－	真直ぐ立ち上がる	3.2	4.0	3.9	23.0	明緑灰色	ガラス製湯呑　　桜の花びら
X-081	2次調査	－	真直ぐ立ち上がる	3.2	4.0	3.9	23.0	明緑灰色	ガラス製湯呑　　桜の花びら
X-082	2次調査	－	真直ぐ立ち上がる	3.2	4.0	3.8	23.0	明緑灰色	ガラス製湯呑　　桜の花びら
X-083	2次調査	－	真直ぐ立ち上がる	3.2	4.1	3.8	23.0	明緑灰色	ガラス製湯呑　　縦の刻有り
X-085	2次調査	－	－	1.5	8.0	－	－	にぶい橙色	陶器・蓋　「実用新案　鐵道青年會　窯業部」の刻印　孔有り
X-086	2次調査	－	－	3.0	2.0	1.0	－	灰色	磁器・栓

長町駅東遺跡出土近代遺物観察表

登録番号	調査次数	分類	形態	器高（cm）	口径（cm）	底径（cm）	容量（cc）	色調	備考
X-087	2次調査	－	細首の丸型	18.7	2.5	4.1	180	透明	ガラス製品　　上下縦に10本の凸有り 表ー守山文化牛乳　（陽刻）　裏－意匠登録　180CC入（陽刻）
X-088	3次調査	－	細首の丸型	18.6	2.5	4.0	180	透明	ガラス製品　　上下縦に10本の凸有り 表ー守山文化牛乳　（陽刻）　裏－意匠登録　180CC入（陽刻） 底面「二」（陽刻）
X-089	2次調査	－	－	2.8	1.6	1.7	－	透明	ガラス製の角柱状の小瓶
X-090	2次調査	－	－	4.9	1.5	－	－	青色	ガラス製の点眼容器　「EYE　WATER　ROHTO」　　被熱により下端変形

※X-087のみ写真図版に掲載。その他は非掲載。

第 7 章　総括

長町駅東遺跡は、仙台市あすと長町土地区画整理事業に伴い、平成 13 年度（2001）から継続的に発掘調査が行われ、総数 350 軒以上の竪穴住居跡が確認されている。平成 15 年度（2004）に行われた第 3 次調査において、集落の北東側を区画する溝跡や材木列跡、一本柱列跡が確認され、平成 16 年度（2005）の第 4 次調査では、溝の一部を土橋状に掘り残した通路状遺構が確認された。さらに、平成 20 年度（2008）の第 9 次調査では、集落の南西側で北西方向から南東方向に延びる河川跡に沿って材木列跡が確認され、この周辺が集落の南端となっている可能性が考えられている。このほか、弥生時代中期中葉の居住域（竪穴住居跡）・生産域（水田跡）・墓域（土器埋設遺構・土壙墓）が検出され、当該期の集落を復元する上での良好な資料と考えられている。

調査開始から 12 年が経過し、郡山Ⅰ期官衙・Ⅱ期官衙期及び弥生時代中期中葉の遺構・遺物をはじめとし、縄文時代から近代にかけての遺構・遺物が多数確認されている。その厖大な資料については、隣接する郡山遺跡と西台畑遺跡との関係の中で検討する必要があるが、本章では第 10 次調査の遺構・遺物を整理し、長町駅東遺跡の集落について若干の検討を行いたい。

第 1 節　弥生時代中期の土器について（第 196・197 図）

第 10 次調査では、基本層Ⅴ層（遺物包含層）や各遺構からコンテナで 10 箱程度の弥生土器が出土している。これらは弥生時代中期中葉の桝形囲式を主体とした土器群である。このうち、基本層Ⅴ層出土土器と SX1 竪穴遺構出土土器には接合関係が認められ、比較的時間幅の狭い良好な資料と考えられることから、掲載遺物 141 点を対象として検討を行う。

a．器種

基本層Ⅴ層（遺物包含層）及び SX1 竪穴遺構から出土した弥生土器の器種は、壺、鉢、高坏、蓋、深鉢、甕、小型土器（各器種に推定されるものを含む）がある。これらの器種のうち、高坏と深鉢、小型土器はすべて精製品、甕はすべて粗製品で、その他の器種には精粗の別がある。器種の中で最も多いのは甕（40.4％）で、鉢（22.0％）、壺（19.9％）、蓋（8.5％）、深鉢（5.0％）、高坏（3.6％）、小型土器（0.7％）の順に割合が減少している。

b．器形

各器種における器形の特徴は以下の通りである。

壺は全体の器形を復元できる個体は 1 点のみである。体部上半に最大径を持ち肩が張るもの、体部中位に最大径を持ち撫肩状のものがある。口頸部は短頸のものを主体とし多様な形態がみられ、長頸の可能性があるもの（B-344）や頸部が「く」字状に短く屈曲する広口のもの（B-342）がある。いずれも平口縁である。

鉢は全体の器形を復元できる個体は少なく、殆どが破片資料である。口縁部に最大径を持ち、体部から口縁部にかけて緩やかに内湾もしくは直線的に外傾するものを主体とし、口縁部が強く内湾して体部上端に最大径を持つもの（B-66・95・238・278）や口縁部と体部の境に括れを持つもの（B-193）がある。殆どが平口縁で、突起を持つもの（B-278）がある。

高坏は破片資料のみである。坏部は緩やかに内湾し、脚部は台形状のものと内湾気味のものがある。いずれも平口縁である。

蓋は破片資料のみである。天井部につまみが付くものと付かないものがある。つまみが付くものには、側縁に高いつまみが付くものと低いつまみが付くものがある。つまみが付かないものには、天井部側縁が外側に向かってわ

ずかに張り出すものと上方に向かってわずかに盛り上がるものがある。体部は内湾気味に開くものと体部上半が外反し口縁部が直線的に開くものがある。

深鉢は全体の器形を復元できる個体は 1 点のみである。口縁部と体部の境に括れを持ち、口縁部が内湾気味に外傾するものを主体とし、直線的に外傾するもの（B-341）や内湾気味に直立するもの（B-173）がある。いずれも平口縁である。

甕は口縁部と体部の境に括れを持つものとほぼ直線的なものがある。括れを持つものには、直角に近い角度で屈曲するもの、鋭角に屈曲するもの、鈍角に屈曲するもの、緩やかに湾曲するものなど多様な形態がみられる。口縁部に最大径を持つものと口縁部と体部上半に最大径を持つものを主体とし、体部上半に最大径を持つもの（B-169）がある。いずれも平口縁である。

ｃ．地文

地文には縄文と植物茎回転文があり、全体の 71.6％に地文が認められる。地文の中で縄文の占める割合は 59.4％で、植物茎回転文は 40.6％である。縄文原体には単節（LR）、無節（L・R）、附加条（LR ＋ R・LR ＋ 2R・LR ＋ LL）、直前段反撚り（LL）、直前段多条、0 段多条がある。縄文原体は横位回転施文するものが殆どだが、斜位回転施文により縦走縄文を施している壺（B-136）と鉢（B-66）がみられる。また、縄文原体末端を結束した痕跡が認められるもの（B-80・122）がある。なお、1 個体で 2 種類の原体を使用しているものはない。植物茎回転文の原体は、ウリ科・シソ科植物の茎やクワ科のカナムグラの茎と考えられている（山内清男 1979、須藤隆 1984・1990、豊村幸宏 2009）。本土器群の植物茎回転文には、条間に棘状圧痕の有無が観察されることから、数種類の植物を使用しているものと推定される。

ｄ．文様

装飾文様は、甕の列点刺突文と壺の隆帯文を除き、沈線文の組み合わせで施文されている。沈線は一本工具により施文され、幅 1 ～ 2mm を主体とする。断面形状は「U」字状を呈するものと「V」字状を呈するものがある。施文は全体的に粗雑で、文様を構成する沈線の交点には隙間がみられる。文様内には地文を施文するものが 60.4％、無文のものが 39.6％で、前者には狭義の磨消縄文と充填縄文があり、充填縄文が殆どである。

各器種の施文部位及び文様の特徴は以下の通りである。

壺は口縁部から頸部上部と体部上半に施文され、2 ～ 3 条の横位直線文や横位直線文と錨形文、四角文の組み合わせが施文される。頸部上端には隆帯文が貼り付けられるものがある。

鉢は口縁部から体部上半に施文され、3 ～ 7 条の横位直線文や横位直線文と連弧文、連続山形文、縦位直線文、斜位直線文の組み合わせが施文される。口縁部内面に横位直線文や垂線が施文されるものがある。

高坏は口縁部から体部上半と脚部下半に施文され、横位直線文や横位直線文と連弧文、連続山形文の組み合わせが施文される。口縁部内面に横位直線文が施文されるものがある。

蓋は口縁部から体部に施文され、横位直線文や横位直線文と連弧文、連続山形文の組み合わせが施文される。口縁部内面に横位直線文が施文されるものがある。

深鉢は口縁部から体部上半に施文され、3 ～ 5 条の横位直線文が施文される。口縁部内面に横位直線文が施文されるものがある。

甕は体部上端に列点刺突文や横位直線文が施文される。列点刺突文に用いられる工具は棒状工具が殆どで、半截竹管や円形竹管がわずかにみられる。刺突は左から右に施されるものが 8 割強を占め、押し引き状のものがみられる。このほか、壁面に対して垂直方向に刺突しているものがある。

ｅ．編年的位置付け

前述の通り、基本層Ⅴ層（遺物包含層）出土土器と SX1 竪穴遺構出土遺物には接合関係が認められ、比較的時間幅の狭い良好な資料と考えられる。主な特徴は以下の通りである。

①主な器種は壺、鉢、高坏、蓋、深鉢、甕である。
②地文は単節 LR 縄文と植物茎回転文が主体で、附加条や直前段反撚りなどの異条縄文が少量用いられる。
③文様は一本工具により施文され、横位直線文、連弧文、連続山形文、錨形文、四角文が描かれる。
④施文は全体的に粗雑で、文様を構成する沈線の交点には隙間がみられる。
⑤文様内には地文を充填するものが主体だが、無文のものが一定量みられる。
⑥甕は、口縁部と体部の境に括れを持ち、体部上端に列点刺突文が施されるものが主体である。

これらの特徴から本土器群は弥生時代中期中葉の桝形囲式（伊東 1957）に比定される。県内の桝形囲式期の主な遺跡は、標式遺跡である多賀城市桝形囲貝塚（須藤隆 1987 他）をはじめ、仙台市南小泉遺跡（仙台市教育委員会 1978、須藤隆 1990・1998）、同西台畑遺跡（伊藤玄三 1958・1993、仙台市教育委員会 2010・2011・2013）、同中在家南遺跡（仙台市教育委員会 1996・2002）、同高田 B 遺跡（宮城県教育委員会 1994、仙台市教育委員会 2000）、長町駅東遺跡（仙台市教育委員会 2007・2009）、市川橋遺跡（宮城県教育委員会 2009）などがある。このうち、中在家南遺跡と高田 B 遺跡では遺物包含層などから多量の弥生土器が出土している。特に、中在家南遺跡Ⅷ・Ⅸ区河川跡 15 層からは中期中葉の弥生土器が層位的に纏まって出土しており、高田 B 遺跡出土土器との型式学的対比から、従来、桝形囲式とされてきた土器群を新旧 2 時期に細分し、「高田 B 式」から「中在家南式」への型式変遷が提示され（赤澤靖章 2000、石川日出志 2005）、「中在家南式」に後続する未命名型式（＋）の存在も指摘されている（石川 前掲）。また、「高田 B 式」は層位的な根拠がないため、型式としての存立及びその内容が課題とされ、中期中葉を「古段階：桝形式 (註 1) →中段階：中在家南式→新段階：円田式に並行する土器群」に細分する型式変遷が提示されている（斎野裕彦 2008）。

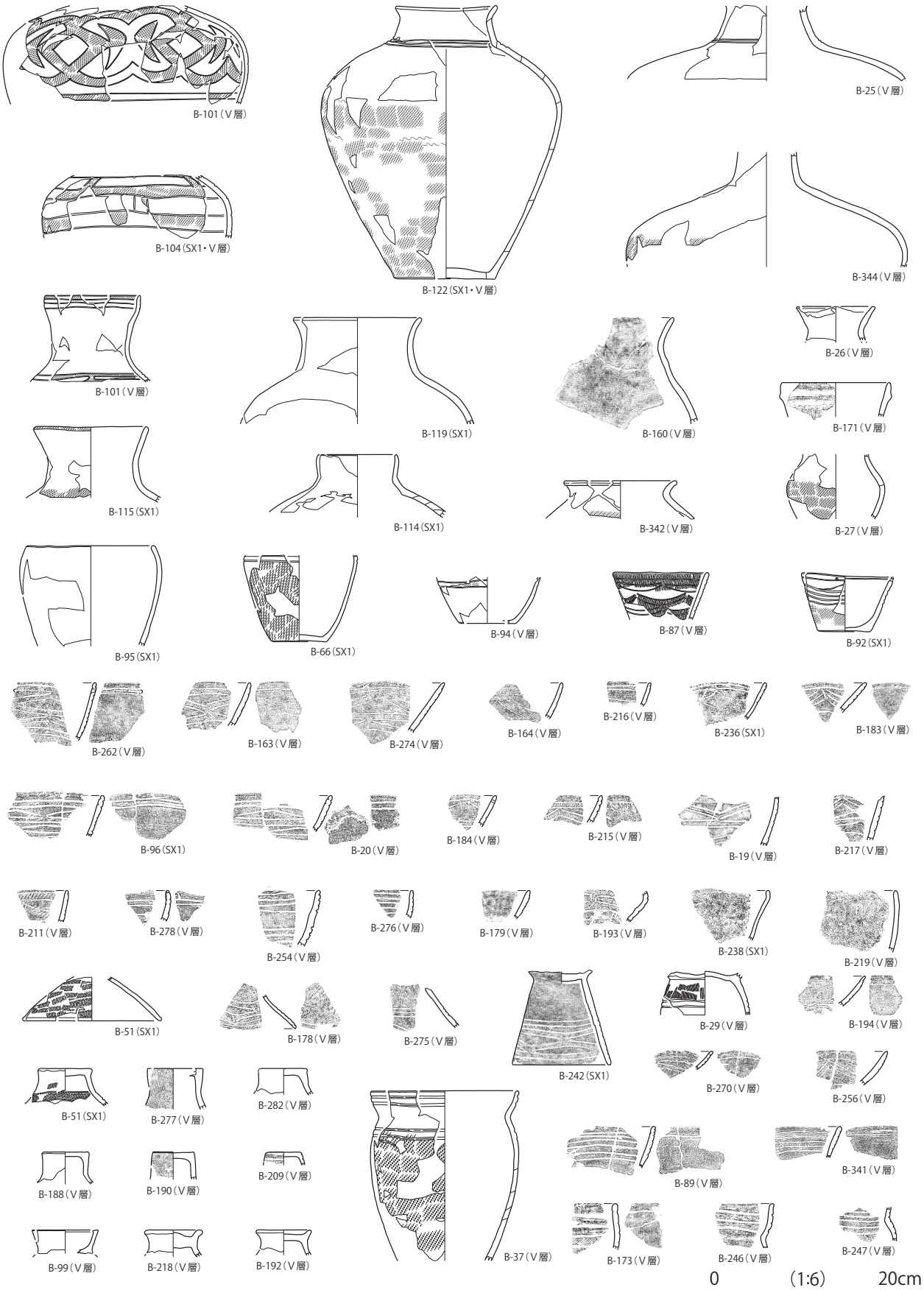
本土器群には、石川（2005）が指摘する「中在家南式では、高田 B 式で入念であった整形と施文がふたたび粗くなり、構図の交点を描く沈線どうしが離れ、弧線は硬化し、総じて構図の流麗さが失われてぎこちなくなる」といった特徴や、斎野（2010）が指摘する「中在家南式では、沈線を挟んで地文部と無文部が隣り合わないことも多く」なるといった特徴がみられることから、本土器群は「中在家南式」に比定されるものと考えられる。

「中在家南式」の標識資料である中在家南遺跡Ⅷ・Ⅸ区河川跡 15 層出土土器群と対比すると、装飾文様は細い沈線による横位直線文と連弧文・連続山形文の組み合わせが主体で、文様内に地文が施文されているものは、殆どが充填縄文手法であるなど共通する特徴を持つ。一方、本土器群には中在家南遺跡でみられる菱形状渦巻文・重菱形文・重三角形文・変形工字文が欠落している。菱形状渦巻文・重菱形文・重三角形文は、「中在家南式」に成立し、次型式の円田式に継続する特徴で、「高田 B 式（桝形式）」には認められない。変形工字文は「高田 B 式（桝形式）」には認められるものの、「中在家南式」で消失し、次型式の円田式には継続しない特徴である。

以上のことから、本土器群は「中在家南式」の中でも古い様相を持つものと考えられる。

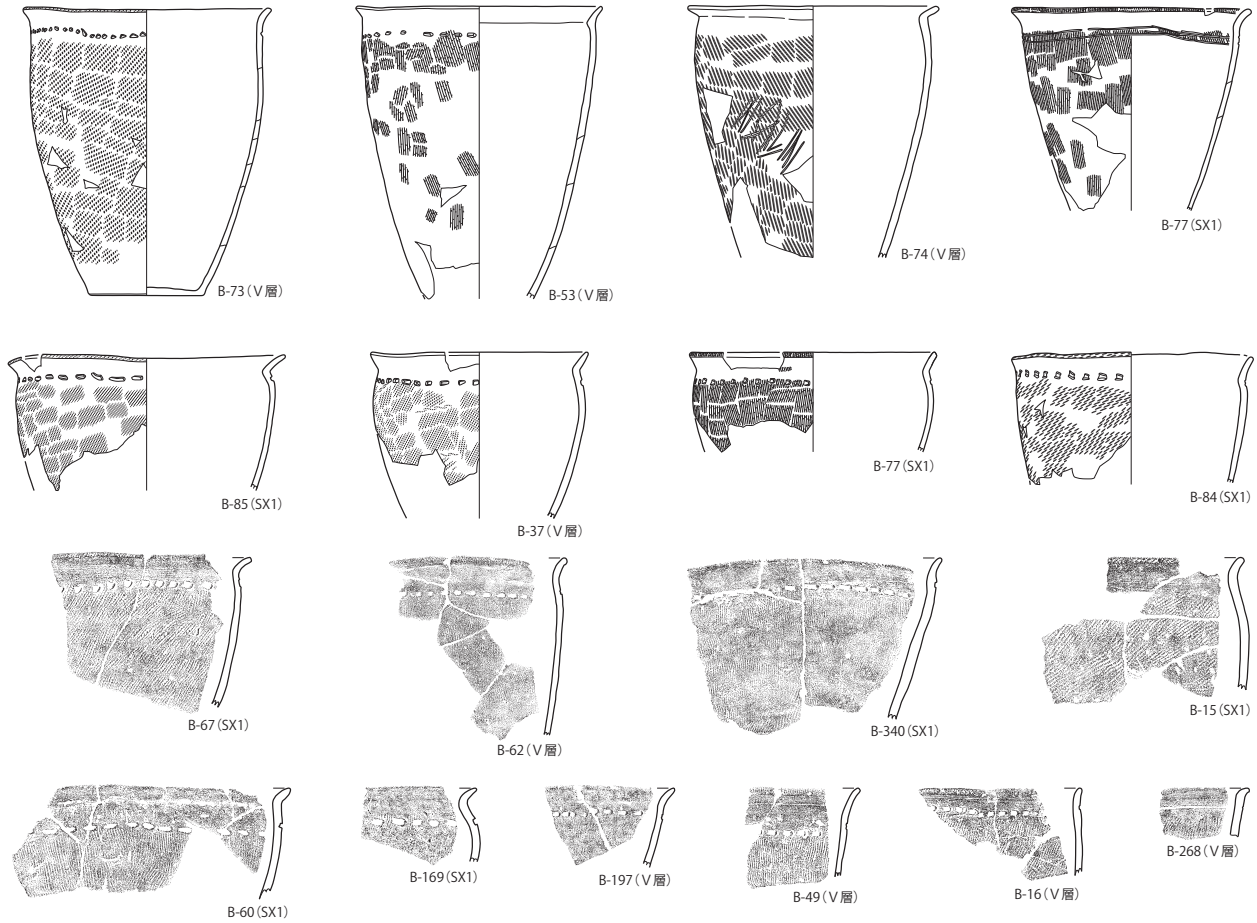
註 1：「桝形式」は、桝形囲貝塚出土土器群を標識資料として、山内清男によって設定された弥生時代の土器型式である（山内清男 1930）。その後、型式名称及び型式内容の変更を経て（馬目順一 1987）、現在は弥生時代中期中葉の土器型式として桝形囲式が設定されている。斎野裕彦は、桝形囲式から古段階の土器群を分離して「桝形式」の再設定を行い、桝形囲式の細分案を提示している（斎野 2008）。

基本層Ⅴ層・SX1

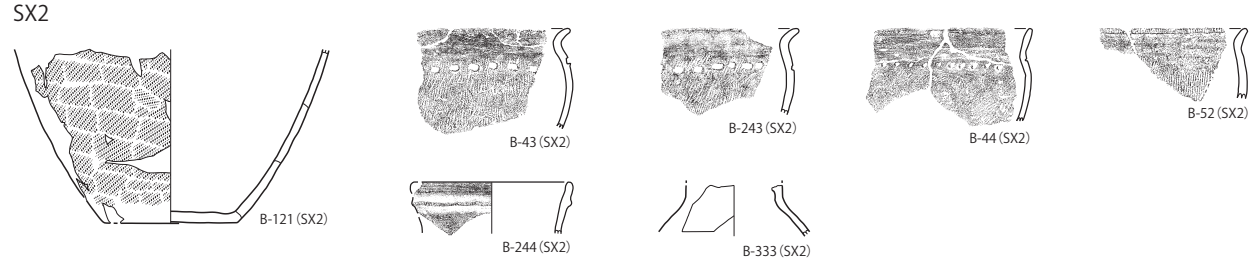


第 196 図　第 10 次調査弥生土器集成（1）

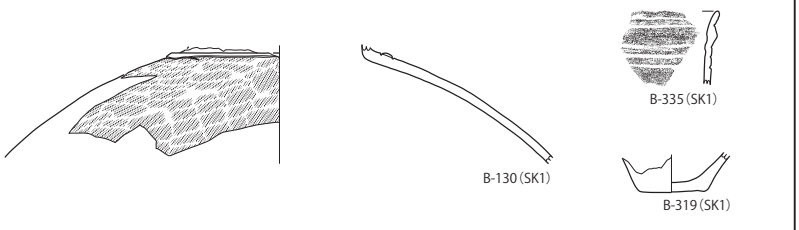
基本層Ⅴ層・SX1



SX2

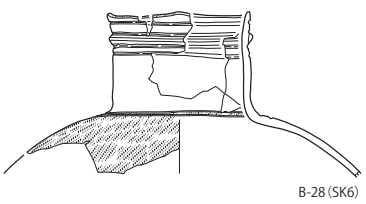


SK1

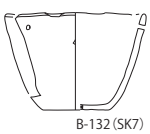


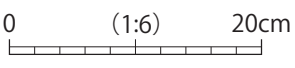
SK2

SK6



SK7





第 197 図　第 10 次調査弥生土器集成（2）

第 2 節　弥生時代中期の遺構について（第 198 ～ 203 図）

第 10 次調査では、弥生時代中期中葉の竪穴住居跡の可能性がある竪穴遺構や土坑、Pit 群が検出されている。これまでの調査成果によると、長町駅東遺跡では弥生時代中期中葉の竪穴住居跡や住居跡の可能性のある性格不明遺構、土器埋設遺構、土壙墓、水田跡が纏まって検出されており、当該期の集落を検討するうえで非常に重要な遺跡と考えられる。本節では、これら遺構について概観し、若干の検討を行いたい。

(1) 竪穴住居跡・性格不明遺構・竪穴遺構（第 198・199 図）

長町駅東遺跡では、第 3 次調査で竪穴住居跡 1 軒（SI1）が検出されている。また、竪穴住居跡の可能性があるものとして、第 3 次調査で性格不明遺構 3 基（SX1 ～ 3）、第 10 次調査で竪穴遺構 2 基（SX1・2）が検出され、いずれの遺構も出土土器から弥生時代中期中葉の桝形囲式期に帰属するものと考えられている。

第 3 次調査 SI1 竪穴住居跡

古代の遺構との重複により遺構全体を検出できていないが、平面形状は不整楕円形と考えられ、規模は長軸 600cm 以上、短軸 460cm、深さ 16cm を測る。壁面に沿って柱穴が位置し、柱痕跡が認められる柱穴がある。また、炉跡と考えられる焼土が検出されている。これら床面施設のあり方から、竪穴住居跡として報告されている。弥生時代中期中葉の竪穴住居跡としては、仙台市内初の検出例である。

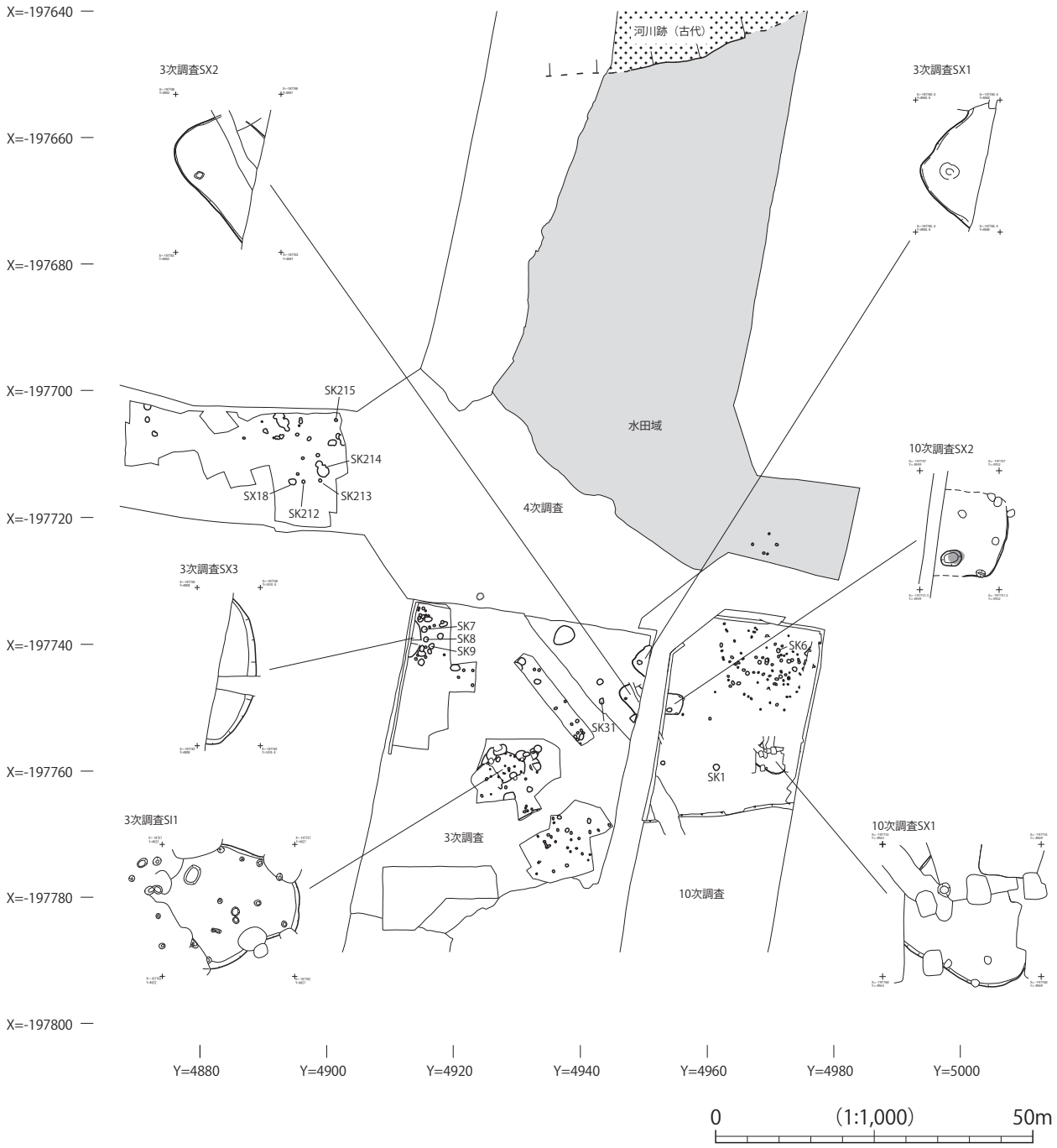
第 3 次調査 SX1 ～ 3 性格不明遺構

竪穴住居跡の可能性があるものの、床面施設がないことから性格不明遺構として報告されている。平面形状は隅丸長方形ないし隅丸方形を基調とするものと円形を基調とするものがみられる。規模は、残存部分から長軸 500cm 程度と推定され、深さ 10 ～ 16cm である。

第 10 次調査 SX1・2 竪穴遺構

床面からピットや土坑が検出されており、竪穴住居跡の可能性があるものの、柱穴構造が不明なことから、竪穴遺構として報告した。古代の遺構との重複などにより遺構全体を検出できていないが、平面形状は、隅丸方形ないし隅丸長方形である。規模は、長軸 320 ～ 540cm、深さ 2 ～ 7cm である。壁面の立ち上がりは緩やかで、竪穴底面に硬化面や貼床はない。第 10 次調査 SX1 竪穴遺構は灰白色粘土を含む土坑を伴い、第 10 次調査 SX2 竪穴遺構では炉跡の可能性が考えられる焼土遺構を伴う。

仙台市内では弥生時代の竪穴住居跡として、八木山緑町遺跡・土手内遺跡・原遺跡の 3 遺跡から後期の竪穴住居跡 5 軒が検出されている。第 3 次調査の報告において、長町駅東遺跡第 3 次調査 SI1 竪穴住居跡と上記 3 遺跡の竪穴住居跡との対比が行われ、第 3 次調査 SI1 竪穴住居跡は規模がやや大きいものの、平面形状が楕円形を呈し、地床炉を持つことや床面の状況などから、後期の竪穴住居跡と同じ特徴を持つとされている（仙台市教育委員会 2009）。長町駅東遺跡で検出された竪穴住居跡と性格不明遺構・竪穴遺構では、第 3 次調査 SX3 性格不明遺構を除き、平面形状に大きな違いがみられる。この違いが遺構の性格によるものか、時期差によりものかは判然としない。ただし、第 10 次調査 SX2 竪穴遺構は炉跡と考えられる焼土遺構が検出されていることから、隅丸方形を基調とする性格不明遺構・竪穴遺構には炉跡が伴っていた可能性があり、竪穴住居跡の機能を持っていたと推定される。このため、平面形状の違いが時期差である可能性を考える必要があるが、仙台市内では弥生時代の竪穴住居跡は検出例が少ないため、今後の調査による資料の増加をまって再度検討を行いたい。

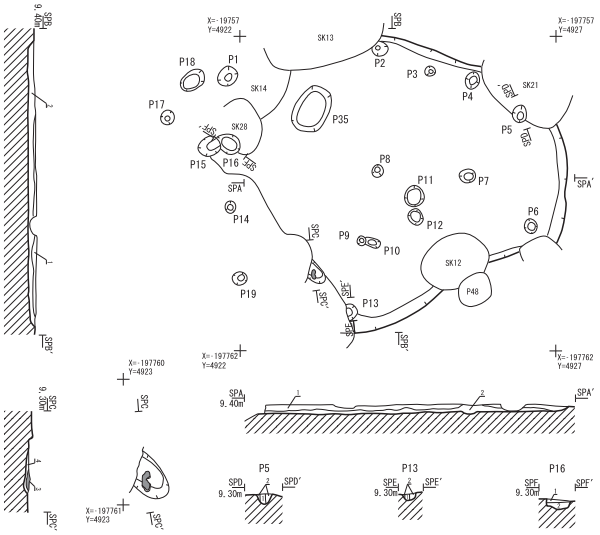


長町駅東遺跡弥生時代竪穴住居跡・性格不明遺構・竪穴遺構観察表

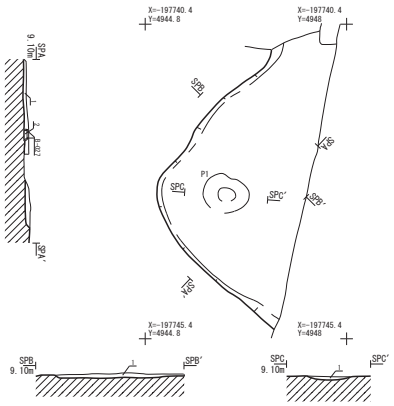
遺構番号	種別	平面形状	規模			施設			時期区分	備考
			長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	ピット	土坑	炉跡		
3次SI1	竪穴住居跡	不整楕円形	600以上	460	16	20	—	有	桝形囲式期	ピット8基が壁面に沿って一定の間隔で並ぶ。 ピット2基から柱痕跡が検出された。
3次SX1	性格不明遺構	隅丸長方形	400以上	300以上	10	1	—	—	桝形囲式期	
3次SX2	性格不明遺構	隅丸方形or 隅丸長方形	464以上	322	16	1	—	—	桝形囲式期	
3次SX3	性格不明遺構	円形or 楕円形	506	142以上	11	—	—	—	桝形囲式期	
10次SX1	竪穴遺構	隅丸方形or 隅丸長方形	540	350以上	4～7	—	1	—	桝形囲式期	土坑内から灰白色粘土が出土。
10次SX2	竪穴遺構	（隅丸方形）	320	260以上	2～3	1	—	有	桝形囲式期	焼土遺構検出。

第 198 図　長町駅東遺跡弥生時代竪穴住居跡・性格不明遺構・竪穴遺構配置図

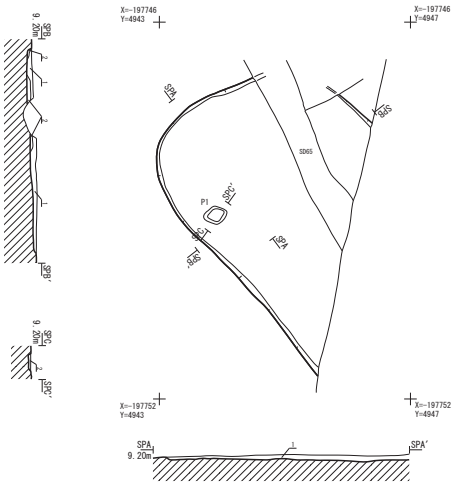
3次調査SI1



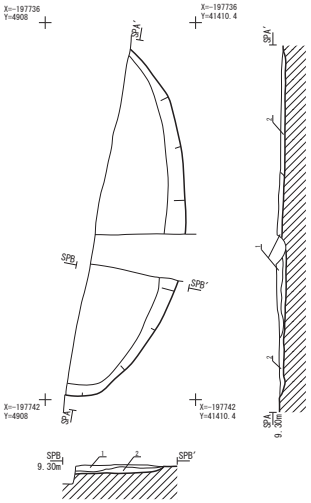
3次調査SX1



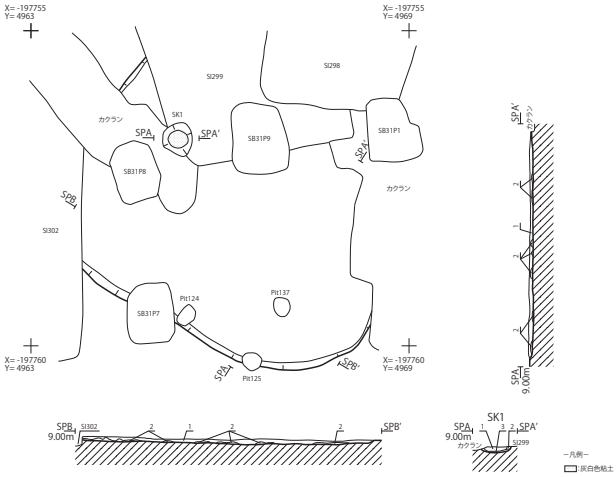
3次調査SX2



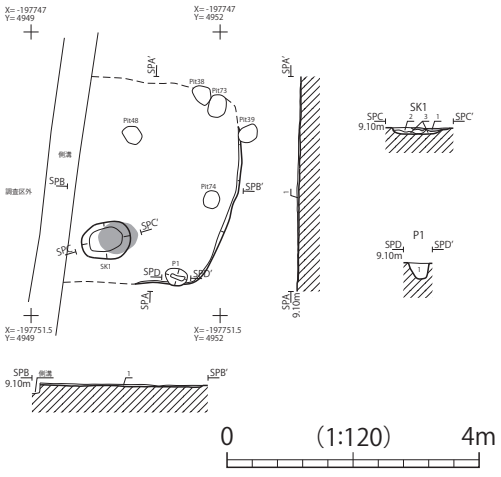
3次調査SX3



10次調査SX1



10次調査SX2



第 199 図　長町駅東遺跡弥生時代竪穴住居跡・性格不明遺構・竪穴遺構集成

（2）土器埋設遺構・土壙墓（第 200 ～ 203 図）

長町駅東遺跡では、これまでの調査で土器埋設遺構 8 基と土壙墓 2 基が検出されている。いずれの遺構も出土土器から弥生時代中期中葉の桝形囲式期に帰属するものと考えられている。

第 2 次調査 SK5 土器埋設遺構

これまでのところ、長町駅東遺跡の中で最も南側に位置する土器埋設遺構で、第 4 次調査 SK212・213 土器埋設遺構から南へ 210m ほど離れている。掘り方底面の北西側に径 30cm、深さ 18cm 程の窪みがあり、この中に壺の上半部が逆位に埋設されている。このほか、土坑の堆積土中から壺や深鉢、甕、蓋、剥片石器、石核が出土している。

第 3 次調査 SK7・8・9 土器埋設遺構

南北にそれぞれ 60 ～ 80cm 前後離れて検出されている。いずれも埋設された土器より一回り大きな掘り方を持つ。第 3 次調査 SK7 土器埋設遺構は、口縁部を北東に向けた壺と口縁部を南西に向けた甕が横位に埋設されており、甕の口縁部直上からは完形の蓋が正位の状態で出土している。遺物の出土位置関係から、甕と蓋のセット関係が窺われる。第 3 次調査 SK8 土器埋設遺構は、口縁部を南西に向けた壺が横位に埋設されている。第 3 次調査 SK9 土器埋設遺構は、壺の下半部が正位に埋設されている。上半部の破片は、本遺構の約 2 m北西から纏まって出土したほか、約 17 m南の D 区南端からも出土した。なお、これら土器埋設遺構の西側には、竪穴住居跡の可能性が指摘されている第 3 次調査 SX3 性格不明遺構が隣接している。

第 3 次調査 SK31 土器埋設遺構

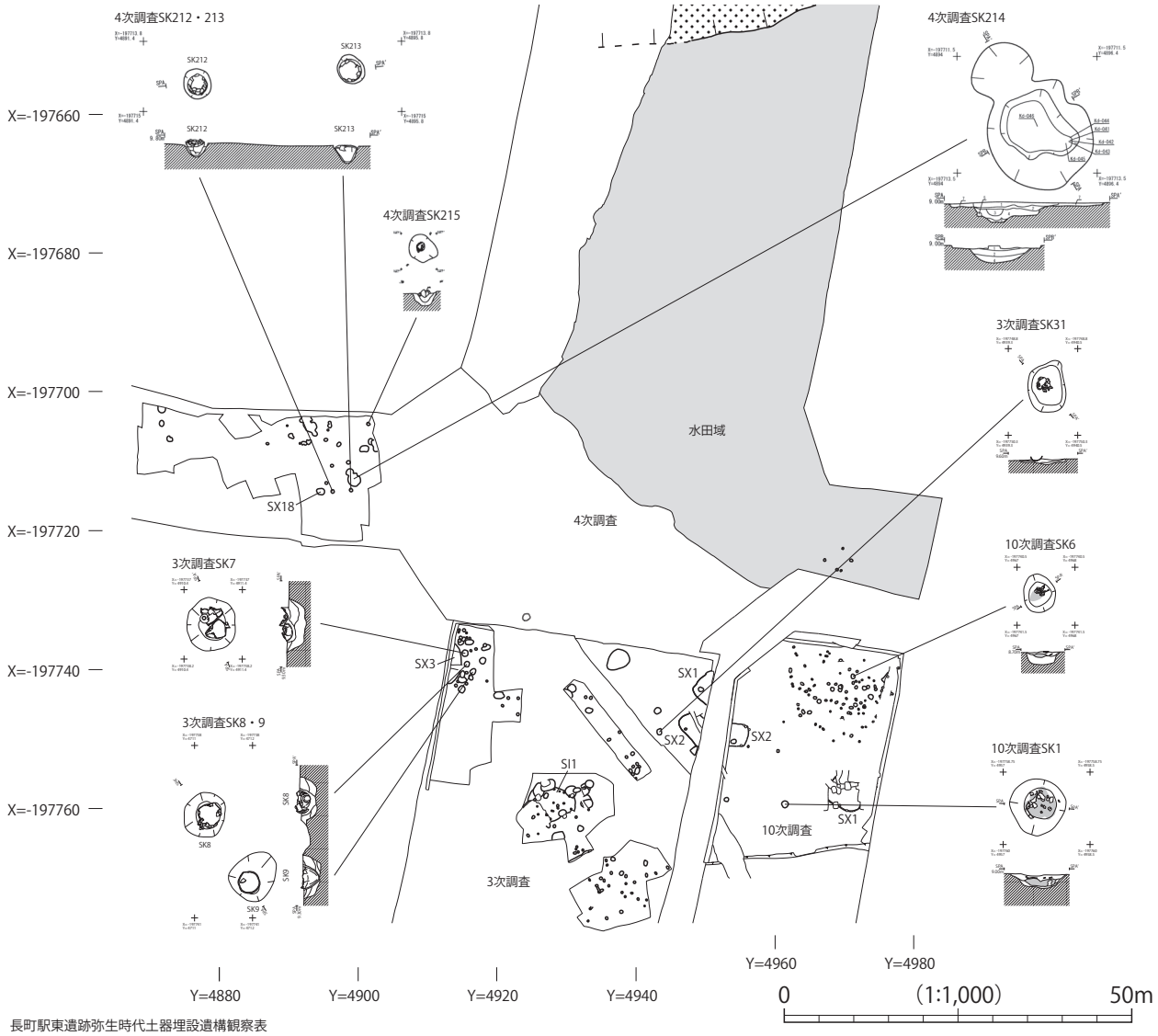
土坑状の掘り方に口縁部を北東に向けた小型の甕が横位に埋設されている。堆積土から蓋が出土しており、第 3 次調査 SK7 土器埋設遺構と同様に、甕と蓋のセット関係が窺われる。なお、本遺構の東側には、竪穴住居跡の可能性が指摘されている第 3 次調査 SX1・2 性格不明遺構が隣接している。

第 4 次調査 SK212・213 土器埋設遺構

東西に 220cm 前後離れて検出されている。ともに掘り方は埋設された壺の大きさと形状を意識したもので、頸部以上を打ち欠いたやや大型の壺が正位に埋設されている。第 4 次調査 SK212 土器埋設遺構は、壺の直上から甕の下半部が出土しており、壺と合わせ口の状態であったと推定されている。壺の底部には焼成後に穿孔されている。第 4 次調査 SK213 土器埋設遺構は、壺の直上から蓋が出土しており、蓋を用いて壺を閉塞していたものと推定されている。壺内の底面から凝灰質頁岩製の石鏃 1 点が出土している。なお、周囲には第 4 次調査 SK214 土壙墓や、土壙墓の可能性が指摘されている第 4 次調査 SX18 性格不明遺構が存在する。

第 4 次調査 SK215 土器埋設遺構

掘り方底面から 14cm ほど浮いて、口縁部を南西に向けた小型の壺が横位に埋設されている。壺底部の残存状況は悪いものの、底部が穿孔されていた可能性がある。埋設された小型の壺は、口縁部が受口状を呈し、最大径を胴部のほぼ中央に持つもので、桝形囲式にはあまり類例がなく、福島県の中期中葉に近似資料があるとされている。隣接する第 4 次調査 SK212・213 土器埋設遺構とは、埋設された土器や埋設状況が異なり、埋設土器とは性格の違いがあることも想定されている。



長町駅東遺跡弥生時代土器埋設遺構観察表

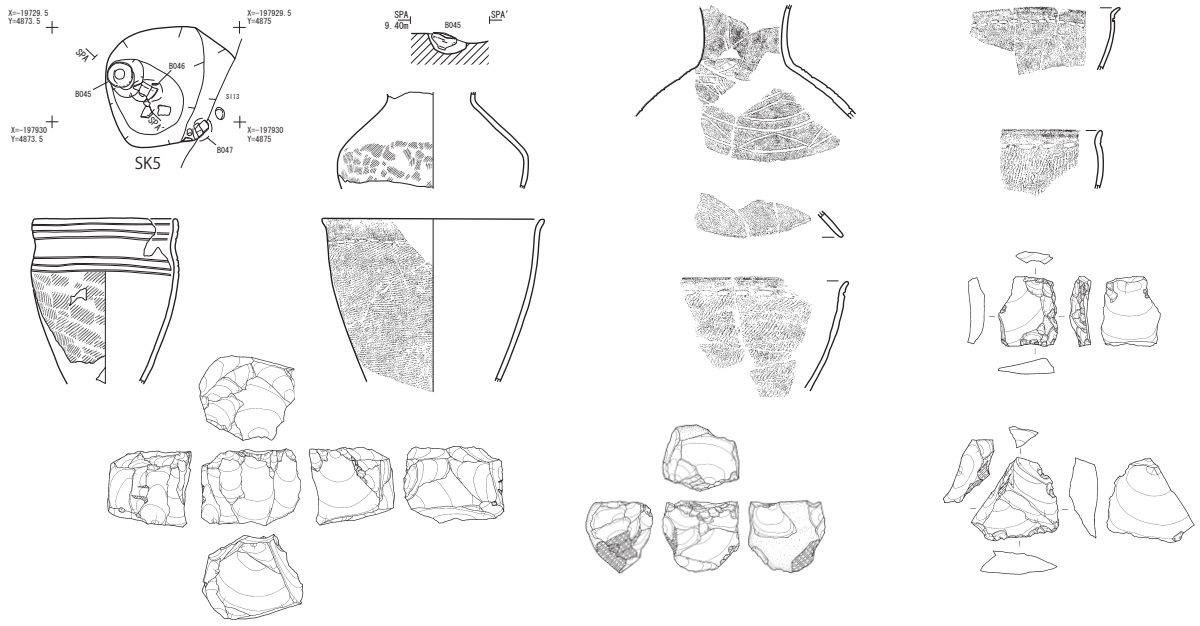
遺構番号	種別	平面形状	規模(cm)		備考
			長軸×短軸	深さ	
2次SK5	土器埋設遺構	円形or楕円形	100以上×90	40	掘り方底面の北西側に窪みがあり、その中に壺の上半部が逆位に埋設されている。堆積土中から壺や深鉢、甕、蓋、剥片石器、石核が出土している。
3次SK7	土器埋設遺構	円形	90×89	33	口縁部を北東に向けた壺と口縁部を南西に向けた甕が横位に埋設されており、甕の口縁部直上からは完形の蓋が正位の状態で出土している。遺物の出土位置関係から、甕と蓋のセット関係が窺われる。
3次SK8	土器埋設遺構	円形	85×72	40	口縁部を南西に向けた壺が横位に埋設されている。
3次SK9	土器埋設遺構	円形	85×67	33	壺の下半部が正位に埋設されている。上半部の破片は、本遺構の約2m北西から纏まって出土したほか、約17m南のD区南端からも出土した。堆積土からは壺の底部破片が出土している。
3次SK31	土器埋設遺構	楕円形	92×65	9	口縁部を北東に向けた小型の甕が横位に埋設されている。堆積土からは蓋が出土しており、SK7と同様に、甕と蓋とのセット関係が窺われる。
4次SK212	土器埋設遺構	円形	54×46	35	頸部以上を打ち欠いたやや大型の壺が正位に埋設されている。壺の底部には焼成後に径3cm程の穿孔が穿たれている。壺の直上から甕の下半部が出土しており、合口の状態であったと推定されている。
4次SK213	土器埋設遺構	円形	56×42	30	頸部以上を打ち欠いたやや大型の壺が正位に埋設されている。壺の直上から蓋が出土しており、壺を閉口していたと推定されている。壺内の底面から石鏃1点が出土している。
4次SK215	土器埋設遺構	楕円形	51×42	24	掘り方底面から14cmほど浮いて、口縁部を南西に向けた小型の壺が横位に埋設されている。壺底部の残存状況は悪いものの、底部が穿孔されていた可能性がある。
10次SK1	土器埋設遺構	円形	99×92	25	灰白色粘土層上面に壺や小型土器の破片が散乱している状態で出土した。
10次SK6	土器埋設遺構	円形	66×56	22	灰白色粘土層上面から口縁部を北東に向けた壺が埋設されている。

長町駅東遺跡弥生時代土壙墓観察表

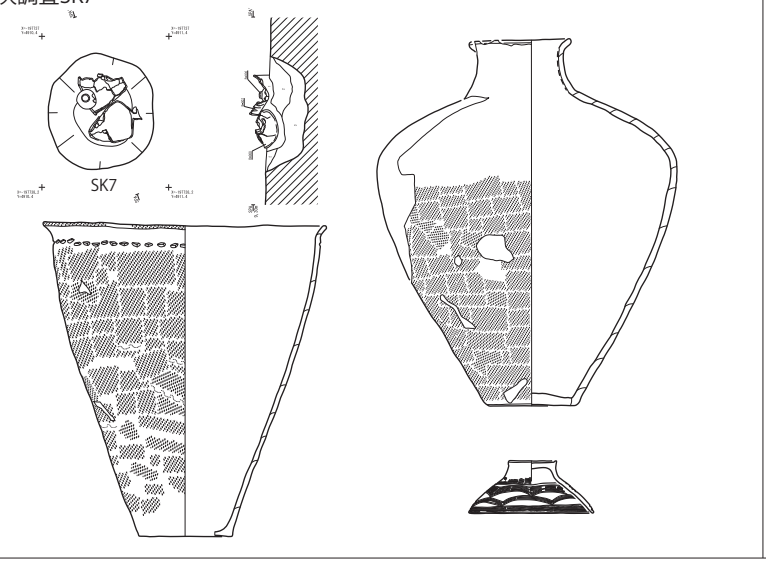
遺構番号	種別	平面形状	規模(cm)		備考
			長軸×短軸	深さ	
4次SK214	土壙墓	不整形	270×175	38	碧玉製管玉11点が出土している。
4次SX18	性格不明遺構	不整形	125×90	30	土壙の規模がSK214土壙墓の窪み部分と同程度であることと、土器埋設遺構や土壙墓に近在することから、埋蔵目的の遺構である可能性が高いとされている。

第 200 図　長町駅東遺跡弥生時代土器埋設遺構・土壙墓配置図

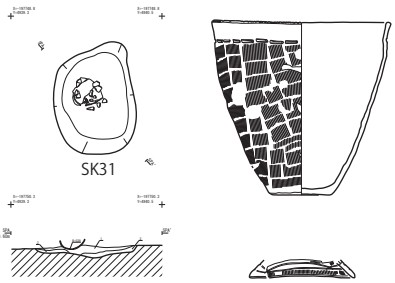
2次調査SK5



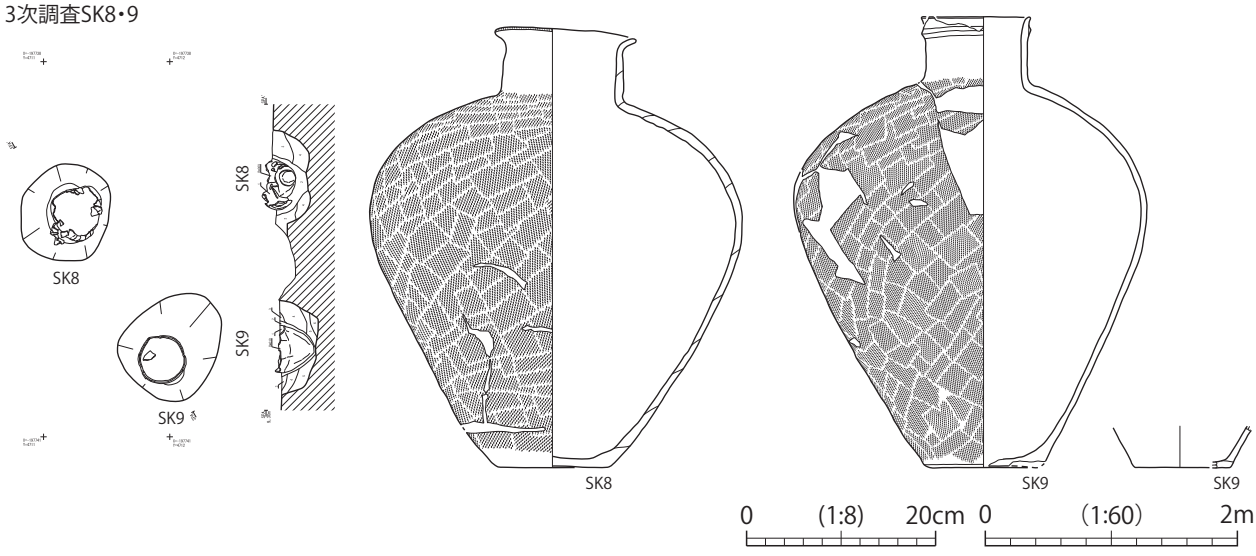
3次調査SK7



3次調査SK31

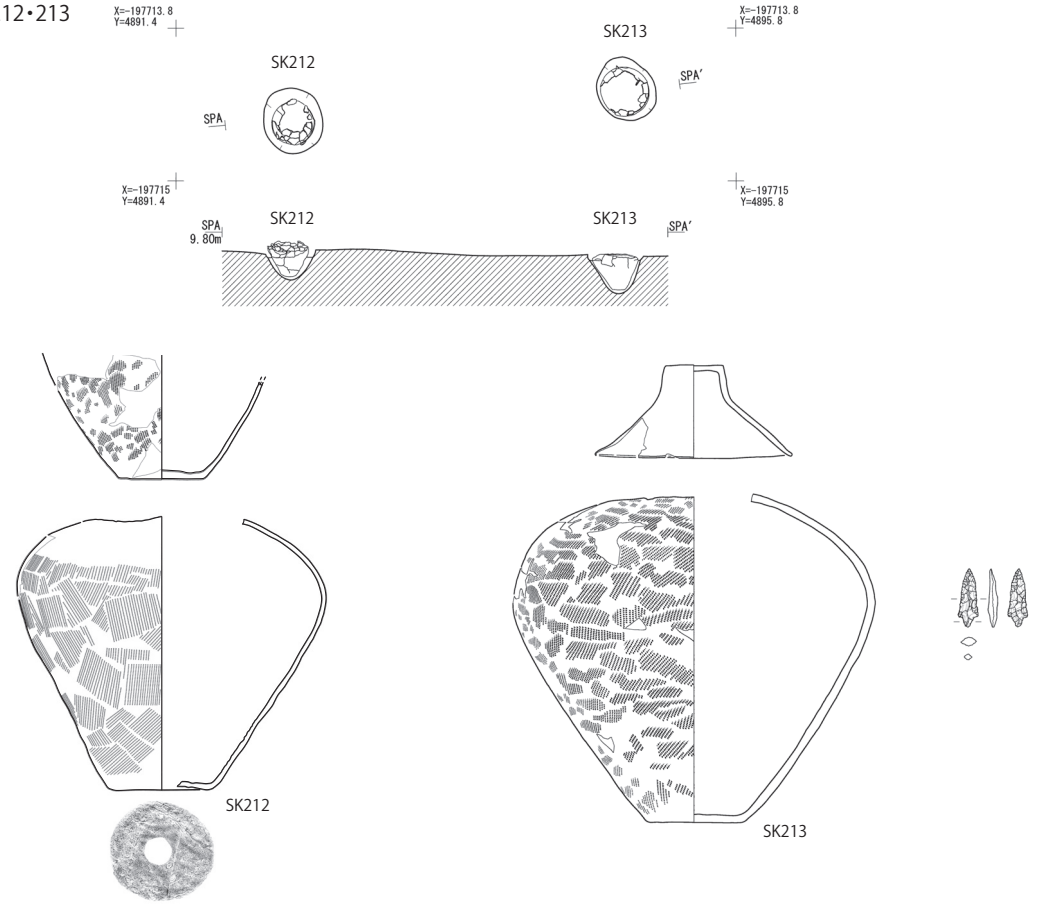


3次調査SK8・9

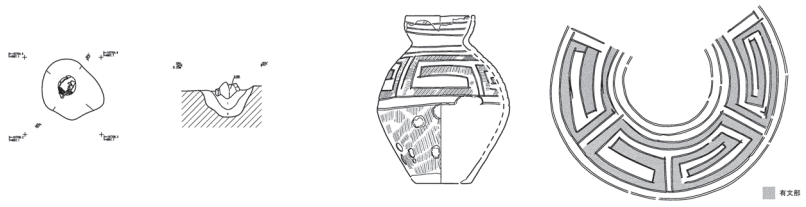


第 201 図　長町駅東遺跡弥生時代土器埋設遺構集成（1）

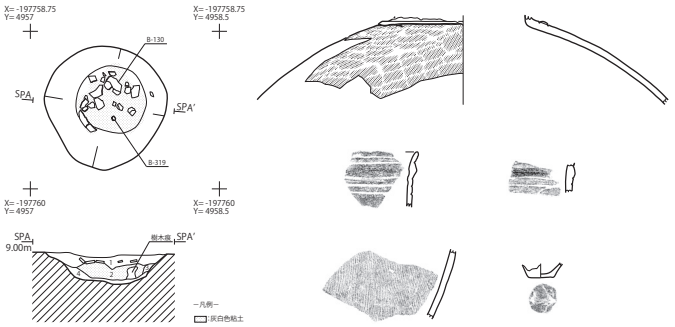
4次調査SK212・213



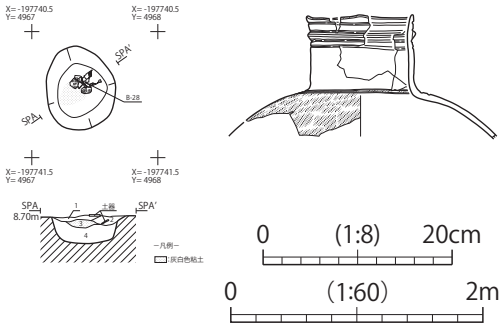
4次調査SK215



10次調査SK1



10次調査SK6



第 202 図　長町駅東遺跡弥生時代土器埋設遺構集成（2）

第 10 次調査 SK1・6 土坑

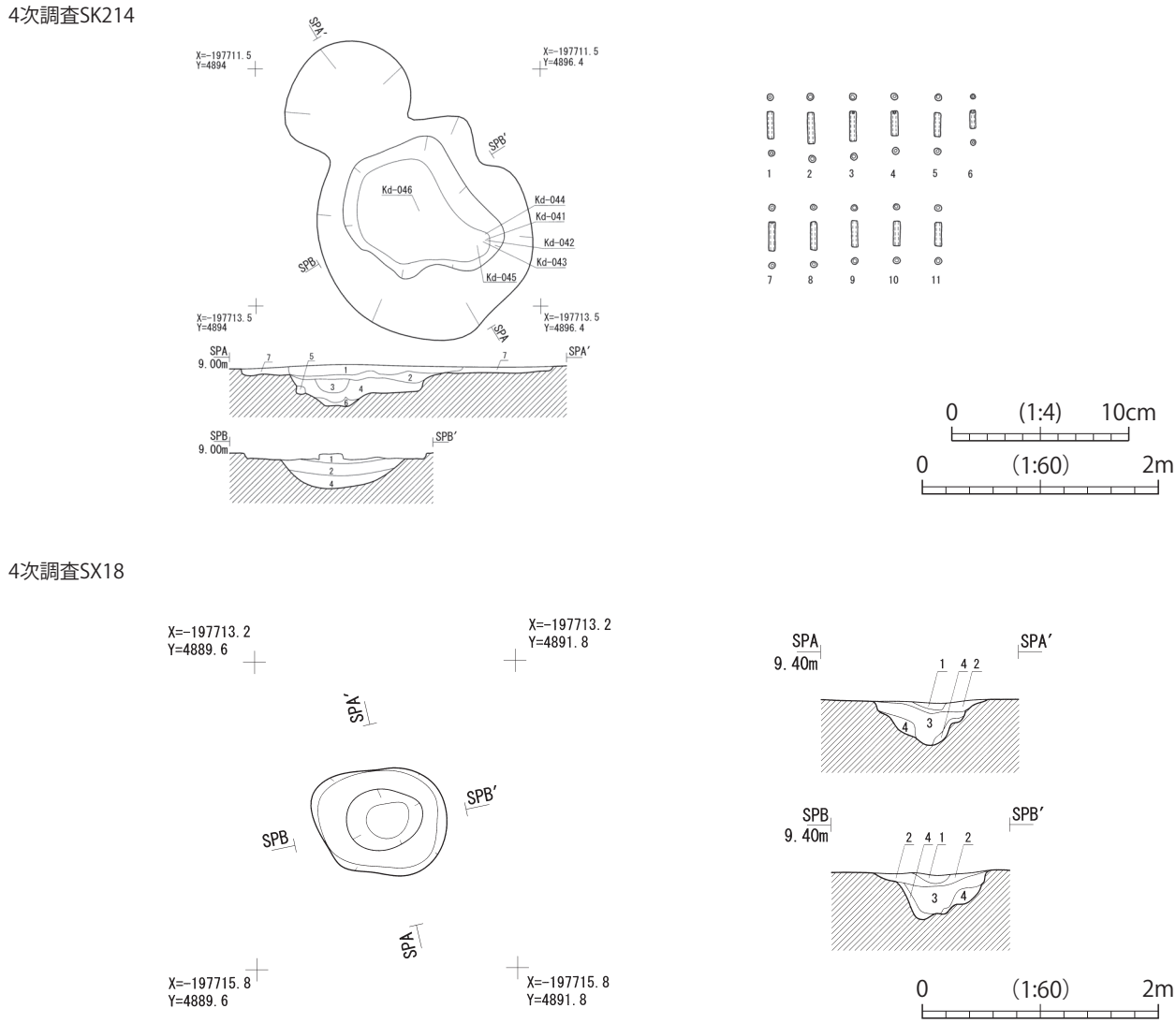
土坑堆積土内に灰白色粘土塊が埋納されており、その上面から土器が出土しているものである。第 10 次調査 SK1 土坑は、壺や小型土器の破片が散乱している状態で出土している。第 10 次調査 SK6 土坑は、壺の上半部が口縁部を北東に向けた横位の状態で埋設されている。

第 4 次調査 SK214 土壙墓

第 4 次調査 SK213 土器埋設遺構とは 40cm 前後、第 4 次調査 SK212 土器埋設遺構とは 240cm 前後の距離に位置する。平面形状は不整形で、土坑外縁が浅くテラス状を呈し、中央付近に窪みを持つ。堆積土中から副葬品と考えられる碧玉製管玉が 11 点出土している。

第 4 次調査 SX18 性格不明遺構

形状と規模が第 4 次調査 SK214 土壙墓の窪み部分と似ており、土器埋設遺構や土壙墓に近在することから埋葬目的の遺構である可能性が高いとされている。



第 203 図　長町駅東遺跡弥生時代土壙墓集成

長町駅東遺跡で検出された土器埋設遺構は、いずれも埋葬に関わる施設と考えられるが、掘り方の形状や埋設される土器の器種と個体数、埋設方法に違いがみられ、その組み合わせにより 3 種に分類される。それぞれの特徴は以下の通りである。

①埋設される土器とほぼ同じ大きさの掘り方を持ち、正位に埋設された壺と蓋または甕の下半部が合わせ口の状態であったと考えられるもの（第 4 次調査 SK212・213 土器埋設遺構）。
②埋設される土器より一回り大きな掘り方を持つもの。埋設される土器の器種と個体数、埋設状態により細分され、壺 1 個体が正位に埋設されるもの（第 3 次調査 SK9 土器埋設遺構）と横位に埋設されるもの（第 3 次調査 SK8 土器埋設遺構）、複数器種が埋設されるもの（第 3 次調査 SK7 土器埋設遺構）がある。
③土坑状の掘り方を持つもの。埋設される土器の器種と個体数、埋設状態により細分され、壺 1 個体が埋設されるもの（第 4 次調査 SK215 土器埋設遺構）と複数器種が埋設されるもの（第 2 次調査 SK5 土器埋設遺構、第 3 次調査 SK31 土器埋設遺構）、灰白色粘土塊が埋納されるもの（第 10 次調査 SK1・6 土坑）がある。

遺跡内における土器埋設遺構の分布状況をみると、①は第 4 次調査区で東西方向に並ぶのに対し、②は第 3 次調査区で南北方向に並ぶという規則性が認められ、③は点在している状況である。このような違いは、「自然地形や東側に作られた水田域との関係を考慮しなければならないが、この配列の違いに何らかの規則性があると想定され」ている（仙台市教育委員会 2009）。

仙台平野における弥生時代中期中葉の墓制は、単葬で、土器棺墓と土壙墓を基本としていると考えられている（佐藤 1989）。①は第 4 次調査 SK214 土壙墓や土壙墓の可能性が高いとされる第 4 次調査 SX18 性格不明遺構と 4m 四方の狭い範囲で検出され、相互に強い関連があるものと推定されるが、中在家南遺跡で検出されたような成人を埋葬したと考えられる土壙墓は認められない。②・③については、調査区の制限があり、今後の調査で土壙墓が検出される可能性もあるが、これまでのところ土壙墓は確認されていない。仙台市内では弥生時代の当概遺構は検出例が少ないため、今後の調査による資料の増加をまって再度検討を行いたい。

第 3 節　古代の遺物について（第 204 ～ 212 図）

第 10 次調査では、基本層Ⅳ層上面で検出した竪穴住居跡及び区画施設から土師器・須恵器が出土している。これらの土器は、器形や調整の特徴から、郡山Ⅰ官衙期の土器群、Ⅱ期官衙期の土器群、Ⅱ期官衙終末期以降の土器群に区分される。しかし、第 10 次調査では、検出された遺構に直接伴う遺物が少ないため、重複関係により帰属時期を推定した遺構が多く、時間幅の広いものとなっている。このため本節では、主要遺構重複関係模式図（第 204 図）と竪穴住居跡及び区画施設から出土した遺物の集成図（第 205 ～ 212 図）を掲載し、時期毎に特徴を記載する。

時期区分については、『長町駅東遺跡第 5・6・7・9 次発掘調査報告書』（仙台市教育委員会 2014）に準じ、時期区分及び年代の対応関係は、以下の通りである。

なお、第 10 次調査では、1 期の遺物は出土していない。

1 期：引田式期　・・・・・・・・・・・・・・・・・　古墳時代中期（5 世紀中葉～末葉）
2 期：住社式期　・・・・・・・・・・・・・・・・・　古墳時代後期（6 世紀中葉～末葉）
3 期：栗囲式期　・・・・・・・・・・・・・・・・・　古墳時代終末期（7 世紀初頭～前葉）
4 期：郡山Ⅰ期官衙期　・・・・・・・・・・・・・・　古墳時代終末期（7 世紀中葉～後葉）

5 期：郡山Ⅱ期官衙期　・・・・・・・・・・・・・・　古墳時代終末期（7 世紀末葉～ 8 世紀初頭）
6 期：郡山Ⅱ期官衙終末期以降　・・・・・・・・・・　奈良時代（8 世紀前葉～末）2 時期に細分される。
前半を「6a」、後半を「6b」とした。

4 期及び 4 期以前：郡山Ⅰ期官衙期及びそれ以前の土器

SI306 竪穴住居跡の P4 から土師器坏（C-58）1 点が出土している。いわゆる有段丸底坏で、口縁部と体部の境には、外面に明瞭な段、内面に稜を持つことから、4 期の中でも古い特徴を持つものと考えられる。調整は、外面は口縁部がヨコナデ、体部から底部にかけてはヘラケズリが施されている。内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。このほか、SI293A 竪穴住居跡の P5 から出土した土師器甕（C-25）や SI304 竪穴住居跡の床面直上及びカマド底面から土師器甕（C-71・72）が出土している。いずれも土師器坏が伴っていないため、明確な時期は不明であるが、SI293A 竪穴住居跡の土師器甕（C-25）は、大型の球胴形を呈することから、4 期以前とした。

5 期：郡山Ⅱ期官衙期の土器

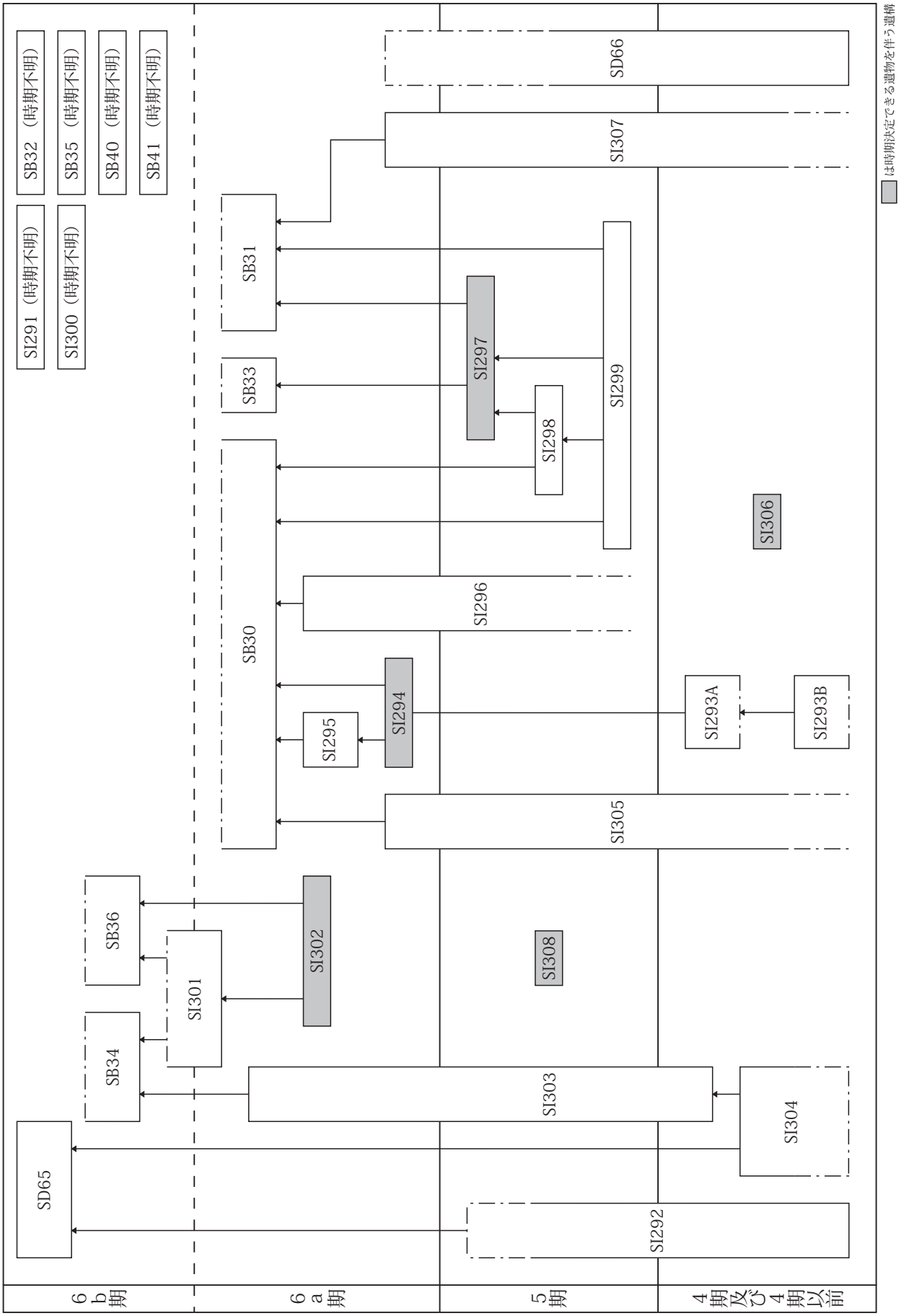
SI297 竪穴住居跡、SI298 竪穴住居跡、SI308 竪穴住居跡の床面及び床面直上、床面施設から出土した土師器坏と土師器甕がある。土師器坏は、底部が平底状の丸底で、口縁部が内湾気味に外傾するもの（SI308 竪穴住居 C-76）と底部から体部が扁平に内湾し、口縁部が内湾気味に大きく開くもの（SI297 竪穴住居 C-40、SI308 竪穴住居 C-75・85）がある。前者は内外面に黒色処理が施されている。後者はいわゆる有段丸底坏で、口縁部が内湾気味に外傾するもの（SI308 竪穴住居 C-75・85）と外傾するもの（SI297 竪穴住居 C-40）がある。口縁部が内湾気味に外傾するものは、口縁部と体部の境が沈線状を呈し、口径 16.9cm の大型品（SI308 竪穴住居 C-75）と口径 13.4cm の中型品（SI308 竪穴住居 C-85）があり、法量の分化がみられる。調整は、外面は口縁部がヨコナデ、体部から底部にかけてヘラケズリが施され、口縁部にヘラケズリが及ぶもの（SI308 竪穴住居 C-75・85）や体部にヘラミガキが施されるもの（SI297 竪穴住居 C-40）があり、4 期の土師器坏とは異なる様相を示している。土師器甕は、最大径が口縁部にあるもの（SI308 竪穴住居跡 C-77・84）、胴部中位にあるもの（SI298 竪穴住居跡 C-47）、口径と胴部径がほぼ同じもの（SI298 竪穴住居跡 C-48）など器形に多様性がみられる。

6a 期：郡山Ⅱ期官衙終末期以降前半

SI294 竪穴住居跡、SI302 竪穴住居跡の床面直上及び床面施設から出土した土師器坏と須恵器脚付盤ないし盤がある。土師器坏は、器形に多様性がみられ、平底のもの（SI294 竪穴住居跡 C-31）、丸底状の平底（SI302 竪穴住居跡 C-54）、丸底と推定されるもの（SI302 竪穴住居跡 C-53）がある。平底のものは、いわゆる有段丸底坏が皿状に変化したものである。丸底状の平底のものは、口縁部が直線的に外傾する器形を呈し、底部の器厚が厚い。体部から底部のヘラケズリ調整が部分的に口縁部にまで及んでいる。丸底と推定されるものは、体部から口縁部にかけて内湾気味に外傾する器形を呈し、内外面とも黒色処理が施されている。

6b 期：郡山Ⅱ期官衙終末期以降後半

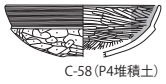
遺構に直接伴う遺物はないが、SI301 竪穴遺構の掘り方から須恵器高台付坏（E-5）1 点が出土している。底部は平底で、体部は直線的に外傾する。高台は底部縁辺に貼り付けられ、高台端部は沈線状に窪む。



第 204 図　第 10 次調査主要遺構重複関係模式図

4 期以前

SI306

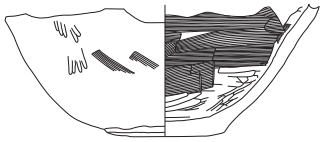


C-58（P4堆積土）

---

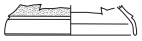
4 期以前

SI293A



C-25（P5堆積土）

C-26（堆積土）

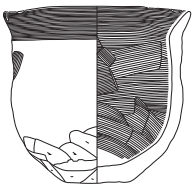


E-6（堆積土）

---

4 期以前

SI304



C-72（カマド底面）

C-71（床面直上）

C-56（堆積土上層）

C-57（堆積土下層）

C-55（堆積土下層）

C-70（堆積土下層）

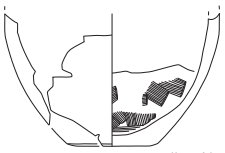
---

4 期以降

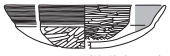
SI292

C-12（掘り方）

C-9（掘り方）



C-8（掘り方）



C-10（堆積土上層）

C-11（堆積土下層）

C-7（堆積土）

---

4 ～ 6a 期

SI307

C-73（掘り方）

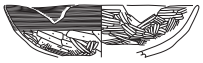
C-63（堆積土）

0　(1:6)　20cm

第 205 図　第 10 次調査竪穴住居跡出土土器（1）

5 期

SI297



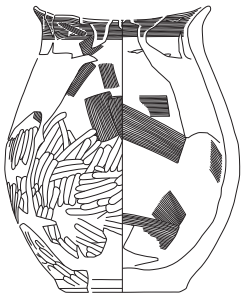
C-40（床面直上）

C-39（堆積土）

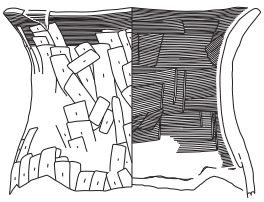
---

5 期

SI298



C-47（床面直上）

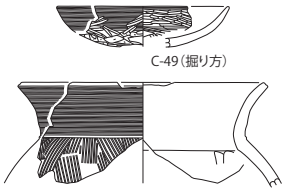


C-48（床面直上）

---

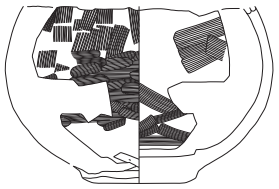
5 期

SI299



C-49（掘り方）

C-51（掘り方）

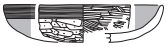


C-50（掘り方）

---

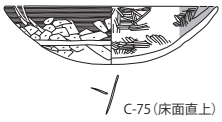
5 期

SI308

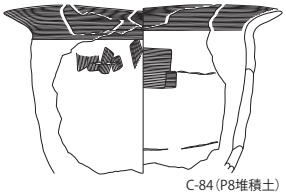


C-76（床面）

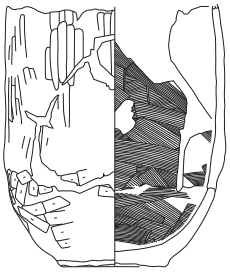
C-85（P7堆積土）



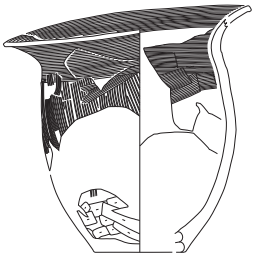
C-75（床面直上）



C-84（P8堆積土）



C-78（床面）

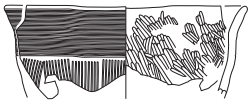


C-77（床面）

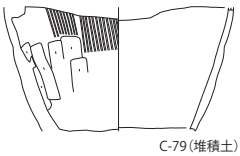
C-80（掘り方）

C-83（掘り方）

C-81（掘り方）



C-82（掘り方）



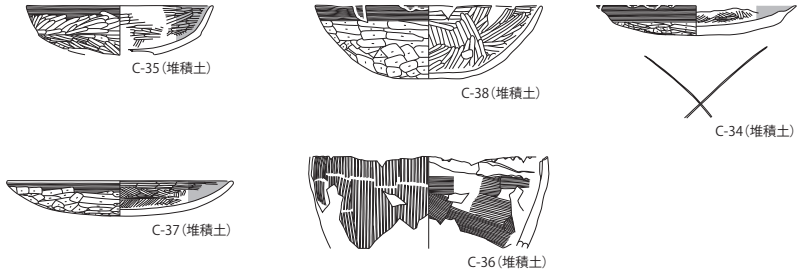
C-79（堆積土）

0 (1:6) 20cm

第 206 図　第 10 次調査竪穴住居跡出土土器（2）

5 ～ 6a 期

SI296



6a 期

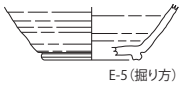
SI294

6a 期

SI302

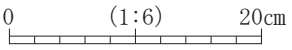
6b 期

SI301

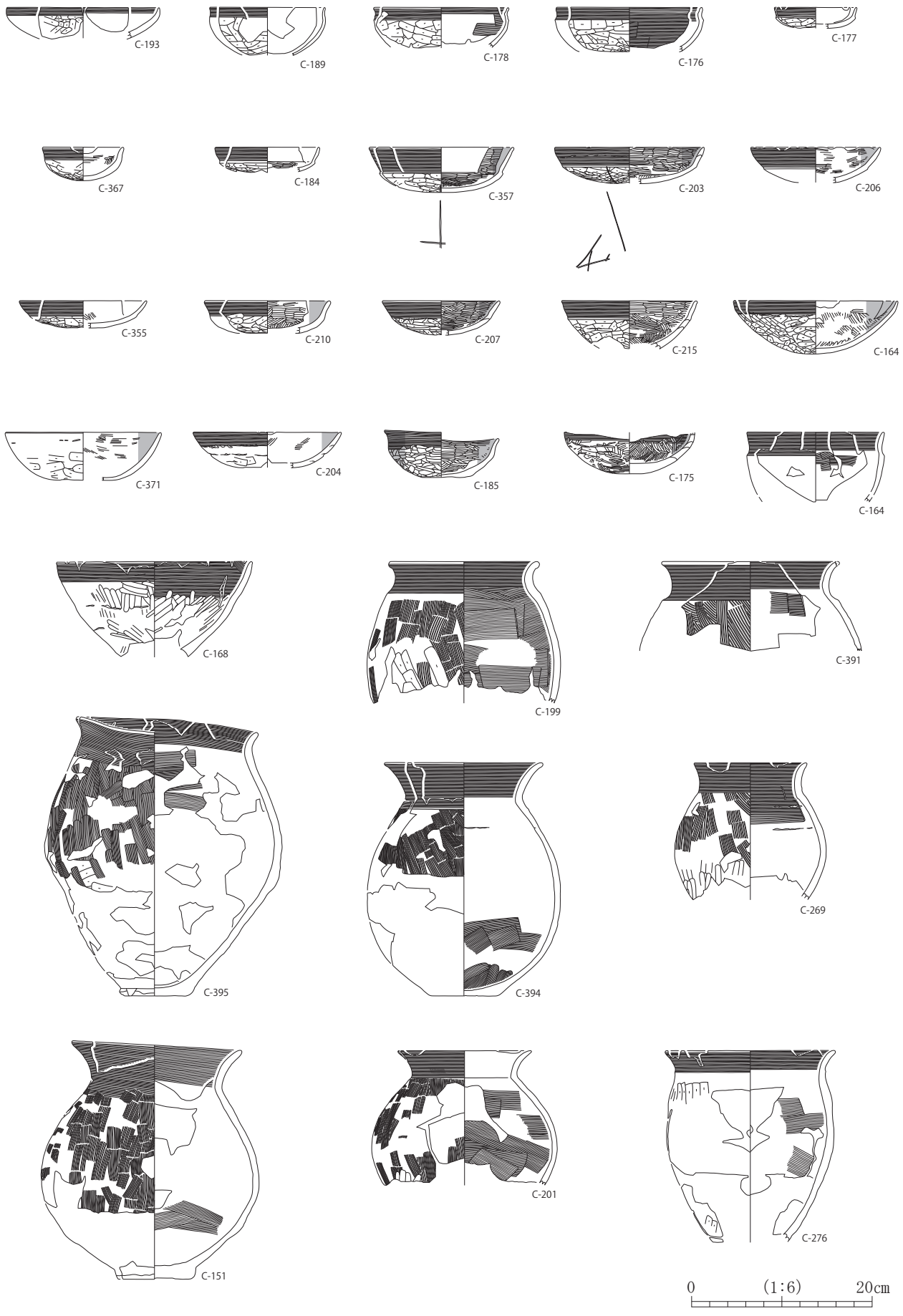


時期不明

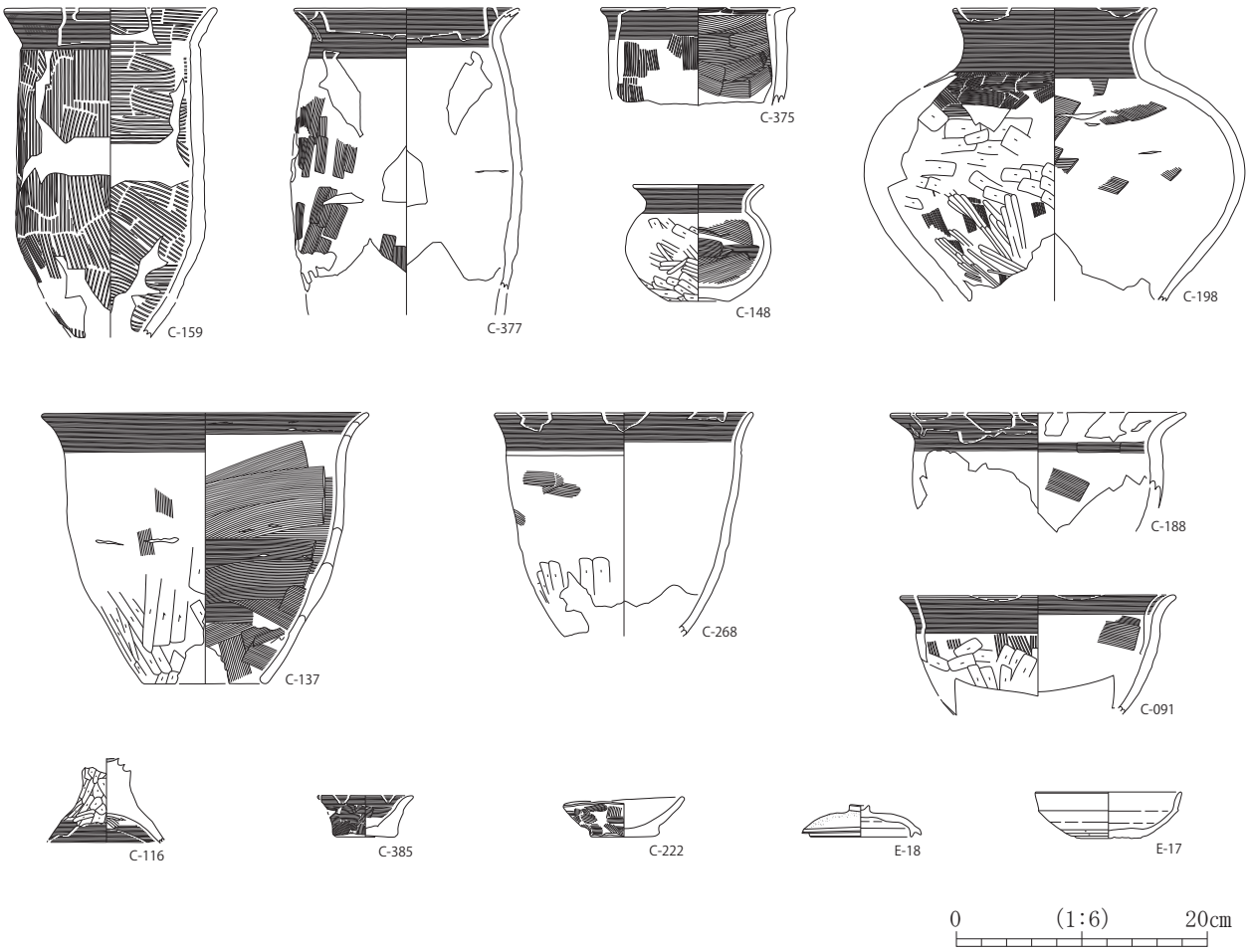
SI291



第 207 図　第 10 次調査竪穴住居跡出土土器（3）



第 208 図　第 10 次調査 SD66 出土土器集成（堆積土上層①）



第 209 図　第 10 次調査 SD66 出土土器集成（堆積土上層②）

SD66 溝跡（区画施設）出土遺物

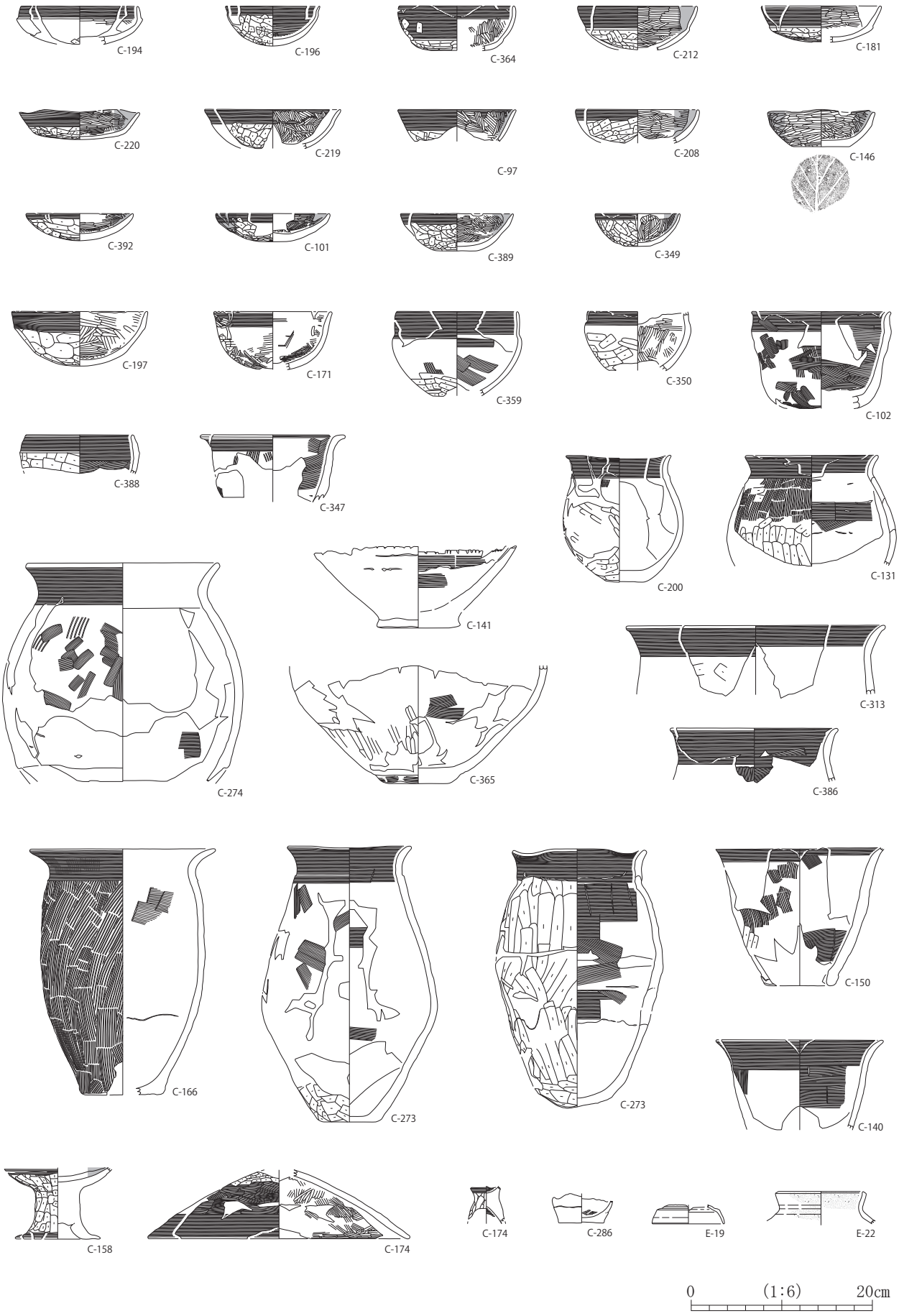
SD66 溝跡からは、土師器・須恵器をはじめ多量の遺物が出土している。堆積土は 4 層に大別され、出土遺物は、堆積土上層（1 層）・中層（2 層）・下層（3 層下部～ 4 層上面）・底面直上出土に大別して取り上げを行っている。

溝跡の構築期に近い時期の遺物としては、底面直上から出土した土師器高坏（C-398）がある。脚部のみの出土ではあるが、外面が赤彩されており、長方形の透孔を 4 ヶ所持つ。器形の特徴から郡山Ⅱ期官衙期に帰属するものと考えられる。このほか、口縁部と体部の境に段を持ち、底部が平底の器形を呈する土師器坏（C-370）がある。底面には木葉痕がみられ、注目される。

溝跡の機能低下時期の遺物としては、堆積土下層出土遺物がある。溝跡底面を覆う 4 層が自然堆積した後に完形品や略完形品が大量に廃棄されており、それらを覆う様に 3 層による埋め戻しが行われている。この段階で、溝跡の大半が埋没していることから、区画施設としての機能が低下したものと推定されるが、埋め戻しは区画施設の内側から行われていることから、新規の竪穴住居跡などの構築により排出された土砂によるものと考えられ、前代の遺物が多量に混入しているものと考えられる。このため、区画施設としての機能低下時期を明確にできる遺物は確認できていない。

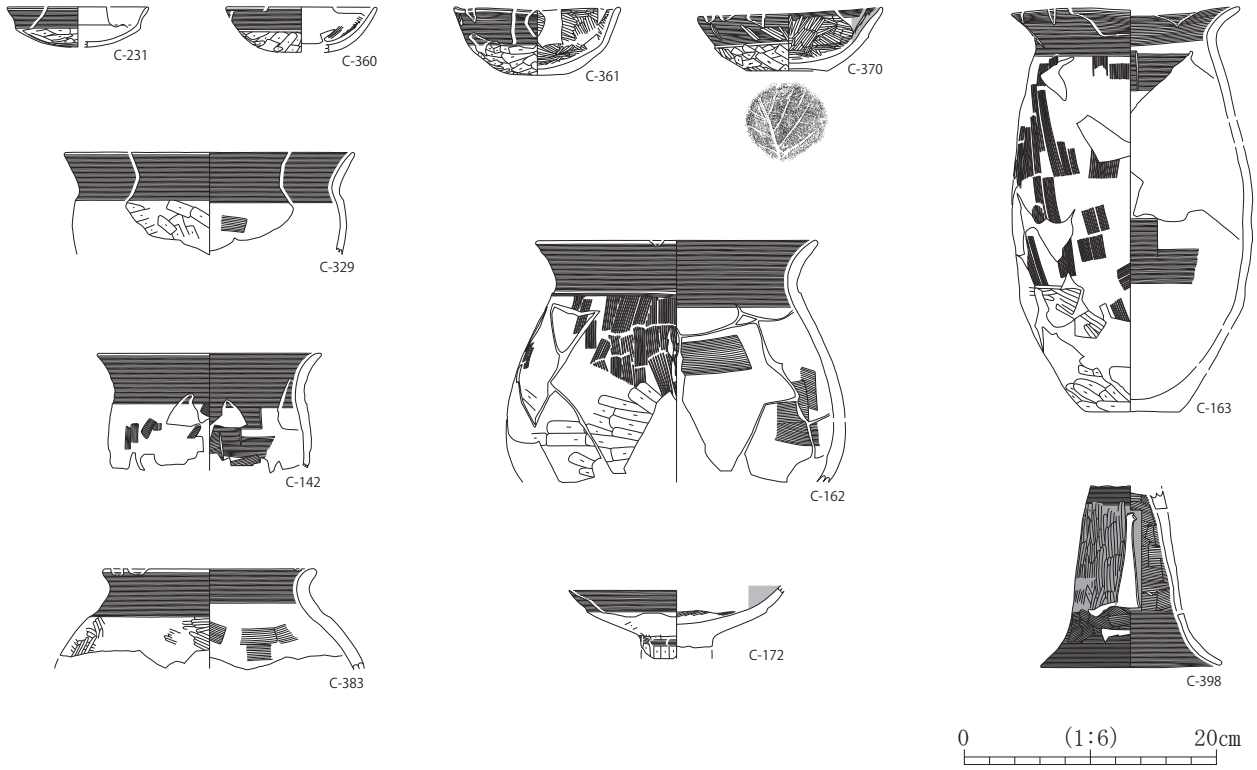
溝跡の廃絶時期については、調査区の大半が削平により失われているため、堆積土上層の遺物が廃絶時期に直結しないものと考えられる。

このほか、堆積土中層から上層にかけて、多くの羽口が出土している。このため、今後の調査で鍛冶関連遺構の検出が想定される。



第 210 図　第 10 次調査 SD66 出土土器集成（堆積土中層）

第 211 図　第 10 次調査 SD66 出土土器集成（堆積土下層）



第 212 図　第 10 次調査 SD66 出土土器集成（底面直上）

第 4 節　古代の遺構について（第 213 ～ 220 図）

(1) 竪穴住居跡・竪穴遺構（第 213 図）

第 10 次調査では、竪穴住居跡・竪穴遺構が 19 軒検出された。これらの竪穴住居跡の構造に関わる属性を整理し、一覧表にまとめた。撹乱による削平や遺構の重複により竪穴住居跡全体が検出されたものは少ないが、平面形状・規模、主軸方向、柱穴構造、カマド、その他の施設の特徴について記載する。

a. 平面形状・規模

検出された竪穴住居跡・竪穴遺構 19 軒のうち、平面形状が判るもの、または推定できるものは 18 軒である。いずれも方形または隅丸方形を基調とするが、5 期以降の SI299 竪穴住居跡と 6b 期以降の SI301 竪穴遺構は長方形を呈する。規模が判る竪穴住居跡うち、最大の SI292 竪穴住居跡は一辺 800cm で、最小の SI300 竪穴住居跡は一辺 213cm である。規模の割合をみると、一辺 450 ～ 510cm の竪穴住居跡が 8 軒と主体を占め、一辺が 365 ～ 420cm の竪穴住居跡が 4 軒、一辺が 608 ～ 689cm の竪穴住居跡・竪穴遺構が 3 軒、一辺が 280 ～ 290cm の竪穴住居跡が 2 軒、一辺 800cm の竪穴住居跡が 1 軒である。詳細な帰属時期が不明な竪穴住居跡・竪穴遺構が多いため、時期毎の規模に明確な違いは確認できないが、小型の竪穴住居跡は 6 期以降に出現する可能性が考えられる。

b. 主軸方向

カマドを基準とした主軸方向が判る竪穴住居跡は 7 軒（SI293A・294・296・299・302・304・308）である。このうち、帰属時期が特定された竪穴住居跡は 3 軒（SI294・302・308）のみで、5 期の SI308 竪穴住居跡は N － 26° － W、6a 期の SI294・302 竪穴住居跡は N － 84 ～ 89° － E である。

c. 柱穴構造

検出された竪穴住居跡・竪穴遺構のうち、柱穴構造が判るもの、または推定できるものは 15 軒で、柱穴が確認できないものは 2 軒、不明なものは 2 軒である。柱穴構造が判るもの、または推定できるものうち、4 本柱穴のものは 11 軒（SI291・292・293A・293B・294・296・298・302・304・306・308）、1 本柱穴＋壁柱穴のもの、または推定できるものは 3 軒（SI295・297・300）、2 本柱穴のものは 1 軒（SI299）である。4 本柱穴のものには、周溝内に壁柱穴と考えられる小ピットを持つものが 1 軒（SI293A）ある。4 本柱穴の竪穴住居跡は、4 期から 6 期にかけて存在する。1 本柱穴＋壁柱穴の竪穴住居跡は、5 期の SI297 竪穴住居跡があり、6 期にも壁柱穴が検出されている竪穴住居跡があるが、4 期には確認されていない。2 本柱穴の竪穴住居跡は、5 期以降と考えられる SI299 竪穴住居跡の 1 軒のみである。以上のことから、10 次調査における当該期の柱穴構造は、4 本柱穴が普遍的な柱穴構造で、5 期を境に多様な柱穴構造に変化していく可能性が考えられる。

d. カマド

カマドは 7 軒の竪穴住居跡（SI293A・294・296・299・302・304・308）から 8 基検出された。造り替えが行われているのは 1 軒（SI294）のみで、2 基のカマドが検出されている。これらのカマドは、撹乱による削平や遺構の重複により全体が検出されたものは少ない。カマドの付設位置は、北壁が 4 基と最も多く、東壁が 3 基（造り替え含む）、西壁が 1 基で、壁面の中央付近に付設されている。カマド袖が残存しているものは、すべて盛土により構築されており、芯材として自然礫が用いられている SI308 竪穴住居跡や、芯材の抜き取り穴と考えられる小穴が検出された SI296 竪穴住居跡がある。燃焼部は大半が壁面の内側に位置し、土師器の小型甕を支脚として転用している SI304 竪穴住居跡がある。残存している煙道部は、長さ 91 ～ 132cm で、先端に向かってやや下り、煙出し部がピット状にやや窪むものである。

e. その他の施設

竪穴住居の施設としては、SI292 竪穴住居跡から間仕切り溝 2 条が検出されている。このほか SI294・302 竪穴住居跡からは、焼土や炭化物を多量に含む土坑が検出され、検出位置や堆積土の状況から、カマドに関連する施設と考えられる。

（2）掘立柱建物跡（第 214 図）

第 10 次調査では、掘立柱建物跡が 9 棟検出されている。このうち SB30 ～ 33 掘立柱建物跡は、掘立柱建物群を形成するものと考えられる。これらは規模が桁行 580 ～ 590cm で、主軸方向が N － 8° － W の SB30・31 掘立柱建物跡が南北に整然と並び、主軸方向が直交する SB32 掘立柱建物跡と部分的に検出された SB33 掘立柱建物跡で構成されている。各掘立柱建物跡の位置関係を柱痕跡間の距離でみると、SB30・31 掘立柱建物跡間は南北に 340 ～ 380cm 程度、SB31・32 掘立柱建物跡間は南北に 280cm 前後、SB30・31 掘立柱建物跡と SB33 掘立柱建物跡間は東西に 220 ～ 240cm 程度離れている。これらは位置関係や規模、主軸方向から同時期に存在していたと推定され、SB30・31 掘立柱建物跡には建て替えが認められることから、継続的に掘立柱建物群が形成されていたものと考えられる。これらの掘立柱建物群の帰属時期は特定できていないが、遺構の重複関係から 6a 期以降のものと考えられる。このほかの掘立柱建物跡としては、小型の総柱建物跡 2 棟（SB35・36）や、小型の側柱建物跡 3 棟（SB34・40・41）がある。SB36 掘立柱建物跡は、重複関係から 6b 期以降と考えられるが、主軸方向が掘立柱建物跡群と類似しているため、掘立柱建物跡群と何らかの関係が想定される。

長町駅東遺跡第 10・11 次調査　竪穴住居跡・竪穴遺構の属性一覧

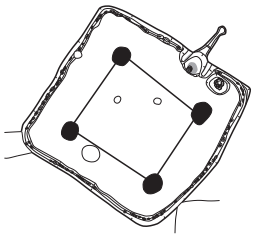
住居番号	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	平面形状・規模		軸方位		カマド			煙道部			その他の施設	時期区分	備考
		平面形状	長軸×短軸（cm）	方位	算出基準	付設位置	燃焼部位置	袖構築材 ※（）は芯材	長さ（cm）	底面	煙出し			
SI291	2・4	隅丸方形or隅丸長方形	510×（185）	N-27°-E	東壁	—	—	—	—	—	—	主柱穴2基	不明	南端部以外調査区外
SI292	3・7	方形or長方形	800×（346）	N-44°-E	東壁	—	—	—	—	—	—	主柱穴2基 間仕切り溝2条	4期以降	南東側以外調査区外
SI293A	7・8・11・12	方形	490×462	N-36°-E	カマド	北壁	やや外側	盛土	91	やや下がる	ピット状	主柱穴4基 貯蔵穴1基 周溝内に小穴	4期以前	SI293Bの建て替え後
SI293B	7・8・11・12	方形	460×441	N-36°-E	東壁	—	—	—	—	—	—	主柱穴2基 貯蔵穴？1基	4期以前	SI293Bの建て替え前
SI294	12	方形	280×（198）	N-84°-E	カマド1	東壁	内側	カマド1：盛土 カマド2：なし	カマド2 103	カマド2 やや下がる	—	主柱穴4基 土坑2基	6a期	南端消失
SI295	12・16	方形or長方形	365×（110）	N-90°-E	北壁	—	—	—	—	—	—	壁柱穴6基	6a期以降	南側消失
SI296	12・13・16・17	隅丸方形	420×419	N-2°-E	カマド	北壁	内側	盛土 芯材抜取痕 ピット一対	132	やや下がる	ピット状	主柱穴4基 貯蔵穴2基	6a期以前	東端消失
SI297	16・17・20・21	方形or長方形	494×（250）	N-6°-E	西壁	—	—	—	—	—	—	主柱穴1基 壁柱穴9基	5期	西側一部のみ残存
SI298	16・20	方形	380×325	N-9°-E	東壁	—	—	—	—	—	—	主柱穴2基	5期以前	東側は掘り方のみ残存
SI299	16・20	長方形	489×316	N-108°-W	カマド	西壁	内側	盛土	（82）	やや下がる	—	主柱穴2基 貯蔵穴1基	5期以降	東側一部と煙道先端消失
SI300	27	隅丸方形or隅丸長方形	213×（153）	N-27°-W	東壁	—	—	—	—	—	—	壁柱穴5基	不明	南側消失
SI301	19・20・23・24	長方形	608×337	N-6°-W	西壁	—	—	—	—	—	—	—	6b期以降	掘り方のみ検出
SI302	19・20・23・24	方形	474×471	N-89°-E	カマド	東壁	内側	—	—	—	ピット状	主柱穴4基 貯蔵穴2基	6a期	北東側一部消失
SI303	15・19・23	方形or長方形	689×（350）	N-4°-W	西壁	—	—	—	—	—	—	—	6a期以降	東側消失
SI304	14・15・18・19	方形	465×450	N-30°-E	カマド	北壁	内側	—	—	—	—	主柱穴4基	4期以前	南西側調査区外
SI305	16	方形or長方形	290×（240）	N-3°-W	西壁	—	—	—	—	—	—	柱穴1基 貯蔵穴1基	6a期以降	北東側・南西側消失
SI306	33・36・37	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	主柱穴4基 貯蔵穴1基	4期	床面・掘り方消失
SI307	20・21・24・25	方形or長方形	382×（151）	N-7°-E	西壁	—	—	—	—	—	—	柱穴1基	4～6a期	東側消失
SI308	23・24・27・28	隅丸長方形	450×（440）	N-26°-W	カマド	北壁	やや外側	盛土 芯材自然礫	124	やや下がる	ピット状	主柱穴4基 貯蔵穴2基	5期	南側消失
SI309 11次	14・19・22	方形	684×668	N-38°-W	南東壁	—	—	—	—	—	—	主柱穴4基	不明	上面消失

※規模について、（）は残存値を表す。

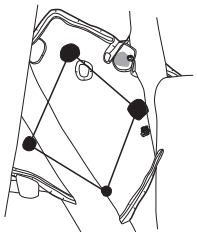
※カマド燃焼部位置は、壁面の内側に構築されるものを「内側」、壁面の外側にわずかに張り出すものを「やや外側」とした。

※煙道部底面の「下がる」の表記は、煙出し方向を指す。

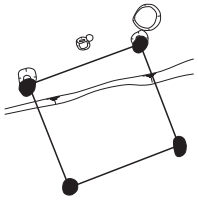
4 本柱穴



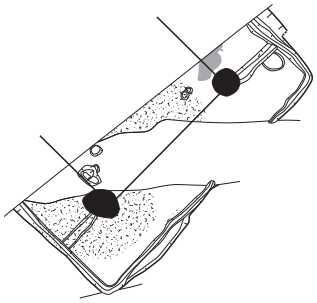
SI293A（4 期以前）



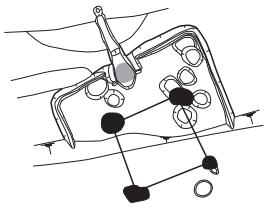
SI304（4 期以前）



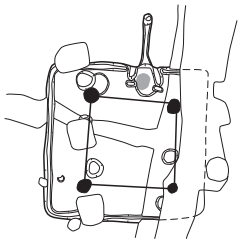
SI306（4 期）



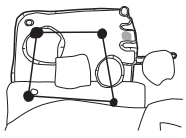
SI292（4 期以降）



SI308（5 期）



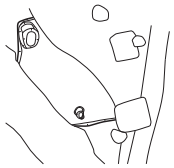
SI296（6a 期以前）



SI294（6a 期）

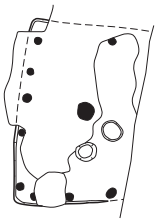
その他

SI307（4 期～ 6a 期）

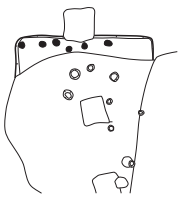


SI305（6a 期以前）

1 本柱穴＋壁柱穴



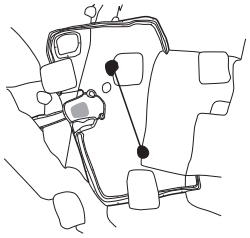
SI297（5 期）



SI295（6a 期）

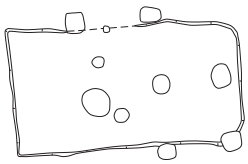
SI300（不明）

2 本柱穴



SI299（5 期以降）

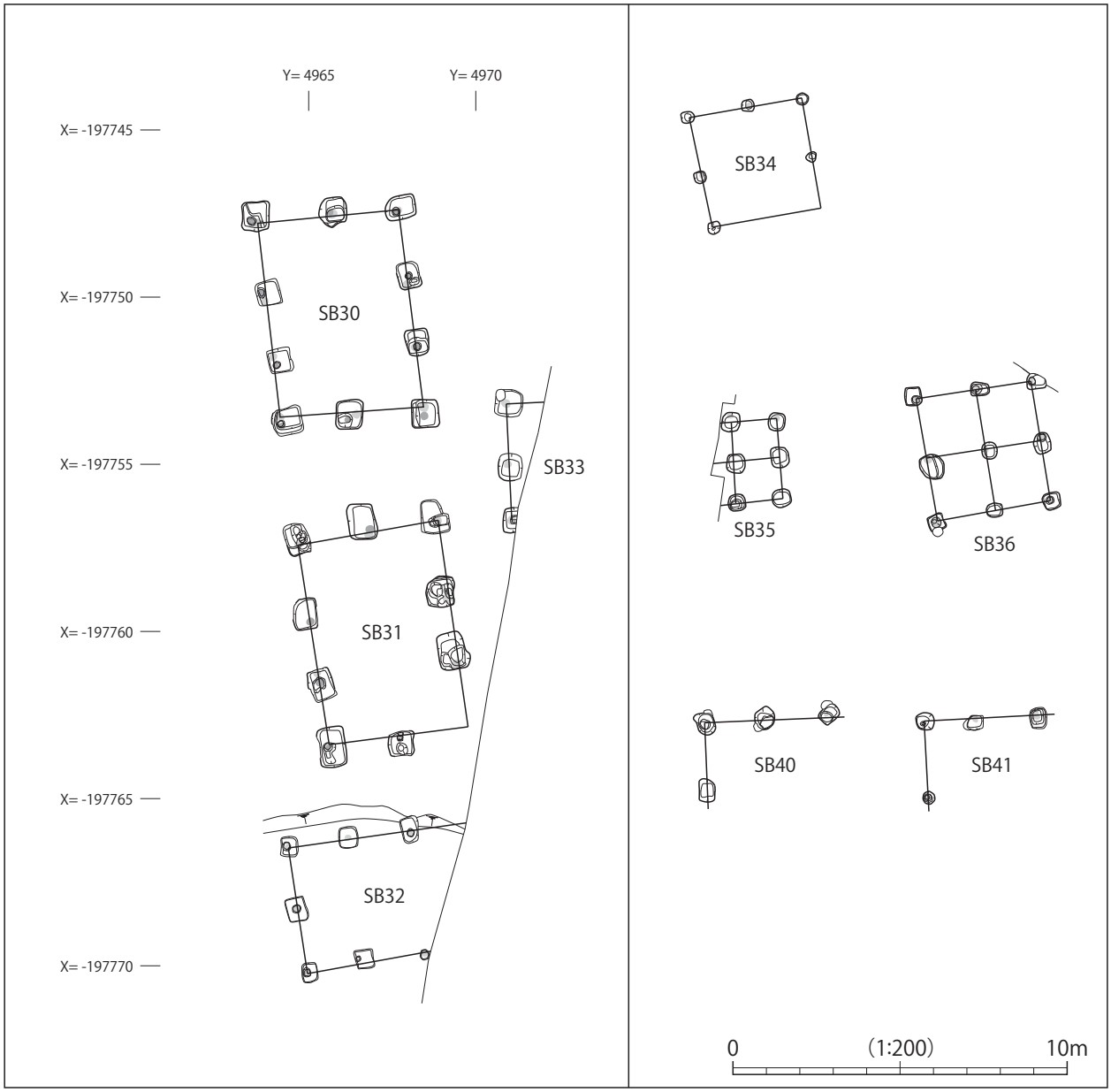
なし



SI301（6 期以降）

0 (1:200) 10m

第 213 図　第 10 次調査竪穴住居跡集成



第 214 図　第 10 次調査掘立柱建物跡集成

(3) 長町駅東遺跡における古墳時代～古代の集落（第 215 ～ 220 図）

長町駅東遺跡では、これまでに竪穴住居跡が 350 軒以上検出され、集落の様相が明らかになりつつある。ここでは、古墳時代～古代にかけての集落変遷図を掲載し、時期毎に概要を記載する。また、本遺跡の北東側に隣接する西台畑遺跡は、本遺跡と同様に郡山官衙の造営と運営に関わる集落と考えられており、当該期については同遺跡についても扱うこととする。なお、遺構の帰属時期については、各報告書に準じた[(註 1)]。

1 期（引田式期）

当期の竪穴住居跡は、いずれも遺跡南端部の河川跡沿いに集中している。これらは、河川跡に並行して点在する一群と、河川跡から 40m 程離れ、同一地点で 4 軒が重複している一群がある。今のところ長町駅東遺跡では、当期の竪穴住居跡はほかに検出されていないことから、この時期が集落の初現と考えられる。

2 期（住社式期）

当期の竪穴住居跡は、遺跡南部と北部の 2 ヶ所に分布域が認められる。南部では河川跡を意識した配置がみられるが、前段階より河川跡から離れた場所に竪穴住居跡が集中する。北部では新たに竪穴住居跡が出現し、集落の規模が拡大しているものと考えられるが、まだ軒数が少なく、点在する様な状況である。

3 期（栗囲式期）

当期の竪穴住居跡も、遺跡南部と北部の 2 ヶ所に分布域が認められる。南部では、前段階の竪穴住居跡群より南側に集中域が移動している。このほか、北西側に 30 ～ 40m 程離れた場所にも 1 軒ある。北部では、前段階に比べ竪穴住居跡が大幅に増加し、北部全域に拡がりをみせるほか、掘立柱建物跡が新たに出現する。また、この段階で区画施設である SA4・5 一本柱列跡が機能していたとされ、次段階の区画施設を伴う集落への兆しと考えられる。

4 期（郡山Ⅰ期官衙期）

当期の竪穴住居跡は、前段階から更に増加し、遺跡全体に分布する様になる。また、当期の早い段階で、集落の区画施設が構築されている。集落の北側は土橋状の通路状遺構を持つ SD66 溝跡と SA1 材木列跡により区画され、南側は河川跡により形成された自然地形と河川跡に沿って構築された SA6 材木列跡により区画されている。本遺跡の北東側に隣接する西台畑遺跡でも、同時期に集落の区画施設（SD17 溝跡、SA1 材木列跡）が構築され、集落の規模が拡大している。このため、郡山Ⅰ期官衙造営に伴い、両遺跡で計画的な集落の整備が行われたものと考えられる。

5 期（郡山Ⅱ期官衙期）

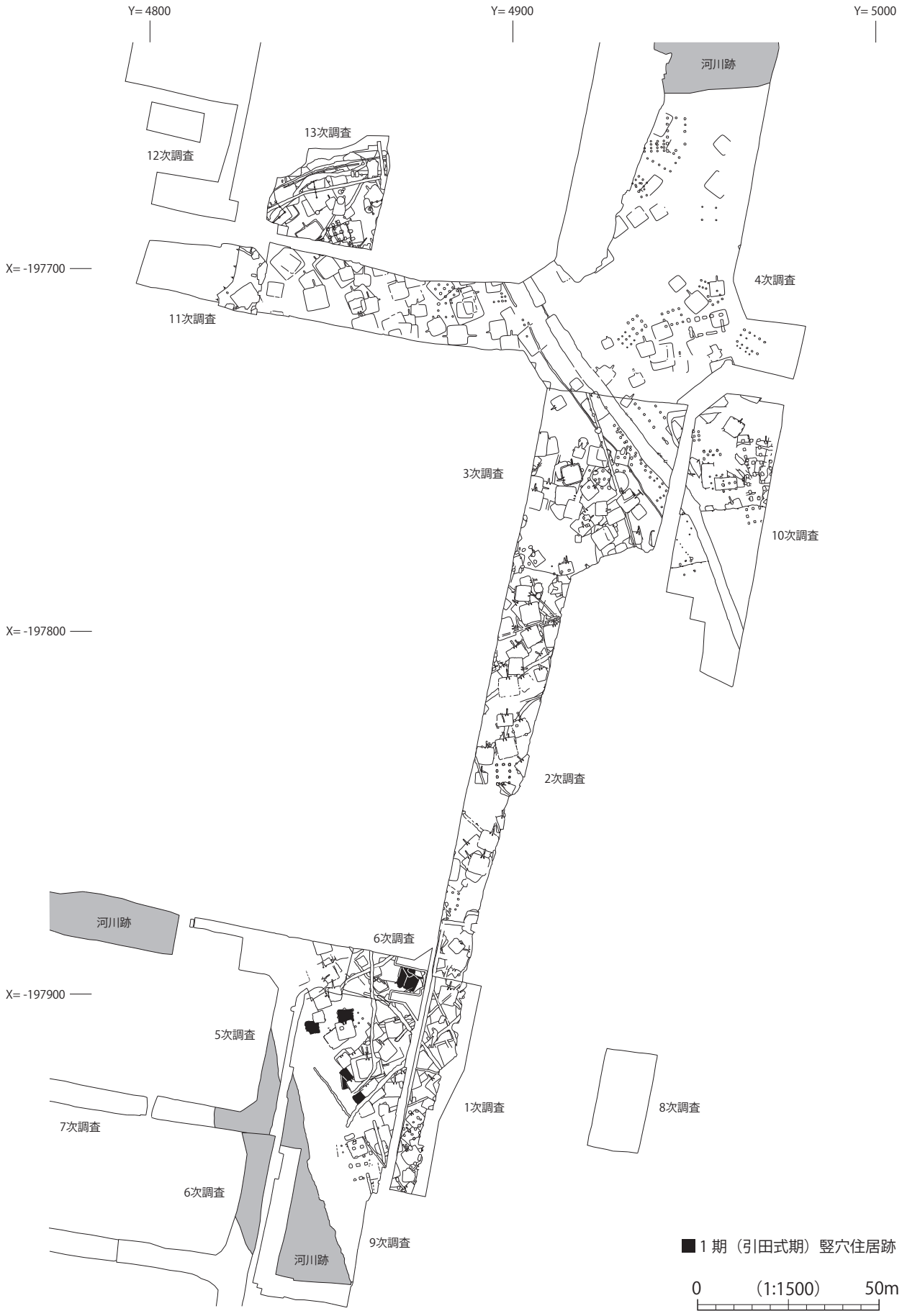
当期の竪穴住居跡は、前段階とほとんど変化はないが、遺跡北西部では確認できなくなる。掘立柱建物跡は前段階に比べ増加し、特に区画施設の外側である遺跡北東部で顕著である。区画施設は前段階と同じ SD66 溝跡と SA1 材木列跡が機能していたと考えられるが、SA1 材木列跡は 5 期の竪穴住居跡との重複関係から、郡山Ⅱ期官衙期の後半には機能を失ったものと考えられる。また、SD66 溝跡は区画施設の内側から人為的に埋め戻しが行われており、次第にその機能が失っていったものと思われる。一方、西台畑遺跡では、Ⅱ期官衙の造営に先立ち、新たに区画施設（SD11・61 溝跡）が構築され集落の再編が行われたものと考えられる。

6 期（郡山Ⅱ期官衙終末期以降）

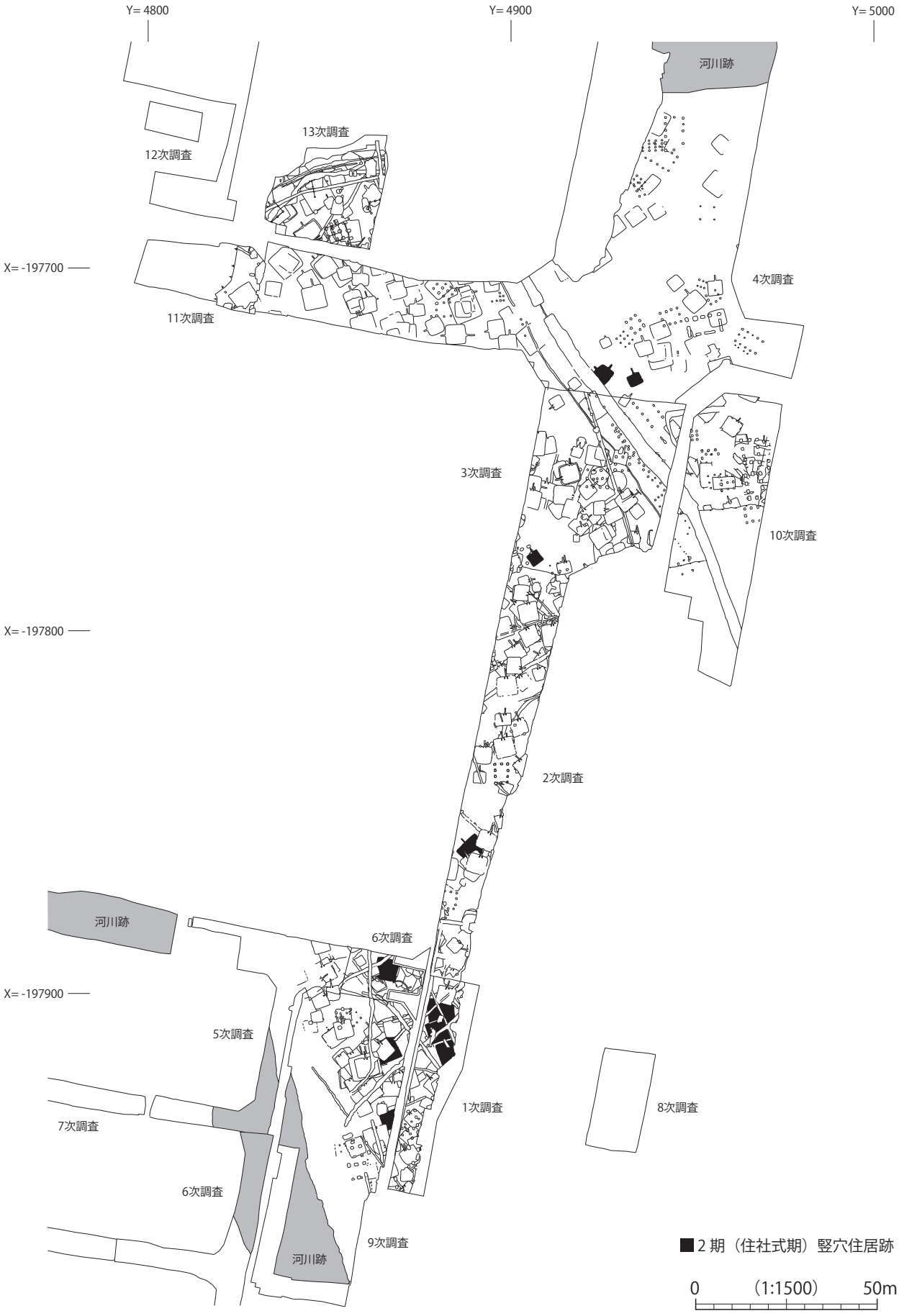
当期の竪穴住居跡は、前段階と比べ大幅に減少し、竪穴住居跡の空白域がみられるようになる。一方、掘立柱建物跡は急増し、区画施設である SD66 溝跡の外側である遺跡北東部で、SB30 ～ 33 掘立柱建物跡が建物群を形成している。また、この掘立柱建物群の北 30m 程に位置する SB22 掘立柱建物跡と周囲に配置されている竪穴住居跡 3 軒が一組として存在していた可能性が指摘されている（註 2）。このような長町駅東遺跡における竪穴住居跡と掘立柱建物跡の構成の変化は、郡山Ⅱ官衙の機能が多賀城に移転することを契機とし、集落構造そのもののが変化したものと考えられる。

註 1：第 4 次調査の 2 期（区画施設構築期）については、他の報告書の時期区分より時間幅が広いことから、出土土器と重複関係により新旧 2 時期に細分した。第 4 次調査 SB22 掘立柱建物跡については、第 4 次調査の報告書では郡山Ⅱ期官衙期とされているが、第 5・6・7・9 次調査の報告書で再検討がなされ、6 期（郡山Ⅱ期官衙終末期以降）に帰属するものと考えられている。本書でも、これに従い 6 期の遺構とした。なお、第 13 次調査については、現在報告書作成中のため各遺構の時期区分は保留とし、遺構配置図のみ図示した。

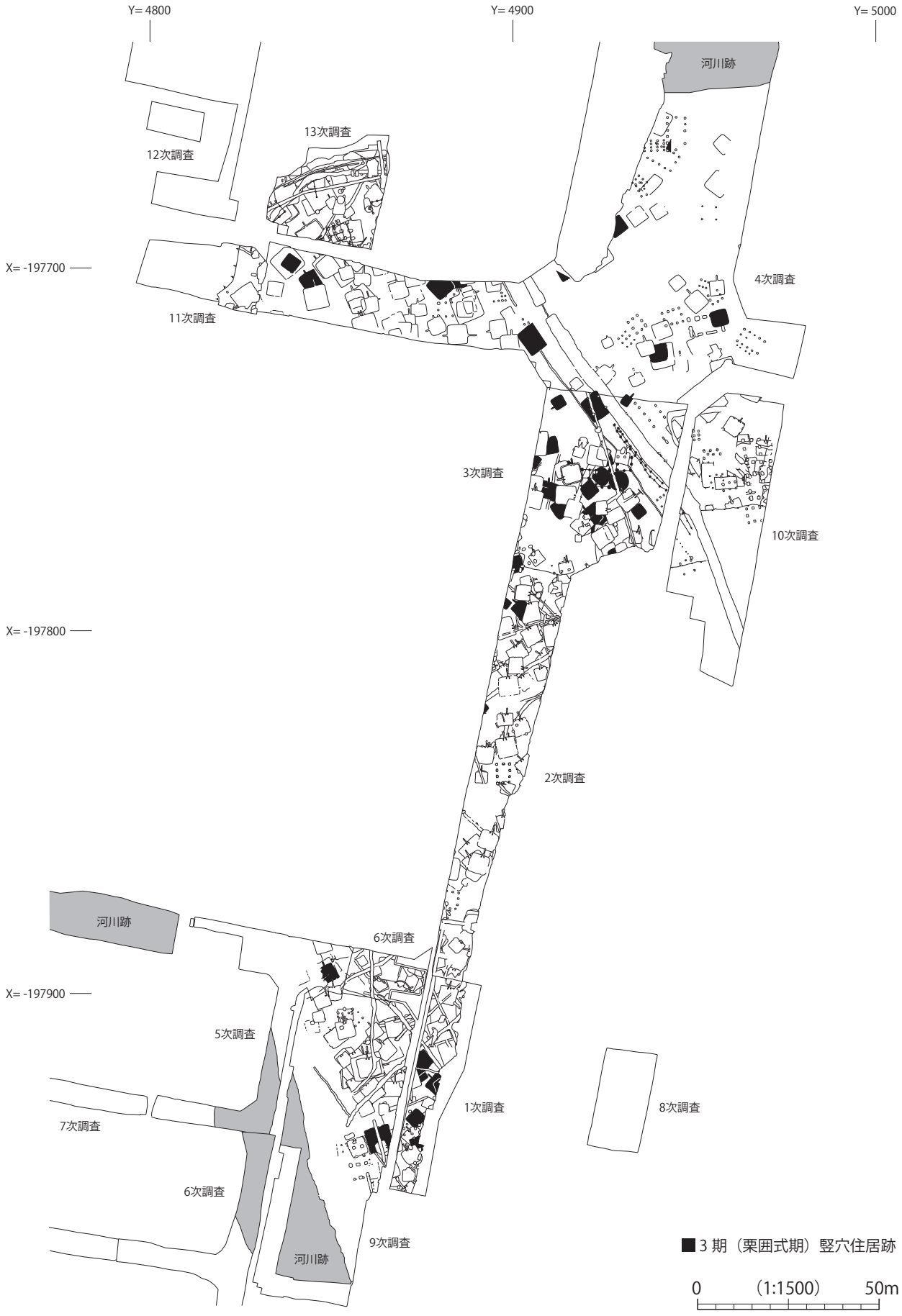
註 2：長町駅東遺跡第 5・6・7・9 次発掘調査報告書（仙台市教育委員会 2014）



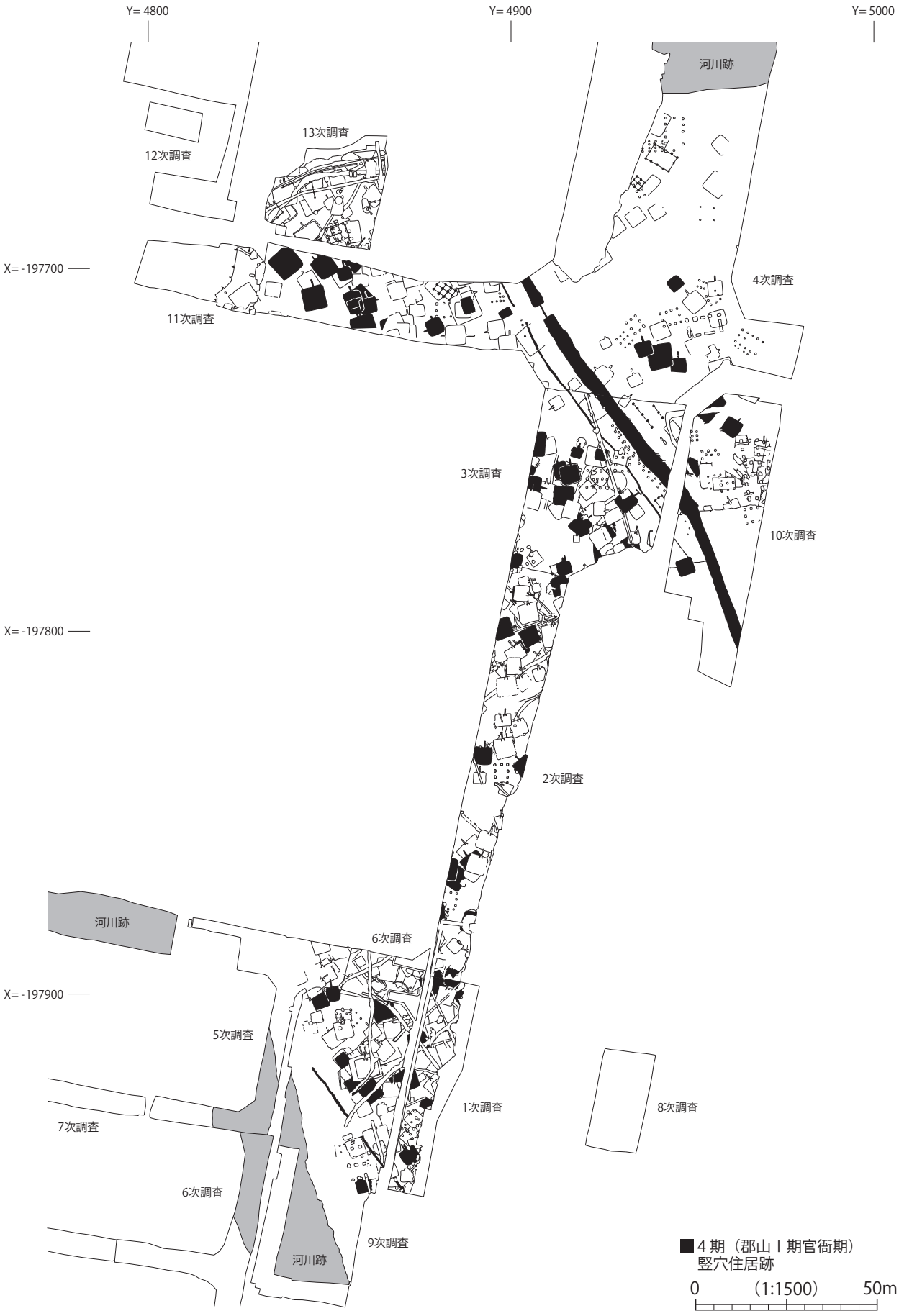
第 215 図　長町駅東遺跡全体図（引田式期）



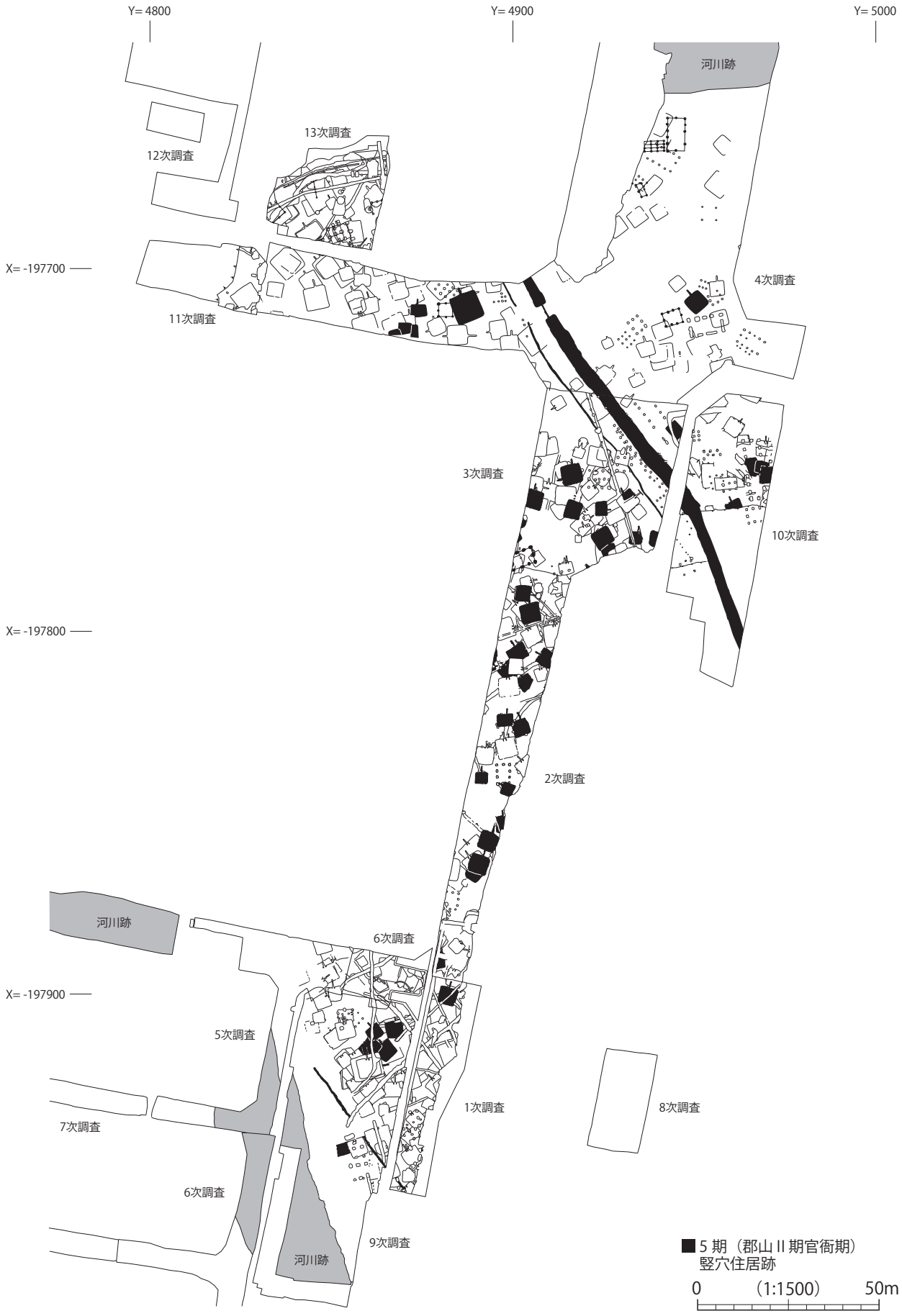
第 216 図　長町駅東遺跡全体図（住社式期）



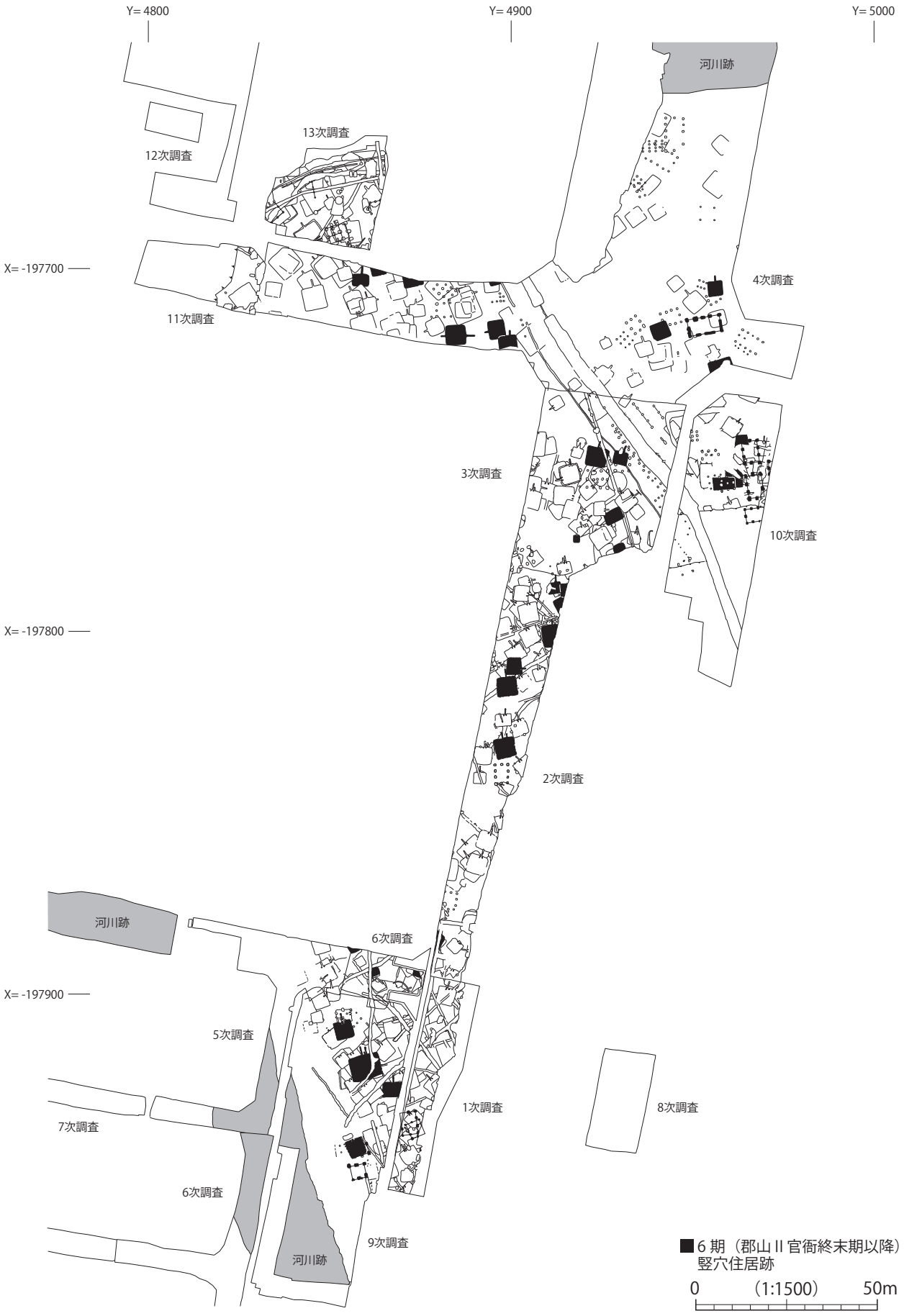
第 217 図　長町駅東遺跡全体図（栗囲式期）



第 218 図　長町駅東遺跡全体図（郡山Ⅰ期官衙期）



第 219 図　長町駅東遺跡全体図（郡山 II 期官衙期）



第 220 図　長町駅東遺跡全体図（郡山 II 期官衙終末期以降）

第 5 節　まとめ

第 10 次調査

縄文時代

（1）基本層Ⅸ層から縄文土器が出土している。粗製土器のため詳細な帰属時期は不明だが、本遺跡の北東側に隣接する西台畑遺跡第 3 次調査区のⅡ区拡張区Ⅹ層から出土した A-006（仙台市文化財調査報告書第 388 集）に類似しており、縄文時代晩期後半に帰属するものと考えられる。

弥生時代

（1）検出された遺構は、竪穴遺構 2 基、焼土遺構 2 基、土坑 7 基、ピット 90 基である。また、遺物包含層や遺構堆積土から弥生時代中期中葉の桝形囲式に比定される弥生土器や石器などがコンテナで 20 箱程度出土している。出土遺物の中には、第 3 次調査区出土遺物と接合した弥生土器や剥片石器がある。

（2）竪穴住居跡の可能性がある SX1・2 竪穴遺構が検出され、第 3 次調査区で確認された居住域が遺跡の東側にまで拡がっていることを確認したが、これらの遺構については、他遺跡の事例等との比較検討を行っていきたい。

（3）調査区北端で検出されたピット群は、外周が円弧を描き、その内側にピットの空白域と密集域がみられる。遺構の性格は不明だが、検出状況から一連の遺構である可能性が考えられる。

古代

（1）検出された遺構は、竪穴住居跡 17 軒、竪穴遺構 2 基、掘立柱建物跡 9 棟、区画施設関連の溝跡 1 条、材木列跡 1 条、一本柱列 2 条である。また、区画施設である SD66 溝跡や竪穴住居跡から 7 世紀中葉以前から 8 世紀前葉に比定される土師器・須恵器などがコンテナで 30 箱程度が出土している。

（2）検出された竪穴住居跡は、詳細な帰属時期が不明なものが多いが、郡山Ⅱ期官衙期から郡山Ⅱ期官衙終末期以降が主体を占めている。また、柱穴構造では 4 本柱穴や 1 柱穴＋壁柱穴、2 本柱穴などがみられ、郡山Ⅱ期官衙期を境に、柱穴構造が多様化している可能性がみられた。

（3）郡山Ⅱ期官衙終末期以降と考えられる SB30 ～ 33 掘立柱建物跡は建物群を形成し、長町駅東遺跡における集落構成の変化がみられた。

（4）区画施設である SD66 溝跡は、西側から人為的に埋め戻しが行われていることを確認した。また、堆積土上層に灰白色火山灰が含まれることから、区画施設としての機能が低下した後も、窪みとして長期間残存していたものと考えられる。

古代～中世

（1）検出された遺構は、小溝状遺構群 1 群、溝跡 14 条、土坑 10 基、ピット 221 基である。出土遺物は、土師器・須恵器・瓦・金属製品などコンテナで 3 箱程度が出土している。

第 11 次調査

（1）検出された遺構は、竪穴住居跡 1 軒、土坑 3 基、溝跡 3 条、ピット 4 基である。出土遺物は、土師器・須恵器を主体にコンテナで 4 箱程度が出土している。

（2）検出された竪穴住居跡は、詳細な帰属時期は不明だが、堆積土からはロクロ土師器の坏が出土している。

（3）近世から近代にかけての遺構としては、本調査区の北側に隣接する第 12 次調査区で検出された溝跡の南側延長部と考えられる SD268 溝跡が検出されている。

引用・参考文献（五十音順・敬称略）

赤澤靖章　1996　「中在家南遺跡出土の弥生土器について」『中在家南遺跡他発掘調査報告書』第 2 分冊
仙台市文化財調査報告書第 213 集

2000　「出土土器の概要」『高田 B 遺跡発掘調査報告書』第 2 分冊 仙台市文化財調査報告書第 242 集

石川日出志　2005　「2. 仙台平野における弥生中期土器編年の再検討『関東・東北弥生土器と北海道続縄文土器の広域編年』
（課題番号 14310189）平成 14 年度～平成 16 年度科学研究費補助金（基盤研究 B（2））研究成果報告書

伊藤玄三　1958　「仙台市西台畑出土の弥生式土器」『考古学雑誌』44 － 1

1993　「仙台市西台畑弥生時代墳墓の再検討」『法政考古学』第 20 集 法政考古学会

伊東信雄　1957　「第 2 章 弥生式文化時代」『宮城縣史』1 宮城懸史刊行会

大川 清・鈴木公雄・工楽善通編　1996　『日本土器事典』雄山閣

加藤道男　1983　「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢』芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会

菊池佳子　1994　「多賀城以前の陸奥国と須恵器」『歴史』第 82 号 東北史学会

工藤信一郎　2008　「長町駅東遺跡・西台畑遺跡の調査から」『第 34 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』古代城柵官衙遺跡検討会

2010　「長町駅東遺跡・西台畑遺跡の集落について」『宮城考古学』第 12 号 宮城県考古学会

国士舘大学考古学会編　2009　『古代社会と地域間交流－土師器からみた関東と東北の様相－』六一書房

斎野裕彦　2002　「農具－石庖丁・大型直縁刃石器・石鎌」『考古資料大観 9 石器・石製品・骨角器』小学館

2008　「Ⅲ . 弥生時代」『宮城考古学』第 10 号 宮城考古学会

2010　「4. 沼向② B 期：弥生中期の土器」『沼向遺跡第 4 ～ 34 次調査』第 9 分冊 仙台市文化財調査報告書第 360 集

佐藤甲二　1989　「67 宮城県南小泉遺跡」『探訪 弥生の遺跡〈畿内・東日本編〉』

仙台市教育委員会　1978　『南小泉遺跡　範囲確認調査報告書』仙台市文化財調査報告書第 13 集

1992　『土手内－土手内遺跡・土手内窯跡・土手内横穴 B 地点発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第 165 集

1996　『中在家南遺跡他発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第 213 集

2000　『高田 B 遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第 242 集

2001　『八木山緑町遺跡ほか発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第 253 集

2002　『中在家南遺跡（第 3・4 次）押口遺跡（第 3 次）発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第 255 集

2002　『原遺跡第 4 次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第 257 集

2005　『郡山遺跡発掘調査報告書－総括編－』仙台市文化財調査報告書第 283 集

2007　『長町駅東遺跡第 4 次調査』仙台市文化財調査報告書第 315 集

2008　『長町駅東遺跡第 1・2 次調査』仙台市文化財調査報告書第 324 集

2009　『長町駅東遺跡第 3 次調査』仙台市文化財調査報告書第 340 集

2010　『西台畑遺跡第 1・2 次調査』仙台市文化財調査報告書第 359 集

2011　『西台畑遺跡第 3 次調査』仙台市文化財調査報告書第 388 集

仙台市史編さん委員会　1995　『仙台市史』特別編 2 考古資料

1999　『仙台市史』通史編 1 原始

2000　『仙台市史』通史編 2 古代中世

菅原保則　2006　『長町駅』

須藤　隆　1987　「東日本における弥生文化の受容」『考古学雑誌』73 － 1 日本考古学会

1990　「東北地方における弥生文化」『伊東信雄先生追悼考古学古代史論攷』伊東信雄先生追悼論文刊行会

1998　『東日本先史時代文化変化・社会変動の研究－縄文から弥生へ－』纂修堂

1999　「第三章　弥生時代」『仙台市史』通史編 1 原始

辻本　武　2011　「吹田操車場の歴史資料」『吹田操車場遺跡Ⅴ』（財）大阪府文化財センター調査報告書第 216 集

2011　「吹田操車場跡地で出土した汽車土瓶と刻印煉瓦」『大阪文化財研究』39 号

東北古代土器研究会　2005　『東北古代土器集成－古墳後期～奈良・集落編－＜宮城＞』研究報告２
豊田市民芸館　1998　『汽車土瓶－変わりゆく旅の器たち』第九回特別展
奈良文化財研究所　2003　『古代の官衙遺跡 Ⅰ 遺構編』
2004　『古代の官衙遺跡 Ⅱ 遺物・遺跡編』
日本考古学協会　2005　「シンポジウム２　７世紀の東日本－変革期の諸相－」『日本考古学協会 2005 年度福島大会シンポジウム資料集』
馬目順一　1987　「桝形式と南御山式土器」『弥生文化の研究 4 弥生土器Ⅱ』金関 恕・佐原 真編 雄山閣
宮城県教育委員会　1994　『高田 B 遺跡－第２・３次調査－』宮城県文化財調査報告書第 164 集
2009　『市川橋遺跡の調査』宮城県文化財調査報告書第 218 集
村田晃一　2000　「飛鳥・奈良時代の陸奥北辺－移民の時代－」『宮城考古学』第２号 宮城県考古学会
2007　「ｖ・宮城県中部から南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部
山内清男　1930　「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』１－３